

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏 名	李 丹
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 232 号
学位授与の日付	2017 年 9 月 6 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	二格の名詞と動詞からなる連語について

Name	Li, Dan
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 232
Date	September 6, 2017
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	A Study of Japanese “Word-Combinations” consisting of “N-ni” and Verb

二格の名詞と動詞からなる連語について

李 丹

目次

第1部 序論	1
第1章 研究の概要	1
1.1 研究の目的	1
1.2 研究の対象	2
1.2.1 「連語」と「連語論」について	3
1.2.2 「カテゴリーカルな意味」について	4
1.2.3 「ニ格の名詞」の範囲	5
1.2.4 本研究で扱わないもの	6
1.3 本研究で扱うデータ	7
1.3.1 言語資料について	8
1.3.2 データの詳細について	10
1.4 本稿の構成	11
第2章 先行研究および本研究の位置づけ	13
2.1 格助詞「ニ」の研究	13
2.1.1 国立国語研究所（1951）	13
2.1.2 益岡・田窪（1987）	14
2.2 ニ格の名詞と動詞との関係に関する研究	15
2.2.1 森山（1988）	15
2.2.2 呉（2000）	18
2.2.3 寺村（1982）	19
2.3 ニ格の名詞を含む連語論の研究	21
2.3.1 奥田（1962[1983]）：「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」	21
2.3.2 松本（1979）：「に格の名詞と形容詞とのくみあわせ」	26
2.4 本研究の位置づけ	29
2.4.1 奥田（1962[1983]）の再考	29
2.4.1.1 「体系化」と「構造」について	29
2.4.1.2 連語論の対象について	32
2.4.1.3 分類の妥当性について	36
2.4.2 本研究の立場・方法論	40
2.4.2.1 本研究の任務	41
2.4.2.2 奥田（1962[1983]）の再考に対して	41
2.4.2.3 「拡大連語」について	47

2.4.3 本研究と格助詞研究との異同	47
第2部 二格の名詞と動詞とからなる連語の分類	49
第3章 対象的なむすびつき	49
3.1 ありかのむすびつき	50
3.1.1 存在物のありか	50
3.1.2 内在のむすびつき	56
3.1.3 所有者のむすびつき	62
3.1.4 所有物のありか	63
3.1.5 認知物のありか	64
3.1.6 出現物のありか	66
3.1.7 消失物のありか	69
3.2 移動のむすびつき	70
3.2.1 行く先のむすびつき	72
3.2.2 着点のむすびつき	76
3.3 くっつきのむすびつき	83
3.4 相手のむすびつき	90
3.4.1 ゆずり相手のむすびつき	91
3.4.2 はなし相手のむすびつき	92
3.4.3 対面の相手のむすびつき	94
3.5 社会的なかかわり	96
3.5.1 社会活動のむすびつき	96
3.5.2 社会的状態変化のむすびつき	98
3.6 心理的なかわり	99
3.6.1 態度のむすびつき	100
3.6.1.1 感情的な態度のむすびつき	100
3.6.1.2 態度的な動作のむすびつき	104
3.6.2 認識のむすびつき	106
3.6.3 知的なむすびつき	108
3.7 関係のむすびつき	109
3.7.1 客観的な関係のむすびつき	109
3.7.2 論理的な関係のむすびつき	111
3.7.3 起源のむすびつき	113
3.7.4 内容＝構成要素のむすびつき	114

3.8	働きかけのむすびつき	116
3.9	受身的なむすびつき	117
第4章	規定的なむすびつき	121
4.1	結果規定のむすびつき	121
4.2	内容規定のむすびつき	124
4.3	目的規定のむすびつき	126
第3部	二格の名詞と動詞とからなる連語がなす体系	128
第5章	〔規定的なむすびつき〕と〔対象的なむすびつき〕との相互関係	128
5.1	〔結果規定のむすびつき〕と〔対象的なむすびつき〕	128
5.2	〔内容規定のむすびつき〕と〔対象的なむすびつき〕	131
5.3	〔目的規定のむすびつき〕と〔対象的なむすびつき〕	132
5.4	まとめ	134
第6章	〔対象的なむすびつき〕の各カテゴリーの間の相互関係	135
6.1	〔ありかのむすびつき〕と〔移動のむすびつき〕と〔くっつきのむすびつき〕	135
6.1.1	〔ありかのむすびつき〕の下位類がなす体系	136
6.1.2	〔移動のむすびつき〕の下位類がなす体系	141
6.1.3	〔ありかのむすびつき〕の下位類と〔移動のむすびつき〕〔くっつきのむすびつき〕	143
6.1.4	〔移動のむすびつき〕と〔くっつきのむすびつき〕	147
6.2	〔ありかのむすびつき〕と他のむすびつき	148
6.2.1	〔ありかのむすびつき〕と〔相手のむすびつき〕	149
6.2.2	〔ありかのむすびつき〕と〔社会的なかわり〕	150
6.2.3	〔ありかのむすびつき〕と〔心理的なかわり〕	151
6.2.4	〔ありかのむすびつき〕と〔関係のむすびつき〕	153
6.2.5	〔ありかのむすびつき〕と〔働きかけのむすびつき〕	154
6.3	〔移動のむすびつき〕と他のむすびつき	154
6.3.1	〔移動のむすびつき〕と〔相手のむすびつき〕	155
6.3.2	〔移動のむすびつき〕と〔社会的なかわり〕	156
6.3.3	〔移動のむすびつき〕と〔心理的なかわり〕	158
6.3.4	〔移動のむすびつき〕と〔働きかけのむすびつき〕	159

6.4	〔くっつきのむすびつき〕と他のむすびつき	159
6.4.1	〔くっつきのむすびつき〕と〔相手のむすびつき〕	160
6.4.2	〔くっつきのむすびつき〕と〔社会的なかかわり〕	161
6.4.3	〔くっつきのむすびつき〕と〔心理的なかかわり〕	162
6.5	その他の相互関係	163
6.6	まとめ	165
第4部 結論と今後の課題		166
第7章 結論		166
第8章 今後の課題		168
参考文献		169

第 1 部 序論

第 1 章 研究の概要

本章では、本研究の目的、研究の対象および本研究で扱うデータについて述べる。最後に、本稿の構成を示す。

1.1 研究の目的

二格の名詞と動詞からなる連語には、例えば「庭に木がある」「新宿に行く」「注射に怯える」「一般生活に関係する」「医者になる」「買い物に行く」などのようなものがあるが、それぞれはむすびつきの性質が異なる。

「庭に木がある」という連語は、二格の空間名詞（「庭に」）とガ格の物名詞（「木が」）と存在動詞（「ある」）とのくみあわせであり、ガ格の名詞で示されている物が二格の名詞で示されている場所に存在していることを表わしている（以下第 3 章で詳細に述べるが、本研究ではこのような連語を「ありかのむすびつき」と呼ぶ。以下同様）。二格の名詞はガ格の名詞のありかを表わす。

「新宿に行く」は二格の空間名詞（「新宿に」）と移動動詞（「行く」）とのくみあわせであり、移動主体が二格の名詞で示されている場所に向かって移動することを表わしている（「移動のむすびつき」と呼ぶ）。二格の名詞は動詞で示される移動動作の行く先を表わす。

「注射に怯える」は二格の抽象名詞（「注射に」）と心理的な状態を表わす動詞（「怯える」）とのくみあわせであり、主体が二格の名詞で示されている対象に対してある感情をもっていることを表わしている（「心理的なかわり」と呼ぶ）。二格の名詞は動詞で示される感情の向けられる対象を表わす。

「一般生活に関係する」は二格の抽象名詞（「一般生活に」）とものの間の関係を表わす動詞（「関係する」）とのくみあわせであり、主体が二格の名詞で示されている対象となんらかの関係をもっていることを表わしている（「関係のむすびつき」と呼ぶ）。二格の名詞は主体と関係をもつ対象を表わす。

一方、「医者になる」は二格の具体名詞（「医者に」）と変化動詞（「なる」）とのくみあわせであり、主体の変化を結果の側面から規定している（「結果規定のむすびつき」と呼ぶ）。二格の名詞は主体の変化した結果を表わす。

「買い物に行く」は二格の動作性名詞（「買い物に」）と移動動詞（「行く」）とのくみあわせであり、主体の移動動作を目的の側面から規定している（「目的規定のむすびつき」と呼ぶ）。二格の名詞は移動動作の目的を表わす。

これらの連語のうち、同じ動詞「行く」は「新宿に行く」（「移動のむすびつき」）と「買い物に行く」（「目的規定のむすびつき」）との 2 種類の連語を作りうる。また、「新宿に買

い物に行く」のような、二格の名詞が2つ存在する単語のくみあわせもある。本研究では、このようなくみあわせは2つの連語の構造を同時に所有していると考える。このことは、この2つの連語の間に何らかの関係があることを物語っている。

このように、「連語」はただ2つ（あるいは3つ）の単語をくみあわせた（本研究で言えば二格の名詞と動詞をくみあわせた）だけでなく、2つ（あるいは3つ）の単語の間にある種の関係（本研究ではこのような関係を「むすびつき」と呼ぶ）があつて、それに従つてある構造をなしているのである。「新宿に行く」と「買い物に行く」のように、その構造が変わることで、すなわちここでは二格名詞が場所名詞（「新宿」）か動作性名詞（「買い物（する）」）かによって、ある1つの連語から他の連語に移行したり、他の連語を派生したりすることがある。このような関係によって連語は一つの体系をなしている。この点においては、連語の研究は単なる格助詞あるいは動詞の結合価の研究などとは大きく異なる。

二格の名詞と動詞からなる連語は、上で見たように、二格の名詞と動詞の関係および二格の名詞と動詞とのそれぞれの意味的な性質（本研究では「カテゴリーカルな意味」¹として考える）によって分類し、さらにそれをもとにした体系化ができる。これは奥田靖雄氏を中心に研究が行われてきた「連語論」²の方法であり、特に奥田（1962[1983]）の「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」は、二格の名詞と動詞の連語に関する唯一の先行研究として挙げられる。しかし、後に2.4.1節で詳述するように、奥田（同）にはいくつかの問題点があり、再考の余地が十分にあると思われる。そのうち、特に連語論の最終目的の一つであると言える連語の体系化³には、奥田の同論文は結果的に至っていないと言えよう。

本研究は、二格の名詞と動詞からなる連語が表わすいくつかのむすびつきの記述にとどまらず、連語の体系化を図ることを目的とする。具体的に、二格の名詞と動詞からなる連語について、奥田（同）を再考した上で、大量のデータに基づいて考察することによって、その構造的なタイプのあり方の記述を試みる。それをもとにして、連語の間の移行・派生などの相互関係を考え、二格の名詞と動詞からなる連語がなす体系を明らかにする。

1.2 研究の対象

本節では、本研究の研究対象、本研究を行う上で必要とする事項および本研究で扱わないものなどについて述べる。

¹ 1.2.2節で取り上げる。

² 1.2.1節で取り上げる。

³ 「連語論の任務は、連語論的なむすびつきをあきらかにすることにとどまらず、むすびつきの体系をあきらかにすることなのである」(言語学研究会編(1983)の「編集にあたって」(p.11)、鈴木康之(1983:43)、点線は引用者による。)

1.2.1 「連語」と「連語論」について

ここでは、言語学研究会（編）（1983）の「編集にあたって」⁴や鈴木康之（1983）（「連語とはなにか」）などを参考にして、「連語」という概念および「連語論」の研究について紹介する。

日本語の連語論は 1950 年代のロシア言語学の影響を受けて、奥田靖雄氏が開拓した言語学研究の一分野であり、主として言語学研究会の研究者によって研究が行われていた。言語学研究会（編）（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』が日本語の連語にかかわる論文の集大成と言える。

「連語」は、従属的なむすびつきにもとづく 2 つあるいは 3 つの単語のくみあわせであって、軸になる主要な単語（他の単語に従属させる構成要素）とそれによりかかる単語（他の単語に従属する構成要素）から成り立っている。他の単語に従属させる構成要素のことは「かざられ」、他の単語に従属する構成要素のことは「かざり」と呼ばれる。例えば「新宿に行く」という連語において、「新宿に」が「かざり」で、「行く」は「かざられ」である。

日本語の連語は、かざられが名詞である場合と、動詞である場合と、形容詞である場合とに大きく分かれる。そのうち、かざられが動詞である場合は、「名詞と動詞とのくみあわせ」と「副詞と動詞とのくみあわせ」とがあり、前者はさらに「を格の名詞＋動詞」、「に格の名詞＋動詞」⁵、「へ格の名詞＋動詞」、「で格の名詞＋動詞」、「と格の名詞＋動詞」、「から格の名詞＋動詞」と「まで格の名詞＋動詞」などに分けられる。それぞれの連語は例えば以下のようなものである。

- 1) を格の名詞＋動詞：家を取り壊す；芝居を見物する
- 2) に格の名詞＋動詞：庭に木がある；山に行く
- 3) へ格の名詞＋動詞：山へ行く；北海道へ旅行する
- 4) で格の名詞＋動詞：おしぼりで手をこする；電話で話す
- 5) と格の名詞＋動詞：犬と遊ぶ；友達と行く
- 6) から格の名詞＋動詞：東京から来る；米から日本酒を作る
- 7) まで格の名詞＋動詞：駅まで歩く；空港まで送る

「連語」は単語と同様に、名づけの単位であって、文を組み立てる材料である。連語論研究は構文論の一領域であり、連語を組み立てている要素（単語）の間のむすびつき方を研究する。例えば、上で例を挙げたように、「新宿に行く」という連語では、「新宿に」は移動動作の行き先を表わす。また、「手帳にメモを貼る」という連語では、「メモを」はくっつける動作の対象を表わし、「手帳に」はくっつけられる対象（としての物）を表わして

⁴ 鈴木康之氏と鈴木重幸氏の両氏による解説である。

⁵ 本研究はこれに当たる。

いる。しかし、連語論はいちいちの連語のむすびつき方をひとつひとつ挙げて、具体的に記述するというわけではない。いちいちの連語を組み立てている単語の語彙的な意味が異なっている、むすびつきの性格は一般的である。このように、連語論の任務はいくつかの連語に共通するむすびつきをとらえることである。ある1つのむすびつきは、別のいくつかのむすびつきと対立しながら、補い合いながら、パラディグマチックな関係を取り結んでいて、まさしく一つの体系をなしている。従って、連語論の任務は、連語論的なむすびつきを明らかにすることにとどまらず、むすびつきの体系を明らかにすることだと言わなければならない。

1.2.2 「カテゴリーカルな意味」について

「カテゴリーカルな意味」について論じられているものとしては、奥田（1974、1976、1979）などがある。そのうち、奥田（1979）では、「カテゴリーカルな意味」が次のように定義されている。

「要素＝単語の語彙的な意味と文法的な意味との中間には、媒介として、カテゴリーカルな意味 *categorical meaning* がある。カテゴリーカルな意味というのは、文法的なむすびつきとかかわりとのなかにおける、語彙的な意味の一般化である。」（奥田（1979[1984:162]））

そして、奥田（1974）は自動詞と他動詞の対を挙げて、「カテゴリーカルな意味」を説明している。

「日本語では、自動詞と他動詞との対は、おおくのばあい、ことなる、ふたつの単語をなしている。たとえば、とけるととかす、もえるともやす、しまるとしめる、おちるとおとすのような対。これらの対は、ちょっと観察するだけで、語彙的な意味の内容のなかに、一方では自動性があるし、他方では他動性のあることがわかるだろう。動作あるいはうごきをめぐる主体＝客体の関係としての、この自動＝他動性は、動詞の語彙的な意味の内容をくみだしている、ひとつの側面である。ぼくたちはこれらの対の動詞の語彙的な意味のちがいをとわれたら、この自動＝他動性のなかにこたえをもとめるだろう。

現実の世界の動作あるいはうごきが、主体＝客体の関係のなかでおこっているとすれば、動詞はこのことも語彙的な意味に反映しないわけにはいかない。それゆえに、この自動＝他動性はおおくの動詞に共通であって、動詞の語彙的な意味の *categorical* な側面をなしている。それは *categorical meaning* である。

（中略）

動詞の自動＝他動性はカテゴリーカルな意味といわれるもののうちのひとつであって、すでに伝統的な言語学はおおくのカテゴリーをみいだしている。動詞をめぐっては、たとえば、きる、かぶる、あびるのような動詞の再帰性、たたかう、つれそう、あらそうのよう

な動詞の相互性、**わかす**、**たく**、**ぬう**のような動詞の生産性。文法学者が動詞を **terminative** と **non-terminative** とに、意志と無意志とに、動作と状態とにわけると、動詞のカテゴリカルな意味にもとづいている。」(奥田 (1974[1984:48-49]))

また、言語学研究会 (編) (1983) では、連語論の観点から「カテゴリカルな意味」が取り上げられている。

「連語論的なむすびつきは一般的であるとすれば、その一般的なむすびつきをつくりだすものは、かざられになる単語の語彙的な意味のすべてではない。語彙的な意味のなかにはむすびつきをつくりだす側面 (意味特徴) があって、それがいくつかの単語の語彙的な意味に共通であるとみななければならない。たとえば、「おる」「きる」「わる」「つぶす」「くだく」のような動詞の語彙的な意味は、対象にはたらきかけてそれを破壊するということでは共通であって、この共通な側面を土台にして「茶わんをわる」「木をきる」「ガラスをくだく」「ごまをつぶす」というようなおなじタイプの連語がつくりだされている。われわれは、おなじタイプのむすびつきのなかで一般化される語彙的な意味のことをカテゴリカルな意味とよんでいる。」(言語学研究会 (編) (1983:12))

本研究は奥田氏の「カテゴリカルな意味」の考えを踏襲し、すなわち「おなじタイプのむすびつきのなかで一般化される語彙的な意味のこと」をカテゴリカルな意味と呼び、二格の名詞と動詞からなる連語について、二格の名詞と動詞のカテゴリカルな意味によって分類し記述する。

1.2.3 「二格の名詞」の範囲

本研究では、「木 (にぶつかる)」「新宿 (に行く)」「母 (に反抗する)」など物や場所、人を示す具体名詞をはじめ、「雨 (に濡れる)」「風 (に揺れる)」などの現象名詞や、「アドバイス (に従う)」「注射 (に怯える)」「一般生活 (に関係する)」のような抽象名詞まで、あらゆる名詞を対象とする。なお、例えば「沖縄の海 (に行く)」「町のはずれにある海 (に行く)」のような修飾要素を含めたものは名詞句とし、かざられ名詞としては単独の名詞と同列に扱う。

また、下の (1) ～ (4) に挙げるような所謂準体助詞「の」ないし形式名詞「こと」を用いるものは、「形容詞 (イ形容詞もナ形容詞も含める) 句や動詞句の名詞化」と考えられ、その名詞性を認めて名詞句相当に扱う。

- (1) H は、「何回か飲んで ニガイのに慣れたら、好きになると思う」と答えた。
(『少年 H』(上巻))

- (2) 私は、アパXX情報を横目で見るとすっかり飽きて、どうせ引っ越すならと雑誌をヒモでしばる作業に専念していた。（『キッチン』）
- (3) だから、海がこんなに近いことにビックリした。（『少年H』（上巻））
- (4) 戦中、戦後に究極のシンプルライフ、簡素生活を体験してきたわれわれの世代にとっては、こうした本が出版されることに驚いてしまう。（『いい言葉は、いい人生をつくる』）

ここで本稿での用例の示し方について説明しておく。以上の例にも見られるように、本稿で用例を挙げる際に、二格の名詞に相当するものは□で囲み、ヲ格の名詞や必要に応じてガ格の名詞に相当するものに波線を付し、かざられになっている動詞は下線で示す。また、名詞を修飾する要素もしくは「の」「こと」によって名詞化されるものや、「それ」「そこ」といった指示詞が指し示す要素などは点線で示す。

1.2.4 本研究で扱わないもの

以上 1.2.3 節では本研究における「二格の名詞」の範囲を示したが、以下のようにかざられ動詞が後置詞として働く場合（(5)(6)）、もしくは二格の名詞と動詞のくみあわせが慣用的に用いられる場合（(7)(8)）や「～になる」「～にする」の場合（(9)～(12)）は、本研究では扱わない。

- (5) 日常会話では、発話に当たっていちいち話題とする場面を言葉に出して説明しないから、時としてこのような理解の行き違いも生ずるのである。（『日本人の発想、日本語の表現―「私」の立場がことばを決める―』）
- (6) そして、他者における自己の実現とは、本来の自分に戻ることである。（『読書のたのしみ』）

(5) (6) の「～にあたって」「～における」はそれぞれ「～の際に」「～での」の意味であって、動詞というよりは、「(～に) あたって」「(～に) おける」の形で後置詞として使われていると思われる。その現われとして、このような動詞はテ形で文中に現われるか、連体形で名詞を修飾するだけで、終止形で文を終わらせることができないことが特徴として挙げられる。同じようなものに、「～にかける/かけて」「～に関する/関して」「～に際して」「～にしたがって」「～に対する/対して」「～について」「～につれて」「～にとって」「～による/によって」などもある。

- (7) まだ若い月が、そうっと空を渡ってゆこうとしているのが目に止まった時、バスが発車した。（『キッチン』）
- (8) わけもわからず一ぺんに涙にくれてしまうみたいな場所に、それはやっぱりある

んじゃないかって。（『泣かない子供』）

(7) (8) は「頭にくる」「耳につく」などと同様で、慣用的な言い回し（例えば、「頭にくる」は「立腹する」ことを表わし、「耳につく」は「耳に強く感じられる」ことを表わす）であると言える。この場合、くみあわせ全体がひとまとまりになって、特定の意味を表わしているため、二つの要素に分割できず、ある程度固定化している。また、こういったくみあわせにおいては、二格の名詞と動詞との間に副詞などの要素を挿入することができないのも特徴であろう。

(9) 「残念だけど、ママとパパは離婚することになったの」（『落花流水』）

(10) 例えば、「臆病な人」を「慎重な人」といったら、それは不的確ということになるでしょう。（『日本語練習帳』）

(11) ちゃんと喋れるようになるまで、お母ちゃんには逆らわんことにする。（『少年H』（上巻））

(12) 重松は「被爆日記」を毛筆で清書することにした。（『黒い雨』）

(9) (10) は必然的な事態の生起を言う表現であるが、何が「離婚すること」「不的確ということ」になるのかが明示されず、また補うことも難しいように特殊な構文である。事態の決定を表わす (11) (12) も同様である。このような構文においては、二格の名詞と動詞との関係进行分析することはほぼ不可能であろう。

また、のちに 2.4 節で詳述するが、下の (13) ～ (15) のように、二格の名詞が動作の状況（動作にとっては外的な空間、情勢、時間など）を表わす場合も、本研究では扱わない。

(13) ……署内には大勢の巡査がつくえにむかっている。（奥田（1962[1983:318]）の例 249 を引用⁶）

(14) 藻のにおいのみちた風のなかに蝶が一羽ひらめいていた。（奥田（1962[1983:320]）の例 265 を引用）

(15) 私が深夜三時に帰宅しても、父は怒らない（しかし眠らずに待っている）。（『泣かない子供』）

1.3 本研究で扱うデータ

本研究では、言語資料から手作業で用例を集め、分析し、研究対象である二格の名詞と動詞からなる連語を分類し記述するという方法をとる。

⁶ 囲みと下線は本稿に合わせて変更している。下の (14) も同様。

本節では、分析に使用した用例の出典および用例の詳細について述べる。

1.3.1 言語資料について

本研究では、いわゆる戦後（1945 年以降）の文学作品および新聞などの言語資料からニ格の名詞と動詞との連語を含んだ用例を手作業により収集し分析を加える。言語資料は以下の通りである。

I、文学作品

文学作品として選んだのは下記の計 25 作品（ジャンル別・発表年順）である。様々な作品から広く用例を集めるために、各作品からの収集の範囲を本文の最初のページから 50 ページ目までに限定し、その範囲において全例採集した。

<小説>

- 1) 松本清張（1958）『点と線』新潮文庫版（1971）（pp.5-54）
- 2) 井伏鱒二（1965）『黒い雨』新潮文庫版（1970）（pp.5-54）
- 3) 井上ひさし（1970）『ブンとフン』新潮文庫版（1974）（pp.5-57）
- 4) 星新一（1971）『ブランコのむこうで』新潮文庫版（1978）（pp.5-54）
- 5) 黒柳徹子（1981）『窓ぎわのトットちゃん』講談社（pp.9-58）
- 6) 赤川次郎（1986）『百年目の同窓会』徳間書店（pp.9-60）
- 7) 吉本ばなな（1991）『キッチン』角川文庫版（1998）（pp.7-56）
- 8) 妹尾河童（1997）『少年 H』（上巻）講談社（pp.6-55）
- 9) 山本文緒（1999）『落花流水』集英社文庫版（2002）（pp.8-59）
- 10) 片山恭一（2001）『世界の中心で、愛をさけぶ』小学館（pp.1-50）
- 11) 辻仁成（2005）『幸福な結末』角川書店（pp.7-59）

<エッセイ>

- 12) 室生犀星（1955）『女ひと』岩波文庫（2009）（pp.7-57）
- 13) 遠藤周作（1975）『ボクは好奇心のかたまり』新潮文庫版（1979）（pp.10-59）
- 14) 向田邦子（1982）『男どき女どき』新潮文庫版（1985）（pp.12-63）
- 15) 曾野綾子（1986）『永遠の前の一瞬』新潮文庫版（1990）（pp.14-63）
- 16) 田辺聖子（1990）『天窓に雀のあしあと』中公文庫版（1993）
- 17) 北杜夫（1994）『母の影』新潮文庫版（1997）（pp.7-57）
- 18) 江国香織（1996）『泣かない子供』大和書房（pp.10-60）
- 19) 斎藤茂太（2002）『いい言葉は、いい人生をつくる』成美文庫版（2005）（pp.3-62）

< 評論 >

- 20) 詫摩武俊 (1967) 『性格はいかにつくられるか』 岩波新書版 (1993) (pp. i - 52)
- 21) 富山和子 (1973) 『水と緑と土』 中公新書版 (1992) (pp.2-51)
- 22) 中埜肇 (1989) 『空間と人間』 中公新書 (pp.i-50)
- 23) 森田良行 (1998) 『日本人の発想、日本語の表現―「私」の立場がことばを決める―』 中公新書 (pp.i-48)
- 24) 大野晋 (1999) 『日本語練習帳』 岩波新書 (pp.i-52)
- 25) 岩波文庫編集部編 (2002) 『読書のたのしみ』 岩波文庫 (pp.7-56)

ジャンル別・年代別の作品の数を下の表 1 に示す。

表 1 言語資料のジャンル別・年代別の作品数

年 代 ジャンル	1950 年代	1960 年代	1970 年代	1980 年代	1990 年代	2000 年 以降	合計
小説	1	1	2	2	3	2	11
エッセイ	1	0	1	2	3	1	8
評論	0	1	1	1	2	1	6
合計	2	2	4	5	8	4	25

II、新聞

文学作品の他に、新聞からも用例を採集した。詳細は以下の通りである。

- ・朝日新聞 (朝刊) : 「社説」と「天声人語」 (略記号はそれぞれ「朝・社」、「朝・天」)
2011 年 4 月 13 日～2011 年 5 月 13 日の 30 日分 (5 月 5 日は新聞休刊日のため、オンラインの更新がなかった)

朝日新聞社ホームページのオンライン閲覧

「社説」: <http://www.asahi.com/paper/editorial.html>

「天声人語」: <http://www.asahi.com/paper/column.html>

(アクセス: 2011 年 4 月 13 日～2011 年 5 月 13 日)

III、補助的なデータ

本研究での主張を補助的に説明するために、電子化資料である『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』(翻訳作品を含まない戦後作品に限る) から用例を採集する場合もあり、それについては、以下「コーパス」と呼び、作品名とともに示す。その他、辞書やインターネットからも任意に用例を採集するが、そのつど出典を明記して示す。なお、これらの補助的なデータは全体の用例数には含めない。

1.3.2 データの詳細について

上述した方法により用例を収集した結果得られた動詞の異なり語数は 1496 語⁷（うち自動詞 823 語（和語動詞 559 語、漢語サ変動詞 264 語）、他動詞 673 語（和語動詞 495 語、漢語サ変動詞 178 語））で、延べ用例数は 6781 例であった。これらが本研究における分類の中で、どのように分布しているかをあらかじめ表 2 に示す。なお、第 2 部と第 3 部で詳細に記述するように、これらのむすびつきは、各々独立して存在しているのではなく、他のむすびつきに移行したり、他のむすびつきを派生したりして、お互いに関係しているため、各むすびつきについては、正確な用例数や動詞の数を挙げるのが極めて困難であろう。従って、ここではあくまで参考として大体の分布状況を示すに留めざるを得ないことをあらかじめ断わっておく。

表 2 各むすびつきの用例数および動詞の数

むすびつき		延べ用例数			動詞の異なり語数		
		総数	内訳		総数	内訳	
			自動詞	他動詞		自動詞	他動詞
対象的なむすびつき	ありかのむすびつき	1774	1400	374	199	154	45
	移動のむすびつき	1329	974	355	373	192	181
	くっつきのむすびつき	901	506	395	274	138	136
	相手のむすびつき	635	103	532	203	35	168
	社会的なかわり	76	69	7	30	25	5
	心理的なかわり	512	449	63	233	196	37
	関係のむすびつき	343	286	57	128	97	31
	働きかけのむすびつき	18	8	10	10	6	4
	受身的なむすびつき	10	9	1	7	6	1
規定的なむすびつき	結果規定のむすびつき	907	777	130	120	54	66
	内容規定のむすびつき	48	31	17	16	3	13
	目的規定のむすびつき	228	143	85	59	15	44
合計		6781	4755	2026	1652	921	731

なお、同じ動詞でも、例えば「向こうに（山城が）見える」（〔認知物のありか〕）と「（駅長さんが）厚着に見える」（〔内容規定のむすびつき〕）における「見える」のように、異なる意味内容の二格の名詞とそれぞれ異なるタイプのむすびつきを作ることができるため、表 2 に示されている動詞の異なり語数の合計（1652 語）は全体の動詞の異なり語数（1496 語）より多いことは免れない。

⁷ 例えば「会う」と「合う」のように、読み方が同じでも、意味が異なるものは、2 語として計算する。

1.4 本稿の構成

第1部「序論」の第2章では、格助詞「ニ」、二格の名詞と動詞との関係、二格の名詞を含む連語論といった観点から、それぞれの先行研究を紹介し、本研究の位置づけを明確にする。まず2.1節から2.3節まで先行研究を概観し、それぞれの問題点を指摘する。先行研究を踏まえた上で、2.4節で本研究の位置づけを明確にするが、まず2.4.1節で本研究の主要な先行研究である奥田（1962[1983]）について再考を行う。その上で、2.4.2節で本研究の立場や方法論を示し、2.4.3節で本研究と格助詞研究などとの異同を述べる。

第2部「二格の名詞と動詞からなる連語の分類」では、二格の名詞と動詞からなる連語が表わすいくつかのむすびつき、そのむすびつきの性格および実現する諸条件などを記述する。二格の名詞と動詞からなる連語は、二格の名詞と動詞とのむすびつき方、および名詞と動詞のカテゴリカルな意味によって、まず「対象的なむすびつき」と「規定的なむすびつき」の2つに大きく分かれる。

第3章では、「対象的なむすびつき」を取り上げる。二格の名詞と動詞からなる連語の大部分が「対象的なむすびつき」を作っているので、第3章は第2部の中心的な部分をなしている。「対象的なむすびつき」に、「ありかのむすびつき」「移動のむすびつき」「くつつきのむすびつき」「相手のむすびつき」「社会的なかわり」「心理的なかわり」「関係のむすびつき」「働きかけのむすびつき」「受身的なむすびつき」の9つの下位分類があり、分類ごとに節を立てて述べる。なお、それぞれのむすびつきはさらにいくつかのタイプに分けることができる。

第4章では、「規定的なむすびつき」を扱う。第3章に比べ大変少ないが、その下位分類として、「結果規定のむすびつき」「内容規定のむすびつき」「目的規定のむすびつき」の3つに分けて述べる。

次に、本研究の中核である第3部「二格の名詞と動詞からなる連語がなす体系」では、第2部での分類をもとにして、むすびつきの間にある派生や移行などの相互関係を述べ、二格の名詞と動詞からなる連語がなす体系を明らかにする。なお、その体系の全体像をとらえやすいように、「対象的なむすびつき」と「規定的なむすびつき」との相互関係と、「対象的なむすびつき」の各カテゴリーの間の相互関係に分けて述べる。

前者については第5章で扱い、「規定的なむすびつき」に属する3つのカテゴリーがそれぞれ「対象的なむすびつき」とどう関係するかを節ごとに述べる。

第6章で後者を取り上げるが、「ありかのむすびつき」「移動のむすびつき」「くつつきのむすびつき」の3つのむすびつきを中心に、この3つの間にどのような相互関係があるのか、またこの3つが他のむすびつきとどう関係するかをそれぞれ述べる。

最後に、第4部では、論文全体の結論をまとめ（第7章）、今後に残された課題につい

て述べる（第 8 章）。

第2章 先行研究および本研究の位置づけ

本章では、まず、格助詞「に」、二格の名詞と動詞との関係、二格の名詞を含む連語論という3つの観点から、それぞれの先行研究を紹介する。先行研究を踏まえた上で、最後に本研究の位置づけを明確にする。

2.1 格助詞「に」の研究

格助詞「に」については、これまで数多くの研究がなされてきたが、本研究との関連性を考慮して、本研究では主に国立国語研究所(1951)と益岡・田窪(1987)を紹介することにする。

2.1.1 国立国語研究所(1951)

国立国語研究所(1951)は現代口語における助詞・助動詞の意味・用法を細かく分類し、その各々にいくつかの用例を付して記述したものである。この本における二格の項目に、以下のような10の用法が挙げられている。以下、用例は二格の名詞と動詞のくみあわせのみ摘記している。

国立国語研究所(1951:135-151): 格助詞「に」

①動作・作用の行われる空間的な場所の定位・位置を示す。いわば、事物の存在する場所。また、事物を存在させる場所。

女が下諏訪に⁸いる、部屋に灯が輝く、愛知県豊川に空電研究所を設ける……

②尊敬の意を表すべき主語につける。(「～には」「～におかせられては」などの形)

③動作・作用の行われる抽象的な場所の定位を示す。①を参照。

予算面に出る、知性の立場に立つ、諸問題に難しいことが多い……

④動作・作用の行われる時・場合を示す。

(イ) 時: 十二日に解除する、春のはじめに起る……

(ロ) 場合・事態: ～の場合に、～の度に、競争に負ける、国交調整に成功する……

⑤割合・割当の基礎を示す。

12分に1回転、一日に一回……

⑥動作・作用の到達する地点・状態。

(イ) 到達点・行き着く所(時・人なども含めて)・方向。

岡山に着く、テントにとびこむ、庭下駄に片足を下ろす……

(ロ) 成り行く状態・結果。

生後八カ月以降になる、高校に昇格する、二つに割れる……

⁸ 例は連語の骨格だけを抜き出して掲げたものである。

(ハ) 変化・帰着させる状態。

これをパンフレットに作成する、母と娘に扮する、稲株を正方形に配置する……

⑦動作・作用の向けられる対象の事物。

(人を目あての動作・作用の相手)

ディックに電話をかける、大尉にお礼を述べる、ディックに刑を宣告する……

(事物に向けられる動作・作用の対象)

偏向板に加わる(電圧)、審査にとりかかる、選挙対策に着手する……

⑧動作・作用がなんのために行われる(存在する)かの目的を示す。

(イ) 動詞終止形(動作性名詞を含む)につく場合。

改善するに必要な手段、国交調整に全力をつくす……

(ロ) 動詞連用形(動作性名詞を含む)につく場合。

遊びに出かける、別れを告げにスーザンを追って来る……

(ハ) [～ために]: 学校を救済するために、全中国を統一させるために……

⑨動作・作用のよりどころ・由来。

(イ) 動作・作用の手段としてのよりどころ。

経歴の程度に鑑みると、協定にもとづく、雨に濡れる……

(ロ) 動作・状態を構成する内容。

青春に富む、～の観念に乏しい……

(ハ) 比較の基準となる事物。

新聞記事に似る、昨年に倍する、それに比べる……

(二) 評価の基準となる事物。

福祉に有害でない、研究を行うのに適する、～の名に価する……

(ホ) 影響をこうむり、作用を受ける場合の、影響・作用の由来・出どころ。

けだるさにとられる、君に教わる……

(ヘ) 動機・きっかけ。

二人のきもちに心をあらためる、条約の成立に自信を高める……

(ト) 名目・理由(「として」の意): ホームラン賞にラクダをもらう……

⑩動作・作用・状態の行われ方・あり方。

左右に飛びちがう、飛石づたいにあるく、時間別に記録する……

2.1.2 益岡・田窪(1987)

益岡・田窪(1987)は外国人日本語学習者向けの学習書であり、基本的な用法をマスターしても、実際にどう使い分けてよいのか分かりにくい格助詞を、類似した各語のペアの練習を通じて学んでいく。この本の「格助詞の基本的用法」の部分に、「が」「を」「に」「へ」「と」「で」「から」「より」「まで」が取り上げられているが、そのうち格助詞「に」の基本的用法が11項目にまとめられている。

益岡・田窪（1987:4-5）：格助詞「に」の基本的用法

- 1、具体物・抽象物の存在位置：駅の前に大学がある、計画に問題がある……
- 2、所有者：私に子供がある、われわれに金がない……
- 3、動作や事態の時、順序：3時に会議がある、山田が最後に着く……
- 4、動作主：私にできる、彼にやらせる、先生に叱られる……
- 5、着点：目的地に着く、壁にカレンダーを貼る……
- 6、変化の結果：信号が赤に変わる、学者になる、息子を医者にする……
- 7、受け取り手・受益者：子供にお菓子をやる、恋人に指輪を買う……
- 8、相手：恋人に会う、田中さんに聞く、父親に金をもらう
- 9、対象：親に逆らう、提案に賛成する、試験の結果に失望する……
- 10、目的：海に海水浴に行く、買い物に行く……
- 11、原因：寒さに震える、酒に酔う……

2.1.1 節で紹介した国立国語研究所（1951）ほど詳しくないが、両者には通じる部分が多いであろう。なお、益岡・田窪（同）では二格の基本的用法だけでなく、働きかけの対象を「二」で表わす動詞の類型化も行われている。その分類を以下に示す。

益岡・田窪（1987:24-25）：働きかけの対象を「二」で表わす動詞の類型

- 1) 方向性を持つ動きを表わすもの：吠える、もたれる、触れる、飛びつく、かみつく…
- 2) 对人的態度を表わすもの：からむ、くいさがる、ほれる、恋する、お辞儀する……
- 3) 物事に対する態度を表わすもの：励む、打ち込む、こだわる、耐える、親しむ……
- 4) 对人的または物事に対する態度：憧れる、頼る、従う、負ける、逆らう……
- 5) 認知を表わすもの：注目する、着目する、気づく（気がつく）、注意する……
- 6) その他：影響する、作用する、利く、違反する、間に合う……

2.2 二格の名詞と動詞との関係に関する研究

名詞と動詞との関係に注目し連語論の観点から行われたと見られる研究に、森山（1988）と呉（2000）が挙げられる。また、連語論の観点からではないが、同じく名詞と動詞との関係に注目した研究に寺村（1982）もある。本節では、それぞれの研究の二格の名詞と動詞との関係にかかわる部分を紹介する。

2.2.1 森山（1988）

森山（1988）は、動詞を述語とする文の意味からみた類型を試みた研究である。そのうち、第Ⅲ部「統語論」の第1章では、「格の類型」に関する考察が行われている。これは、連語論的な考え方による格パタンの類型であり、「格成分の分析上の問題点について考察し、

格体制がどのように規定されるかという観点から、動詞句の連語としての意味を抽出することを具体的に試みる」(p.19) ものである。具体的には、「格のパターンを考え、格助詞の置換⁹を手掛かりにして意味的な問題を考え、連語論的な意味を設定」(p.66) するという方法をとる。以下では、本研究との関連上、主に二格を含む格のパターン、すなわち、a) [ガ, ニ] 型、b) [ガ, カラ, ニ] 型、c) [ガ, 引用のト, ニ] 型：伝聞・伝達動詞句、d) [ガ, ヲ, ニ] 型、e) [ガ, ヲ, カラ, ニ] 型の5つを取り上げ、それぞれの連語論的な意味を紹介する。

森山 (1988:70-94) : 二格を含む格のパターンの連語論的な意味

a) [ガ, ニ] 型

- 1) 存在を表わすもの：[ガ, ニ] 型、[ガ, 場所名詞デ] 型
 - ①存在動詞：[ガ, ニ] 型（ある、いる、存在する、実在する）
 - ②様態存在動詞句：[ガ, ニ／デ（ニオイテ）] 型（シテイル形：浮かぶ、沈む、そびえる、隠れる、泊る）
- 2) ヘ格に置換されるもの：移動的なもの：[ガ, ニ／ヘ] 型
 - ①接着動詞句（あたる、埋まる、収まる、こびりつく、ささる、しゃがむ……）
 - ②出現動詞句（現れる、生ずる、噴き出す、もえたつ、わき上がる）
- 3) ニタイシテに置換されるもの¹⁰：[ガ, ニ／ニタイシテ] 型
 - ①態度の動詞句（憧れる、飽きる、お辞儀する、干渉する、恐縮する、……）
 - ②働きかけの自動詞（挨拶する、お辞儀する、拍手する、逆らう）
- 4) デ等に置換されるもの：原因・変化動詞：[ガ, ニ／ニヨッテ／デ] 型
（驚く、呆れる、悩む、困る、苦しむ、泣く、笑う、酔う）
- 5) 同一的なト格に置換されるもの：主体改変型変化動詞句：[ガ, ニ／ト] 型
（改める、変える、化す、なる、交替する）
- 6) 相互的なト格に置換されるもの：[ガ, ニ／ト] 型
（会う、関わる、別れる、混ざる、（釣り合う））
- 7) ニ格の交替がないもの：関係動詞句
（関与する、因る、要る）

⁹ 森山 (1988:70) は「格助詞がどのように置換されうるかということ（格助詞置換法）が、格関係を意味的に探る際の大きな手助けとなる」として、二格の置換の範囲を以下のように挙げている。

デ : 旅館 に／で 泊まる
ヘ : 京都 に／へ 着く
ニタイシテ: 彼 に／に対して 抵抗する
ニムカッテ: 彼 に／に向かって 近づく
ニヨッテ : 失敗 に／によって 悩む
ト (同一的): 恋人 に／と なる
ト (相互的): 水がアルコール に／と 混ざる

¹⁰ 森山 (1988) はニオイテ、ニタイシテ、ニムカッテのようなものもガ、ヲ、ニと同様に「格助詞」と呼んでいる。なお、これらは高橋 (1994) では「後置詞」とされている (cf. 「後置詞化」: 「いわゆる「他の品詞から後置詞への移行」 (p.99))。

b) [ガ, カラ, ニ] 型

1) ニ格がへ格に置換可能:[ガ, カラ, ニ／へ] 型

- ①起点に重点があるもの: 出発動詞句 (散る、離れる、出発する)
- ②移動全体が取り上げられるもの: 単純移動動詞句 (上がる、移動する、動く、移る、下がる、渡る……)

2) ニ格が同一的なト格に置換可能なもの: 主体改変動詞句カラ・ト類
(改まる、変わる、なる、変身する、変心する)

c) [ガ, 引用のト, ニ] 型: 伝聞・伝達動詞句

(言う、怒る (感情の方向がある)、話す、聞かせる、講演する、うそぶく、知らせる…)

d) [ガ, ヲ, ニ] 型

1) [ガ, ヲ, ニ／デ (ニオイテ)] 型: 発見動詞句

2) [ガ, ヲ, ニ／へ] 型: 対象接着・対象姿勢方向動詞句

(浴びせる、当てる、押し付ける、かける、飾る……／押す、向ける、開ける……)

3) [ガ, ヲ, ニ／ト (相互的)] 型: 相互型対象変化動詞句

(合わせる、重ねる、つなげる、似せる、交ぜる……)

4) [ガ, ニ／ニタイシテ, ヲ] 型: 適応の動き (ヲ格を含んで働き掛けるもの)
(働かせる)

5) [ガ, ヲ, ニ／同一的なト] 型: 対象改変型動詞句

(改める、変える、なおす、する、(もとに) もどす (非移動的))

e) [ガ, ヲ, カラ, ニ] 型

1) [ガ, ヲ, カラ, ニ／へ] 型: 対象移動動詞句

(出す、(火気を) 遠ざける／上げる、移動する……／与える、集める、送る……)

2) [ガ, ヲ, カラ, ニ／ト] 型: 対象改変型変化動詞句

(改める、変える、治す、訂正する)

森山 (1988) は単なる格パタンの類型化ではなく、形式の支えをもって動詞句としての意味、すなわち連語的な意味を研究したものであり、連語論にかなり近い。しかし、「連語的な意味」について、森山 (同:65) は「奥田氏の言う「構造的にしばられた意味」というような観点は、ここで問題にする連語的な意味である。」としているが、奥田氏の言う「構造」は森山 (同) の「格のパタン」よりも、名詞と動詞とのむすびつきに深くかかわっていると思われる。森山 (同) は動詞の意味を類型化しているが、要求している名詞の意味は類型化されていない。このように、森山 (同) は格パタンの類型を通して連語的な意味を設定できても、連語論で問題とされている個々のむすびつきの間の関係には触れていない。

2.2.2 吳 (2000)

吳 (2000) は同じく連語論の観点から、動詞の意味・用法を規定しようとしたものである。吳は当該の動詞が支配する名詞の格に注目し、AO 動詞、AB 動詞、AC 動詞、BO 動詞、C 動詞、O 動詞という 6 種類のグループを設定している。吳 (2000:51) によると、A は「ヲ格」、B は「ニ格」、C は「その他の格」を意味し、また、O とは「格支配のないこと」を意味するという。つまり、AO 動詞、AB 動詞、AC 動詞、BO 動詞、C 動詞、O 動詞はそれぞれ以下のような動詞を意味する。

AO 動詞：ヲ格の対象¹¹だけを必要とする動詞

AB 動詞：ヲ格の対象とニ格の対象とを必要とする動詞

AC 動詞：ヲ格の対象とヲ格以外の対象を必要とする動詞

BO 動詞：ニ格の対象だけを必要とする動詞

C 動詞：ヲ格ニ格以外の対象を必要とする動詞

O 動詞：対象を必要としない動詞

また、これら 6 種類のグループについて、さらにそれぞれの連語論的な特性の違いによって細分を行っている。以下では、本研究と直接関連のある AB 動詞と BO 動詞、つまり「ヲ格の対象とニ格の対象とを必要とする動詞」と「ニ格の対象だけを必要とする動詞」についてその具体的な分類を紹介する。

吳 (2000:140-220) ¹² : AB 動詞 (ヲ格の対象とニ格の対象とを必要とする動詞)

1、とりつけ的な意味を表わす動詞

(布を胸に) つける、(広告を壁に) はる、(糊を門に) なする、(ペンキをベンチに) ぬる

2、うつしかえ的な意味を表わす動詞

(テーブルを居間に) うつす、(雑誌を封筒に) いれる、(ゴミをゴミ箱に) すてる、
(裾を上膊まで) まくる

3、授受的な意味を表わす動詞

(人に強い力を) さずける、(馬に水を) あたえる、(金を銀行に) あずける、(参考書を友達に) かす

4、言語活動的な意味を表わす動詞

(前歴を妻に) はなす、(先生に失礼なことを) いう、(夫に秘密を) かたる、(行き先を運転手に) つげる

¹¹ 吳 (2000) では、主体以外のものを広く「対象」という。

¹² 吳 (2000) は中国語で書かれているが、紹介する際に使用する日本語訳は鈴木康之 (2005) による。なお、鈴木康之 (2005) では、吳氏が 1996 年に書かれた同名の博士論文 (「現代動詞の意味・用法の連語論的な研究」) の一部が紹介されている。

吳 (2000:255-273) : BO 動詞 (ニ格の対象だけを必要とする動詞)

- 1、方向的な移動を表わす動詞
(町に) いく、(駅に) くる、(宿舎に) もどる、(家に) かえる……
- 2、消出という現象的な意味を表わす動詞
(海が遠くに) あらわれる、(怪物が水面に) うかぶ、(鉱水が地面に) わく……
- 3、心理状態的な意味を表わす動詞
(速度に) おどろく、(恐怖に) おののく、(殺人罪に) おびえる……
- 4、その他の BO 動詞
 - 1) 存在的な意味を表わす動詞
庭に (木が) ある、家に (人が) いる、社会に (悪が) 存在する……
 - 2) くつつきの意味を表わす動詞
(郊外に) うつる、(縄に) すがる、(毛布に) くるまる、(水に) ひたる……
 - 3) 関係的な意味を表わす動詞
(母親に) にる、(義兄に) あたる、(北側に) ひかえる、(東に) そびえる……
 - 4) 社会的な活動を表わす動詞
(大学に) 入学する、(会社に) 就職する、(課長に) 出世する……

吳 (2000) は 6 種類のグループを設定しているが、連語論的な観点からの動詞分類にとどまっており、その細かさにおいても森山 (1988) より不十分である。

2.2.3 寺村 (1982)

連語論の観点からではないが、名詞と動詞との関係に注目している研究として、寺村 (1982) が挙げられる。寺村 (同) は「第 2 章 コトの種類」で、「日本語の述語を、それがどういう種類の補語を必要とし、それぞれの補語がどういう格助詞をとるかという視点から分類して」いる (p.81)。なお、寺村 (同:79) によると、「具体的なコトを描くかなめとしての叙述語が「述語」¹³であり、それといろいろな格関係において結びつく名詞が「補語」である」。以下では、寺村 (同) の 30 分類から、本研究と関連のあるニ格を補語に含めた 15 分類を紹介する。

寺村 (1982:87-170) : 補語にニ格を含めた類型

- [4] ¹⁴対面、あるいは対象に対する態度 : 「X ガ Y ニ」

述語 : A. (「働きかけ」性の強いもの) 賛成する、かみつく、飛びかかる、吠える
B. 恋する、憧れる、頼る、言う

¹³ 寺村 (1982) では、「述語」には動詞だけではなく、形容詞も含まれている。なお、以下の分類の紹介では動詞のみ取り上げる。

¹⁴ 分類の通し番号は寺村 (1982) と同じものである。

- C. 会う、(海に) 面する/臨む、向かう、(彼に) 近づく
- [8] 移動—3 「入る、着く；泊まる」類：「X ガ (Z カラ) Y ニ」
 述語：A. 入る、乗る、着く、向かう
 B. 集まる、近づく、沈む、落ち着く
 C. 泊まる、住む、立つ、座る
- [9] 行く、来る、帰る、戻る：「X ガ (Z カラ) (W ヲ) Y へ/Y ニ」
- [10] 変化 「なる」類：「X ガ (Z カラ) (Y ニ)」
 述語：A. なる、変わる、化ける、扮する
 B. 分かれる、伸びる、増える、昇進する
- [11] 働きかけと移動の複合 「入れる」類：「X ガ Y ヲ (W カラ) Z ニ」
 述語：A. 入れる、乗せる、着ける、伝える
 B. 集める、沈める、落ち着ける、捨てる
 C. 泊める、立てる、並べる、比べる
- [12] 働きかけと変化の複合 「変える」類：「X ガ Y ヲ (W カラ) (Z ニ)」
 述語：A. する、変える、決める、選ぶ
 B. 増やす、上げる、温める、塗る
- [13] 授受の表現 (1) 「与える」類：「X ガ Y ニ (Y へ) Z ヲ」
 述語：与える、教える、売る、紹介する
 やる、あげる、さしあげる、くれる、くださる
- [14] 授受の表現 (2) 「受ける」類：「X ガ Y ニ/Y から Z ヲ」
 述語：受ける、教わる、買う
 もらう、いただく
- [15] 「命じる」類：「X ガ Y ニ Z ヲ/コトヲ/ト」
 述語：命じる、強いる、勧める、説明する、感謝する
- [16] 一時的な気の動き：「X ガ Y ニ」
 述語：驚く、ハッとする、安心する、怒る、失望する
- [21] 物理的存在 (あるとき、あるものがある空間を占めて存在する)：「X ガ Y ニ」
 述語：ある、いる
- [22] 所有、所属の存在：「X ガ Y ニ」
 述語：ある、いる
- [23] 部分集合、または種類の存在：「X ガ (Y ノ中) ニ」
 述語：ある、いる
- [24] 「何かに対する」性状：「X ガ Y ニ/Y ト」
 述語：A. 面している
 B. 似ている、平行している、共通している
 C. 異なる、違う

〔25〕 相対的性状：「X ガ Y ニ/ Y ニトッテ」

述語： できる、分かる

寺村（1982）は述語全体の分類であり、二格の名詞と動詞のくみあわせはばらばらになっていて、体系化されていない。

2.3 二格の名詞を含む連語論の研究

二格の名詞を含む連語論の研究として、奥田（1962[1983]）（「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」）と松本（1979）（「に格の名詞と形容詞とのくみあわせ」）が挙げられる。以下、2.3.1 節と 2.3.2 節でそれぞれを紹介する。

2.3.1 奥田（1962[1983]）：「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」

周知のように、奥田（1962[1983]）は二格の名詞と動詞とのくみあわせ全体を対象とした記述的な研究であり、「記述的な研究にもとづいて、に格の名詞と動詞とのくみあわせがあらわすカテゴリー的な構造をあきらかにすること」を目的としている。具体的には、「この型の単語のくみあわせがあらわすいくつかのむすびつき、そのむすびつきが実現する諸条件、むすびつきのあいだにある相互関係をあきらかにする」研究である。

奥田は、二格の名詞と動詞とのくみあわせは、a) [対象的なむすびつき]、b) [規定的なむすびつき]、c) [状況的なむすびつき] を表わしているとしている。それぞれについては以下のように説明している。

- ・ 対象的なむすびつき

動作（あるいは状態）とその動作（あるいは状態）の成立にくわわる対象との関係である。（p.282）

- ・ 規定的なむすびつき

かざり名詞でしめされる状態あるいは現象は、動作そのものの成立に直接に関係せず、動作のもっているなんらかの側面を規定してかかる。（p.309）

- ・ 状況的なむすびつき

かざり名詞でしめされるものは、動作の成立に直接的にくわわってはならず、それをそとがわからとりまくものにすぎない。（p.317）

この 3 つのむすびつきについて、奥田はさらに下位分類を行っている。以下、表 3 では、奥田（同）の詳しい分類を連語の例を挙げてまとめる。なお、用例は基本的に奥田（同）のものを挙げるが、むすびつきの性格をより簡潔かつ明確に示すために、実例から当該の連語のみを抽出し、時制もすべて現在形にしている（波線と太字は奥田（同）に従う）。該

当する連語が存在しない場合は、空欄にする。

表 3 奥田（1962[1983]）：「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」（分類）

分類	下位分類		連語の例	
	I	II	自動詞	他動詞
対象的 なむす びつき	ありかの むすびつき	存在の むすびつき	<u>庭に木がある</u> ； <u>細君のそばにいる</u>	
		内在の むすびつき	<u>雲にかがやきがある</u> ； <u>藤子さんに能力がある</u>	<u>背中に筋をもつ</u>
		所有者の むすびつき	<u>あなたに信一君がいる</u> ； <u>家に田地がある</u>	
		所有物の ありか		<u>銀座うらに店をもつ</u> ； <u>世界中に土地を買う</u>
		認知物の ありか	<u>いすに女客のひざがみえる</u> ； <u>貧民窟に声がきこえる</u>	<u>老人を旅客のむれのなかにみつける</u> ； <u>うら町に古本屋をしっている</u>
		出現物の ありか	<u>えくぼが陶器のはだにできる</u> ； <u>沼のほとりに尼寺がたつ</u>	<u>まちに変化をもたらす</u> ； <u>顔に口ひげをはやす</u>
	ゆくさきのむすびつき		<u>山にいく</u> ； <u>社にかえる</u> ； <u>広場にあつまる</u>	<u>荷物をトラックにはこぶ</u> ； <u>煙草の灰を灰皿におとす</u>
	くつつきのむすびつき		<u>夜風がほおにあたる</u> ； <u>ひざによりかかる</u>	<u>ほおに手をあてがう</u> ； <u>砂はまに風呂敷をしく</u>
	ゆずり相手のむすびつき			<u>金をお前にくれてやる</u> ； <u>旅人に宿をかす</u>
	はなし相手のむすびつき		<u>学校に抗議する</u> ； <u>六角にこたえる</u>	<u>佐伯に礼をいう</u> ； <u>委員会に報告する</u>
	かかわりの むすびつき	心理的な態度 のむすびつき	<u>注射におびえる</u> ； <u>星にあこがれる</u>	<u>土居にはらをたてる</u> ； <u>私に人間的であることをのぞむ</u>
		態度的な動作 のむすびつき	<u>命令にしたがう</u> ； <u>旦那にそむく</u>	<u>このことに口をだす</u> ； <u>勉強に努力をそそぐ</u> ¹⁵
	はたらきかけのむすびつき			<u>お鳥にいらだたしさをあたえる</u> ； <u>おもちゃにぜんまいをかける</u>
	道具のむすびつき		<u>よろこびにあふれる</u> ； <u>才智にたける</u>	<u>帯をうしろ手にむすぶ</u> ； <u>手鏡にかみをそろえる</u>

¹⁵ 奥田（同）は他動詞の例を挙げておらず、「口をはさむ、口をだす、声をあわす、調子をあわす……」などのフレーズのみを挙げているため、この2例は筆者による作例である。

規定的なむすびつき	結果規定のむすびつき	魚の <u>研究家になる</u> ； <u>強盗にかわる</u>	黒髪を <u>ロングカットにする</u> ； 子どもをあたらしい日本人に <u>そだてる</u>
	内容規定のむすびつき	郡が <u>立派な男にみえる</u> ； <u>ぐちにきこえる</u>	相談の相手を <u>神にみだてる</u> ； <u>再建団体に指定される</u>
	様態規定のむすびつき	<u>大声にしゃべる</u> ； <u>従順にはたらく</u>	顔を <u>ながし目にみる</u> ； 指を <u>妙なかたちにごかす</u>
	目的規定のむすびつき	<u>墓まいりにいく</u> ； <u>むかえにでる</u>	<u>見まいにもっていく</u> ； <u>修業にだす</u>
状況的なむすびつき	空間的なむすびつき	<u>置内に巡査がつくえにむかう</u> ； <u>湯殿に女が傍若無人にふるまう</u>	東京のある <u>場末にさかな屋をする</u> ； <u>隣室にしごとをする</u>
	情勢的なむすびつき	<u>雨にやってくる</u> ； <u>拍手のうちに場内が明るくなる</u>	<u>雪に傘をさす</u> ； <u>しずけさのなかに玄鶴をみまもる</u>
	時間的なむすびつき	<u>六時には店がしまる</u> ； <u>五月にいく</u>	郡氏を <u>過去に愛した</u>
	原因のむすびつき	<u>雨にぬれる</u> ； <u>夜の寒さにふるえる</u>	<u>つめたい風にオーバーのえりをたてる</u>

以上は二格の名詞と動詞とのくみあわせについての奥田の分類であったが、以下にむすびつきの間の相互関係に関する記述をまとめる。

まず〔対象的なむすびつき〕〔規定的なむすびつき〕〔状況的なむすびつき〕の3つの間の関係について、以下のような説明がなされている。

「対象的なむすびつきが土台によこたわっていて、そのうえに規定的なむすびつきと状況的なむすびつきとがかさなっているというかたちで、これらのカテゴリーは相互に関係をもっている。一般的にいえば、規定的なむすびつきと状況的なむすびつきとは、対象的なむすびつきから派生したものであって、現代日本語のなかにこれらのカテゴリーのあいだの派生的な関係が法則として確認できる。」(p.281)

表3からもうかがえるように、二格の名詞と動詞とのくみあわせにおいて、〔対象的なむすびつき〕が中心的な部分であって、奥田（同）におけるむすびつきの間の相互関係の記述は主に〔対象的なむすびつき〕に見られる。表3に示したように、〔対象的なむすびつき〕はさらに8つの下位のカテゴリーに分かれている。これらの相互関係について奥田は以下のように総括している。

「(前略) このかざられ動詞の語彙的な意味のずれ＝抽象化によって、カテゴリー相互

の関係がたもたれている。を格（あるいはが格）の名詞と動詞とのくみあわせがフレーズ化することによって、ひとつのカテゴリーからべつのカテゴリーへの移行がすすんでいるあいがある。さらに、かざられ動詞のアスペクトをかえることによって、いくつかのカテゴリーはひとつにまとまるだろう。」(p.283)

具体的に各カテゴリーはどう関係し合うのか、奥田はそれぞれのむすびつきを説明していくなかで触れているので、それらを表4にまとめて示す。表4において、「むすびつきの間の相互関係」は奥田の記述をそのまま引用する。また、奥田が連語の例を挙げていない場合は、「連語の例」の当該個所は空欄にする。なお、相互に関係をもつむすびつきについては、それぞれの箇所でも相互関係に関する記述がなされている場合があるため、「関係をもつむすびつき」の欄のなかで、重複しているものがある。

表4 奥田(1962[1983])におけるむすびつきの間の相互関係

関係をもつむすびつき	むすびつきの間の相互関係（奥田の記述）	連語の例
くつつきのむすびつき、 ゆくさきのむすびつき ↓ 存在のむすびつき	くつつけ動詞 ¹⁶ と移動動詞（いわゆる瞬間動詞）は、状態体 ¹⁷ のかたち（つくーついている、くるーきている）をとると、存在動詞の資格をもってきて、に格の名詞とのくみあわせにおいて存在のむすびつきをつくる。 (p.284)	<u>雪丸のうしろに男が</u> <u>たっている</u> ； 義母が <u>福岡にかえっ</u> <u>ている</u>
所有物のありか、 出現物のありか、 くつつきのむすびつき ↓ 内在のむすびつき	内在のむすびつきをあらわす単語のくみあわせは、所有物のありかや出現物のありかをあらわす単語のくみあわせからも、ずれ＝抽象化の結果うまれてきている。さらに、くつつきのむすびつきをあらわす単語のくみあわせからも派生してきている。(p.285)	とかげが <u>背にみどり</u> の筋を <u>もっている</u> ； 情熱が <u>あなたのなか</u> <u>にひそんでいる</u>
内在のむすびつき ↓ はなし相手のむすびつき、 ゆずり相手のむすびつき、 かかわりのむすびつき	に格の名詞と陳述的なくみあわせとのあいだにできあがる関係は、もはや内在のむすびつきとしてあつかうことはできない。その性格のちがいにしただって、対象的なむすびつきに属するいくつかのカテゴリーにわかれる。 (p.286-287)	<u>このひとにはなしが</u> <u>ある</u> ； <u>あの男に貸しがあ</u> <u>る</u> ； <u>教育に自信がある</u>
認知物のありか ↓ 存在のむすびつき、 内在のむすびつき	「みる」「みえる」が文の中で／ある／という語彙的な意味にちかづくばあいがある。そのことと関係して、この動詞をしんにしてできる単語のくみあわせが、存在あるいは内在のむすびつきをつくるようになる。(p.289)	<u>給仕だまりに給仕が</u> <u>みえない</u> ； <u>営業上におおきな損</u> <u>失をみる</u>

¹⁶ 奥田（同）は〔くつつきのむすびつき〕を表わす単語のくみあわせを作る動詞のグループを「くつつけ動詞」と呼んでいる。

¹⁷ 奥田（同）は動詞の継続相（「～ている」形）を「状態体」と呼んでいる。

<p>認知物のありか</p> <p>↓</p> <p>出現物のありか、 ゆくさきのむすびつき</p>	<p>「みえる」は／あらわれる／あるいは／くる／という語彙的な意味にちかづくばあいがあるだろう。したがって、この動詞とに格の名詞とのくみあわせは、出現物のありかやゆくさをあらわす単語のくみあわせにちかづく。 (p.289-290)</p>	<p><u>佐々の顔に驚愕の色</u> がみえる</p>
<p>くつつきのむすびつき、 ゆくさきのむすびつき</p> <p>↓</p> <p>出現物のありか</p>	<p>くつつけ動詞や移動動詞のあるものが、語彙的な意味のずれ＝抽象化の結果、出現動詞のグループにはいりこんできている。たとえば、でる、だす、たつ、たてる、にじむのような動詞。(p.290)</p>	
<p>出現物のありか</p> <p>↓</p> <p>存在のむすびつき、 内在のむすびつき</p>	<p>出現性の動詞が状態体のかたちをとるばあいも、ありかをしめすに格の名詞とのあいだにあるむすびつきは、存在あるいは内在的なニュアンスをおびてくる。(p.291)</p>	<p>おおきなのが<u>鼠</u>にたくさんなっていた； <u>うしろすがた</u>につかれがあらわれている</p>
<p>ゆくさきのむすびつき</p> <p>↓</p> <p>出現物のありか</p>	<p>はなしがでる、欲がでる、くいがくる、たるみがくる、ひびがはいる、店をだす、芽をだす、あせをだす、おとをだすのようなフレジオロジカルなくみあわせのなかで、移動動詞が出現性の意味をおびてきて、このフレーズをに格の名詞がひろげることによって、出現物のありかをしめしている場合がある。(p.293)</p>	<p><u>部屋</u>に梨花の性格がでている； ビルの<u>一階</u>に食堂をだす</p>
<p>ゆくさきのむすびつき</p> <p>↓</p> <p>かかわりのむすびつき</p>	<p>ゆくさきのむすびつきをあらわす単語のくみあわせは、かかわりのむすびつきをあらわす単語のくみあわせにも移行しているが、このばあいも、口をだす、心をうつす、注意をくばる、同情をよせるのようなフレーズを媒介にしている。(p.294)</p>	
<p>くつつきのむすびつき</p> <p>↓</p> <p>かかわりのむすびつき</p>	<p>はらがたつ、気がつく、いやけがさす、目をとおす、はらをたてる、けちをつける、夢をかけるのようなフレーズを媒介にして、くつつきのむすびつきをあらわす単語のくみあわせが、かかわりのむすびつきをあらわす単語のくみあわせに移行している。(p.298)</p>	
	<p>このくつつきのむすびつきをあらわす単語のくみあわせはひゆ＝すがたづけ的な使用をとおして、かかわりのむすびつきをあらわす単語のくみあわせにちかづいていく。(p.298)</p>	<p><u>面倒なことにさわる</u>； <u>男の心</u>にすがりつく</p>
<p>ゆずり相手のむすびつき</p> <p>↓</p> <p>ゆくさきのむすびつき、</p>	<p>ゆずり相手のむすびつきをあらわす単語のくみあわせが、ゆくさきあるいはくつつきのむすびつきをあらわす単語のくみあわせにちかく、そこには移行の関係がある</p>	

くつつきのむすびつき	ことは、 おくる、わたす、あげる、くばる、とどける、あてがう のような移動動詞あるいはくつつけ動詞が語彙的な意味の抽象化の結果、やりもらい動詞のグループにはいつてきているということのうちに、あらわれている。 (p.299)	
はなし相手のむすびつき ↓ かかわりのむすびつき	言語活動をしめす動詞がに格の名詞とくみあわさって、かかわりのむすびつきをあらわす単語のくみあわせをつくるばあいがある。(p.300)	<u>かれの表情に</u> 注意 する； <u>批判に</u> こたえる
くつつきのむすびつき、 ゆくさきのむすびつき ↓ かかわりのむすびつき	態度的な動作のむすびつきをあらわす単語のくみあわせが、くつつきあるいはゆくさきのむすびつきをあらわす単語のくみあわせから発展したものであることは、 そむく、はむかう、たてつく、たちむかう、かしづく のような動詞の単語づくりの構造のなかに証拠をみることができる。(p.306)	
ゆくさきのむすびつき ↓ 結果規定のむすびつき	かえす、うつす、もどる、すすむ のような移動動詞が抽象名詞とくみあわさって、変化動詞に移行し、この種のむすびつきをあらわす単語のくみあわせをつくることができる。(p.311)	雪朗さんをふつうの <u>状態に</u> かえす ； 学校が町の <u>事業に</u> うつる
ゆくさきのむすびつき ↓ 目的規定のむすびつき	この種のむすびつきが、ゆくさきのむすびつきのずれ＝抽象化の結果うまれてきたことは、うたがいない。二三のばあい、かざり名詞はゆくさきのニュアンスをつよくもっている。(p.315)	<u>見物に</u> いく； <u>入湯に</u> くる

以上、本節では、奥田（1962[1983]）の分類とむすびつきの間の相互関係を紹介した。同じく二格の名詞と動詞とのくみあわせとして、本研究と奥田（同）の関係について 2.4 節で改めて取り上げる。

2.3.2 松本（1979）：「に格の名詞と形容詞とのくみあわせ」

二格の名詞を含む連語論の研究に、前節で紹介した奥田氏の「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」の他に、松本（1979）の「二格の名詞と形容詞とのくみあわせ」もある。この論文の本文中では触れられていないが、論文の後ろに付してある「この報告までの経過」（pp.309-313）によると、松本（同）は奥田氏の「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」と「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」の両論文を大いに参考にしているという。特に、「に格」の論文は「を格」ほど説明が詳しくないことから、連語現象を記述する際の手続きや方法などは、「を格」から学んだとされている。

松本（同）も、二格の名詞と形容詞とのくみあわせを、二格の名詞と形容詞のむすびつ

き方の違いによって、「対象的なむすびつき」、「規定的なむすびつき」、「状況的なむすびつき」の3つに大きく分けている。それに、「これらのカテゴリーのうち、対象的なむすびつきをあらわすくみあわせでは、かざりのに格名詞の存在が、かざられの形容詞の結合能力からみて、だいたい義務的だが、規定的なむすびつき、状況的なむすびつきでは、一般に、義務的とはいえない」（pp.204-205）としている。

この3つのむすびつきについて、松本はさらに下位分類を行っている。以下、表5では、松本（同）の詳しい分類を連語の例を挙げてまとめる。なお、用例は基本的に松本（同）のものを挙げるが、むすびつきの性格をより簡潔かつ明確に示すために、実例から当該の連語のみを抽出し、時制もすべて現在形にしている（下線は松本（同）に従う）。

表5 松本（1979）：「に格の名詞と形容詞とのくみあわせ」（分類）

分類	下位分類			連語の例
	I	II	III	
対象的なむすびつき	ありかのむすびつき	存在空間のむすびつき		この <u>まち</u> に孤児院が <u>ない</u> ； この <u>地域</u> に軍の工場が <u>多い</u>
		社会的な空間のむすびつき		家にしごとが <u>ない</u> ； <u>義務教育学校</u> にそうした制度が <u>ない</u>
		部分・側面のありかのむすびつき		<u>絵</u> に色彩が <u>ない</u> ； <u>からだ</u> に異常が <u>ない</u>
		所属さきのむすびつき		<u>女</u> に詩人が <u>多い</u> ； <u>北条</u> が <u>たに</u> 智者が <u>ない</u>
		もちぬしのむすびつき		<u>伸子</u> に旅費が <u>ない</u> ； <u>夫婦</u> にこどもが <u>ない</u>
	かかわりのむすびつき	態度—性質的なかかわりのむすびつき	あいて的なむすびつき	<u>房子</u> におみやげが <u>ない</u> ； この <u>手紙</u> に返事が <u>ない</u>
			態度のあいてのむすびつき	私は <u>かれ</u> においめが <u>ない</u> ； おふくろは <u>寺</u> に功績が <u>ない</u>
			態度のむけられるものごとのむすびつき	おっとは組合の <u>しごと</u> に <u>熱心だ</u> ； 志村は <u>けしき</u> に興味が <u>ない</u>
			ひとの特性のむけられ、あらわれる対象のむすびつき	<u>あつき</u> によ <u>わい</u> （おば）； <u>食物</u> にく <u>わしい</u> （西洋婦人）
			ものの特性のむけられ、あらわれる対象のむすびつき	ときわ木の葉は <u>風雨</u> につ <u>よい</u> ； 木造のたてものは <u>台風</u> によ <u>わい</u>
		客観的なかかわりのむすびつき	ちかさ—とおさのむすびつき	ちぢみの産地はこの <u>温泉場</u> に <u>ちかい</u> ； <u>海</u> にと <u>おい</u> （この野の村）
			にかよいのむすびつき	自分の顔は K の <u>顔</u> に <u>そっくりだ</u> ；

		対象＝判断 的なかわ りのむすび つき		ももに <u>ちかい</u> （木）
			へだたりのむすびつき	<u>工廠に<u>関係がない</u></u> （もの）； 芸術は <u>政治に<u>無縁だ</u></u>
			＝にないてのむすびつき	ストーブは <u>台所に<u>不適當だ</u></u> ； 色が <u>壁に<u>不つりあいだ</u></u>
			モーダルな判断のよりどころ＝にないてのむすびつき	<u>ごはんに<u>たくあんが<u>必要だ</u></u>； <u>学者に書物が<u>大切だ</u></u></u>
	主体の むすびつき	感情の主体のむすびつき	話し方のほうが <u>三四郎に<u>おもしろい</u></u> ； <u>私に労働が<u>たのしい</u></u>	
		感覚の主体のむすびつき	<u>ふたりにこの陽気が<u>あつい</u></u> ； <u>鮭に<u>まぶしい</u></u> （光堂）	
		感覚点のむすびつき	冬の夜風が <u>くちびるに<u>つめたい</u></u> ； 風が <u>皮膚に<u>いたい</u></u>	
規定的 なむす びつき	内容規定的なむすびつき		宗助は <u>勇氣に<u>とほしい</u></u> ； このはなしは <u>確実性に<u>とほしい</u></u>	
	目的規定的なむすびつき		<u>むしぼしに<u>よい</u></u> （季節）； <u>学習に<u>必要な</u></u> （あかるい生活）	
	意義づけ的なむすびつき		牛のすねの骨つき肉が <u>スープに<u>適當だ</u></u> ； <u>女もちに<u>おおきい</u></u> （銀どけい）	
	状態規定的なむすびつき		<u>茶色に<u>きたない</u></u> （髪）； 地形は <u>南北に<u>ながい</u></u>	
状況的 なむす びつき	時間的なむすびつき		<u>天保時代に<u>ない</u></u> （もの）； <u>下痢のときなぞに<u>くずゆが<u>適當だ</u></u></u>	
	環境的なむすびつき		<u>曇天にかげが<u>つよい</u></u> ； <u>うすあかりのうちに色<u>があざやかだ</u></u>	
	原因的なむすびつき		かおはたそがれの <u>ひかりに<u>あおい</u></u> ； <u>ひかるみどりに<u>目が<u>いたい</u></u></u>	

以上、本節では、松本（1979）の分類を簡単に紹介した。かざられが形容詞か動詞かで性質が全く異なるが、動詞「ある」の反対語が「ない」であるように、松本（同）は本研究とも関連している。例えば「庭に木がある」という連語は「庭に木がない/多い」と同じむすびつきをしている。また、「彼は父親に似ている」と「彼は父親にそっくりだ」とはニュアンスの違いはあるものの、二格の名詞と動詞あるいは形容詞との間の関係は同じである。このように、本研究は二格の名詞と動詞からなる連語を分類する際に、いくつかのむすびつきについては松本（同）も参考になった。

2.4 本研究の位置づけ

以上、2.1 節から 2.3 節まで先行研究を概観したが、本節では、先行研究を踏まえて、本研究の位置づけを明確にし、本研究の立場および方法論を述べる。

2.3.1 節で述べたように、奥田（1962[1983]）は二格の名詞と動詞とのくみあわせを対象とする唯一の先行研究であると言える。本研究は二格の名詞と動詞からなる連語がなす体系を明らかにしようとするもので、奥田（同）を大いに参考にしている。本節では、まず 2.4.1 節で、奥田（同）に対して再考を行い、奥田（同）の問題点を指摘する。その上で、2.4.2 節で本研究の立場や方法論を示す。その際に、2.4.1 節で指摘した奥田（同）の問題点をどう改善するか、および改善の必要性を詳しく述べる。最後に、2.4.3 節で、本研究を行う意義、すなわち単なる格助詞の研究との異同を明示する。

2.4.1 奥田（1962[1983]）の再考

言語学研究会によって刊行された『日本語文法・連語論（資料編）』（言語学研究会（編）（1983））に収められている論文は、名詞のそれぞれの格の形（ヲ格、ニ格、デ格、ヘ格、カラ格、マデ格）と動詞とのくみあわせについてそれぞれの性質を論じたものである。このうち特にヲ格の名詞と動詞とのくみあわせについての論考は、両者のむすびつきのパラディグマティックな体系を明らかにしたものである。これらは、連語論研究の出発点として欠かすことのできない成果であり、今もなお連語論研究において広く参照され、その地位を保っている。しかし、当然のことながらこれらは無批判に受け入れるべきものではない。

『日本語文法・連語論（資料編）』の論文のうち、本研究は奥田の「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」を主要な先行研究として参照することを述べた。この論文に対して、これまでに様々な批判・意見が提出されており、本研究を行うにあたって、再考を試みたい。

以下、諸家（主に鈴木重幸氏、鈴木康之氏、仁田義雄氏、宮島達夫氏など）による批判・意見を参照しつつ、a) 「体系化」と「構造」、b) 連語論の対象、c) 分類の妥当性という 3 つの観点から順に述べていく。

2.4.1.1 「体系化」と「構造」について

Ⅰ、むすびつきの体系

言語学研究会編（1983）の「編集にあたって」や鈴木康之（1983）で明らかにされているように、「連語論の任務は、連語論的なむすびつきをあきらかにすることにとどまらず、むすびつきの体系をあきらかにすること」である。ある 1 つのむすびつきは、別のいくつかのむすびつきと対立しながら、補い合いながら、パラディグマチックな関係を取り結んでいて、1 つの体系をなしている。その体系の中でのみ個々のむすびつきを確認することができる。

このことは、奥田の「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」（奥田（1968-1972[1983]））

の第一章第一節「物にたいするはたらきかけ」で見事な記述がなされている。すなわち、〔もようがえのむすびつき〕、〔とりつけのむすびつき〕、〔とりはずしのむすびつき〕、〔うつしかえのむすびつき〕、〔ふれあいのむすびつき〕、〔結果的なむすびつき〕はお互いにどう連続しているか、またそれと同時にどう対立しているかを常に念頭に置いて論を進めているように見受けられる。例えば、同じく3単語のくみあわせである〔うつしかえのむすびつき〕と〔とりつけのむすびつき〕〔とりはずしのむすびつき〕の関係について、奥田は以下のように記述している。

「うつしかえのむすびつきをあらわす連語は、意味的にみても構造的にみても、とりつけのむすびつき、とりはずしのむすびつきをあらわす連語にきわめてちかい。すでにのべであるように、とりつけのむすびつきをあらわす連語は、対象としてはたらくに格の名詞でひろげられているし、とりはずしのむすびつきをあらわす連語も、おなじく対象としてはたらくから格の名詞でひろげられている。だが、うつしかえのむすびつきをあらわす連語では、空間としてはたらくに格あるいはへ格、から格あるいはまで格の名詞でひろげられている。を格の名詞と動詞とのむすびつき方のちがいは、これをひろげる第二の名詞のはたらきのなかにあらわれてくるのである。」(p.34)

それに対して、奥田の「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」(奥田(1962[1983]))の論文では、表4に示した、個別のむすびつき間の派生・移行などの関係に関する記述も散見されるが、個々のむすびつきはお互いにどう異なるか、またどういうふうに対立しながら、補い合いながら、一つの体系をなしているかは見えてこない。また、表4にもうかがえるように、具体的な「連語の例」が挙げられていないものがある点においても不十分である。

〔対象的なむすびつき〕のうちの〔ありかのむすびつき〕を例に説明してみる。〔ありかのむすびつき〕は〔存在のむすびつき〕〔内在のむすびつき〕〔所有者のむすびつき〕など6つのタイプに分かれているが、〔ありかのむすびつき〕という上位のむすびつきから、例えば〔存在のむすびつき〕という下位のむすびつきのタイプを取り出せるのは、〔存在のむすびつき〕自身の性質によってではなく、〔存在のむすびつき〕とは異なる、しかし隣接している別のいくつかの下位のむすびつき(〔内在のむすびつき〕〔所有者のむすびつき〕など)と相互に関係し合って、それら全体が〔ありかのむすびつき〕という一つの体系をなしているからである。しかし、奥田(1962[1983])からは「体系」というのが積極的には読み取れない。

このようにヲ格の名詞と動詞についての奥田(1968-1972[1983])は全体にわたって「体系」が意識されて書かれているのに対して、ヲ格についての奥田(1962[1983])は個々のむすびつきのみ取り上げ、「体系」の記述に欠けている。

Ⅱ、連語の構造的なタイプ

連語はいくつかの単語を構成要素にもっていて、それらの間には構造的なむすびつきがある。連語論の対象は、それらの単語の間のむすびつき方である。

ヲ格の名詞と動詞とのくみあわせを例にすると、例えば、〔もようがえ〕という構造的なむすびつきを表わす連語（例えば「りんごをきる」「くるみをくだく」など）における 2 つの単語の間には、「動作が物＝対象にはたらきかけて、その物のかたち、あり方に変化をあたえる」というむすびつき方が存在している。ここで、「むすびつき」は意味から生み出されるものなら、「構造」は形式に関係するものと言えるであろう。しかし、ここでいう「形式」は単に【N を V】という構造をしているという意味ではなく、ある「構造」において、名詞と動詞のカテゴリカルな意味が限定されているのである。すなわち、上の例でいうと、「もようがえ構造」と呼ばれるものは、「動作の働きかけを受けて形、あり方の変化が生じる物」（＝対象）を表わすヲ格の名詞と、「物に働きかけて、その物に形、あり方の変化を生じさせること」を表わす動詞（「もようがえ動詞」）とのくみあわせである。このような「もようがえ構造」でのヲ格の名詞と動詞との関係づけを〔もようがえのむすびつき〕と呼ぶ。同じように、「くつつく物」（＝第一の対象）を表わすヲ格の名詞と、「くつつけられる物」（＝第二の対象）を表わすニ格の名詞ととりつけ動詞とからなる 3 単語のくみあわせ（例えば「上衣に名札をつける」「かべにポスターをはる」など）は「とりつけの構造」を実現していて、「とりつけ構造」でのヲ格の名詞と動詞との関係づけが〔とりつけのむすびつき〕なのである。

しかし、奥田の「ニ格」の論文では、「むすびつき」のみが問題にされていて、「構造」は積極的に取り上げられていない。例えば、「ヲ格」の論文で〔とりつけのむすびつき〕を表わす「上衣に名札をつける」「かべにポスターをはる」などの連語は、「ニ格」の論文になると、「とりつけ構造」に言及せずに、ニ格の名詞と動詞とのくみあわせのみを抽出して、「ひざによりかかる」「ほおにあたる」などの自動詞の例とともに、〔くつつきのむすびつき〕としている。自動詞の場合はともかくとして、特に他動詞の場合、例えば「彼は上衣に名札をつけた」という文から、「上衣に名札をつける」という構造を取り出さずに、「上衣につける」という連語のみを抽出したとして、それ自体が名づける的な単位として文の中で働くとは考えられない。つまり、鈴木康之（2004:159）も述べているように、「連語論の研究領域で「むすびつき」と規定するような場合には、カザラレの名づける的な意味を具体化するために、一定の構造的なタイプを実現させていなければならない」のである。

さらに、「構造的なタイプ」と関連して、鈴木康之氏は以下の指摘もしている。

「奥田が「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」や「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」で論じていたような、連語の構造的なタイプの次元のことが「ニ格」では問われていないのである。」（鈴木康之（2004:160））

「（前略）奥田先生の論文「に格」には、本来の連語論で問題にしなければならないよ

うな連語としての構造的なタイプ（さらには連語論の研究対象とする「むすびつき」）が積極的にはみえてこないのである。連語論が問題にするような「構造的なタイプ」があたかも規定していないかのようで、単に、二格のカザリ名詞とカザラレ動詞との関係を論じているように感じられるのである。」（鈴木康之（2006b:231））

「構造的なタイプ」という用語を使っていないが、仁田（1985:48）も「一つのかざり名詞とかざられ動詞のむすびつき方・関係的意義のあり方を考察するに当たっても、その動詞が自らの表す動きの実現・完成のために必要とする名詞全体が考慮に入れられなければならない。」と述べ、連語論において「むすびつき」と「構造」との両方を立てる必要性を示唆していると思われる。

以上見てきたように、むすびつきは構造の中に見出すものであり、むすびつきの間の相互関係、ないしむすびつきの体系も構造を基底にして成り立っている。結局、構造を取り上げなかった奥田の「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」は最終的に体系化に至っておらず、むすびつきの体系を明らかにしているとは言えないであろう。

2.4.1.2 連語論の対象について

本節は、奥田の「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」からやや離れるかもしれないが、奥田（1962[1983]）をもとにして、連語論で扱うべき対象について再検討したい。「連語論の対象」として取り上げて対象とするか否かを検討するのは〔状況的なむすびつき〕と「ガ格の名詞およびガ格の名詞と動詞とのくみあわせ」との2つで、以下はこの順番で述べる。

I、〔状況的なむすびつき〕の扱いについて

すでに見たように、二格の名詞と動詞とのくみあわせを、奥田（1962[1983]）はまず〔対象的なむすびつき〕、〔規定的なむすびつき〕、〔状況的なむすびつき〕の3つに大きく分けている。これらについての説明をいま一度下に挙げる。

・ 対象的なむすびつき

動作（あるいは状態）とその動作（あるいは状態）の成立にくわわる対象との関係である。（p.282）（点線は引用者による。以下同様）

・ 規定的なむすびつき

かざり名詞でしめされる状態あるいは現象は、動作そのものの成立に直接に関係せず、動作のもっているなんらかの側面を規定してかかる。（p.309）

・ 状況的なむすびつき

かざり名詞でしめされるものは、動作の成立に直接的にくわわってはならず、それを

そとがわからとりまくものにすぎない。(p.317)

何によってまずこの3つのカテゴリーに分けたかについて奥田ははっきり示していないが、上の説明から、動詞にとって二格の名詞の存在が義務的か任意的か、言い換えれば、二格の名詞と動詞とのむすびつきが強いか弱いかの差が読み取れる¹⁸。すなわち、[対象的なむすびつき]においては、動詞は二格の名詞の存在を義務とし、二格の名詞と動詞とのむすびつきが固い。[規定的なむすびつき]では、動詞は二格の名詞の存在を必ずしも義務とするとは限らないものの、「動作のもっているなんらかの側面を規定してかかる」という点では動詞とは無関係的ではない。ただし、二格の名詞と動詞とのむすびつきは比較的弱い。これらに対して、[状況的なむすびつき]になると、動詞にとっては二格の名詞の存在が任意であり、二格の名詞と動詞とのむすびつきもきわめて弱い。このことは奥田自身の記述からも確認することができる。特に[状況的なむすびつき]について、上の説明につづいて、奥田は下のようなことをも付け加えている。

「一般的にいえば、状況的なむすびつきは、動作にとっては外的な空間、時間、条件、情勢などを表現している。このことから、この単語のくみあわせでは、かざりとかざられとの関係は、きわめてよい。特殊なばあいのをぞけば、かざられ動詞の語彙的な意味には限定がなく、むすびつきの性格はむしろ、かざり名詞の語彙的な意味と形態との特殊性に依存している。」(奥田 (同:317))

連語論の対象が構成要素である単語の間のむすびつき方である以上、かざりとかざられとの間に何らかの関係でむすびつけられていなければならないのである。これを考えると、名詞と動詞との関係がきわめて弱い[状況的なむすびつき]を連語論の対象に入れるべきかどうかを検討し直す必要があるであろう。[状況的なむすびつき]の扱いについて、早くから仁田(1985:49)は「連語論の対象としては、少し問題になってくるのではないだろうか」と疑問を呈し、「典型的な状況的なむすびつきは、その生起を動詞の語義的なあり方に規定されることが極めて稀薄であるし、また、それが結びついているのは、動詞であるというよりは、動詞に対象的なむすびつきを作る名詞などの結びついた出来事・事柄の核に対してであろう。」と述べている。

[状況的なむすびつき]を連語論の対象に入れることに対して、鈴木康之氏も以下のような反対の意見を述べている。

¹⁸ 2.3.2節ですでに述べたが、松本(1979)('に格の名詞と形容詞とのくみあわせ')も、二格の名詞と形容詞とのくみあわせを、まず[対象的なむすびつき][規定的なむすびつき][状況的なむすびつき]の3つに大きく分けており、二格の名詞と形容詞との関係について以下のように述べている。「対象的なむすびつきをあらわすくみあわせでは、かざりのに格名詞の存在が、かざられの形容詞の結合能力からみて、だいたい義務的だが、規定的なむすびつき、状況的なむすびつきでは、一般に、義務的とはいえない。」(p.204-205)。

「(前略) 名づける意味の完結のための「単語のくみあわせ」としては、なによりもまず、「対象的なむすびつき」が研究対象となるのではないだろうか。つまり、「規定的なむすびつき」や「状況的なむすびつき」は、「対象的なむすびつき」とは同列にあつかえないはずだと感じている。とりわけ、状況的なむすびつきは、連語論の対象というよりも、文の構造の問題としてあつかうべきではないだろうか。」(鈴木康之 (2006b:228))

これに対して、鈴木重幸氏は次のように反論している。

「対象的なむすびつきのタイプは規定的なむすびつき、状況的なむすびつきと対立して存在している。(中略)。連語の構造的なタイプのモデル化にとってむすびつきの3つのタイプの位置づけはことなるだろう。つまり、構造的ななかで状況のむすびつきにあるカザリは、対象的なむすびつきにある連語とくらべて動詞とのむすびつきのかたさ、つよさがことなるだろう。あるいは義務的か、任意的かという特徴などによってことなっているだろう。」(鈴木重幸 (2006b:12))

しかしながら、[状況的なむすびつき]と名づけられているものの、奥田(同:317)が「この種の単語のくみあわせが文にはいるばあいには、かざり名詞は、容易に状況語として動詞との直接的な関係を失っていく」と指摘しているように、それは名づける単位として文の中で働くとは考えられないし、また「かざり名詞の語彙的な意味をかざりがいっそう具体化してみせるという関係」も読み取れず、単に「単語のくみあわせ」だけである。そのような単語のくみあわせでは、構造的なタイプを規定することができず、むすびつきが実現されているとも考えにくい。

Ⅱ、「ガ格の名詞」および「ガ格の名詞と動詞とのくみあわせ」の扱いについて

周知の通り、奥田の連語論はガ格の名詞を考察の対象に含んでいない。

言語学会(編)(1983)の「編集にあたって」では、ガ格の名詞と動詞とのくみあわせは、[従属的なむすびつき]ではなく、[陳述的なむすびつき]をなし、「modality と temporality とからきりはなされたところでは成立しない」(p.6)として、連語の対象として扱わないとしている。

連語論においてガ格の名詞と動詞とのくみあわせを排除することに関しては、当初から反論があった。仁田(1985)は「ガ格名詞と動詞との結びつきは、果して本当に連語論的な研究の対象外なのだろうか」(p.48-49)と問いかけ、主語—述語の関係は「名づけるレベル、事柄的な意味のレベルでの関係のあり方をも担っており、その上に機能的な関係のあり方が被ってくるのであろう」(p.49)と述べている。さらにいくつかの言語事実を提出している。例えば、「くるみを割る」という連語が「太郎がくるみを割るのに熱中してい

る。」という文の構成要素になっているように、「僕は太郎が来るのを見た。」においても、ガ格の名詞と動詞とのくみあわせ「太郎が来る」が構成要素になっていて、排除されるものではない。「春が来て、暖かくなった。」のように、ムード形式をもテンス形式をも持ちえない文的度合いの低い節にも、ガ格の名詞と動詞との組み合わせは存在する。」(p.49)。また、「庭におおきなびわの木があった」のような例において、「庭に」は「ある」に対してというより「おおきなびわの木(が)」の「ありか」であり、「ある」をセンターとして「おおきなびわの木が」との関係において「ありか」なのである」(p.48)。

仁田(1985)の疑問と同様に、宮島(2005b)は「わたしも、ガ格には主語という主格補語的な面があること、すくなくとも部分的には連語論であつかつていいのではないか、とおもう。¹⁹⁾(p.21)(点線は引用者による)と主張し、ガ格を連語論に入れる根拠として、「馬がいなく/鳥がさえずる/動物がなく」の差や、「人が/手が～をつかまえる」「人が/足が～をふむ」などの表現の差は、なにが動作の主体になるかという意味の問題でもあるが、どのようなガ格名詞が動詞とむすびつくか、という連語の問題でもある。」(p.21)というのを挙げている²⁰⁾。

連語論におけるガ格の扱いをめぐって、鈴木康之氏と鈴木重幸氏の両氏の間にも異なる見解が見られる。鈴木康之氏は「主述の関係にあるような単語のくみあわせでも連語論の対象になるものがある」と主張し(鈴木康之(1983)・鈴木康之(2005)・鈴木康之(2006a))、「汚水が流れる」「電車が動く」のようなくみあわせを取り上げている。これは自他対応を有する動詞の、他動詞の目的語と自動詞の主語との対応に関する観点からであり、例えば、「汚水を流す」「電車を動かす」という連語において、「汚水を」「電車を」は「流す」「動かす」の動作としての名づける的な意味を具体化するとすれば、それに対応するものとして、「汚水が流れる」「電車が動く」における「汚水が」「電車が」もまた、「流れる」「動く」の現象としての実体を具体化するものとして要求されるとしている。また、「汚水が流れる」「電車が動く」のような連語は、動詞が名詞に転成することによって、「汚水の流れ」「電車の動き」というような名詞を核とする連語(ノ格の名詞と名詞とのくみあわせ)に移行する事実からも、「汚水が流れる」「電車が動く」というようなくみあわせを名づける的な単位として考えられ、連語論の対象にするべきだと指摘している。また、自他対応は持たなくとも、例えば「月が昇る」「太陽が昇る」のような連語における「月が」「太陽が」は、やはり「昇る」という動詞の意味的な完結のために必須であるとしている。

これに対して、鈴木重幸(2006a)は、「汚水が流れる」「電車が動く」のような単語のくみあわせは、「奥田のたてた基準から、主語と述語とのくみあわせになる特徴をそなえて

¹⁹⁾ 宮島(2005b)の「注3」に、「根本[1965]は、連語論と名のついていないし、言語学研究会の成果であるかどうか、はっきりしないが、ガ格と形容詞のくみあわせを連語論的に記述している。」(p.31)とがある。

²⁰⁾ この論文が掲載される前に、同じ題名で連語論特別研究会で発表された資料宮島(2005a)では、ガ格を連語論に入れる根拠として、デ格の道具名詞が主体になりうるかどうかの例(例えば、「そろばんで計算をした」と「コンピューターで計算をした」において、「そろばんが計算をした」という言い換えは難しいが「コンピューターが計算をした」は可能)が挙げられている。

いる。したがって、このタイプのくみあわせは連語から排除される」(p.191)と一蹴しているが、それは保守的過ぎるであろう。その一方で、鈴木重幸氏はまたガ格の名詞と動詞とのくみあわせを認めるような発言もしている。

「「ガ格の名詞」＋「自動詞」というタイプには、「頭が（ずきずき）いたむ。」「手がふるえる。」「足がしびれる。」「肩がこる」のようなくみあわせがある。こうしたくみあわせは、「ゾウは鼻がながい」のような「ガ格の名詞＋形容詞」のタイプとにて、「わたしは」などの主語に対する述語（連語述語、合成述語）となることができる。このばあいには、ガ格と動詞との連語である可能性がある。（「気がつく」「気がきく」「気がひける」「身がひきしまる」「（頭に）血がのぼる」のような慣用的なものもある。）」（p.190）

このように、文の中では主語として扱われるべきガ格の名詞および、ガ格の名詞と動詞とのくみあわせを連語論から排斥することは、多くの点で無理があるように見受けられる。動詞の意味を完結させるために必要なものであれば、ガ格も連語論において扱うとするほうが自然な成り行きと言えよう。

2.4.1.3 分類の妥当性

2.3.1 節の表 3 からすぐわかるように、奥田（1962[1983]）の分類では、〔対象的なむすびつき〕のうちの〔ありかのむすびつき〕と〔かかわりのむすびつき〕のみが細分類されていて（前者は 6 つのタイプに、後者は 2 つのタイプにそれぞれ分かれている）、他のむすびつきについては下位分類がほとんど行われていない。これは言語学研究会（編）（1983）に収められている奥田の「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」と「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」に比べ、詳細さで劣るように思われる。

1 つの下位分類として立ててはいないが、もちろん奥田もその細かいところの違いに気づいているようである。その証拠として、いくつかのむすびつきについて、下位分類の可能性を示唆するような記述が散見されることが挙げられる。以下、むすびつきごとに紹介する。

・〔ゆくさきのむすびつき〕

「（前略）に格の名詞と動詞とのくみあわせのなかに状態のむすびつきをカテゴリーとしてたてることができるだろうか。」(p.294)（点線は引用者による。以下同様）。例えば「曾根は興奮した精神の状態にある」「日本の教育は危機にたつ」のような連語を指す。

ただし、その問いかけに対して、奥田は「動詞の語彙的な意味はうしないかけていて、この種の単語のくみあわせは陳述的であるといわなければならない。」(p.294)と付け加えている。

・[かかわりのむすびつき]

「かかわりのむすびつきのなかに、きわめて未発達であるが、認知のむすびつきをぬきだすことができる。このむすびつきをつくるのは、ふれる、さわる、通じる、通曉する、きづくのような動詞である。」(p.306)。「六角のことにふれる」「遊里の消息に通曉する」などの連語である。

「かかわりのむすびつきをあらわす単語のくみあわせのなかには、論理的な関係を表現したものがある。かざられになる動詞は、くらべる、比較する、もとづく、かこつけるのようなものにかざられている。」(p.306-307)。「お三輪にくらべる」「日教組指令にもとづく」のような連語がある。

「かかわる、関係する、にている、にあうのような動詞とに格の名詞とでできている単語のくみあわせは、物や現象のあいだにある客観的な関係が表現をうけている。」(p.307)。例えば「六代目ににている」「おれの体面にかかわる」などである。

・[道具のむすびつき]

「とむ、みちる、あふれる、たける、めぐまれる、不足する、かけるのような動詞とに格の名詞がくみあわさると、に格の名詞は、動詞でしめされる状態をその内容の側面から具体化する。この種の単語のくみあわせは、道具のむすびつきをあらわす単語のくみあわせからずれてきたものである。」(p.309)。例えば「よろこびにあふれる」「才智にたける」のような連語がある。

これらの記述は、それぞれのむすびつきについて更に細かく深く分析できる余地が十分にあることを示唆している。以下、主に「ゆくさきのむすびつき」と「かかわりのむすびつき」を取り上げて、他の資料も参考にしつつ、それぞれの下位分類の可能性について考えてみる。

まず、「ゆくさきのむすびつき」について検討する。

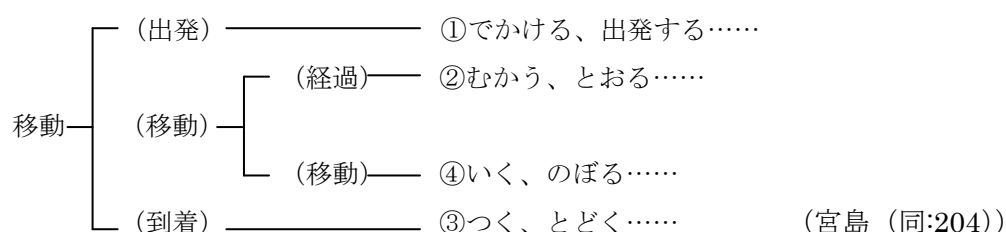
「ゆくさきのむすびつき」について、奥田(同:291)は「方向性をもった移動動詞が、に格の名詞とくみあわさると、そこにはゆくさきのむすびつきができる。」としている。自動詞の例に、「いく、くる、かえる、でかける、むかう、かよう、はいる、あつまる、うつる……」などがあり、「山にいく」「社にかえる」「広場にあつまる」「汽船にうつる」「庭におりる」「海にむかう」のような連語を作る。他動詞の例に、「はこぶ、うつす、とどける、おろす、ちかづける……」などがあり、「荷物をトラックにはこぶ」「煙草の灰を灰皿におとす」などの連語を挙げている。この「ゆくさきのむすびつき」における二格の名詞について、奥田(同:291)は「空間的なニュアンスをもった具体名詞であって、動詞との関係においてゆくさきをしめしている」と述べているが、「ゆくさき」とは具体的に何を指しているかについてはっきりとした定義がなされていない。

「移動」という現象についての先行研究には、宮島(1972)が包括的なものとして重要である。宮島(同:203)は、「ある動詞が移動の開始(すなわち出発)から終了(すなわち

到着)にいたるまでの、どの段階に重点をおいて表現しているか」によって、移動動詞を以下の4種類に大きく分けている。

- ①出発の段階に重点があるもの。「でかける」「出発する」の類
- ②経過の段階に重点があるもの。「むかう」「とおる」の類
- ③到着の段階に重点があるもの。「つく」「とどく」の類
- ④全部の段階をふくむもの。「いく」「はいる」の類 (宮島 (同:203))

「移動」概念の範囲について、宮島 (同:204) は「広い意味での<移動>には、<出発・到着>もふくまれる。すなわち、<出発・到着>にも<移動>としての側面はある。しかし、よりせまく<移動>をくぎれば、②④の類であり、そのなかでも特に④類である。」と述べている。このことを図で示すと、以下のようになる。



また、石綿 (1999) は、動詞の統語構造を用いて述語になる単語の分類を行っている。そのうち、移動動詞については、「移動一般」(「いどうする」「いく・ゆく」「くる」など)、「方向をもつ移動」(「すすむ」「あがる」など)、「出発移動」(「しゅっぱつする」「たつ」など)、「着点移動」(「つく」「もどる」など)、「経路移動」(「こえる」「とおる」など)、「状態移動」(「あるく」「はしる」など)、「方向移動」(「むく」「むける」など)、「移動の逆」(「とどまる」「とまる」など) という8つのタイプに分けられている (p.197-208)。

宮島 (1972) や石綿 (1999) のこういった研究を踏まえて、上に挙げた奥田の用例を見直すと、例えば「海にむかう」「山にいく」と「広場にあつまる」との間に連語のタイプの差があることがわかる。すなわち、「海にむかう」「山にいく」の場合は、宮島分類のいわゆる狭い意味での<移動> (<経過>と<移動>) の段階にあるのに対して、「広場にあつまる」は<到着>の段階にあると言っていいであろう。また、これらの例を石綿分類で見ると、「山にいく」は「移動一般」に入るが、「広場にあつまる」は「着点移動」に入る(「向かう」は石綿 (1999) では取り上げられていない)。

このように、奥田が一括して「ゆくさきのむすびつき」と呼んでいるものには、実は性質が異なるいくつかのタイプが含まれていると言える。よって、このむすびつきについて、さらに細かく分類し、その内部構造をより明らかにすることが必要であろう。

次に、「かかわりのむすびつき」について考える。

〔かかわりのむすびつき〕について、奥田（同）はこのむすびつきを作る動詞は態度動詞であるとし、「態度動詞には心理的なものと動作的なものがあり」、それに応じて〔心理的な態度のむすびつき〕と〔態度的な動作のむすびつき〕に分けている。それ以上の分類はなされていない。しかし、すでに述べたように、奥田もその他の下位分類の可能性に気づいているようである。奥田の示唆的な記述にもとづいて、例えば〔かかわりのむすびつき〕の中に、〔認知のむすびつき〕、〔関係のむすびつき〕とでも呼ばれるむすびつきを立てることができるのではないだろうか。

実際に、奥田の「ヲ格」の論文を見てみると、同じく〔かかわりのむすびつき〕と呼ばれるむすびつきの中に、下位のタイプが細かく立てられていることがわかる。例えば「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」の論文では、第三章の〔心理的なかかわり〕はまず〔認識のむすびつき〕〔通達のむすびつき〕〔態度のむすびつき〕²¹〔モーダルな態度のむすびつき〕〔内容規定的なむすびつき〕に5分類されている。またそれぞれについてはさらに下位分類が行われている。ただし、〔通達のむすびつき〕だけは、〔認識のむすびつき〕の下位のカテゴリーとして分類する余地があると指摘されており（奥田（1968-1972:109））、それ以上細かく分けられていない。それ以外のむすびつきについては、下位分類は具体的には以下のようにになっている。

- ・〔認識のむすびつき〕
 - a) 〔感性的なむすびつき〕:「天井をみつめる」「ピアノをきく」
 - b) 〔知的なむすびつき〕:「もののむずかしさを考える」「精神状態を考察する」
 - c) 〔発見のむすびつき〕:「先生を雑沓のなかにみつけたす」「国民性を古代に発見する」
- ・〔態度のむすびつき〕
 - a) 〔感情的な態度のむすびつき〕:「蛇をおそれる」「風呂をたのしむ」
 - b) 〔知的な態度のむすびつき〕:
 - 「文章を小説の一技術とみなす」「雲をけむりとまちがえる」
 - c) 〔表現的な態度のむすびつき〕:「あらい金づかいをたしなめる」「友だちをはげます」
- ・〔モーダルな態度のむすびつき〕
 - a) 〔要求的なむすびつき〕:「天皇制の復活をのぞむ」「娘の手術をたのむ」
 - b) 〔意志的なむすびつき〕:「復讐をたくらむ」「旅行をおもいたつ」
- ・〔内容規定的なむすびつき〕
 - a) 〔体験の内容規定〕:「狼狽を感じる」「反感をおぼえる」
 - b) 〔思考の内容規定〕:「策略を考える」「名義を考える」
 - c) 〔通達の内容規定〕:「じょうだんをいう」「日本語をはなす」

²¹ 「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」では、〔かかわり〕の下位に〔動作的な態度のむすびつき〕というのがあるが、これはこの論文にない。この論文での〔態度的なむすびつき〕は、のちに紹介するように、〔感情的な態度〕〔知的な態度〕〔表現的な態度〕の3つに分けられている。

ヲ格とニ格とで、動詞の性質も名詞と動詞とのむすびつき方も異なるが、〔かかわりのむすびつき〕を表わす連語に、多様なものが存在していることは両者に共通している。よって、「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」と同様に、「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」の場合も細かく分類し、またそうすることによって、〔かかわりのむすびつき〕の性格をいっそう明らかにすることができると思われる。

奥田 (1962[1983]) の分類の妥当性を再考する際に直面するもう一つの問題は、奥田 (同) の分類のどれにも入れられないものがあるということである。

例えば、「(泥棒が) 警察に捕まる」「(生徒が) 先生に見つかる」のような連語がまず挙げられる。これらはそれぞれ「(泥棒が) 警察に捕まえられる」「(生徒が) 先生に見つけられる」という受身的な意味をもっていることから、〔受身的なむすびつき〕とでも呼ぶべきタイプの連語を作っていると考えられる。ニ格の名詞と動詞との関係は対象的であろう。

また、「会う」「出会う」「再会する」など「人と対面する」の意味を表わす一連の動詞とニ格の名詞とのくみあわせ（「おじいさんに会う」「彼女に出会う」）も奥田 (同) の分類に当てはめられる箇所がなかった。これらの例においては、人名詞がニ格にたち、「対面する相手」を表わす。奥田 (同) の〔ゆずり相手のむすびつき〕〔はなし相手のむすびつき〕と並んで、〔対面の相手のむすびつき〕を作っていると言えるであろう。ニ格の名詞と動詞との関係は〔受身的なむすびつき〕と同様に、対象的である。

この節では奥田 (1962[1983]) の分類の妥当性について再考したが、連語論として扱うべきだが奥田 (同) になかったものを取り入れ、また奥田 (同) にあったものでも必要に応じて細かく分類するという分類の再編成が、ニ格の名詞と動詞からなる連語に関する研究を行う以上さしせまって必要であろう。

以上、2.4.1 節で、奥田の「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」について、「体系化」と「構造」(2.4.1.1 節)、「連語論の対象」(2.4.1.2 節)、「分類の妥当性」(2.4.1.3 節) という 3 つの観点から再考を試みた。再考によって明らかになったように、奥田の同論文は、「構造」を取り上げず、「体系化」に至っていない、「〔状況的なむすびつき〕や「ガ格の名詞」の扱いが不適切である」、「分類が不十分である」といった問題点がある。ニ格の名詞と動詞からなる連語を再検討するにあたって、これらの問題点をどう改善していくべきかが重要であろう。具体的な改善案は次節で提示する。

2.4.2 本研究の立場・方法論

本研究は連語論研究のひとつの試みとして、連語そのものの分類にとどまらず、連語の体系を明確に示すという視点から、奥田 (1962[1983]) を整理しなおし、発展させようとするものである。

以下、本節では、本研究の任務を明確にした上で、奥田 (同) の再考に対する改善案を

示す。最後に本研究における「連語」の範囲、すなわち「拡大連語」について述べる。

2.4.2.1 本研究の任務

本研究の任務として、以下の2点、つまり「再分類」と「体系化」を設定できる。

- a) 二格の名詞と動詞からなる連語について、奥田（1962[1983]）の問題点を改善し、分類の再編成を行う。
- b) a) の分類をもとにして、二格の名詞と動詞からなる連語がなす体系を明らかにする。

これらについて、主に本研究の第2部と第3部で詳細な記述を行うが、第2部でa)の「再分類」を、第3部でb)の「体系化」をそれぞれ取り上げる。

なお、次節では、主にa)について、奥田（1962[1983]）の再考に対して、2.4.1節で指摘した奥田（同）の問題点を本研究で具体的にどう改善するか、および改善の必要性を述べる。

2.4.2.2 奥田（1962[1983]）の再考に対して

2.4.1節で、奥田（同）の問題点として、「構造」を取り上げず、「体系化」に至っていない（2.4.1.1節）、「状況的なむすびつき」や「ガ格の名詞」の扱いが不適切である（2.4.1.2節）、「分類が不十分である」（2.4.1.3節）という3点を指摘した。それぞれの改善方法、すなわち本研究の立場を以下に順に述べる。

I、「体系」と「構造」について

2.4.1.1節で述べたように、連語においては、「むすびつき」は「構造」の中で実現されるものであり、「構造」を離れたところでは、「むすびつき」も成り立たないのである。例えば、〔ありかのむすびつき〕は【＜物＞が ＜空間＞に ＜存在/認知/出現＞V】²²という「ありかの構造」における二格の名詞と動詞との関係であり、〔移動のむすびつき〕は【＜空間＞に ＜移動＞V】あるいは【＜物＞を ＜空間＞に ＜移動＞V】という「移動の構造」における二格の名詞と動詞との関係である。また、同じく〔移動のむすびつき〕と言っても、自動詞と他動詞とで性質が異なるし、同じ構造の中で実現されるとは考えられず、上記のようにそれぞれの構造を設定しなければならない。

このような「構造」を設定してはじめて、むすびつきの対立と移行などの相互関係が見えてき、いわゆるむすびつきの「体系」が成り立つ。奥田（同）は「構造」に触れずに二格の名詞と動詞との「むすびつき」を語ろうとしたがゆえに、個別のむすびつきの間の派生や移行などの相互関係が取り出せても、むすびつき全体の「体系」がはっきり見えない

²² それぞれのむすびつきの構造については、第3章で提示する。

のである。

従って、本研究では、それぞれのむすびつきに対して、まず連語の構造（「ありかの構造」、「移動の構造」、「くつつきの構造」など）を設定し、そこから例えば「ありかのむすびつき」、「移動のむすびつき」、「くつつきのむすびつき」などの連語のタイプを取り出す。それをもとに、「構造」を介して存在している連語のタイプ間の相互関係を見出し、さらにその上で成り立っている連語の「体系」を捉える。

Ⅱ、〔状況的なむすびつき〕と「ガ格の名詞」の扱いについて

2.4.1.2 節で見たように、〔状況的なむすびつき〕について、奥田は二格の名詞と動詞との関係の弱さに気づいているものの、それを取り上げ、連語論として扱っている。しかし、奥田が〔状況的なむすびつき〕を表わすとしているもの（〔空間的なむすびつき〕〔情勢的なむすびつき〕〔時間的なむすびつき〕〔原因のむすびつき〕）のほとんどは、それぞれの連語自体が一つの名づける意味を表わすとも考えられないし、連語論的な構造をなしているとも言えない。このようなくみあわせにおいて、二格の名詞と動詞との間にむすびつきを見出すことができず、ただの「単語のくみあわせ」に過ぎない。また、奥田も「かざられ動詞の語彙的な意味には限定がなく、むすびつきの性格はむしろ、かざり名詞の語彙的な意味と形態との特殊性に依存している」（p.317）と指摘しているように、結局このようなくみあわせを取り出しても、連語論の研究よりは、格体制の研究あるいは結合価の研究と言わざるを得ない。

このようなことから、本研究では〔状況的なむすびつき〕を対象として扱わないことにする。

一方、ガ格の名詞を連語論の対象から除くことに対して、2.4.1.2 節で見たように、多くの批判の意見が出されている。結局のところ、動詞の意味を完結させるために必要なものであれば、ガ格も連語論において扱うべきだという結論に至ると言えよう。

もっとも、連語論研究が行われ続ける限り、ガ格の名詞の扱いをめぐる、これからの議論が断えないであろうし、本研究はさしあたって何らかの結論を出すものでもない。ただし、本研究で二格の名詞と動詞との関係を分析する際に、ガ格の名詞も対象に入れなければならない場合がある。例えば、李（2011b）で考察しているように、物あるいは現象や状態の存在を表わす「ありかの構造」において、物あるいは現象や状態のありかを示す二格の名詞だけでなく、物あるいは現象や状態を表わすガ格の名詞も基本的に必要である。ガ格の名詞を除いたら、「ありかの構造」も成り立たなくなるし、〔ありかのむすびつき〕も存在しえないのである。

従って、本研究では、ガ格の名詞について、必要に応じて扱うことにする。

Ⅲ、分類の再編成について

2.4.1.3 節で見たように、奥田（同）の分類は、一部のものについて下位分類を行う、ま

た新たなものを補うといった改善が必要である。Ⅱのところでも述べたように、〔状況的なむすびつき〕を本研究では扱わないので、以下主に〔対象的なむすびつき〕と〔規定的なむすびつき〕について、奥田（同）をもとにした再分類の1つの可能性を示す。

〔対象的なむすびつき〕

・〔ありかのむすびつき〕

奥田（同）の〔ありかのむすびつき〕は、〔存在のむすびつき〕、〔内在のむすびつき〕、〔所有者のむすびつき〕、〔所有物のありか〕、〔認知物のありか〕、〔出現物のありか〕という6つのタイプに分かれている。本研究も基本的に奥田（同）に従うが、「（彼が）船の中に隠れる」「手を袂の下に隠す」など空間を表わす二格の名詞と消失の意味を表わす動詞とのくみあわせもあることから、その6つのタイプと並んで、〔消失物のありか〕をも立てる。

・〔ゆくさきのむすびつき〕

奥田（同）は〔ゆくさきのむすびつき〕について下位分類をしていないが、本研究は二格の名詞の性質、すなわち「行く先」を表わすか「着点」を表わすかという点に注目して、〔行く先のむすびつき〕と〔着点のむすびつき〕に分ける。これは、後に3.2で詳しく述べるが、〔行く先のむすびつき〕と〔着点のむすびつき〕のそれぞれの典型的な連語「～に向かう」と「～に着く」とで、性質が明らかに異なり、1つの分類の中で扱えないことによる。また、〔ゆくさきのむすびつき〕から〔結果規定のむすびつき〕を表わす連語を作れるのは、本研究で言う〔着点のむすびつき〕を表わす動詞のみである。

なお、これらの上位のむすびつきは、奥田（同）の〔ゆくさきのむすびつき〕に対して、本研究は〔移動のむすびつき〕と呼ぶ。

・〔ゆずり相手のむすびつき〕〔はなし相手のむすびつき〕

「おじいさんに会う」「彼女に会う」など二格の人名詞と「人と対面する」の意味を表わす動詞とのくみあわせは奥田（同）の分類のどれにも入れられず、本研究は新たに〔対面の相手のむすびつき〕を立てる。

また、これに〔ゆずり相手のむすびつき〕と〔はなし相手のむすびつき〕も加えて、その上位に〔相手のむすびつき〕が立てられる。

・〔かかわりのむすびつき〕

〔かかわりのむすびつき〕について、奥田は〔心理的な態度のむすびつき〕と〔態度的な動作のむすびつき〕との2つの下位分類のみを立てている一方、実に様々なものがあることも示唆的に指摘している。

本研究では、〔かかわりのむすびつき〕を表わすものの多様性を考えて、〔かかわりのむすびつき〕という1つのカテゴリーを設けないことにする。その代わりに、〔社会的なかかわり〕、〔心理的なかかわり〕、〔関係のむすびつき〕の3つのカテゴリーを〔対象的なむすびつき〕の直接の下位分類として立てる。そのうち、〔社会的なかかわり〕をさらに〔社会活動のむすびつき〕と〔社会的状態変化のむすびつき〕の2つのタイプに、〔心理的なかか

わり]を[態度のむすびつき][認識のむすびつき][知的なむすびつき]の3つのタイプに、[関係のむすびつき]を[客観的な関係のむすびつき][論理的な関係のむすびつき][起源のむすびつき][内容＝構成要素のむすびつき]の4つのタイプにそれぞれ分ける。なお、[内容＝構成要素のむすびつき]だけは、奥田(同)の[道具のむすびつき]から取り出したものである。

・[道具のむすびつき]

奥田(同)の[道具のむすびつき]に他動詞のものと自動詞のものがあるが、他動詞が作るもの、例えば「帯をうしろ手にむすぶ」「手鏡にかみをそろえる」などは現代日本語としては「ふつうのいいまわしではない」(p.308)ため、現代日本語の共時的な研究である本研究では扱わない。一方、自動詞が作るもの、例えば「よろこびにあふれる」「才智にたける」などは、奥田が「道具のむすびつきをあらわす単語のくみあわせからずれてきたもの」(p.309)として挙げており、本研究では扱う。これらは上に挙げた[内容＝構成要素のむすびつき]をなし、[関係のむすびつき]の下位に入れる。

なお、上に挙げなかった[くつつきのむすびつき]と[はたらきかけのむすびつき]は、本研究も奥田(同)に従って、そのまま[くつつきのむすびつき]と[働きかけのむすびつき]として[対象的なむすびつき]の下位に位置づける。

また、奥田(同)の分類にないものとして、「警察に捕まる」「先生に見つかる」なども挙げられ、これらは受身的な意味を表わしていることから、[受身的なむすびつき]と名付ける。

[規定的なむすびつき]

奥田(同)の[規定的なむすびつき]の下位分類に、[結果規定のむすびつき][内容規定のむすびつき][様態規定のむすびつき][目的規定のむすびつき]の4つの類がある。そのうちの[様態規定のむすびつき]については、まず「名詞が動作や現象の様態(動作の質的な特徴)を規定するはたらきをなすことのできるのは、現代日本語ではおもにで格であって、こうしたはたらきをもっていたに格の名詞はほとんど副詞への移行を完了している」(p.313)と述べ、例えば「従順にはたらく」「熱心にプロポーズする」の「従順」「熱心」はもはや名詞ではないと述べる。そのうえで、「大声にしゃべる」「ながし目に見る」の「大声」「ながし目」は「なお名詞性を保存しているようにみえる」(p.313)と述べて、これらを様態規定のむすびつきとする。本研究は主に現代日本語を対象とする共時的な研究であるので、このようなものは扱わない。

従って、本研究における[規定的なむすびつき]は、[結果規定のむすびつき][内容規定のむすびつき][目的規定のむすびつき]の3つの下位分類になっている。

以上のことを整理すると、本研究の分類は次のページの表 6 になる。なお、奥田（1962[1983]）の分類と比較しやすいように、奥田（同）の分類との対応関係も合わせて示す。

表 6 奥田（1962[1983]）の分類と本研究の分類との対応関係

奥田（1962）の分類			本研究の分類			
分類	下位分類		下位分類		分類	
対象的なむすびつき	ありかのむすびつき	存在のむすびつき	→	存在物のありか	ありかのむすびつき	
		内在のむすびつき	→	内在のむすびつき		
		所有者のむすびつき	→	所有者のむすびつき		
		所有物のありか	→	所有物のありか		
		認知物のありか	→	認知物のありか		
		出現物のありか	→	出現物のありか		
				→	消失物のありか	
	ゆくさきのむすびつき		→	行く先のむすびつき	移動のむすびつき	
			→	着点のむすびつき		
	くつつきのむすびつき		→	くつつきのむすびつき		
	ゆずり相手のむすびつき		→	ゆずり相手のむすびつき	相手のむすびつき	
	はなし相手のむすびつき		→	はなし相手のむすびつき		
	かかわりのむすびつき	心理的な態度のむすびつき	→	対面の相手のむすびつき	社会的なかわり	
			→	社会活動のむすびつき		
		態度的な動作のむすびつき	→	社会的状態変化のむすびつき	心理的なかわり	
			→	態度のむすびつき		
		その他	→	認識のむすびつき	関係のむすびつき	
→			知的なむすびつき			
→			客観的な関係のむすびつき			
→			論理的な関係のむすびつき			
規定的なむすびつき	結果規定のむすびつき	→	起源のむすびつき	関係のむすびつき		
	内容規定のむすびつき	→	内容＝構成要素のむすびつき			
	様態規定のむすびつき	→				
	目的規定のむすびつき	→	働きかけのむすびつき			
状況的なむすびつき	空間的なむすびつき	→	受身的なむすびつき			
	情勢的なむすびつき	→	結果規定のむすびつき	規定的なむすびつき		
	時間的なむすびつき	→	内容規定のむすびつき			
	原因のむすびつき	→	目的規定のむすびつき			

注：“.....▶”は奥田（1962[1983]）との対応関係を、 は本研究で新しく立てた分類をそれぞれ示す。

なお、奥田（同）の一部のもののみが本研究と対応している場合は“—▶”で示す。

第2部（第3章と第4章）では、表6に示した本研究での分類を1つずつ取り上げ、用例を挙げながら、詳細に記述する。

以上、Ⅰ～Ⅲでは、主に奥田（同）の再考に対して、その問題点を具体的にどう改善するか、および改善する必要性を見てきた。

2.4.2.3 「拡大連語」について

本研究における「連語」の範囲は奥田（1962[1983]）のそれより広く、いわゆる「拡大連語」のようにとらえている。本節はこれについて述べる。

周知の通り、奥田の連語論で扱われている「連語」というのは、「(葉っぱが) 地面に落ちる」「花を花瓶に飾る」のような、動詞の基本形と名詞とのくみあわせである。しかし、李（2011a）で明らかになっているように、特に移動動詞やくっつけ動詞のあるものは文の中で「～ている」形、「～てある」形および受身形（普通は「～(ら)れている」の形で現われる）をとると、二格の名詞との関係が、動詞の基本形の場合とは明らかに異なっている。すなわち、動詞の基本形と二格の名詞とのくみあわせ、例えば「(葉っぱが) 地面に落ちる」「花を花瓶に飾る」はそれぞれ〔移動のむすびつき〕〔くっつきのむすびつき〕を作っているのに対して、動詞の「～ている」形、「～てある」形および受身形と二格の名詞とのくみあわせ、例えば「葉っぱが地面に落ちている」「花が花瓶に飾ってある」「花が花瓶に飾られている」は〔存在のむすびつき〕を作っている（第3章で詳しく述べる）。

また、移動動詞の中に、「歩く」「走る」「飛ぶ」など移動の様態を表わす動詞があって、移動の行く先あるいは着点を表わす二格の名詞をとりにくい。しかし、これらの動詞は「～ていく/てくる」の形をとると、「玄関に走っていく」「大学に飛んでいく」などのように、容易に二格の空間名詞とくみあわさって、〔移動のむすびつき〕を作るのである。

以上のような事実を考えて、本研究では、動詞の基本形だけでなく、動詞の「～ている」形、「～てある」形、「～ていく/てくる」形および「～(ら)れている」の形など、特定のいわゆるアスペクト形式やヴォイス形式になったものと名詞とのくみあわせも広く「連語」として扱う。

2.4.3 本研究と格助詞研究との異同

2.4.2節で本研究の立場や方法論を明確にしたが、本節では、本研究は連語論研究であって、いわゆる格助詞研究とどう違うかを述べる。

2.1節で挙げたように、格助詞研究は格助詞「ニ」そのものの意味と用法を対象とするが、二格を取れる動詞及び名詞の性質を考えずに格助詞「ニ」のみ取り出すことはできない。例えば、「葉っぱが地面に落ちる」と「葉っぱが地面に落ちている」における格助詞「ニ」のそれぞれの用法は、国立国語研究所（1951）の分類でいうと前者は「⑥—（イ）到達点・行き着く所（時・人なども含めて）・方向。」になり、後者は「①動作・作用の行われる空

間的な場所の定位・位置を示す。いわば、事物の存在する場所。また、事物を存在させる場所。」になるが、これは動詞「落ちる」の形が変わる（「ている」形になる）ことによって、「地面に」が「到達点・行き着く所」から「事物の存在する場所」を表わすようになったからである。格助詞「ニ」のみを考えるとこのような関係性は見えない。

格助詞の研究に対して、本研究は二格の名詞と動詞との関係に着目して、二格の名詞と動詞とのそれぞれの性質を分析することによって二格の名詞と動詞とのむすびつきを研究する。格助詞研究と違って、本研究では連語の構造を設定することで、二格の名詞と動詞からなる連語の間の移行・派生の関係、ないしそれがなす体系も明らかになる。例えば、上掲の「葉っぱが地面に落ちる」と「葉っぱが地面に落ちている」の例の他に、同じく同じ動詞「しがみつく」からなる連語「手すりにしがみつく」と「愚かさにしがみつく」も挙げられる。格助詞研究では、「手すりにしがみつく」と「愚かさにしがみつく」における格助詞「ニ」はどちらも「動作・作用の向けられる対象の事物」（国立国語研究所（同）の分類⑦）になる。一方、本研究では、「手すりにしがみつく」は「くっつきの構造」をなしており、〔くっつきのむすびつき〕を表わす連語を作っている。二格の名詞は基本的に物名詞である。二格の名詞が抽象化され、「愚かさにしがみつく」になると連語全体は「態度的な動作の構造」になり、〔態度的な動作のむすびつき〕を表わす連語を作るようになる。

このように、本研究は連語の体系化を試みるものであり、単なる格助詞の研究とは異なる。

第2部 二格の名詞と動詞からなる連語の分類

第2部では、2.4節の表6で示した本研究での分類を1つずつ取り上げて、連語の性質を記述する。

二格の名詞と動詞からなる連語は、二格の名詞と動詞とのむすびつき方によって、まず「対象的なむすびつき」を表わすものと「規定的なむすびつき」を表わすものに大きく分かれる。

「対象的なむすびつき」と「規定的なむすびつき」の定義は基本的に奥田(1962[1983])に従う。すなわち、「対象的なむすびつき」というのは、動作(あるいは状態)とその動作(あるいは状態)の成立に加わる対象との関係である(p.282)。一方、「規定的なむすびつき」においては、二格の名詞で示される状態あるいは現象は、動作そのものの成立に直接に関係せず、動作のもっているなんらかの側面を規定してかかる(p.309)。

以下、第3章では「対象的なむすびつき」を、第4章では「規定的なむすびつき」をそれぞれ述べる。

第3章 対象的なむすびつき

すでに挙げたように、「対象的なむすびつき」は動作(あるいは状態)とその動作(あるいは状態)の成立に加わる対象との関係を表わす。奥田(1962[1983]:282)も指摘しているように、「このばあい、対象という用語のもとに具体的な物を理解してはいけない。動作の成立にくわわる物や現象や状態は、動作との関係において、すべて対象になる」のである。

しかし、同じく「対象的なむすびつき」を表わすと言っても、二格の名詞と他動詞のくみあわせと、二格の名詞と自動詞のくみあわせとは、構造が異なる。二格の名詞と他動詞のくみあわせは、ヲ格の名詞を媒介にして成り立っているため、常に3単語の構造をなしている(ヲ格の名詞が「直接的な対象」を示し、二格の名詞が「間接的な対象」を示す)。これに対して、二格の名詞と自動詞のくみあわせはヲ格の名詞を必要としないので、2単語から成り立っている(なお、に格の名詞と自動詞のくみあわせの場合にも「に格の名詞がしめす対象の間接性は、きえてなくなるわけではない」(奥田(同:282))。

本研究では、「対象的なむすびつき」を、二格の名詞と動詞とのむすびつき方および、二格の名詞と動詞のそれぞれのカテゴリカルな意味によって、次の9つに分類した。

第1節 ありかのむすびつき

第2節 移動のむすびつき

第3節 くつつきのむすびつき

- 第 4 節 相手のむすびつき
- 第 5 節 社会的なかかわり
- 第 6 節 心理的なかわり
- 第 7 節 関係のむすびつき
- 第 8 節 働きかけのむすびつき
- 第 9 節 受身的なむすびつき

以下は一つずつ取り上げて詳しく述べる。

3.1 ありかのむすびつき

〔ありかのむすびつき〕について、奥田（1962[1983]:283）は、「に格の名詞が存在動詞や認知動詞や出現動詞などくみあわさると、その名詞は物（あるいは現象や状態）のありかをしめし、かざり名詞とかざられ動詞のあいだにありかのむすびつきができる。このありかのむすびつきには空間的なニュアンスがつよくつきまとっているが、対象的なものである。」と述べている。本研究における〔ありかのむすびつき〕も基本的にこれに従う。なお、自動詞の場合は、物（あるいは現象や状態）を表わすガ格の名詞も構造的に必要なため、基本的に 3 単語からなる構造である。

〔ありかのむすびつき〕は二格の名詞と動詞の語彙的な意味によって、性質の異なるものに分かれるが、本研究は次の 7 つのタイプに分けて説明する。

- a) 存在物のありか
- b) 内在のむすびつき
- c) 所有者のむすびつき
- d) 所有物のありか
- e) 認知物のありか
- f) 出現物のありか
- g) 消失物のありか

3.1.1 存在物のありか

〔存在物のありか〕を表わす連語は、「ある」「いる」をはじめとする存在動詞と二格の空間名詞と物や人や現象を表わすガ格の名詞とのくみあわせであり、ガ格の名詞で示されている物や人や現象が二格の名詞で示されている場所に存在していることを表わす。二格の名詞はガ格の名詞のありかを示す。「存在の構造」を示すと、以下の通りである。

存在の構造

【 <空間>に <物/人/現象>が <存在>Vi 】

[存在物のありか]

[存在物]

[存在]

・例：庭に木がある、部屋に人がいる

このように、本稿では、それぞれの連語の構造を「〇〇の構造」と名づけ、上のように示す。なお、この構造において、上段の欄（< >）は名詞や動詞のカテゴリカルな意味を示し、下段の欄（[]）はそれぞれの文法的な意味を示す。

[1] 典型的なニ格名詞としては、まず下の例のように「マンハッタン」「町」「公園」「部屋」などといった空間名詞が挙げられる。

- (1²³) マンハッタンにはレストランがあんなにたくさんあるのに、そこであなたの恋人が、御主人と子供たちと一緒に食事をしていた。（『泣かない子供』）
- (2) 町には、スカシ彫りの欄間の石板だけ売る店があり、事実、多くの家が、それを後生大事に、家の一番目立つところにはめこんでいる。（『永遠の前の一瞬』）
- (3) この公園には木がうえてあり、池や噴水があり、鉄棒なんかもある。（『ブランコのむこうで』）
- (4) どうしてこの部屋にこんなテーブルがあるのか、私にはわからない。（『キッチン』）

そのほか、次の「通り」「境」「底蓋」などのような空間性の具体名詞もある。

- (5) 山手通りに立派な石づくりの教会があるでしょう。（『少年 H』（上巻））
- (6) うちとマリの家の境にある木戸がバタンと開いて、彼女がこちらに駆けて来るのが見えた。（『落花流水』）
- (7) 色は銀色で、鋳物のようにザラザラしている。しかし底蓋には幾つかの穴があった。（『ボクは好奇心のかたまり』）

また、ニ格には下の（8）～（14）が示すように、「そこ」などの空間を表わすコソアド系指示詞や、「裏」「向こう」「途中」などの方位や位置を表わす名詞や、「近く/遠く」などの距離を表わす形容詞の連用形や「～場所/ところ」のような具体的な場所を明示する名詞句などもよく現われる。

- (8) 廊下から部屋に入ることができ、そこには椅子やテーブルがあるだろう。（『ブランコのむこうで』）

²³ 便宜上、用例の通し番号は章ごとにリセットする。

- (9) 「防空壕が裏にあります」と能島さんが云ったが、誰も立って行かなかった。(『黒い雨』)
- (10) 向うに丘があったが、その下方がむざんに削りとられ、その背後にはいくらかの雑木林が続いていた。(『母の影』)
- (11) 途中にグラウンドと歴史博物館がある。(『世界の中心で、愛をさけぶ』)
- (12) H が遊び場にしていた山はすぐ近くにあった。(『少年 H』(上巻))
- (13) 「そうか、それなら眼鏡も、僕の一ばん力闘した場所にある筈だ」(『黒い雨』)
- (14) H の家から一キロメートルほど離れたところに、“大正筋”という繁華街と、その道に直角に交わる“六間道”という賑やかな商店街があった。(『少年 H』(上巻))

空間性をもたない具体名詞が二格にたつ場合は、「～の上に」「～の中に」「～のそばに」「～のところに」という手続きで空間化されなければならない。

- (15) 彼女の傍らには、手がつけられていないおにぎりの載った皿がある。(『落花流水』)

なお、次の 2 例が示すように、二格に人の身体部位がきている場合は、空間化の手続きをとらずに空間的に用いられることもある。(17) は純粋な存在からやや離れているが、[存在物のありか] を作ることに変わりがないであろう。

- (16) 駆け寄って来たマリの手には、いつもランドセルに付けてあった鈴と手鞠のキーホルダーがあった。(『落花流水』)
- (17) きちんと揃えた脚には、清潔な足袋があった。土には汚れていない。(『点と線』)

[2] ガ格には、以上に挙げたように、「テーブル」「眼鏡」などの物名詞や、「防空壕」「博物館」のような空間名詞がくるのが普通であるが、「跡」「傷」「模様」などのような視覚でとらえられる現象を表わす名詞が現われることもある。例えば以下の 3 例である。

- (18) 見上げた壁には、時計のあとだけがあった。(『キッチン』)
- (19) おじさんは横川駅で被爆したとのことで左の頬に傷があった。(『黒い雨』)
- (20) 彼女は、ナイフとフォークだけではなく、ふちに花模様のある大皿を、半ダースずつ二組も添えてくれた。(『少年 H』(上巻))

この場合は、松本(1979:210)も指摘しているように、ガ格の名詞と「ある」のまとまりが強くなって、その全体が、二格の名詞に対して視覚でとらえた現象を示している。このことから、ガ格の名詞と「ある」とのくみあわせは、二格名詞の属性を表わしていると

も考えられ、次節に取り上げる〔内在のむすびつき〕に近い。ただし、〔内在のむすびつき〕においては、二格の名詞は空間性を持たない具体名詞か抽象名詞であるのに比べると、この3例は〔存在物のありか〕に分類していいであろう。

「ことづて」などの抽象名詞、「協会」のような組織名詞がガ格にくることもある。抽象名詞の場合は、〔存在物のありか〕の構造で用いられることによってその意味が具体化されるであろう。下の(21)においては、「ことづて」は「ことづてが書いてある紙」の意味を表わしている。

- (21) 各教室に、校長先生から“みんな、校庭に集まるように”という、ことづてがあつた。(『窓ぎわのトットちゃん』)
- (22) ものの怪の寺で思いだったが、幽霊のよく出る英国には、「幽霊屋敷証明協会」とかいふ協会がロンドンにあり、ものの怪の出る家から電話があると、協会から調査員が派遣され、あらゆる角度から調べた揚句、たしかにふしぎな現象が起こることがわかると、ちゃんと証明書を発行してくれるのである。(『ボクは好奇心のかたまり』)

ガ格に抽象名詞がくるとき、二格に「ここ」「どこ」などのコソアド系指示詞が現われても、物理的な空間を表わさず、抽象的に用いられるようになる。

- (23) (本の内容について：引用者注) ここには「夕暮れのあそび」も「イチジク」も、「自由」も「恋びと」も「子どもと水」も、「パン」も「友情」も「裏の木」もある。(『泣かない子供』)
- (24) 犯罪がなかったという手持無沙汰がどこかにあつた。(『点と線』)

ガ格に抽象名詞がきて、二格に人間の身体部位((25))か、それが空間化されたもの((26))がきて、〔存在物のありか〕を作ることもある。身体部位として用いられるのは「身体」「胸」「手」「心」などである。

- (25) 三十代に長い間、不眠症になっていた頃、私の心に一つだけ、救いのように泛んでいた風景がある。(『永遠の前の一瞬』)
- (26) ぼくの身体のかなかにはアルコール分解酵素がたくさんあるのか、少々飲んだくらいでは酔わなかった。(『世界の中心で、愛をさけぶ』)

[3] 〔存在物のありか〕の連語を作る二格の名詞は、空間性のある具体名詞が普通であるが、やや異なるものとして、「この世」「世の中」「夢の国」「人間社会」「背景」「現実」などのような「人を取りまく無形の場所」を表わすともいえる名詞が現われることもある。

そういった場合に、ガ格の名詞は「縁というもの」「事実」「習わし」のような社会に関係する抽象的な事柄が現われる。

- (27) しかし、この世には縁というものがあることを、近ごろ私は感ずるようになった。
(『母の影』)
- (28) これは人間社会にある一つの事実を的確にとらえて言語化したから、社会に存在を認められたのです。(『日本語練習帳』)
- (29) まあそういう習わしが背景にあるせいか、……。 (『天窓に雀のあしあと』)

また、「彼女らの結婚」「～と～」のような複数性をもつ抽象名詞（あるいは名詞句）が二格にたつ場合も〔存在物のありか〕が成り立つ。ガ格には「共通した点」「違い」など複数の事柄の関係を述べる名詞がくる。

- (30) 相手の男も同年輩かちょっと上、初婚あり再婚あり、といろいろだが、彼女らの結婚に共通した点が二つある。(『天窓に雀のあしあと』)
- (31) やはり「意味」と「意義」には違いがあるのです。それを書いて下さい。(『日本語練習帳』)

[4] 以上、主に「ある」「いる」の例を取り上げて、二格の名詞の性質をもとにむすびつきの性格を見てきたが、それら以外に、「居合わせる、居候する、存在する、点在する」²⁴などの存在動詞に近い動詞も、場所を示す二格の名詞とくみあわさって、〔存在物のありか〕を作る。

- (32) 今風にいえば、若い連中のいじめの現場に居合わせて、つい口を差し挟み、仲裁に割って入る行為といえなくもない。(『日本人の発想、日本語の表現―「私」の立場がことばを決める―』)
- (33) 道の両側に『松竹館』『娯楽館』『三国館』などいう映画館が点在し、本庄町周辺の商店街とは比較にならぬほど華やいでいた。(『少年 H』(上巻))
- (34) 愛情というのはたぶんこんな風に、情熱や欲望とはまったく別の場所に、そうっと存在しているものなのだと思う。(『泣かない子供』)

また、「溢れる、そびえる、散らかる、散らばる、閉じこもる、並ぶ、潜む、広がる、宿る、静止する」などの動詞が「～ている」形を取り、同じく場所を示す二格の名詞とくみあわさり、〔存在物のありか〕を作っている。

²⁴ 本稿では、動詞を挙げる際に、和語動詞と漢語動詞とを分けて提出する。また、それぞれについて順番は基本的に五十音順による。

- (35) イングランドの花でもある薔薇は、初夏のイギリスを歩くといたるところに溢れているのだが、……。 (『泣かない子供』)
- (36) 雄一がハガキにそう打ってくれたのを、どんどんコピーして (案の定、この家にコピー機もひそんでいた) あて名書きをした。 (『キッチン』)
- (37) 東京の小さな家の狭い座敷の書棚には『漱石全集』が並んでいた。 (『読書のたのしみ』)

[5] さらに、奥田 (同:284) でも指摘されているように、「くっつけ動詞と移動動詞は、継続相のかたち (「～ている」) をとると、存在動詞の資格をもってきて、に格の名詞とのくみあわせにおいて存在のむすびつきをつくる」場合もある。例えば、

- (38) 赤い絨毯にはいろいろな物が落ちている。 (『ボクは好奇心のかたまり』)
- (39) その思いつきだけで生きているという、テーブルを買った彼女は今夜も店に出ている。 (『キッチン』)
- (40) コーヒーの底に砂糖が沈んでいて、僕は思わずそれを飲んでしまった。 (『ボクは好奇心のかたまり』)
- (41) 抜け落ちたりしないように、本体に一センチ幅の丈夫なゴム輪を掛けている。 (『読書のたのしみ』)

(38) の「落ちる」と (39) の「出る」は移動動詞であるが、これらの例に移動そのものは見られず、実質的に移動した後の存在状態、すなわち「絨毯に物がある」「彼女は店にいる」という事実を表わしていると言える。(40) と (41) の場合も同様に、くっつけ動詞の「沈む」と「かける」はここでは具体的なくつつく動作またはくつつける動作よりくつついた後またはくつつけた後の存在状態、すなわち「コーヒーの底に砂糖がある」「本体にゴム輪がある」という事実を表わしている。これらにおいては動詞は「～ている」形を取ることによって、移動動詞とくっつけ動詞として本来持っている性質が希薄になり、場所を示す二格の名詞とのくみあわせは〔存在物のありか〕を実現している。

同じように、特にくっつけ動詞の他動詞のあるものは、「～てある」形または受身形の「～ている」形 (「～(ら)れている」の形) をとっている場合も、〔存在物のありか〕を作るようになる。例えば以下のような例である。

- (42) 手帳にびっしり、切手の二倍ぐらいの大きさのメモ用紙が貼てある。 (『いい言葉は、いい人生をつくる』)
- (43) いたる所にある様々な花びんに季節の花々が飾られていた。 (『キッチン』)

3.1.2 内在のむすびつき

奥田(1962[1983]:285)で指摘されているように、動詞「ある」の基本義である「存在」の意味が薄れ、「属性として、部分としてもっている」という語彙的な意味を実現している場合は、二格の名詞とくみあわさって、〔内在のむすびつき〕ができあがる。〔存在物のありか〕と異なり、二格の名詞は空間性を持たない具体名詞か抽象名詞であって、動詞との関係において空間的なありかを示さず、部分や側面、あるいは属性(内在物)のありかを示している。

〔内在のむすびつき〕を表わす連語は、主に動詞「ある」と物や人や事を表わす二格の名詞と事柄を表わすガ格の名詞とのくみあわせであり、二格の名詞で示されている物や人や事は、ガ格の名詞で示されている事柄を部分・側面・属性としてもっていることを表わす。「内在の構造」は以下の通りである。

内在の構造

【 <事/物/人>に <事>が <存在>Vi 】

〔内在物のありか〕 〔内在物(部分・側面・属性)〕 〔内在〕

・例：新聞に投書欄がある、犬に感情がある、笑いにいい効果がある

[1] 二格の名詞がガ格の名詞で示される部分のありかを表わすもののほとんどは、(44)～(46)が示すように、二格の名詞が「新聞」「映画」「本」など情報性のものを指し示す名詞であり、ガ格の名詞はそれぞれの一部分を示す抽象名詞(「投書欄」「セリフ」「文章」)であるようなくみあわせである。

(44) 大阪の朝日新聞には「手紙」という井戸端会議のような読者の投書欄があつて、かなりのスペースが割かれている。(『天窓に雀のあしあと』)

(45) また、『論語』や『孟子』には、人生に対する深い洞察の示された文章がたくさんありました。(『日本語練習帳』)

(46) 「ア・マン・イン・ラブ」という映画の中に、「それが人生よ。素敵な思い出を編みなさい」というセリフがあります。(『泣かない子供』)

二格に同じく情報性のものを指し示す名詞がきても、ガ格の名詞がそれらの部分を示す抽象名詞ではなく、「顔」「お城」「スナック」などの具体名詞がくる次のような連語は、〔内在のむすびつき〕からやや離れるであろう。

(47) 商店街のポスターにもサブちゃんの顔がある。(『天窓に雀のあしあと』)

(48) お城っていても、ヨーロッパの絵にあるようなお城なんだよ。(『ブランコのむこうで』)

- (49) 夜は一つサブちゃんに敬意を表さなければと、サブちゃんの歌にある松風町のスナックへ当てずっぽうに入り、……。『天窓に雀のあしあと』

(47) ～ (49) において、ガ格の名詞で示される物（それぞれ「サブちゃんの顔」「お城」「松風町のスナック」）は二格名詞の「商店街のポスター」「ヨーロッパの絵」「サブちゃんの歌」の一部分であると同時に、これらはそれぞれ「サブちゃんの顔」「お城」「松風町のスナック」の抽象的な出現場所をも示しており、二格の名詞、ガ格の名詞と「ある」とのくみあわせは後述の〔出現物のありか〕²⁵に近づいている。このような連語は〔内在のむすびつき〕と〔出現物のありか〕との中間的なものであろう。

[2] 二格の名詞がガ格の名詞で示される側面のありかを表わすものにおいて、二格の名詞には「貧乏というレッテル」「批評の分野」などの抽象名詞が多いが、「カツラ」「犬や猫」のような具体名詞や「トモエ（学校の名前）」などの組織名詞、「うち」のような空間名詞も現われうる。

- (50) 貧乏というレッテルには意外にメリットがあった。『落花流水』
- (51) 当時、批評の分野に亀井勝一郎賞というのがあって、それをもらった。『読書のたのしみ』
- (52) だが、狐狸庵の考えによると、カツラには三つの難点がある。『ボクは好奇心のかたまり』
- (53) 犬や猫にも感情や意思はあるけれど、人間のほうが絶対的に有利なのだ。『いい言葉は、いい人生をつくる』
- (54) ある日、トットちゃんは、学校に行く電車の中で、突然、「あれ？ トモエに校歌って、あったかな？」と考えた。『窓ぎわのトットちゃん』

(50) ～ (54) が示しているように、〔内在のむすびつき〕を表わす連語では、二格に具体名詞がきても、ガ格の名詞は二格の名詞で示されるものの側面を表わす抽象名詞であるため、くみあわせ全体の意味が抽象化される。

二格の名詞に、言葉を表わす抽象名詞が現われる場合、ガ格に「意味」「感じ」「(物をとらえる) 角度」のような名詞がきて、言葉の側面を特徴づける。

- (55) だから、「通」にはもともと「道がついている」という意味がある。『日本語練習帳』
- (56) 「お客がちつとも来ない」と「お客がさっぱり来ない」とをくらべると、「さっぱ

²⁵ 〔出現物のありか〕を表わす連語は、典型的には「現われる、出現する」など出現の意味を表わす動詞と二格の空間名詞とのくみあわせである。詳しくは 3.1.6 節参照。

「り」に店主の期待はずれの感じがあるなど思うか思わないかです。(『日本語練習帳』)

- (57) しかし、「単語」は一つ一つ物をとらえる角度があるので、それが違うと、重なるところはあっても、中心のところは大きく違ってきます。(『日本語練習帳』)

また、二格の名詞が人名詞、人間の身体部位あるいは「意識」「人柄」などもっぱら人間に関係する名詞であり、ガ格の名詞が「可愛いところ」「表情」「気持ち」「欲求」「温味と素直さ」などのような人間の性質の側面を表わす名詞がくると、「内在のむすびつき」を作る。

- (58) わがままで図々しい女の子だけれど、昨日のうなぎといいこのラムネといい、「彼女」は人を喜ばせようとする可愛いところがある。(『落花流水』)

- (59) あきらかに、情死とわかったので、「刑事たちの顔」は、弛緩した表情があった。(『点と線』)

- (60) 「思い知らせる」とは、「自分の心の中に」ある一つの気持ち、恨みとか悪い感情を相手に分からせることです。(『日本語練習帳』)

- (61) ……今は普通に行われていることを思えば、「日本人の意識」は「可能動詞」を欲する根源的な欲求があり、それに応えるように新形ができる。(『日本語練習帳』)

- (62) 「O氏の人柄」、いささかやぼったいながら温味と素直さがあった故だろう。(『永遠の前の一瞬』)

[3] ガ格の名詞と二格の名詞が属性（つまり性質や特徴）と属性のありか関係を成している典型的なものはなかなか見つからないが、以下のような例は属性的と言えるであろう。

- (63) 「笑いに」は脳の活動を高める効果があることは生理的にも実証されている。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)

- (64) しかし、私の感じでは、女性の「ニコニコ顔」はとりわけ人を魅了する力があるようだ。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)

- (65) 「しかし君。そうだ、「帯革」に特徴があった筈だ」(『黒い雨』)

- (66) ……、「この本」はとてもフランス映画的な空気があると思う。(『泣かない子供』)

(63) ～ (66) に見られるように、二格には抽象名詞も具体名詞も現われうるが、ガ格の名詞は「効果」「力」「特徴」「～的な空気」などのものの属性を表わしうるような抽象名詞でなければならない。また、ガ格の名詞と「ある」のまとまりが強くなって、その全体が二格の名詞で示される事柄や物の属性（性質や特徴）を特徴づけている。例えば、(63)では、「笑いに…効果がある」は、「笑いは効果的だ」ということであり、すなわち「効果

がある」は二格名詞の「笑い」の性質を特徴づけていると言える。

[4] 以上述べてきたように、〔内在のむすびつき〕を、ガ格の名詞が二格の名詞で示される物や人、事柄の部分を表わすか、側面を表わすか、それとも属性を表わすかによってタイプ分けもできそうであるが、「部分」、「側面」と「属性」の間にはっきりとした境界線を引くことができず、一つの線の上で連続している。従って、厳密に言えば、「より部分的」、「より側面的」、「より属性的」というふうに規定した方がいいであろう。

このことをもう少し詳しく説明する。例えば、以下の(67)における「フランス語」と「文法」についてみると、「言語学的に見て一つの言語には語彙だけでなく文法もある」と考える場合の「文法」は「フランス語」全体の一つの部分と考えられる。また、「フランス語」の性質について述べる場合は、多くの性質から「文法」という性質を取り上げるなら側面になる。他の言語（この例では「日本語」）と対照する場合は、「文法」と「ある」のまとまりが強くなり、その全体が「フランス語」の属性を表わしており、すなわち「フランス語は文法的だ」というようなニュアンスを帯びている。

(67) 森さんは「日本語は非文法的言語だ。フランス語には文法があるけれど」と書いています。（『日本語練習帳』）

[5] 〔内在のむすびつき〕を作ることができる動詞は、以上見てきた「ある」の他に、「溢れる、隠す、隠れる、こもる、潜む、含む、宿る、揺らめく、欠落する、成立する」などもある。これらのうち、3.1.1 節で見た通り、「溢れる、隠れる、潜む、宿る」などいくつかの動詞は〔存在物のありか〕をも作っている。また、〔存在物のありか〕の場合と同様に、〔内在のむすびつき〕においても、これらの動詞は「～ている」形を取るのが普通であろう。

(68) ステファンの声は子供を窘めるように低く、ちょっとだけ優しく、そして本質は厳しいものだ。わたしの腕を解く手に力が籠もっている。（『幸福な結末』）

(69) 十七歳にしても小柄なその体のどこに、睡眠一時間で頑張れるエネルギーが隠れているのか、使う側にいる英子が首をひねるのだから、少々妙なものである。（『百年目の同窓会』）

(70) 彼は笑い、細めた瞳にはまっすぐ答えが宿っている。（『キッチン』）

(71) ……、女の人というものはよく見ていると、どこかに美点の幾つかを匿しているものであって、それを見つけ出されないのは、相手の眼の配りが不足しているのだと解釈すべきである。（『女ひと』）

これらの例においては、二格の名詞で示されているもの（「手」「体のどこ」「（彼の）瞳」

「(女の人の) どこか」は、ガ格の名詞で表わされている属性(「力」「エネルギー」「答え」「美点」)のありかを表現している。なお、(68)～(71)に見られるように、二格の位置に現われるものは人名詞「(女の人の) どこか」あるいは人間に関わる名詞(「手」「体のどこ」「(彼の) 瞳」)がほとんどのようである。

以下の例のように、他動詞「含む」は「含まれている」という受身の形で現われることが多いようである。

(72) このお時の行動には、情死という感情に密着しない、何かが含まれていそうだった。(『点と線』)

(73) ……、こうした日常生活でくりひろげられるさまざまな問題の背景には、自分と相手との性格が調和しているかどうかという問題がふくまれている。(『性格はいかにつくられるか』)

[6] また、〔存在物のありか〕で見たのと同様に、くっつけ動詞や移動動詞のあるものは、「～ている」形を取ると、二格の名詞とのくみあわせが〔内在のむすびつき〕を作る場合がある。例えば、

(74) その豊かな太鼓腹には、搾取、収奪と矢印がはいっている。(『天窓に雀のあしあと』)

(75) 何でもない、名残りを惜しんでいたのだ、と弁解したが、ご不浄の窓に寄りかかって名残りを惜しむのは似合わないと言われ、うしろ姿に悩みが出ていたわよ、と目のなかをのぞき込まれると、ふと話してみる気持になった。(『男どき女どき』)

(76) 彼女には、そういうことが持つ、しんとした寂しさがしみ込んでいた。(『キッチン』)

これら3例では、動詞「入る」「出る」「染み込む」が本来もっている語彙的な意味が薄れ、二格の名詞とのくみあわせ全体が比喩的に用いられることでずれ＝抽象化を起し、二格の名詞(「太鼓腹」「うしろ姿」「彼女」)がある種の属性を備えているという内在的な状態を表現している。

ただし、こういった動詞が〔存在物のありか〕を表わす場合と異なり、二格には「彼女」のような人を表わす具体名詞以外に、ほとんど抽象名詞が現われる。また、〔存在物のありか〕が表わす存在の状態はより具体的であり、実際に移動動作やくっつく動作が行われた後の状態であるとも考えられるのに対して、〔内在のむすびつき〕が表わす内在的な状態はより抽象的なものであって、移動動詞やくっつけ動詞が表わす動作が行われるとは考えられない。

[7] 人間を示す二格の名詞が「わかる」「できる」「聞こえる」「見える」など可能相の動詞とくみあわさって、人間の能力を表わす連語を作る。すなわち、二格の名詞で示されている人が動詞で示されている能力（属性）をもっていることを表わす。奥田（同:285）も述べているように、「この種の単語のくみあわせでは、に格の名詞は能力（可能性）の所有者を示して」いて、連語全体は内在的であり、〔内在のむすびつき〕の特殊なものとして位置づけておく。なお、二格の名詞が能力の所有者を表わすという点において、次節に取り上げる〔所有者のむすびつき〕に近づく。この種の連語の構造を示すと、以下の通りである。

能力の構造

【 <人>に <事>が <可能>Vi 】

〔能力の所有者〕 〔能力発揮の領域〕 〔能力〕

・例：私に意味が分かる、人間に音が聞こえる

(77) 本当は、こんなに簡単で、『学校を、そして子供たち』を愛する校長先生の気持ちがかもった校歌はなかったのに、子供たちには、まだ、それがわからなかった。

（『窓ぎわのトットちゃん』）

(78) わたしの目だけに見える、エキゾティックな顔だちの、ステファンとは対照的な、アジア系の男性。（『幸福な結末』）

(79) しかし実際は、はたの者には知れない楽しみがある。魚を釣るのに似た楽しさである。（『黒い雨』）

(80) だが、それ（計算：引用者注）を楽しむことはコンピューターにはできない。

（『いい言葉は、いい人生をつくる』）

上述した通り、ここで挙げた例の多くにおいて二格の名詞は「子供たち」「はたの者」などのような人間を表わす名詞であるが、(78) の「わたしの目」のように、「目」や「耳」など人間の「感覚器」を表わす名詞も現われうる。ただし、(80) の「コンピューター」はやや特殊であろう。宮島（2005a:15）には、「そろばんが計算をした」とは言えないが、高級な機械になると人間に近づいて、「コンピューターが計算をした」は可能であるという指摘がある。(80) においても、「計算を楽しむこと」ができるかどうかを人間と比べていることから、人間に近い能力を持つものと認めていいであろう。

また、語彙的に可能の意味を含んでいない「つく」は、(81) と (82) のようにまずガ格の名詞とフレーズを作って、二格の名詞によって広げられると、能力の所有者が「区別ができる」「想像ができる」といった能力を持っているかどうかを表現するようになり、そのフレーズが動詞相当になって、二格の名詞とくみあわさる。

(81) にもかかわらず、ぼくには大トロとウニの区別もつかなかった。(『世界の中心で、愛をさけぶ』)

(82) 政・財界の「エライさん」の男たちが匆忙を極める身であろうことは、私にも想像がつく。(『天窓に雀のあしあと』)

3.1.3 所有者のむすびつき

〔所有者のむすびつき〕を表わす連語は、「ある」「いる」など所有を表わしうる自動詞と二格の人名詞と物や人や事を表わすガ格の名詞とのくみあわせであり、二格の人名詞で示されている人が、ガ格の名詞で示されている物や人や事を所有していることを表わす。二格の名詞はガ格の名詞の所有者を示す。「所有者の構造」は以下の通りである。

所有者の構造

【 <人>に <物/人/事>が <所有>Vi 】
[所有者] [所有物] [所有]

・例：私に車がある、彼に姉がいる

ガ格には「家族」「女（恋人）」のように、他者との一定の社会的な人間関係を表わす人名詞が現われやすい。

(83) あの頃、私もあなたも恋をしていて、どっちの恋人にも家族があつて、そんなこと問題じゃないってお互いに言いきかせていた。(『泣かない子供』)

(84) こんどのことで、はじめて弟にそういう女があつたのかとわかったようなしだいです。(『点と線』)

また、次の(85)のような抽象名詞（「別名」）や具体名詞（例：「私に車がある」）も現われうる。

(85) 妹には「もち焼き女」という別名がある。文字通り、我が家でおもちを焼く係なのだ。(『泣かない子供』)

ガ格に「覚え」「義務」「経験」「好み」「特権」など人間の抽象的な所有物とでもいえる名詞がくると、「ある」とのまとまりが強くなって、その全体が二格の名詞で示される人を所有者としてとっている。

(86) もちろん、建物一つ一つを見れば、私にも、一応好みはあるののだが……。 (『永遠の前の一瞬』)

- (87) 私は、奥さんには奥さんの特権があると思う。(『泣かない子供』)
- (88) きっと女には死なねばならぬせつばつまった事情があり、弟を道づれにしたと思います。(『点と線』)
- (89) 若者の親への反抗心は、遠い昔に私にも覚えがあるから、わからないでもない。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)

これらの例において、「好みがある」「特権がある」「事情がある」「覚えがある」はそれぞれ「私」「奥さん」「女」「私」の側面と考え、〔内在のむすびつき〕を作っているとも考えられるが、二格にはもっぱら人を表わす名詞が現われるという点から、本研究では〔所有者のむすびつき〕に分類する。なお、これらの例の存在は、〔内在のむすびつき〕と〔所有者のむすびつき〕が繋がっていることを物語っている。

また、〔所有者のむすびつき〕には、二格の名詞が「この親子」「おじいさんとその人」のような複数の人間を表わすものである場合もある。その場合、ガ格の名詞は「共通点」「別の考え方」などの複数の人間の関係を述べる名詞である。

- (90) それに、似ていないこの親子には共通点があった。(『キッチン』)
- (91) 「おじいさんとその人には、また別の考え方があったんでしょうから」(『世界の中心で、愛をさけぶ』)

3.1.4 所有物のありか

〔所有物のありか〕を表わす連語は、「もつ」「借りる」などの所有を表わす他動詞と二格の空間名詞とヲ格の物名詞とのくみあわせであり、人間が二格の名詞で示されている場所にヲ格の名詞で示されている物を所有していることを表わす。二格の名詞はヲ格の名詞で示されている所有物のありかを示す。連語の構造を示すと、以下の通りである。

所有物の構造

【 <空間>に <物>を <所有>Vi 】

〔所有物のありか〕 〔所有物〕 〔所有〕

・例：箱根に別荘を持つ、海辺に部屋を借りる

- (92) そのため、祖父の紀一が東京府下であった、まだ麦畠だらけの世田谷松原の地に土地を借り、新病院を設立したのである。(『母の影』)
- (93) それでも、一夜のうちに降りつもった雪は、私たち家族が寺町の高台に借りていた部屋から眺められる古い城下町の屋根を白くそめかえて、朝になっても、町は異様な静かさに包まれる日があった。(『永遠の前の一瞬』)

(94) 地方に根強い支持基盤を持つ自民党に対抗し、将来にわたって担う 2 大政党のひとつであり続けるためには、地方議員の裾野を広げ、「選挙は風頼み」の体質から脱しなければならないからだ。(朝・社)

(95) 「思いこむ」とは、一つの考えを心にもったときに、それ一つを固く信じて他の考えをもてないこと。(練)

〔認知物のありか〕を表わす連語は、「見える」「聞こえる」など認知活動を表わす動詞と二格の空間名詞と物や現象を表わすガ格かヲ格の名詞とのくみあわせであり、二格の名詞で示されている場所にガ格かヲ格の名詞で示されている物や現象を認知することを表わす。二格の名詞は認知を受ける物や現象のありかを示す。「認知の構造」は以下の通りである。

64

を作っている。なお、この場合は(102)のような自動詞の例もあるが、他動詞の方が多いようである。

- (99) お兄さんはそこで奥歯でも痛んでいるような顔をした。彼の顔に僕は初めて感情らしきものを見た。(『落花流水』)
- (100) あらゆることに楽しみを見つけることは、人間だけに許された生の醍醐味なのである。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)
- (101) 受験生は受験生なりに、定年近い父たちは父たちなりに、正月というのは、むしろ、背筋に薄ら寒いものを感じる時なのだと思う。(『永遠の前の一瞬』)
- (102) 後れをとってうつむいた時、足元に成功が見つかる。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)

また、動詞「する」は「香り」「匂い」「気配」など人間の五感で感知できるような抽象名詞とくみあわさって、「ある状態・現象の起きたことやその存在がおのずと感じられる」という意味を表わすようになる。その全体が二格の空間名詞によって広げられると、「認知物のありか」を作るようになる。例えば下のような例である。

- (103) ぴよんと飛びあがったら、畑のずっとむこうに海がちょっと見えた。空気のかなかには、海のかおりがかすかにした。(『ブランコのむこうで』)
- (104) そこには大麻もヘロインも出て来ない。しかし、その風景には、明らかに麻薬の匂いがする……。 (『永遠の前の一瞬』)
- (105) 僕の背よりも高い、その大きなアメリカ製の冷蔵庫を開けると、背中にマリの気配がした。(『落花流水』)

なお、「認知物のありか」について、奥田(同)は以下のような指摘をしている。「「みえる」「きこえる」のような状態性の動詞をひろげるに格の名詞がその状態のありかをしめしているとすれば、この動詞をしんにしてできている単語のくみあわせは、存在のむすびつきをあらわす単語のくみあわせときわめてちかい関係にあると、いわなければならない。」(p.289)。

実際に、例えば次の「見える」の例であるが、(106)と(107)は認知としての意味が完全に消えていないものの、それぞれ「～ている」形および動詞の連体形によって、「軒下に風鈴がある」「正面に階段がある」といった存在状態を表わしており、「存在物のありか」に移行していると言えるであろう。また、(108)においては、二格名詞とガ格名詞の抽象化によって、認知活動としての意味が薄くなり、連語全体は抽象的な「存在物のありか」を表わすようになる。

(113) 私の住む町の近くにかなり大がかりな人工の町ができた。(『天窓に雀のあしあと』)

(114) だから、「味」とは「口」と「未」との二つの合成で、口の中に生じる微かなもの。(『日本語練習帳』)

出現物の出現場所を表わす二格の名詞は、(109)～(114)に見られるように、空間名詞(「鎌倉市」「オフィス」「田舎」)、空間的な性格をもつ具体名詞(「飾り窓」)や空間化された具体名詞(「町の近く」「口の中」)などであるのが普通である。しかし、空間性を持たない人名詞や抽象名詞なども二格に現われることがある。下の(115)の「彼女は」は文脈＝構造によって臨時的に場所として機能している。(116)の「心の中に」は上の(114)と同様に空間化されているが、ガ格名詞の「イメージ」によって抽象化されている。(117)においては、二格名詞の「駐車場の問題」もガ格名詞の「現象」も抽象名詞である。これら3例は抽象的な〔出現物のありか〕を作っている。

(115) 彼女に子どもができ、しかも彼女はぼくの子どもを産む意志をもっていることを表明したのです。(『天窓に雀のあしあと』)

(116) つまり、「思う」とは、一つのイメージが心の中にできあがって、それ一つが変わらずにあること。(『日本語練習帳』)

(117) タイム・イズ・マネーならぬスペース・イズ・マネーという現象が、この駐車場の問題に集中的に表われていると言えるであろう。(『空間と人間』)

上で見てきたように、〔出現物のありか〕を表わす連語では、二格の名詞に様々な性質のものがなりうる。この点においては、前述した3.1.1節の〔存在物のありか〕と状況が非常に似てはいる。しかし、〔存在物のありか〕に比べ、〔出現物のありか〕には出現性の意味が新たに加わっているため、〔存在物のありか〕に含めることができない。〔存在物のありか〕では、存在動詞は存在物の存在のあり方を示しており、二格の名詞と動詞との間の関係は静的である。それに対して、〔出現物のありか〕においては、その関係が動的である。なぜなら、出現動詞によって表わされる「出現」という出来事が起こってはじめて、出現物ができて、それと同時にある場所が出現場所としての性質を帯びるからである。

[2] 以上に挙げた典型的な出現動詞の他に、現象性の動詞「浮かぶ、浮かべる、浮き出る、映す/写す、映る/写る」も出現動詞のグループに入るであろう。それに、この種の動詞が現われた用例の数は、出現物のありかの用例のうち大きな割合を占めている。

(118) 行手の左手に当って、一ばん遠い山の上に一抹の白雲が浮かび、その雲の遙か上空に白い落下傘が一つ見えた。(『黒い雨』)

- (119) 雨に覆われた夜景ににじんでゆく大きなガラスに映る自分と目が合う。(『キッチン』)
- (120) 当人の頭の皮膚の色がそのまま合成樹脂の人工皮膚にうき出て、生えざわも本物そっくりに見えるという効果があるわけだ。(『ボクは好奇心のかたまり』)
- (121) やとわれママらしい狐みたいに痩せた女が、ほかに客のいないのをいいことに、石黒たちの前で、口をあけ、手鏡に奥歯をうつしては爪楊子でせせっている。(『男どき女どき』)

これらの例の他に、「目/心/頭/脳裏に浮かぶ」「目/心/視野に映る」のようなくみあわせもあり、出現性の意味を含んでいると考えられるが、慣用的な表現にも近づいていくであろう。

また、「明かりが点く」「灯り/火がともる」などのフレーズも、「部屋に明かりが点く」「お店に灯りがともる」のように、場所を表わす二格の名詞で広げられ、連語全体は「出現物のありか」を作っている。

出現性の意味をもっているとはいいにくいが、変化動詞「増える、増やす」と変化するものの存在場所を表わす二格の名詞とのくみあわせは、「出現物のありか」に近い性質を持っている。例えば、

- (122) アキちゃんの顔にもだんだん皺が増えていく。(『世界の中心で、愛をさけぶ』)
- (123) 数週間で交代する派遣型でなく、医師、保健師、精神保健福祉士、臨床心理士といった専門家を被災地に増やす。(朝・社)

[3] 以上は出現性の意味を持っている動詞について見てきたが、これらの動詞の他に、奥田(同:290)にも指摘があるように、「くっつけ動詞や移動動詞のあるものが、語彙的な意味のずれ＝抽象化の結果、出現動詞のグループにはいりこんできている」。例えば、「出る、出てくる、滲む」のような動詞。

- (124) 私の住む町の近くにかかなり大がかりな人工の町ができた。・・・、時には広場に青空市場が出たり、星空映画館ができたり、して、まあ若者向きじゃあるけれど、新しもの好きの私はこれが嬉しくてならない。(『天窓に雀のあしあと』)
- (125) その翌日の新聞にも出ていなかった。(『少年 H』(上巻))
- (126) 兄が見つけだしたさながら時代劇に出てくる浪人の住む裏長屋のよううらぶれた家へ。(『母の影』)
- (127) 全体から醸し出される雰囲気というものには、誰かのことを心から労る優しさや、悲しみが滲み出ており、細い二つの目から今にも涙が零れ出てきそう。(『幸福な結末』)

(124)～(126)の「出る」と「出てくる」は移動動詞であるが、語彙的な多義性により、これらの例において、「現われる」という意味を表わしている。(127)では、くっつけ動詞の「滲む」が「出る」とくみあわさり、「滲み出る」という複合動詞を作り、出現性の意味を帯びてくる。

(128) 警察官が急に表に出てきたので H たちは逃げた。(『少年 H』(上巻))

〔消失物のありか〕を表わす連語は、自動詞の場合は、「消える」「隠れる」など消失の意味を表わす動詞と二格の空間名詞と物や人、現象を表わすガ格の名詞とのくみあわせであり、ガ格の名詞で示されている物や人、現象が二格の名詞で示されている場所に消失することを表わす。他動詞の場合は、「隠す」など消失の意味を表わす動詞と二格の空間名詞と物や人、現象を表わすヲ格の名詞とのくみあわせであり、ヲ格の名詞で示されている物や人、現象を二格の名詞で示されている場所に消失させることを表わす。二格の名詞は消失する物あるいは現象の消失していく先を示す。「消失の構造」を示すと、以下の通りである。

・例：袂の下に手を隠す

この種の動詞に「去る、見え隠れする」などもある。二格の名詞は「自室」「路地」「花びらの中」のような空間性をもつ具体名詞がほとんどであるが、(133)の「言葉の背後」のような抽象的な場所を表わすものも現われうる。

- (129) 母は階段を登りきると、右手の自室に消え、もう現われなかった。(『母の影』)
- (130) 路地に隠れるようにしてある古い動物病院のその獣医は、こちらの方が歳を聞きたくなるような老人だった。(『落花流水』)
- (131) バスに揺られながら、空のかなたに去ってゆく小さい飛行船を目でなんとなくまだ追いかけてながら。(『キッチン』)
- (132) 薔薇のまわりには、蟻も蜂もよってくる。薔薇は、ほっそりした指の骨を思わせるそのきみどりの茎に蟻を這わせ、幾重にも重なった花びらの中にまるまると太った蜂を隠していたりするので、つい顔を埋めんばかりにして花のにおいをかいだときなど、私はしょっちゅうぎよとさせられた。(『泣かない子供』)
- (133) 話し手が表現を進める“話者の目”として言葉の背後に隠れてしまい、ただその視点を通して対象と対峙している、そのような立場に立つ言語だということである。(『日本人の発想、日本語の表現―「私」の立場がことばを決める―』)

3.2 移動のむすびつき

移動動詞が二格の名詞とくみあわさると、〔移動のむすびつき〕ができる。2.4.1.3 節で奥田(1962[1983])を再考した際に触れたように、宮島(1972)は、移動のどの段階に重点をおいて表現するかによって、移動動詞を4種類に分けている。本研究でも、「移動」を、目的地に向かって進んでいく、すなわち移動の開始及び継続の段階(「出発・経過」と、着点に到達する、すなわち移動の終了の段階(「到着」と)の2つの段階に大きく分けて分析していくことにする。この2つの段階に属する移動動詞はともに空間性をもつ二格の名詞をとることができるが、「出発・経過」の段階の動詞を広げる二格の名詞は「行く先」を示し、そして「到着」の段階の動詞を広げる二格の名詞は「着点」を示す。これに応じて、本研究では、〔移動のむすびつき〕を次の2つに分類する。

- a) 行く先のむすびつき
- b) 着点のむすびつき

以下、3.2.1 節と 3.2.2 節でこの2つのむすびつきの性質をそれぞれ詳しくみていくが、〔移動のむすびつき〕において、〔行く先のむすびつき〕と〔着点のむすびつき〕との2つのタイプを立てる根拠についてもう少し付け加える。

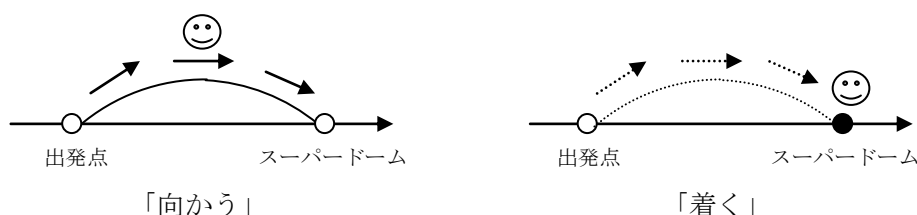
後ほど詳述するように、〔行く先のむすびつき〕を作る最も典型的な移動動詞は「向かう」

であり、〔着点のむすびつき〕を作る最も典型的な移動動詞は「着く」と考えられる。同じ移動動詞でも「向かう」と「着く」とで性質が異なる。まず、くみあわさる二格の名詞のカテゴリカルな意味が異なる。例えば、「方向」というカテゴリカルな意味を持っている「東」と「空間」というカテゴリカルな意味を持っている「公園」が「向かう」と「着く」とむすびつく場合を比べてみよう。「向かう」は「東に向かう」と「公園に向かう」の両方とも言えるのに対して、「着く」は「公園に着く」としか言えない。これは「向かう」は「空間か方向」を表わす二格の名詞とくみあわさることができるのに対して、「着く」は「空間」を表わす二格の名詞としかくみあわさることができないからである。次に、二つの動詞の「～ている」形が表わしている意味も異なる。「向かっている」は進行形であり、主体が出発点から到達点へ移動している最中を表わす。これに対して、「着いている」は結果状態を表わしており、主体がすでに到達点に到着している。

また、「向かう」は「移動」の「経過」の段階に重点があり、「着く」は「到着」の段階に重点があることはすでに宮島（1972）にも触れながら述べたが、下の例のように、この2つの動詞が2つの文に続けて使われている例文はその特徴を一層明らかに示している。

- (134) 私は、アメリカの東部から南部への風景の移りかわりを眺めながら、スーパー
ドームへ向かいたかった。つまり、そこに着くまでの道中を愉しみたかったのだ。（コーパス：『一瞬の夏』）

この2つの文において、「スーパードーム」は、「私」の移動動作にとって、目的地であると同時に最終的な到達点でもある。ただし文法的には、「スーパードーム」は、「向かう」動作にとっては、常に〔目的地＝行く先〕であって着点ではないのに対して、「着く」動作にとっては〔到達点＝着点〕なのである。このことは以下のような時間軸で示すことができる。



「向かう」の場合、移動主体は出発点と到達点（この例では「スーパードーム」）のどちらにもおらず、出発点から到達点への途中のどこかにいる。一方、「着く」の場合は、移動主体はすでに到達点にいる（しかし、「出発」や「移動」の過程がなければ「到着」も達成されえないため、上記の図では移動を点線で示した）。すなわち、「向かう」は継続的な移動過程を表わし、線的であるのに対して、「着く」は瞬間的な移動動作を表わし、点的であると言える。(134)の「そこに着くまでの道中」は、まさに「向かっている」途中の状態

を表わしているのである。

また、同じ「スーパードーム」でも、「向かう」とくみあわさったときと、「着く」とくみあわさったときと、異なるカテゴリカルな意味を実現している。「スーパードームへ（/に）向かう」における「スーパードーム」は「スーパードームが占有している空間」であってもいいし、単に「スーパードームがある方向」であってもいい。すなわち、「スーパードームに」はここでは「空間/方向」というカテゴリカルな意味を表わしている。これに対して、「スーパードームに着く」においては、必ず「スーパードームのどこか」を指しており、つまり「スーパードームが占有している空間」でなければならない。ここにおける「スーパードームに」は「空間」というカテゴリカルな意味を表わしている。

このように、同じく移動動詞と言っても、「向かう」と「着く」はそれぞれの語彙的な意味の違いによって、同じ二格の名詞とくみあわさった場合でも、性質の異なる連語を作っている。また、それぞれの連語において、二格の名詞のカテゴリカルな意味も異なっている。これらのことは、〔移動のむすびつき〕を〔行く先のむすびつき〕と〔着点のむすびつき〕の2つに分類する必要性を示唆している。なお、例（134）では、「向かう」はへ格の名詞をとっているが、3.2.1 節で述べるように、方向性が強い〔行く先のむすびつき〕において、ほとんどの場合、二格はへ格と入れかわることができる。

以下、〔行く先のむすびつき〕と〔着点のむすびつき〕を作る連語についてそれぞれ詳細に述べる。

3.2.1 行く先のむすびつき

〔行く先のむすびつき〕を表わす連語は、自動詞の場合は、方向性をもった移動動詞と空間か方向を表わす二格の名詞とのくみあわせであり、移動主体が二格の名詞で示されている空間か方向に向かって移動することを表わす。他動詞の場合は、方向性をもった移動動詞と空間か方向を表わす二格の名詞と物や人を表わすヲ格の名詞とのくみあわせであり、ヲ格の名詞で示されている物や人を二格の名詞で示されている空間か方向に向かって移動させることを表わす。二格の名詞は移動動作の着点ではなく行く先を示す。「行く先の構造」を以下のように示すことができる。

行く先の構造

【 <空間/方向>に(/へ) <移動>Vi 】

〔行く先〕

〔移動動作〕

・ 例：公園に行く、学校に向かう

【 <空間/方向>に(/へ) <物/人>を <移動>Vt 】

〔行く先〕

〔移動させる対象〕

〔移動動作〕

・ 例：アフリカに薬を送る、震災地に医者を派遣する

[1] 「行く先のむすびつき」を作る移動動詞は移動主体がある方向に向かって進んでいくという意味をもち、「向かう」をはじめ、次のようなものがある。なお、本研究では、「行く先のむすびつき」を作る動詞を「行く先動詞」と呼ぶ。

行く、送る、赴く、進む、迫る、旅立つ、近づく、近寄る、ついていく、出かける、
出ていく、出向く、向かう、寄る
急行する、出勤する、出征する、接近する、直行する、東進する、派遣する

(135) 「いや、いそがしくはないが、夕方から鎌倉に行く用事がある。」(『点と線』)

(136) 母の輝子は、八〇代になってから南極に旅立ってしまうような超行動派である。
(『いい言葉は、いい人生をつくる』)

(137) 計算のヘタな私は、カルキュレーターを出してきて慌てて何度も割算をした。
寄付の分もいれると四十三万三千三百球がアフリカに送れる計算であった。
(『永遠の前の一瞬』)

(138) 行き詰まりをうけ、英国は軍事顧問団を反体制派の拠点ベンガジに派遣する方針だ。(朝・社)

上に挙げた動詞の他に、「歩く」「走る」など様態を表わす移動動詞と「～だす」との複合動詞も行く先動詞に入る。例えば「歩き出す、送り出す、駆け出す、連れ出す、飛び出す、踏み出す、走り出す」などである。

(139) そんなとき、トットちゃんのうしろの机の男の子が立ち上がって、黒板のほうに歩き出した。(『窓ぎわのトットちゃん』)

(140) というのは、敏子を無理やり結婚させて、神戸に送り出したことが、ことの始まりだったのではないか、という負い目があったからだ。(『少年H』(上巻))

「進む、迫る、近づく、接近する」などは「向かう」と同様に、「移動」の「経過」の段階に重点があり、二格の空間名詞とのくみあわせにおいては、二格の名詞は常に目的地であって到達点ではない。

(141) フェリーは広島県の造船所で造られ、瀬戸内海を西へ進み、関門海峡を通過して日本海に出て、新潟に向かう。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)

(142) 車は予定通り空港に到着し、ぼくたちは搭乗手続きを終えてゲートに進んだ。
(『世界の中心で、愛をさけぶ』)

(143) 森のほうに近づくにつれ、森のなかから笛や太鼓の音が聞こえてきたのだ。
(『ブランコのむこうで』)

これらの例において、二格の名詞が到達点ではなく目的地しか表わさないことについて、宮島（1972:207）では、移動の経過の段階に重点があり、かつ方向性の強いものに属する動詞は、「～へ（に）」という目的地をあらわす目的語をとることが多い。（中略）。特徴は、これがつねに目的地であって到達点ではない、ということだ。」という指摘がなされている。例として「むかう」が挙げられており、例えば「アメリカへむかった（むかっている）」というのは、日本からアメリカへの途中のどこかにいることであって、すでにアメリカにいることではない。

一方、「出かける」「赴く」などは移動の全過程のうち、「出発」の段階に重点があり、動作の結果ここにいなくなる、すなわち「最初の場所における不在」という事実がこれらに共通している。しかし、出発した後の移動主体は到達点への途中にいるか、あるいはすでに到達点に着いているかは文脈によって異なる。例えば「出かける」は、(144)においては、「父が食事代にくれた紙幣をポケットに入れ、」という状況説明からわかるように、出発そのものを表わしている。これに対して、(145)では、後半の「聴衆から盛んな拍手を受けると、講師であるこちらと一緒に拍手をする」は移動先（着点）における動作を表わしており、「中国に出掛けた折」というのは、つまり「中国にいた折」のことである。

(144) 父が食事代にくれた紙幣をポケットに入れ、私はあの曲芸の場所にでかけた。
（『ボクは好奇心のかたまり』）

(145) かつて中国に講演旅行に出掛けた折、聴衆から盛んな拍手を受けると、講師であるこちらと一緒に拍手をする。（『日本人の発想、日本語の表現―「私」の立場がことばを決める―』）

また、単に「東京に出かけている/出かけた」と言う場合も、移動主体は東京への途中のどこかにいるかもしれないし、もう東京に着いているかもしれない。なお、「彼はついさっき東京に出かけた」のように、動作の時間を示す「ついさっき」が文中に表れると出発直後を表わす。

「赴く」も「出かける」と同様で、(146) は出発の段階にしか言及していないのに対して、(147) は到着の段階も含まれており、すなわち、移動主体の「野口」はもうすでに「船橋ジム」に着いたことを表わしている。(145) と同じように、後半の「百五十万を支払い、ジム間の移籍の手続きを済ませるという大役を立派に果していた」によって移動先（着点）における動作が表わされている。

(146) そして、それを追うように、近々のうちに防諜専門家が、二名長崎へ赴くという連絡ももたらされた。（コーパス：『戦艦武蔵』）

(147) 野口は三日前、エディと共に船橋ジムに赴き、百五十万を支払い、ジム間の移籍の手続きを済ませるという大役を立派に果していた。（コーパス：『一瞬の夏』）

[2] このように、〔行く先のむすびつき〕を表わす連語を作りうる動詞は、基本的に「向かう」や「出かける」のような方向性をもつ移動動詞であるが、これらの他に、奥田（1962[1983]:292）にも指摘があるように、「あるく、はしる、かける、はう、とぶ、いそぐ」のような移動の様態を表わす移動動詞（奥田では「状態性の移動動詞」とされる）も、二格の名詞とくみあわさって、行く先のむすびつきを作ることができるのであるが、その際、「ふつうは、あるいていく、はっていく、かけてくる、とんでくるのような手つづきで方向性の移動動詞にいちど移行して、この種のむすびつきをあらわす単語のくみあわせのなかにはいつてくる」のが特徴である。なお、そのうち、「～ていく」は行く先動詞で、「～てくる」は次節で取り上げる着点動詞²⁶である。

(148) そう判断して、線路づたいに東に向けて横川鉄橋の方に歩いて行った。（『黒い雨』）

(149) 「そうね」と、八重子が言ったのは、これから十五番ホームに駆けて行って、お時さんとその相手をのぞいてみたい気持ちが動いていたからである。（『点と線』）

(150) そういうと、トットちゃんは、待っているママのところに走っていった。（『窓ぎわのトットちゃん』）

これらの例が示しているように、移動の様態を表わす動詞が「～ていく」と結合して用いられた場合は、方向性をもつ移動動詞が単独で現われた場合より、その移動する過程での状態あるいは様子を具体的に指し示すことができる。

[3] すでに触れたように、〔行く先のむすびつき〕においては、二格の名詞は「鎌倉」「南極」などの空間名詞だけでなく、「東」、「～の方」のような方向を表わす名詞も現われうるのが特徴である。よって、行く先動詞とくみあわせる二格の名詞は＜空間/方向＞というカテゴリーカルな意味をもっていると考えられる。

(151) しかし軍は東に進んでいる。老ノ坂を東に越えれば京都盆地である。（コーパス：『国盗り物語・織田信長』）

(152) 植込をめぐって、玄関のほうに近づいて行くと、ちょうどその式台の上に居合わせた女中ふうの、すこし年をとったやつが、……。 （コーパス：『かよい小町』）

空間性をもたない具体名詞がこのくみあわせにおいて二格の位置に立つ場合は、(153) が示すように「～の近くに」を用いることによって空間化されなければならない。この他に、「～の側に」「～の中に」「～の横に」「～のところに」などもある。

²⁶ 本研究では、〔着点のむすびつき〕を作る動詞を「着点動詞」と呼ぶ。3.2.2 節参照。

- (153) たしかに、それと思われる特急の車両の近くに寄って、見送りの人たちの間から、窓を見た。(『点と線』)

なお、空間性をもたない二格の人名詞が直接移動動詞とくみあわさる場合もある。

- (154) 裸になったオトコ姉ちゃんに、H はそれとなく接近し、湯船からあがったとたん、手拭いを引ったくった。(『少年 H』(上巻))

この例における「オトコ姉ちゃん」は、早津(2008:45)の言う「意志や感情や判断力をそなえた存在としての「人間」というよりは、むしろ物や事に相当する非人格的な存在としての「ヒト」として」理解した方がいいであろう。ここでは臨時的に場所に相当するものとして用いられ、すなわち「オトコ姉ちゃんのいる方向」を指し示している。

3.2.2 着点のむすびつき

〔着点のむすびつき〕を表わす連語は、自動詞の場合は、方向性をもった移動動詞と二格の空間名詞とのくみあわせであり、移動主体が二格の名詞で示されている場所に到達することを表わす。他動詞の場合は、方向性をもった移動動詞と二格の空間名詞と物や人を表わすヲ格の名詞とのくみあわせであり、ヲ格の名詞で示されている物や人を二格の名詞で示されている場所に到達させることを表わす。二格の名詞は移動動作の着点を示す。「着点の構造」を以下のように示すことができる。

着点の構造

- 【 <空間>に <移動>Vi 】
 [着点] [移動動作]
- ・例：学校に着く、教室に入る
- 【 <空間>に <物/人>を <移動>Vt 】
 [着点] [到着させる対象] [移動動作]
- ・例：座敷に客をあげる、新しい家に荷物を運ぶ

[1] 〔着点のむすびつき〕の連語を作る移動動詞は移動主体が到達点に到着するという意味をもち、「着く」などとともに到着の意味を表わせる動詞のグループの他に、「転がりこむ」のような様態を表わす移動動詞と「こむ」とからなる複合動詞と、「駆け寄る」のような「よる」を含む複合動詞のグループもある。本研究では、これらの動詞を合わせて「着点動詞」と呼ぶ。

a) 到着の意味を表わせる動詞

上がる、集まる、移る、追いつく、押し寄せる、落ちる、降りる、帰る、駆け上がる、駆け立てる、来る、下がる、たどり着く、着く、集う、出てくる、出る、取って返す、飛び上がる、逃げる、登る、這い上がる、入る、走り出る、走り逃げる、引き返す、引越す、引込む、踏み入れる、舞い戻る、戻る、やってくる、よじ登る、分け入る

移民する、帰国する、上陸する、出張する、侵入する、着陸する、出入りする、転落する、到達する、到着する、落下する

上げる、落とす、下ろす、連れ去る、届ける、運ぶ、見送る、見舞う、持ち帰る、導く、戻す、呼び出す、呼び戻す/案内する、疎開する、退散する、輸入する

b) 「こむ」を含む複合動詞

転がりこむ、すべりこむ、飛びこむ、なだれこむ、逃げこむ、入りこむ、走りこむ

押し込む、投げ込む、運び込む、放り込む、踏み込む、持ち込む

c) 「よる」を含む複合動詞

駆け寄る、立ち寄る、にじり寄る

〔着点のむすびつき〕を表わす連語では、移動主体が二格の名詞で示される場所＝着点に到達するが、移動の「出発」や「移動」の過程がなければ「到着」も達成されえない。従って、多くの場合、〔着点のむすびつき〕を表わす連語は、移動主体が出発から到着まで移動していく全過程を暗に含みつつも、そのうちから、到着の段階だけに強く注目して、表現していると言えるのである。

以下にまず a のグループの動詞が作る連語の例を挙げる。

(155) 学校に着いて、電車の教室に入ると、トットちゃんは、先に来ていた、山内泰二君に、すぐ聞いた。(『窓ぎわのトットちゃん』)

(156) 眠くて。と雄一に告げて、私は田辺家に戻ってすぐ寢床に入ってしまった。(『キッチン』)

(157) 午後になると私の仕事部屋に来て、何時に居間に降りればいいのか教えてくれた。(『泣かない子供』)

(158) カメラマン役の家内を引っ立てて甲板に上り、例のポーズを決めている。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)

(159) 僕は庭に出て、こちらを見上げるジョンの首輪に鎖をつないだ。(『落花流水』)

(160) 能島さんの奥さんは念のためだと云って、私たちに荷物引換の証文を書いてくれ、私たちを母屋の座敷にあげて茶菓子の代りに味噌を添えた胡瓜を出して下すった。(『黒い雨』)

(161) その癖、あたしたちの新しい家に荷物を運んだりするときは、ムキになって完璧に手伝うの。(『男どき女どき』)

(162) 一方の親が 16 歳未満の子を無断で国外に連れ去った場合、元の居住国にいったん戻し、その地の手続きに従って子の面倒を見る者を決めようというのが条約の骨子だ。(朝・社)

b と c のグループの「こむ」を含む複合動詞と「よる」を含む複合動詞の連語は例えば以下のようなものがある。

(163) その夜は自分のアパートマンに戻りたくなくて、エステールに誘われたまま、彼女の部屋に転がり込んだ。(『幸福な結末』)

(164) 家から褌をしめただけの裸で飛び出し、街の中を走ってそのまま海に飛びこんでいた。(『少年 H』(上巻))

(165) フン先生は、羽をもいだ蠅を筆箱にほうりこんでつぶやいた。「蠅にも座頭市がいるとみえる」(『ブンとフン』)

(166) そうして築山から出て行くと、門のところに駈け寄って広島市街の方を見た。(『黒い雨』)

「歩く」「飛ぶ」「走る」など移動の様態を表わす動詞は、3.2.1 節で述べたように「～ていく」の形で二格の名詞とくみあわさって〔行く先のむすびつき〕の連語を作るのと同様に、「～てくる」の形で二格の空間名詞とくみあわさると〔着点のむすびつき〕を作ることができる。

(167) 二年前の九月頃、夜なかに妙に光るものが介良町の田畠の上に飛んできた。(『ボクは好奇心のかたまり』)

(168) やはりマリだった。僕とジョンをみとめるとぱっと立ち上がった。痩せた、と僕が思った瞬間、マリはこちらに走って来た。(『落花流水』)

[2] 上の例に見られるように、〔着点のむすびつき〕においても、二格の名詞は「学校」「甲板」などのような空間性をもつ具体名詞や、コソアド系指示詞などであるのが普通であるが、〔行く先のむすびつき〕に比べ、ある具体的な場所というニュアンスが強く、〔着点のむすびつき〕を表わす連語には、「東」「～の方」などのような方向を表わす二格の名詞は現われにくい。従って、着点動詞とくみあわせる二格の名詞は<空間>というカテゴリー的な意味のみをもっていると考えられる。

空間性をもたない具体名詞が二格に立つ場合は、(169) のように空間化の手続きを取るのが普通であるが、(170) のように人名詞が直接現われる場合もある。

(169) 次の瞬間、トットちゃんは、ママの腕の中に、とびこんで来て、いった。「ねえ、
今度の学校に、いいチンドン屋さん、来るかな？」(『窓ぎわのトットちゃん』)

(170) ここでも避難して行く人は疎らになっていたが、たいていがひどい怪我をしたり
大火傷をしたりしている人たちで、ひとりぼっちとぼとぼ歩く小学一年生ぐ
らいの子供もいた。僕はその子に追いついて声をかけた。(『黒い雨』)

「その子」は人を表わす具体名詞であるが、(170)においては、「追いつく」という移動動作の目標を表わし、すなわち、「その子がいる地点」が「追いつく」動作の着点である。

なお、「寝床」「お風呂」など二三の具体名詞は、空間的な場所を示しているにもかかわらず、移動動詞「入る」とのくみあわせ(「寝床/ベッド/お風呂/お湯に入る」)において、単にある場所に到着するという意味だけでなく、例えば「寝床/ベッドに入る」「お風呂/お湯に入る」はそれぞれ「就寝すること」「入浴すること」を意味しているように、フレジオリジカルなくみあわせになっている。

また、「入る」は身体部位を表わす名詞「耳」「目」「手」などとくみあわせり、「耳/目/手に入る」のようなフレジオリジカルなくみあわせを作る場合もある。その他に、「入る」は「力」「身」などのガ格名詞とまずくみあわせり、その全体が二格名詞によって広げられ、下のような連語を作ることができる。ただし、これらの連語は〔着点のむすびつき〕から離れ、(171)は〔内在のむすびつき〕に、(172)は〔態度的な動作のむすびつき〕²⁷にそれぞれ移行している。

(171) H は早く家に帰りたかった。というのは、崖を登るとき腹に力がはいったから
か、ウンチを漏らしてしまっていた。(『少年H』(上巻))

(172) 「なんか緊張感がないよな」ぼくは言った。「夏休みだというのに、ちっとも勉強に身が入らない」(『世界の中心で、愛をさけぶ』)

〔行く先のむすびつき〕を表わす連語にはなかったが、〔着点のむすびつき〕を表わす連語においては、抽象名詞も直接二格に現われることができる。奥田(同)にも指摘があるように、「方向性をもった移動動詞と抽象名詞(あるいは空間性をもたない具体名詞)とのくみあわせは、おおくのばあいでは、フレジオリジカルなくみあわせになっていて、かざられ動詞の語彙的な意味のずれ＝抽象化をともしないながら、ゆくさきのむすびつきとはことなる性格のむすびつきをあらわしている。」(奥田(同:293))という場合もある。着点動詞のうち、特に「落ちる」「入る」「戻る」の3つの動詞が抽象名詞とくみあわせりやすいようである。例えば、

(173) a、人間はいかにもがいても悪の深淵に落ちていく。(『ボクは好奇心のかたま

²⁷ 3.6.1.2 節参照。

り』)

b、そう考えると、自分が光源氏の手に落ちた若紫のように思えた。(『世界の中心で、愛をさけぶ』)

(174) a、君と別れて妻の元に帰ろうと考えていた。(『幸福な結末』)

b、そこで、「思う」と「考える」の違いに帰りましょう。(『日本語練習帳』)

(175) a、了解なしに他の縄張りに入ることは許されない。(『日本人の発想、日本語の表現―「私」の立場がことばを決める―』)

b、その問題に入る前に、もう少し用例を掲げて、検証しておこう。(『日本人の発想、日本語の表現―「私」の立場がことばを決める―』)

以上の3組の例では、すべて抽象名詞が二格の位置に現われているが、各ペアのaにおいて、「落ちる」「戻る」「入る」は移動動詞としての語彙的な意味がまだ完全には失われておらず、二格の名詞は抽象化された移動動作の抽象的な着点とも考えられる。これらに対して、bでは移動のニュアンスはまったく感じられず、それぞれの動詞は語彙的に移動の意味が薄れている。いずれにしても、これらのくみあわせは形式的に限られており、フレジオロジカルなくみあわせに近づいていく。

「仲裁」「活動」のような動作名詞²⁸が「入る」「戻る」などにくみあわせり、「仲裁/活動/作業/休憩/自習に入る」「話のつづきに戻る」といったフレーズを作る場合がある。また、移動動詞は「自己嫌悪」「うつ状態」「眠り」「佳境」などのような状態性の抽象名詞とくみあわさって、「自己嫌悪/人間不信/錯覚/危機に陥る」「うつ状態/深みに落ち込む」「眠り/恋に落ちる」「話を聞く態勢/マイナスモード/佳境/絶好調に入る」のようなフレジオロジカルなくみあわせを作る場合もある。これらの場合においては、移動動詞「陥る」「落ち込む」「落ちる」「入る」「戻る」などは完全に語彙的な意味を失ってしまい、まさしく村木の言う「機能動詞」(「実質的な意味を名詞にあずけて、みずからはもっぱら文法的な機能をはたす動詞」(村木(1991:203))として働いているに過ぎないのであろう。後者の場合については、奥田も取り上げ、「しかし、このばあいも、動詞の語彙的な意味はうしないにかけていて、この種の単語のくみあわせは陳述的であるといわなければならない。(奥田(1962:294))」と述べている。

二格の名詞の抽象化がさらに進み、「天国」や「地獄」のような実在しない場所を表わす名詞が二格の位置に現われた場合、例えば「天国/地獄に行く」という連語全体は「この世を去る/亡くなる」ことを表わしており、慣用的な表現に近づく。

[3] ここまでは、もっぱら二格の名詞が移動動詞とくみあわせり、[着点のむすびつき]を表わす連語を作る場合を見てきたが、移動の意味をもっていない動詞が現われた場合で

²⁸ 村木(1991:214)によると、「動作名詞とは、なんらかの動的な運動がなづけられている名詞である」という。

も、二格の名詞がその動作及び現象の着点を表わし、二格の名詞と動詞との間に「着点のむすびつき」ができあがることがある。移動動詞の場合と同様に、二格の名詞は空間性をもった具体名詞である。このような動詞を以下にまとめる。

こぼれる、差し込む、射す、そろう、倒れる、散る、通じる、飛び乗る、乗り込む、乗る、はねる、ひっくり返る、響き渡る、響く、またがる、回る

集める、加える、こぼす、さし出す、しまう、捨てる、そそぐ、倒す、出す、垂らす、散らす、閉じ込める、流しこむ、流す、投げつける、投げる、脱ぎ捨てる、乗せる、広げる、振り込む、放り出す、招き入れる

移植する、拡大する、招待する、投下する、入力する、放出する

(176) 彼は表へ出ると、市内電車に乗った。ぼんやり向かい側の車窓から見える動く景色を見ていた。(『点と線』)

(177) この家に全員がそろうことはほとんどなかった。(『キッチン』)

(178) 以前ママが、菓子のかげらを床にこぼしても拾おうとしないマリに注意したことがあった。(『落花流水』)

(179) 子供が釣った鮎を汚れたドブ川に捨てようとしているところを、通りかかったツユ子が貰うけたのだ。(『男どき女どき』)

(180) そのとき空を覆っていた厚い雲が裂けて、境内に明るい光が射した。(『世界の中心で、愛をさけぶ』)

(181) 真夜中、しんとした台所に声がよく響いて楽しかった。(『キッチン』)

(176) と (177) において、「電車」と「この家」はそれぞれ「乗る」「そろう」といった人間の動作の行き着くところ＝着点を示していて、同様に (178) と (179) において、「床」と「ドブ川」はそれぞれ「こぼす」「捨てる」といった人間の動作の結果「菓子のかげら」と「釣った鮎」の行き着くところ＝着点を示している。また、(180) と (181) における二格の名詞の「境内」と「台所」はそれぞれ「光が射す」「声が響く」といった現象の届く先＝着点を表わしている。

一方、下の例が示すように空間性をもたない具体名詞や抽象名詞も二格に現われうる。ただし、そうした場合は、動詞とのくみあわせ全体において、(176) ～ (181) で見たのとは異なり、抽象的な場所へ行き着くという事態が表現される。このような動詞は以下の動詞が挙げられるが、自動詞がほとんどである。

至る、及ぶ、加わる、遡る、絞る、尽きる、届く、とどまる、取り込む、流れる、根付く、のぼる、跳ね上がる、広がる、踏み切る、行き着く、わたる

回帰する、帰する、帰着する、収斂する、達する、定着する、投じる、波及する

- (182) これについてのアトム論の説明はそれ以降カントやラプラスを経て現代の宇宙学者にまで及ぶ宇宙生成論の嚆矢をなすものと言えるであろう。(『空間と人間』)
- (183) それが時代とともに次第にその背景となる人間社会、果ては「世間」を超えて、自然界も含めた“あたり一帯”にまで限りなく意味は広がっていくのである。(『日本人の発想、日本語の表現―「私」の立場がことばを決める―』)
- (184) 右手は、おそらく幕藩時代にまで遡ると思われる古い墓だった。(『世界の中心で、愛をさけぶ』)
- (185) 亡くなった相撲通の作家宮本徳蔵さんが、強さとは、一口で言うなら「無心」に帰着すると書いていた。(朝・天)

(182) ～ (184) には「～にまで」のような複合格助詞が見られ、二格の名詞で示されている内容が動作や現象の行き着くところであることを一層明示的に表現しているであろう。

なお、「達する」「のぼる」「はねあがる」などの動詞は、下の例が示しているように、(182) ～ (185) とはやや性質が違う。

- (186) 文章は一つ一つの単語で成り立っています。文章はほぐしていくと、結局は単語に達します。(『日本語練習帳』)
- (187) すでに失業手当を受けることが決まった人だけで4万人強、手続きを始めた人は7万人近くにのぼる。(朝・社)
- (188) 昔は八万円ぐらいだったものが今ではやはり二倍にはね上がり、十五万円から十六万円。(『ボクは好奇心のかたまり』)

この3例において、ニュアンスの差はあるものの、「単語に達する」「7万人近くにのぼる」「二倍にはね上がる」はそれぞれ「単語になる」「7万人近くになる」「二倍になる」と同じ意味であり、4.1 節の〔結果規定のむすびつき〕に近づいている。しかし、後述するように、〔結果規定のむすびつき〕を作るのは主に「なる」をはじめとする変化動詞であることから、本研究はこれらを〔着点のむすびつき〕の特殊なものとして位置付ける。また、「達する」は下の例も観察された。

- (189) やむなく歩くこと約二時間、脚が棒のようになるころになって初めて公共浴場に指定された湖岸に達することができた。(『空間と人間』)

(189) において、「達する」は空間名詞「湖岸」とくみあわさり、「湖岸に着く/到達する」と同様に、典型的な〔着点のむすびつき〕を作っている。このような例の存在は、(186)

～(188)のような連語を〔着点のむすびつき〕に分類し、また〔着点のむすびつき〕と〔結果規定のむすびつき〕はつながっていることを物語っている。

3.3 くっつきのむすびつき

〔くっつきのむすびつき〕を表わす連語は、自動詞の場合は、「くっつく」「当たる」などのくっつけ動詞と二格の物名詞とのくみあわせであり、主体が二格の名詞で示されている物にくっつくことを表わす。他動詞の場合は、「くっつける」「かける」などのくっつけ動詞と二格の物名詞とヲ格の物名詞とのくみあわせであり、ヲ格の名詞で示されている物(＝第一の対象)を二格の名詞で示されている物(＝第二の対象)にくっつけることを表わす。二格の名詞は物のくっつく先を示す。「くっつきの構造」は以下の通りである。

くっつきの構造

【 <物>に <くっつけ>Vi 】

〔くっつく先〕 〔くっつく動作〕

・例：手すりに当たる、壁にぶつかる

【 <物>に <物>を <くっつけ>Vt 】

〔くっつく先〕 〔くっつける対象〕 〔くっつける動作〕

・例：手帳にメモを貼る、トーストにバターを塗る

[1] くっつけ動詞には、下のようなものがある。なお、奥田(同:295)は、くっつけ動詞が自動詞の場合について、「自動詞とのくみあわせでは、に格の名詞は、動作がその表面に、内部にくいこんでいく物＝対象をしめしている。」と述べている。

当たる、埋もれる、埋まる、覆いかぶさる、かかる、重なる、重なりあう、被さる、絡まる、絡む、くっつく、転がる、刺さる、触る、しがみつく、沈む、染みる、溜まる、ついていく、ついてくる、つかまる、浸かる、突き当る、付きそう、つきまとう、つく、包まる、つまづく、融ける、止まる、滲む、残る、載る、這う、はねる、浸る、引っかかる、伏せる、ぶつかる、ぶら下がる、触れる、紛れる、混じる、まみれる、もぐる、もたれる、寄りかかる、寄り添う

嘔吐する、激突する、接触する、接吻する、浸透する、埋没する

あける、あてがう、あてる、あぶる、入れる、植える、移し植える、埋める、置く、押す、抱え上げる、かけ合う、かける、かざす、重ねる、飾る、担ぐ、被せる、刻む、くくる、くっつける、くわえる、下げる、刺す、さらす、しかける、敷く、沈める、しばる、しまう、据える、背負う、添える、注ぐ、染める、立てる、垂らす、つかむ、つぐ、つける、突っ込む、繋ぐ、繋げる、積み上げる、閉じ込める、止める、取る、

並べる、塗る、残す、載せる、のっける、吐き出す、はさむ、貼る、浸す、引っかけ
る、広げる、ぶちあける、ぶちまける、ぶっかける、ぶつける、撒く、まとう、持つ、
盛る

挿入する、埋蔵する

- (190) きゃっとお姉さんが声を上げる。けれどその石は鉄の階段の手すりに当たり、
鈍い音を立てて見当違いの方向へ飛んで行った。(『落花流水』)
- (191) それでも僕は、押される度に人波に浚われまいと懸命に柱にしがみついていた。
(『黒い雨』)
- (192) 暮れる空がはるかビルの向こうへ消えてゆくのを、吊り革につかまった手にも
たれかかるようにして見つめていた。(『キッチン』)
- (193) 私は毛布にくるまって、今夜も台所のそばで眠ることがおかしくて笑った。
(『キッチン』)
- (194) 「——あ、あそこだわ」と、美子は、沢山の荷物に埋れそうになってしゃがみ
込んでいる美保を見付けて言った。(『百年目の同窓会』)
- (195) この家の中で、いちばん、きちんと時間を守るシェパードのロッキーは、トッ
トちゃんの、いつもと違う行動に、げんそうな目をむけながら、それでも、大
きくのびをすると、トットちゃんにびったりとくっついて、(なにか始まるらし
い) ことを期待した。(『窓ぎわのトットちゃん』)
- (196) 或る人間がかたのごとく死んだ、そしてその顔に白布をあてがい弔客があるた
びに、白布の被いを取って告別のために見せていた。(『女ひと』)
- (197) この人たちは民家を倒壊させるのが任務であった。家の柱という柱に鋸を入れ、
八割がた引切って棟木に太綱をつけ、二十人三十人の者が引張って倒すのであ
る。(『黒い雨』)
- (198) いつのまにか自分でも気がつかないうちに、トーストにバターをぬり、それを
お皿の上におき、またとりあげてバターをぬった。(『ブランコのむこうで』)
- (199) 「いいんだよ」ぼくは半分ほど空になった祖父のグラスにビールを注ぎながら、
「ぼくがいなくても、おじいちゃん一人で充分だったんじゃない」と謙遜して見
せた。(『世界の中心で、愛をさけぶ』)
- (200) 更に——、私のこの芝居を本にして出版する新潮社の社長さんがモーターに指を
つつこんで怪我をした。(『ボクは好奇心のかたまり』)

ニ格の名詞の性質について、奥田は「具体名詞」としており、更に「ゆくさきのむすび
つきや存在のむすびつきとはちがって、このむすびつきには空間的なニュアンスがかけ
ている。したがって、かざり名詞の語彙的な意味にも空間的なニュアンスがかけ
ている。(奥田(同:295))」と指摘している。実際に、上の(190)～(200)においても、ニ格名詞

の「手すり」「柱」「吊り革」「毛布」「荷物」「トットちゃん」「顔」「棟木」「トースト」「グラス」「モーター」はいずれも空間性を感じさせにくい具体名詞である。しかし、以下に挙げる(201)～(204)は少し状況が異なるであろう。

- (201) 道に迷ったり、あるいは列車やバスで知らない駅や停留所に止まったときに、よく「ここはどこですか」と人に聞く。(『日本人の発想、日本語の表現―「私」の立場がことばを決める―』)
- (202) そこで A さんは玄関先に鏡を置き、毎朝、出かけるときに表情チェックをするようにした。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)
- (203) 主人はフン先生のまえに、タマゴと塩をならべた。(『ブンとフン』)
- (204) フン先生は図書館備付の新聞を机の上にひろげ、一ページずつ、すみからすみまで、ていねいに目を通した。(『ブンとフン』)

(201) と (202) における「駅や停留所」と「玄関先」は動作あるいは物がくっついてある先＝物であると言うよりも、動作あるいは物がくっついてある先＝場所と考えた方が無難であろう。さらに (203) と (204) では、「フン先生の前」「机の上」のように空間化されており、一層場所性が現われている。実際に、3.1.1 節ですでに触れたように、これらの動詞が「～ている」形、「～である」形または受身形の「～られている」形（「～(ら)れている」の形）をとると、例えば (201') ～ (204') が示すように、連語全体は〔存在物のありか〕に移行する。

- (201') 列車やバスが駅や停留所に止まっている
- (202') 玄関先に鏡が置いてある / 玄関先に鏡が置かれている
- (203') フン先生のまえにタマゴと塩がならべてある / フン先生のまえにタマゴと塩がならべられている
- (204') 机の上に新聞がひろげてある / 机の上に新聞がひろげられている

〔くっつきのみすびつき〕を作る連語が、空間性をもっているか否かは、ここでは重要ではない。動詞が表わす動作がくっついていく先は具体物でもいいし、ある具体的な場所でもいい。問題は動作がその物か場所と直接的・物理的な接触があるかどうかということである。いずれにせよ、直接的・物理的な接触が基準である以上、二格の名詞は具体名詞でなければならない。

しかし、実際に、(205) と (206) のように、音や声を表わす抽象名詞も二格の位置につくことができる。

- (205) タンバリンの音は、いつも太鼓の音に混じってだんだん近づいてきた。(『少年

H』(上巻))

- (206) カップを洗っていると、水音にまぎれて雄一が口ずさむ歌が聴こえた。(『キッチン』)

この2例とも、2種類の音が混ざり合って、一緒になっている状態を表わしており、このグループに入れていいであろう。

また、くっつけ動詞が抽象名詞とくみあわせる例に以下のようなものもある。

- (207) 岩波文庫版の解説は斎藤茂吉で、このほうは、「山椒大夫」については「奴隷解放といふ社会問題をも取扱い、従うて経済問題にも接触する」と言い、「高瀬舟」については「罪の行為」の問題、「富に対する観念」の問題、「ユウタナジイ(安楽死)の問題」を指摘するなど、現代とのかかわりに触れた文言(もんごん)が随所にちりばめられている。(『読書のたのしみ』)
- (208) ……、そしてそれをそのまま頭の中にしまつて眼をとじるということは、生涯のはてに打つかる詩のようなものであつて、却つて死ぬ人間にとってぬくぬくとしたものであるかも知れぬ。(『女ひと』)
- (209) 自分の個性に、できるだけよい側面からスポットライトを当ててみるのだ。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)
- (210) 以上の考えを頭において、日本語の姿や性格に分析のメスを入れ、日本人の思考様式や日本文化の有り様との関わりを探ってみたのが本書である。(『日本人の発想、日本語の表現―「私」の立場がことばを決める―』)

これらの例はいずれもくっつく動作が考えられず、連語全体は比喻＝抽象化している。しかし、具体的ではないが、二格の名詞と動詞との間に、ある種の抽象的なくっつきの関係がまだ残っていると思われるため、本研究ではこれらを〔くっつきのむすびつき〕の特殊なものとして扱う。

くっつけ動詞のうち、「書く」をはじめとする「文字、記号、絵画や図形などの記録」の意味を表わすいくつかの動詞がある。「書く」の他に、「描く、書き入れる、書きこむ、書きしるす、書きつける、書きとめる、書きのこす、(日記を)つける/記録する、掲載する、清書する、着色する」などもあり、他動詞がほとんどである。二格の名詞は「紙」「手帳」「ノート」「本」「雑誌」「辞書」などである。

- (211) 今になって思うと、そのおっさんに悪気はなく、番号を紙に書いて電話機に貼っておいてもどうということはないのだから、そう怒らなくてもいいのだ。(『天窓に雀のあしあと』)
- (212) 私は、予定は手帳に鉛筆で書き込み、スケジュールを消化するとそれをペンで

書き換え、一日の最後に鉛筆書きの部分を消す。（『いい言葉は、いい人生をつくる』）

- (213) 今までペンで清書した部分は、シゲ子に毛筆で清書しなおさせることにして、その続きを半紙に毛筆で清書することにした。（『黒い雨』）

また、「直接的・物理的な接触」からやや離れるが、位置関係を表わす動詞「面する」「隣接する」などと二格の空間名詞とのくみあわせも、このグループに入れるべきであろう。その他に、「差しかかる、沿う、続く、つながる、交わる/接する、通じる」などもあり、自動詞がほとんどである。

- (214) そのレストランは、元町にある大丸百貨店の斜め前の、電車通りに面していた。（『少年 H』（上巻））

- (215) 本館に隣接した二階建ての白い洋館は、ほとんど鹿鳴館か大正デモクラシーかという代物だ。（『世界の中心で、愛をさけぶ』）

- (216) 強い西陽が街道にそつた一軒の農家にさしていて、その家の前で一人の若い女が幼い子供をだきながら、ぼんやり立っていた。（『ボクは好奇心のかたまり』）

(214) ～ (216) が示しているように、このグループに入る他の動詞と異なり、「面する」「隣接する」「そう」は存在状態を表わしているため、動詞は「～ている」形、或いは連体節として名詞を修飾する形になっているのがほとんどである。この点において、〔存在物のありか〕にも近いと言えるであろう。

[2] 以上は主に単純動詞の例を用いて説明を加えたが、実際には、くっつけ動詞には「かじりつく」「抱きつく」、「飛びかかる」「もたれかかる」、「食い込む」「編み込む」のような、「一つく」「一かかる」「一こむ」などがついたものが数多く存在している。このことは、〔くっつきのむすびつき〕の一つの大きな特徴と言えるであろう。これについて、奥田（同:296）では、「具体的な作用動詞のあるものは、「つく」「つける」「こむ」「いる」のような接尾辞をともなって、くっつけ動詞のグループに移行している。」という指摘がなされている。

今回集めた用例の中には、「一つく」「一つける」「一かかる」「一かける」「一こむ」「一おちる」「一あてる」「一よせる」などが観察された。それぞれの動詞には以下のようなものがある。

一つく：かじりつく、かぶりつく、絡みつく、こびりつく、すがりつく、抱きつく、
貼りつく、まといつく、むしゃぶりつく、焼きつく

一つける：植えつける、打ちつける、押さえつける、押しつける、凍りつける、すり

つける、たたきつける、つきつける、取り付ける、貼りつける、まきつける

－かかる：差しかかる、飛びかかる、殴りかかる、のしかかる、もたれかかる、寄りかかる

－かける：投げかける、ふりかける、もたせかける

－こむ：編み込む、押し込む、刻みこむ、食いこむ、組み込む、転がり込む、差し込む、染みこむ、注ぎこむ、つぎ込む、つけ込む、はめ込む、紛れ込む、めりこむ、もぐりこむ

－おちる：かかりおちる、崩れおちる

－あてる：押し当てる、探り当てる

－よせる：すりよせる

連語の例は例えば以下のようなものがある。

(217) ドアにすがりつくような姿勢でしゃがみ、ぼくはしばらく目をつぶって、じっとしていた。（『ブランコのむこうで』）

(218) かよ子が溜息をつきながら、煙草を灰皿にすりつけたところで、卷子はもうひとつつけ加えた。（『男どき女どき』）

(219) 物干し台から屋根に登った黒服の三人が、前と後ろから兄チャンに飛びかかって押さえつけた。（『少年 H』（上巻））

(220) 彼が小瓶に入った赤い野菜のようなものを指さしたので、わたしは微笑み返し、彼を真似てそれを肉の上にふりかけた。（『幸福な結末』）

(221) エステールは毛布の中にもぐり込んできて、わたしの腕に抱きついた。（『幸福な結末』）

(222) 母親の敏子が、自分の息子のセーターに文字を編み込むことを思いついたのは、アメリカから送られてきた横文字の宛名書きと、手紙の中に入っていた写真を見たからだ。（『少年 H』（上巻））

[3] くっつけ動詞から、「座る、立つ、寝る、倒れる」のような人間の姿勢を表わす動詞のグループを見出すことができる。このような動詞は、人間の姿勢が変化した後、くっついた先を表わす具体名詞と二格の形でくみあわせると、〔くっつきのむすびつき〕を表わす連語を作ることができる。

(223) 彼は部屋の隅のソファに座り、真剣な表情で考えを語りはじめた。（『幸福な結末』）

(224) 僕も椅子に腰を下ろして、頬杖を着いてマリを眺めた。（『落花流水』）

- (225) 生徒は本堂には入りきらないので、境内に立ったままで告別式に臨んだ。(『世界の中心で、愛をさけぶ』)
- (226) 離れの座敷に寝ていた盛夫の弟の四郎が、死亡したのである。(『少年 H』(上巻))
- (227) 翌日、洗濯物を干し終わり畳に寝転がって本を読んでいたら、庭先からちりちりと鈴の音が聞こえてきた。顔を上げると、マリが庭に立っていた。(『落花流水』)
- (228) 足先から駆け昇るように吐気が込み上げて、呻きながらベッドに倒れた。(『ボクは好奇心のかたまり』)

(223) ～ (228) に見られたように、二格の名詞は「ソファ」「椅子」「座敷」「畳」「ベッド」など人間の姿勢変化にかかわる場所としての具体物、あるいは「境内」のような具体的な場所を表わす名詞からなる。

なお、この種のくっつけ動詞として、以下のようなものが挙げられる。

- 「座る」類：あぐらをかく、居座る、かがみこむ、かける、腰かける、腰を下ろす、腰をかける、腰を据える、しゃがみこむ、しゃがむ、座り込む、座る、跪く
正座する、端座する、
- 「立つ」類：佇む、立ち止まる、立つ、突っ立つ
- 「寝る」類：うつ伏す、うつぶせになる、突っ伏す、倒れ伏す、寝かす、寝ころがる、寝ころぶ、寝そべる、寝る、伏す、横たわる、横になる
- 「倒れる」類：倒れかかる、倒れこむ、倒れる、ひっくり返る、ぶっ倒れる

これらが示しているように、このグループに入る動詞は数が多く、かつ動作の主体は人間に限られているという点では、このグループの他のくっつけ動詞とは異質である。最終的に別類とすべきか否かについては、今後用例を増やすなどしてさらに検討していきたい。

[4] また、奥田(同:297)にも指摘があるように、「住む、泊まる」などのような動詞は、「くっつけ動詞の特殊なグループとして」扱っていいであろう。「住む、泊まる」の他に、「生きる、暮らす、巣くう、過ごす、住みつく、眠る、引っ込む/一泊する、寄宿する、居住する、宿泊する、滞在する、駐屯する、駐留する、同居する、逗留する、間借りする」などもあり、自動詞がほとんどである。例えば、

- (229) まだ本家の家族は、広大な屋敷に住んでいたが、いずれ山や畑と同じように抵当物件として人手に渡るはずであった。(『少年 H』(上巻))

- (230) 子供の頃からお寺の匂いが好きだったので、お寺に泊まれるなんて素敵だ、と思った。（『泣かない子供』）
- (231) 六畳間に台所がついただけのこの小さなアパートに、母と二人で私はもう十年暮らしていた。（『落花流水』）
- (232) ミセス・ステープルスがアメリカ人なのに、日本語がうまかったのは、昭和三年から六年間日本に滞在し、基督教の布教に励んでいた人だったからだ。（『少年 H』（上巻））
- (233) ホテルに一泊して、翌日の午前中の便で出発することになっていた。（『世界の中心で、愛をさけぶ』）
- (234) 当時私は京王線の千歳鳥山に間借りしていたが、アルバイト先は西部池袋線の大泉学園。（『読書のたのしみ』）

これらの例において、二格の名詞は「屋敷」「お寺」「アフガニスタン」などのような空間性を帯びた具体名詞であって、動詞は連体節として名詞を修飾するか、「～ている」形を取るのが普通であろう。このように、この種の単語のくみあわせ全体は〔存在物のありか〕に近づいており、〔存在物のありか〕に入れてもいいかもしれない。

しかし、この種の連語において、存在物は人間（或いは動物）に限られており、そして人間（或いは動物）が二格の名詞で示される場所に存在していることは条件づけられていることから、単に〔存在物のありか〕として扱いきれない。ここで言う「条件づけられている」というのは、時間的な制限を受けていることを意味している。例えば、(232)における「六年間」によってはっきり示されているように、このグループを作る連語は、「ある期間内にある場所に存在している」という意味合いを強く持っている。「一泊する」は「一晩泊まる」の意味であり、動作の期間は点的である。これに対して、「住む」と「暮らす」などは短時間でもいいし、一生でもよく、他のいくつかの動詞とともに、動作の期間は線的であると言える。

また、「その場所に存在している」限りでは、広い意味では、その場所との「くつつき」も考えられる。このようなことから、本研究においても、このグループを〔くつつきのむすびつき〕の特殊なものとして扱うことにする。

3.4 相手のむすびつき

二格の人名詞がやりもらい動詞、言語活動を表わす動詞や対面を表わす動詞などにくみあわさると、〔相手のむすびつき〕ができあがる。二格の名詞はそれらの動詞が表わす動作の相手を示す。動詞の語彙的な意味によって、〔相手のむすびつき〕はさらに下の3つのカテゴリーに分かれる。その順で見えていく。

- a) ゆずり相手のむすびつき
- b) はなし相手のむすびつき
- c) 対面の相手のむすびつき

3.4.1 ゆずり相手のむすびつき

〔ゆずり相手のむすびつき〕を表わす連語は、「与える」「ゆずる」のようなやりもらい動詞と二格の人名詞と物を表わすヲ格の名詞とのくみあわせであり、ヲ格の名詞で示されている物を二格の名詞で示されている人にゆずることを表わす。二格の名詞はゆずり相手を示す。「ゆずりの構造」を示すと、以下の通りである。

ゆずりの構造

【 <人>に <物/事>を <やりもらい>Vt 】

〔ゆずり相手〕 〔やりもらいの対象〕 〔やりもらい動作〕

・例：彼女にプレゼントを贈る、友達にお金を貸す

やりもらい動詞は「あげる、与える、受け継ぐ、贈る、買い与える、返す、貸す、くださる、くれてやる、くれる、手渡す、やる、ゆずる、よこす、渡す」などの他動詞がほとんどである。

- (235) 女の人に物をおくるということは、たいへん嬉しいものである。(『女ひと』)
- (236) そしてこの貴公子はその親達に衣裳を脱いで与え、この子が育ったらかならず都の身がもとに使を立てるよう、わすれないように託して都に去って行った。(『女ひと』)
- (237) ある時、見知らぬ奥さんから「人にお金を貸していたのですが、それが思いがけず、返って来るかも知れないことになりました。もし返ってきたら、全額さしあげます」という電話がかかって来たのである。(『永遠の前の一瞬』)
- (238) 駅につくと安田は切符を買い、二人には入場券を渡した。(『点と線』)

〔ゆずり相手のむすびつき〕を表わす連語において、ヲ格の名詞は基本的に物を表わす具体名詞であるが、以下の例に見られるように、「会社」のような組織名詞や抽象名詞もヲ格に現われうる。

- (239) ところが父が高校を卒業すると、せっかく大きくした会社をあっさり部下に譲り、自分は選挙に出て議員になった。(『世界の中心で、愛をさけぶ』)
- (240) 運命はわれわれに幸福も不幸も与えない。ただその素材と種子を提供するだけだ。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)

- (241) 自然災害をおそれつつ、向き合う姿勢を社会に根づかせる。次の世代に教訓を受け継いでゆく責任が、私たちにはある。（朝・社）

また、やりもらい動詞ではないが、「支払う、提供する」など物の譲渡を伴う動作を表わす動詞も〔ゆずり相手のむすびつき〕を作ることができる。「支払う、提供する」の他に、「預ける、配る、捧げる、出す、払う、分ける/委託する、委任する、仮払いする、寄贈する、寄付する、供給する、進呈する、提出する、郵送する」などもある。

- (242) 避難区域や屋内退避区域などの住民に、避難時の交通費や宿泊費、勤務できなかった分の給与相当額を支払う。（朝・社）

- (243) 考えられることは、と二人の医師は口を揃える。君に角膜を提供した人物の生前の強い記憶による、残像作用ではないだろうか、と。（『幸福な結末』）

奥田（同:299）も指摘しているように、「もらう、かりる、あずかる、いただくのような動詞もに格の名詞とくみあわさることができるが、このばあいには二格のはたらきは奪格的である」。例えば以下のような例が挙げられる。

- (244) そして隣の家に住んでいたアメリカ人の男の子にジョンを貰ったこと。（『落花流水』）

- (245) みるみるうちに彼の顔が強張るのが可笑しかった。もう私はこの男にずいぶん金を借りている。（『落花流水』）

3.4.2 はなし相手のむすびつき

〔はなし相手のむすびつき〕を表わす連語は、自動詞の場合は、「答える」「挨拶する」などの言語活動を表わす動詞と二格の人名詞とのくみあわせであり、二格の名詞で示されている人に言語活動を行うことを表わす。他動詞の場合は、「言う」「聞く」などの言語活動を表わす動詞と二格の人名詞と事を表わすヲ格の名詞とのくみあわせであり、ヲ格の名詞で示されている内容をめぐって、二格の名詞で示されている人と言語活動を行うことを表わす。二格の名詞ははなし相手を示す。「はなしの構造」を示すと、以下の通りである。

はなしの構造

【 <人>に (<事>と) <言語活動>Vi 】

[はなし相手] ([言語活動の内容]) [言語活動]

・例：隣人に挨拶する、学生に注意する

【 <人>に <事>を(/と) <言語活動>Vt 】

[はなし相手] [言語活動の内容] [言語活動]

・例：家族に結果を知らせる、上司に経緯を報告する

言語活動を表わす動詞には以下のようなものがある。

謝る、答える、伝わる、詫びる

挨拶する、意見する、質問する、注意する、プロポーズする

言う、言い聞かせる、言いきる、言いつける、言い渡す、伺う、打ち明ける、訴える、おっしゃる、(声/言葉/電話を) かける、語る、聞く、ことづける、(愚痴を) こぼす、知らせる、勧める、尋ねる、告げる、伝える、問いかける、問う、(言葉を) 投げかける、述べる、話しかける、話す、申し上げる、申し出る、呼びかける
勧告する、急報する、具申する、催促する、紹介する、助言する、進言する、説得する、説明する、宣言する、相談する、伝達する、報告する、密告する、連絡する

(246) 「こんばんは」僕は慌ててお姉さんに挨拶した。(『落花流水』)

(247) もしかすると、結婚しているのかもしれない。マリーに質問してみたことがあったけれど、マリーは「知らない」と答えるだけだった。(『落花流水』)

(248) 岡田は、「——すみませんでした。目が覚めたら、この姿が見えなくて……。お騒がせしました」と、集って来た人たちに詫びた。(『百年目の同窓会』)

(249) でも私はどうしても——今、私に必要なのはあの田辺家の妙な明るさ、安らぎ——で、そのことを彼に説明できるようには思えなかった。(『キッチン』)

(250) 「マリーにさよならを言いたいんです。マリーはいつ帰って来るんですか？」(『落花流水』)

(251) 家へ帰って、父親にオトコ姉ちゃんが死んでいたことを告げた。(『少年 H』(上巻))

必ずしも言語活動を伴うとは限らないが、下のような連語も「はなし相手のむすびつき」に入れていいであろう。

(252) 植田先生は、東北のある中学校の理科の先生である。その日、植田先生は中学一年生に蛙の解剖法を教えていた。(『ブンとフン』)

- (253) 一計というのは道中、その女の子たちに、もし君たちがその道場の大先生の催眠術にかからねば、千円をやると約束したことである。(『ボクは好奇心のかたまり』)

このような動詞に、「教える、(電報)を打つ、断る/お辞儀する、打電する、指示する、注文する、通知する、発信する、表明する、披露する、命ずる、約束する、要請する」などがある。このグループの動詞も、(253)のように言語活動の内容をト格で明示する場合がある。

3.4.3 対面の相手のむすびつき

〔対面の相手のむすびつき〕を表わす連語は、「会う」「出会う」のような「対面する」に似た意味を表わす自動詞と二格の人名詞とのくみあわせであり、主体が二格の名詞で示されている人と対面することを表わす。二格の名詞は対面の相手を示す。「対面の構造」は以下の通りである。

対面の構造

【 <人>に(/と) <対面>Vi 】

〔対面の相手〕 〔対面動作〕

・例：友達に会う、素晴らしい人に出会う

「対面する」に似た意味を表わす動詞に、「会う、お目にかかる、出会う、向き合う、向き直る、めぐり会う、行きあう/再会する、出会う、遭遇する」などがある。

- (254) 婆やはいつも優しく私らを育ててくれたが、実の母に久方ぶりに会うことは何と言っても別様な気持を抱かせるものであった。(『母の影』)

- (255) ある日、『松竹館』という映画館の前で、近所の豆腐屋の小父さんに出会った。(『少年H』(上巻))

- (256) 狐狸庵はその路の向うから、今、言ったようなインチキ聖がおごそかな顔をして歩いてくるような気がして、そういう人物にめぐり会えたらどんなに楽しいであろうと思う。(『ボクは好奇心のかたまり』)

(254)～(256)においては、動詞「会う」「出会う」「めぐり会う」は「実の母」「小父さん」「そういう人物」といった人名詞と二格の形でくみあわさっているが、早津(2008:52)も指摘しているように、これらの動詞は「ト格の人名詞とくみあわさって動作の相互性がきわだった連語をつくる」こともできる。例えば、上の例を「実の母と会う」「小父さんと出会った」「そういう人物とめぐり会う」に置き換えても、動作の相互性を

感じるようになる以外に、さほど意味の差はないであろう²⁹。

同様の性質に、「出会うはずのところを出会わないでしまう」という意味を表わす「すれ違う」も挙げられ、このグループに入れていいであろう。

- (257) 鏡をみることもくるしく、路で少女たちにすれ違う時やあたらしい女中に始めて引き合わされる時、辛かった。（『ボクは好奇心のかたまり』）

宮島（1972:183）にも指摘があるように、「会う」「出会う」などは（254）～（256）のように、「人」を相手とする場合の他に、「事件・事柄」を相手を取る場合もある。この中でも、特に「出会う」は比較的いろいろな相手を取ることができるようである。例えば以下のような例である。

- (258) するとまた、細道はあくまで澄明な溪流に出会うのであった。（『母の影』）

- (259) ふつうは、ほとんどモノのない暮らしでも、家族の愛情と子どもたちの澄んだ瞳、みんなの屈託のない笑顔に出会えるはずだ。（『いい言葉は、いい人生をつくる』）

- (260) しかし、世の中には、思いがけずお正月に、何かしら人生のひとくぎりが烈しくとび去って行くという思いをしみじみ味わうことのできるような幸運に出会う人もいるらしく、人から聞いた事ながら、私には忘れられない話を、ここで御披露しようかと思う。（『永遠の前の一瞬』）

（258）では、自然物を表わす「溪流」が二格に現われている。（259）と（260）において抽象化が進んで、抽象名詞（「笑顔」「幸運」）が「出会う」の相手になっている。なお、（259）における「笑顔」は宮島の言う「<人>と<ことがら>との中間」とでも言うべきものであろう。この場合、「笑顔」は「人の笑顔」を指していて、どちらかというところ、<ことがら>よりは<人>に近いかもしれない。

また、「再会する」と「行きあう」も「人」以外の名詞とくみあわせりうる。

- (261) なつかしい太宰や漱石、厚ぼったいファッション雑誌や漫画雑誌、少年文庫にまで再会して、私は心底興奮した。（『泣かない子供』）

- (262) ランチを楽しんでいる人、明るい色の服を着た老婦人たち。結婚式にも二度行き合った。花の咲き乱れる公園を、新郎新婦を中心にして、ドレスアップしたひとたちが賑やかに練り歩く。（『泣かない子供』）

²⁹ この種の動詞は動作の主体が意志を持っているかどうか、すなわち意志性の有無によって、それぞれについて、二格とト格の間の異同にずれが生じる。しかし、一々の動詞について検討することは、本研究の主旨からずれていく恐れがあることを考慮して、意志性の有無と二格・ト格の間の異同について、本稿では深入りしない。

(261) は具体物を指す名詞（「雑誌や文庫」）がニ格にたつ例であるが、宮島は「人やできごとにくらべれば、ものの方が「あう」相手になりにくい（宮島（1972:185））」と指摘している。同様に、普通「人同士が再び会う」ことを表わす「再会する」も物を相手に取りにくいはずであって、(261) では、「ファッション雑誌や漫画雑誌、少年文庫」は擬人化して扱われていると考えていいであろう。(262) における「結婚式」はイベントを表わす抽象名詞であるが、人間の集まりと考えられる。

ニ格の名詞が「人」である (254) ～ (257) の場合と比べ、(258) ～ (262) の例において、「事件・事柄」を示すニ格の名詞はいずれもト格に置き換えられないことは特徴的であろう。ただし、「互いに向かい合う」という意味を表わす「向き合う」は、そもそも動作の相互性を語彙的な意味に含んでいるため、具体的な人名詞だけでなく、「現実と向き合う」のように抽象名詞ともト格の形でくみあわせることができる。

また、ニ格の位置に「人」が現われることがほとんどなく、「事件・事柄」とむすびつきやすい傾向を見せている「遭う」と「遭遇する」は、意味的に「会う」に近いことから、このグループに入れる。

- (263) 私は戦災にあっていたけれど、前もって東京郊外の親類の家に小型の捕虫網、三角罐などを疎開しておいたし、家が焼けるとき毒管の数本を庭の隅に積まれた砂利の中に埋めて助けていて、そのときもそれらを所持していた。（『母の影』）
- (264) トラブルに遭遇したら、「これを乗り越えれば、自分は一段階スキルアップできる。人間的にも一段階ステップアップするチャンスなのだ」と前向きに考えよう。（『いい言葉は、いい人生をつくる』）

3.5 社会的なかかわり

〔社会的なかかわり〕を表わす連語は、人間が社会と何らかのかかわりをもっていることを表わす。人間と社会とのかかわりというのは、主に人間がある組織や集団に所属したり、社会活動を行ったり、あるいは社会における身分や地位などの社会的な状態が変化したりすることを指す。人間の社会とのかかわり方によって、〔社会的なかかわり〕はさらに2つのカテゴリーに分かれる。

- a) 社会活動のむすびつき
- b) 社会的状態変化のむすびつき

3.5.1 社会活動のむすびつき

〔社会活動のむすびつき〕を表わす連語は、「参加する」「出席する」など人間の社会活動を表わす動詞とイベントを表わすニ格の名詞とのくみあわせであり、主体がニ格の名詞

で示されているイベントに参加することを表わす。社会活動を表わす動詞は基本的に自動詞である。「社会活動の構造」を以下のように示すことができる。

社会活動の構造

【 <イベント>に <社会活動>Vi 】

〔社会活動先〕

〔社会活動〕

・例：旅行に参加する、会議に出席する

「参加する、出席する」の他に、「出演する、列席する」などもある。

- (265) 一学期の修学旅行には元気に参加していたのに、二学期のはじめからずっと学校を休むようになった。（『世界の中心で、愛をさけぶ』）
- (266) 松本外相はこの後、ドイツで核軍縮・不拡散の、セネガルでアフリカ開発の、それぞれ国際会議に出席する。（朝・社）
- (267) 盛夫と敏子の結婚式のために集まってきた親戚は、同じ日のうちに葬式と結婚式の両方に列席することになったので、大騒ぎになった。（『少年 H』（上巻））
- (268) お参りしたほうがいいわよと芝居に出演してくれる岸田今日子さんにも奨められましたが、そこは狐狸庵、男でござる、「なあに。ぼくが床に当たったんだから、この芝居、大当たりだア」などと上半身、包帯をまかれて苦痛をこらえながら勝手なことを言っていた。（『ボクは好奇心のかたまり』）

着点動詞「出る」はイベントを表わす抽象名詞とくみあわさると、その語彙的な意味の多義性により、「参加する」という意味を表わすようになり、連語全体は〔社会活動のむすびつき〕を作るようになる。

- (269) 私は中米を車で南下し、ブラジルのペン大会に出たあと、カリブ海で遊んで帰って来た。（『永遠の前の一瞬』）

また、上で述べたように、社会活動を表わす動詞は基本的に自動詞であるが、「参加する」の意味を表わす他動詞のフレーズ「顔を出す」も〔社会活動のむすびつき〕を作ることができる。

- (270) 今まで不義理をしていたが、大学時代の同窓会にでも顔を出して、昔のよしみで頭でも下げてみるか。（『男どき女どき』）

3.5.2 社会的状態変化のむすびつき

〔社会的状態変化のむすびつき〕を表わす連語は、「就職する」「入学する」など人間の社会的な状態の変化を表わす動詞と組織や集団を表わす二格の名詞とのくみあわせであり、主体が二格の名詞で示されている組織や集団に所属するようになることを表わす。二格の名詞は主体の社会的な状態が変化した後の新たな所属先を示す。社会的な状態変化を表わす動詞も基本的に自動詞である。「社会的な状態変化の構造」を以下のように示すことができる。

社会的な状態変化の構造

【 <組織・集団>に <社会的な状態変化>Vi 】

〔新たな所属先〕

〔社会的な状態変化〕

・例：銀行に就職する、大学に入学する

このむすびつきを作る能力のある動詞には、「就職する、入学する、入社する、入団する、編入する」などがあり、漢語動詞がほとんどである。

(271) 朝田君、このデパートに就職したの？ (『百年目の同窓会』)

(272) 家に帰り、半年後、形ばかりの試験があつて、旧制女学校に入学しました。(『読書のたのしみ』)

(273) しかし、今年は日本ハムに斎藤佑樹投手が入団し、大きな注目を集めている。
(朝・社)

(274) 気まぐれな偶然から、ぼくたちは九つもあるなかの同じクラスに編入され、担任から男女の学級委員に任命された。(『世界の中心で、愛をさけぶ』)

〔社会活動のむすびつき〕の場合と同様に、くっつけ動詞「つく」は「職業」「仕事」などの名詞とくみあわさり、また同じくくっつけ動詞の「入れる」と移動動詞の「行く」「入る」は二格の組織名詞とくみあわさると、語彙的な意味の多義性によって、人間の社会的な状態変化を表わすようになり、〔社会的状態変化のむすびつき〕を作るようになる。例えば以下のような例である。

(275) 彼は将来、植物関係の仕事に就きたいそうだ。(『キッチン』)

(276) 小父さんは、兵隊に行く人を送るたびに、先輩づらをして嬉しがっているように見えた。(『少年 H』(上巻))

(277) 「やくざな商売に手を染めていたしな。刑務所に入ったこともあるんだ。向こうの親は、そのあたりのことも知っているようだった」(『世界の中心で、愛をさけぶ』)

- (278) だめよ。この電車は、この学校のお教室なんだし、あなたは、まだ、この学校に入らせていただいてないんだから。(『窓ぎわのトットちゃん』)

「所属する」「勤める」など語彙的な意味に社会的な状態変化を含んでいない動詞と組織や集団を表わす二格の名詞とのくみあわせは、人間がある期間ある組織や集団に所属することを表わし、広い意味では人間の社会的な状態が変わるということから、同じく「社会的状態変化のむすびつき」に入れていいであろう。「所属する」「勤める」の他に、「勤務する、在籍する、属する」などもある。

- (279) しかし小島村の人で原爆の落ちるとき広島にいた者は、重松と家内と矢須子の他には、報国挺身隊に所属する青年と奉仕隊員だけであつた。(『黒い雨』)
- (280) オトコ姉ちゃんは、大正筋にあるどこかの映画館に勤めている。(『少年 H』(上巻))
- (281) けれども矢須子が広島の第二中学校の奉仕隊の炊事部に勤務していたというのは事実無根である。(『黒い雨』)
- (282) 亡くなった時のベアトリスの年齢はわたしよりも二歳年下の二十五歳、大学院に在籍はしていたが、出ていなかったのではないか。(『幸福な結末』)

また、前述したように、社会的な状態変化を表わす動詞も基本的に自動詞であるが、「在籍する」の意味を表わす他動詞のフレーズ「籍を置く」も「社会的状態変化のむすびつき」を作ることができる。

- (283) いまは小さな劇団に籍を置き、もう一度、芝居の勉強を一からやり直しているところだという。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)

3.6 心理的なかわり

人間の心理的な活動や態度を表わす動詞と二格の人名詞や抽象名詞とくみあわせると、「心理的なかわり」を表わす連語ができあがる。二格の名詞はその心理的な活動や態度の向けられる対象を示す。動詞の語彙的な意味によって、「心理的なかわり」はさらに以下の3つのカテゴリーに分けることができる。

- a) 態度のむすびつき
- b) 認識のむすびつき
- c) 知的なむすびつき

3.6.1 態度のむすびつき

〔態度のむすびつき〕を表わす連語は、対象に対する感情、意志、考え方や行動の傾向など、一口に言えば、対象への態度を表現しており、具体名詞でも抽象名詞でも自由に支配できる態度動詞と、その態度が向けられる二格の名詞とからなる。奥田(1962[1983]:302)は、「態度動詞には心理的なものと動作的なものがあり、それに応じてかかわりのむすびつきは、a) 心理的な態度のむすびつきと b) 態度的な動作のむすびつきとのふたつのカテゴリーにわかれる」としている。本研究もこれに従い、〔態度のむすびつき〕を2つのタイプに分けて説明する。

- a) 感情的な態度のむすびつき
- b) 態度的な動作のむすびつき

3.6.1.1 感情的な態度のむすびつき

〔感情的な態度のむすびつき〕を表わす連語は、「驚く」「憧れる」など人間の感情を表わす動詞と人や物や事を表わす二格の名詞とのくみあわせであり、主体が二格の名詞で示されている人や物や事に対してある感情をもっていることを表わす。二格の名詞はその感情の向けられる対象を示す。感情的な態度を表わす動詞は自動詞がほとんどである。「感情的な態度の構造」を示すと、以下の通りである。

感情的な態度の構造

【 <人/物/事>に <感情>Vi 】

[感情の向けられる対象] [感情的な態度]

・例：大きなりんごに驚く、海外生活に憧れる

奥田(同)でも記述されているように、〔感情的な態度のむすびつき〕を表わす単語のくみあわせには、原因的なニュアンスを帯びるものとそうでないものがある。例えば以下の例を比べてみよう。

- (284) しかし、青森、秋田、山形の3県は、こうした需要も少ないうえ、原発事故の風評被害にも苦しんでいる。(朝・社)
- (285) その不名誉な噂を打ち消すのに苦勞したのを思いだしたからだ。(『少年H』(上巻))
- (286) 「ストイック」というおよそ自分と縁のない概念に憧れていたせいもある。(『泣かない子供』)
- (287) お母さんにものすごく執着してねえ、恩を捨ててかけおちしたんだってさ。(『キッチン』)

(284) と (285) において、動詞「苦しむ」と「苦勞する」は感情的な態度を示していて、名詞で示される事によって引き起こされるというような意味合いが、二格の名詞との間に存在する。一方、(286) と (287) では、「憧れる」と「執着する」のような動詞は、心理的な状態＝ありさまよりは、名詞で示される人や事に対して主体が自己の感情や意志を表わす、すなわち心理的な態度を示しており、二格の名詞との間に原因的なニュアンスはあまり感じられない。

(284) と (285) のように、二格の名詞と動詞との間に「原因→結果（心理的な状態）」の意味合いが認められる場合は、「かざられ動詞の語彙的な意味が対象への方向性をつよくもたず（奥田（同:303））」、その対象が誘因であるがために、むしろ対象の方から主体に向かってくるというニュアンスが含まれている。これに対して、(286) と (287) のような連語においては、対象に対する主体の感情や意志が表わされており、対象へ自ら向かっていくという対象への方向性が見出されている。このように、同じく「感情的な態度のむすびつき」を表現しているにもかかわらず、2 つのグループは対象に対する指向性においても異なっている。

また、2 つのグループに属する動詞には、各々形態的な違いも見られる。まず、「苦しむ」と「苦勞する」のような動詞については、下の (284') と (285') のように、対になる他動詞の受身形（「苦しめられる」「傷つけられる」）、もしくは「～させられる」のような使役受身の形（「困らされる」「苦勞させられる」）に置き換えることができる。一方、(286') と (287') が示すように、「憧れる」と「執着する」のような動詞では同様の言い換えはほとんど行えない（「*憧れさせられる」「*執着させられる」³⁰など）。このことも、2 つのグループの間に原因的なニュアンスの有無の差が存在していることを裏づけているであろう。

(284') ……、原発事故の風評被害にも苦しめられている。

(285') その不名誉な噂を打ち消すのに苦勞させられたのを……。

(286') *……自分と縁のない概念に憧れさせられていたせいもある。

(287') *お母さんにものすごく執着させられてねえ、……。

原因的なニュアンスを帯びる動詞は「苦しむ」「苦勞する」を含め、以下のようなものが挙げられる。

倦む、驚く、脅える、傷つく、狂う、苦しむ、困る、たまげる、てこずる、戸惑う、悩む、参る

³⁰ 本稿において、「*」は非文、または文法的に正しくても、普通は言わない言い方を示す。この「憧れさせられる」「執着させられる」などは普通言わないが、ごく特殊な場合（例えば、「ある圧力で、憧れさせられる」）なら言えるかもしれないため、完全に非文とも言い難い。

安心する、うんざりする、苦笑する、苦勞する、激怒する、興奮する、失望する、絶望する、はっとする、びっくりする、ほっとする、身震いする、満足する、立腹する

- (288) テントの中にいた牧師と信徒たちは、乳母車を押して入ってきた敏子に、別に驚いた顔もせず迎え入れた。（『少年 H』（上巻））
- (289) 濁っていく目に失望し、自殺を考えたことも。（『幸福な結末』）
- (290) この屈辱的な行為を我慢する必要などなかったが、奇妙なことに、わたしは見られていることに、興奮していた。（『幸福な結末』）

一方、原因的なニュアンスを帯びない動詞は「憧れる」「執着する」を含め、以下のようなのが挙げられる。

飽きる、呆れる、明け暮れる、憧れる、甘える、飢える、駆られる、こがれる、拘る、親しむ、耐える、馴染む、なつく、慣れ親しむ、慣れる、はまる、惹かれる、びびる、耽る、惚れ直す、惚れぬく、惚れる、迷う、見惚れる、読みふける

飽き飽きする、啞然とする、うっとりする、感謝する、感動する、気乗りしない、興ずる、驚嘆する、期待する、共感する、共鳴する、恋する、固執する、嫉妬する、執着する、専念する、耽溺する、同情する、涙する、熱中する、一目惚れする、没頭する

- (291) いまでは週末には二時間以上車を走らせ、大きな木材をかついだり、セメントをこねたりの肉体労働にすっかりはまっている。（『いい言葉は、いい人生をつくる』）
- (292) そこに、花見に興ずる人々の日本の生活や文化の影が投影して、この句を俗気たっぷりなものに仕立て上げている。（『日本人の発想、日本語の表現―「私」の立場がことばを決める―』）
- (293) しかし、ぼくはもうこれ以上偽りの生活を続けていくのに耐えられない。（『ボクは好奇心のかたまり』）
- (294) H は、その一冊だけを繰り返し読むことに飽々し、『少年倶楽部』や漫画の本も読みたかったがダメだった。（『少年 H』（上巻））
- (295) 「いまからナイフとフォークに慣れとったら、キットいいことがあるからね」と母親の敏子がいうので、しかたなく二人の子どもは苦勞しながら食べていたのである。（『少年 H』（上巻））

2つのグループにおいて、二格名詞の性質に限定はないが、(290)、(293)と(294)

が示しているように、「これ以上偽りの生活を続けていく」「見られている」「その一冊だけを繰り返し読む」といった動詞句が準体助詞「の」や形式名詞「こと」によって名詞化され、二格に立つことも少なくない。

以上の2つのグループに入る動詞は人の感情を表わすことを基本義としているのに対して、「溺れる」「酔う」のような、もともと感情を示していない動詞も、二格の抽象名詞とくみあわさることによって、語彙的な意味のずれ＝抽象化とともに、〔感情的な態度のむすびつき〕を表現する場合がある。

(296) その悲しみに溺れることなく、自分の生を生ききっていく。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)

(297) 俺はあんたのように、自分の顔のみにくさに酔ったりしないさ。(『女ひと』)

(296) と (297) の他に、「その思いに溺れる」「自己憐愍に酩酊する」の例もあった。これらの例は (284) ～ (295) と異なり、二格の位置には抽象名詞しかつかず、また動詞「溺れる」「酔う」「酩酊する」は「悲しみ」「思い」などといった抽象名詞とくみあわさってはじめて、連語全体が感情面の表現にずれるのである³¹。くみあわせ全体がひとまとまりになって、人間の心理的な状態を示しているため、名詞と動詞との間に原因的なニュアンスがあるか否かについて、判断しかねる部分もある。「酔う」について、奥田は「**なく、わらう、よう、よわる**のような、もともと生理的な状態をしめしている動詞がに格の名詞とくみあわさって、心理的な状態をしめすようになっていばあいは、むすびつきの原因的なニュアンスは一そうつよくなる。(奥田(同:303))」のように記述している。しかし、「酔う」の用例が挙げられていないため、確かなことは言えないが、そう指摘する根拠は見当たらない。

なお、原因的なニュアンスは二格の名詞と動詞とがむすびついてはじめて現われてくるものであり、同じ動詞でも、二格の名詞の語彙的な意味によって、むすびつきの性格が異なる場合がある。例えば、以下に示す「満足する」の例である。

(298) a、敏子は、自分の子どもも神に捧げ、一家全員がキリスト教徒になったことに満足した。(『少年 H』(上巻))

b、人生に満足したればこうつぶやこう。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)

(298a) では、「自分の子どもも神に捧げ、一家全員がキリスト教徒になったこと」が原因となって、主体の「敏子」は「それで満足した」という心理的な状態になっていることを表現している。これに対して、同じく「満足する」が用いられた (298b) においては、

³¹ これらの動詞は「水に溺れる」「酒に酔う」などのように、「水」や「酒」といった具体名詞とのくみあわせは、人間の心理的な状態を示せず、単に生理的な状態を示しているにすぎない。

原因となるものが存在しておらず、「人生」に対して主体の「満足する」という意志的な態度が表わされているに過ぎない。この例は、上の原因的なニュアンスを帯びる動詞とそうでない動詞は完全に区別することができるものではなく、連続していることを物語っている。

また、上で述べたように、感情的な態度を表わす動詞は自動詞がほとんどであるが、「持つ」「抱く」「感じる」「抱える」「示す」「失う」などの他動詞は「興味/好感/好意/尊敬/憧れ/自信/抵抗感/愛情/郷愁/希望を持つ」「興味/好意/敬意/親近感を抱く」「負担/不足/喜び/満足感/親しみを感じる」「不安/苦しみを抱える」「興味を示す」「自信を失う」のようなフレーズを介して、「感情的な態度のむすびつき」を作ることができる。なお、ヲ格の名詞は上の例にもうかがえるように基本的に人間の感情を表わす抽象名詞である。

- (299) ぼくはアキの分別臭い言い方に反発を感じた。しかしそれ以上に、彼女の腹立ちに好感をもった。(『世界の中心で、愛をさけぶ』)
- (300) じっさい、お時さんの言うとおりの「小雪」にいる女中は、多少とも安田に興味を抱いていた。(『点と線』)
- (301) 人生に不足が感じられたら、もう少し忙しく生きるのも一つの解決法かもしれない。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)

3.6.1.2 態度的な動作のむすびつき

「態度的な動作のむすびつき」を表わす連語は、「従う」「逆らう」など人間の何かに対する態度的な動作を表わす動詞と人や事を表わす二格の名詞とのくみあわせであり、主体が二格の名詞で示されている人や事に対してある態度をもって動作を行うことを表わす。二格の名詞はその態度の向けられる対象を示す。態度的な動作を表わす動詞も基本的に自動詞であるが、他動詞の場合は動詞とヲ格の名詞がひとまとまりになって、その全体が自動詞同様に態度的な動作を表現する。「態度的な動作の構造」を示すと、以下の通りである。

態度的な動作の構造

【 <人/事>に <態度的な動作>Vi 】

〔態度の向けられる対象〕 〔態度的な動作〕

・例：上司に従う、母親に逆らう

「態度的な動作」という呼び名の通り、このむすびつきにおける「動作」は例えば〔移動のむすびつき〕や〔くつつきのむすびつき〕に見られるような具体的な動作ではなく、主体の動作には対象に対して何らかの態度が常についている。そして、そういう抽象的な態度をもって、ある動作を行うという意味合いが、「態度的な動作のむすびつき」を表わ

す連語には存在している。

態度的な動作を表わす動詞には以下のようなものがある。

抗う、ありつく、あやかる、挑む、(力を)入れる、打ちこむ、(手を)打つ、促す、怠る、(歯止めを)かける、(耳を)傾ける、傾く、かまう、(万全を)期す、(気を)配る、乞う、答える、応える、媚びる、逆らう、従う、すぎる、背く、楯突く、(気を)つかう、(気を)つける、立ち向かう、頼む、頼る、ついていく(くる)、つかれる、つけ込む、努める、つられる、取り入れる、取りかかる、取り組む、取り込む、取りつかれる、倣う、慣れ従う、願う、ねだる、臨む、乗っ取る、のめり込む、乗り出す、励む、(敬意を)払う、踏み切る、踏み込む、役立つ、役立てる、ゆだねる

依存する、応じる、帰依する、協力する、合意する、貢献する、抗する、賛成する、参入する、従事する、集中する、集中沈潜する、殉じる、乗ずる、尽力する、接する、専念する、即答する、対応する、対抗する、対処する、着手する、注意する、注目する、挑戦する、直面する、抵抗する、抵触する、徹する、同調する、当惑する、納得する、配慮する、反抗する、反対する、反応する、反発する、服従する、奉公する、奉仕する、目配りする、留意する

- (302) 美子は、朝田の言葉に従って、美保を抱いて休憩室へ行った。(『百年目の同窓会』)
- (303) 約 140 万人が被曝したソ連時代の核実験による放射線被害でも、日本は実態の説明や健康対策に協力してきた。(朝・社)
- (304) 毎朝、手帳を見て、綱渡り的なスケジュールになっていたりと「今日は忙しいぞ」と多忙に挑戦するようなファイトさえ沸いてくる。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)
- (305) 奥さんたちはみんな、能島さんの云う新兵器説に賛成した。(『黒い雨』)
- (306) ちゃんと喋れるようになるまで、お母ちゃんには逆らわんことにする。(『少年H』(上巻))
- (307) お父上に背き、その名を捨ててください。(『世界の中心で、愛をさけぶ』)
- (308) 制度に反対する共産党を除く各党に、通年ではこの4倍が渡る。(朝・天)
- (309) 精神病院の俵に生まれたことに初めは抵抗し、文学部を選んだものの、戦争になり、医学生ならば徴兵を延期されると知ると、ただちに大した抵抗もなく祖父と父と同じ道へと駒を進めた。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)
- (310) 私もぜひお二人にあやかり、奮闘したいと励みにしている。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)
- (311) 私が「単語に敏感になろう」、「違い目について感覚のある人間になりましょう」と言っていることに注意して下さい。(『日本語練習帳』)

(312) ただ、現行の制度はバラマキ色が強い。自民党など野党の主張にも耳を傾け、思い切って見直してはどうか。（朝・社）

(313) この遠出には、母も金がなかったらしく、祖母に金をねだっているのを私は唐紙の隙間から盗み見ていた。（『母の影』）

(302) ～ (313) が示しているように、二格の位置には主に人（「お母ちゃん」「お父上」「お二人」「祖母」）を表わす名詞や、抽象的な事柄（「言葉」「実態の解明や健康対策」「多忙」「新兵器説」「制度」「野党の主張」）や出来事（「精神病院の俤に生まれたこと」「～と言っていること」）を表わす名詞（句）がたつが、抽象名詞の方が圧倒的に多い。

上の例にもうかがえるように、態度的な動作を表わす動詞の語彙的な意味は様々である。早津（2008:52）を参考にすると、対象に対する態度の側面から、この種の連語は従順的な態度であるか反抗的な態度であるか、またはその中間的であるというの3つのグループに分けることができる。(302) ～ (305) が従順的な態度の例であり、(306) ～ (309) が反抗的な態度の例である。なお、反抗的な態度を表わす連語において、二格の名詞が人名詞の場合は主に「お母ちゃん」「お父上」あるいは「親」など親族を中心とする話し手より目上の人間を表わす名詞であり、連語全体は目上の人の命令・押し付けなどに対する反抗を表現している。このことから従順な態度を示す動詞に比べ、反抗的な態度を示す動詞は語彙的な意味において範囲が狭いことが窺えるであろう。

3.6.2 認識のむすびつき

〔認識のむすびつき〕を表わす連語は、「気づく」など人間の認識活動を示す動詞と物や人や事を表わす二格の名詞とのくみあわせであり、主体が二格の名詞で示されている物や人や事をめぐって、ある認識活動を行うことを表わす。二格の名詞はその認識活動の対象を示す。認識活動を表わす動詞は基本的に自動詞である。「認識の構造」を示すと、以下の通りである。

認識の構造

【 <物/人/事>に <認識活動>Vi 】

〔認識活動の対象〕

〔認識活動〕

・ 例：ポスターに気づく

認識活動を表わす動詞には、「思い当たる、気がつく、気づく、目覚める/開眼する」などの動詞がある。

なお、「気づく」については、奥田は「かかわりのむすびつき」の特殊なものとして以下のように簡単に指摘している。「かかわりのむすびつきのなかに、きわめて未発達であるが、

認知のむすびつきをぬきだすことができる。このむすびつきをつくるのは、**ふれる、さわる、通じる、通曉する、気づく**のような動詞である。(奥田 (1962:306))。本研究では、奥田の指摘を受け継ぎ、これらの動詞を取り出して、[心理的なかわり]の下位のカテゴリとして立てることにする。ただし、「ふれる、さわる、通じる、通曉する、気づく」と奥田は一例に並べているのであるが、動詞の語彙的な意味に明らかに違いがあることを考慮して、本研究では、「ふれる、さわる、気づく」のような動詞を本節に、そして「通じる、通曉する」のような動詞を[知的なむすびつき](3.6.3 節参照)に、それぞれ振り分けて、各々の特徴及びむすびつきの性格を詳細に述べる。

[認知のむすびつき]においては、動詞は人間の認知活動を表わしていて、二格の名詞はその認知活動の向けられる対象を示している。二格の名詞と動詞との間に、対象について知る、あるいは対象をめぐって、何かの情報・知識を持つということが表現される。対象は人や物、それらの性質や形態およびそれらの間の関係、あるいは事柄であるので、二格名詞の性質にはほとんど制限がない。

- (314) 「まあ——これは失礼を」と、**私とホームズ氏に**やっと**気付いた**ように、「初めまして」と頭を下げた。(『百年目の同窓会』)
- (315) **私が知恵をつけたことに****気がついて**、勤め先かどこかに置くことにしたのだろう。(『落花流水』)
- (316) 結構じゃないか。**プロ意識に****目覚めた**のさ、あの子も。(『百年目の同窓会』)

(314) は人を表わす具体名詞(「私とホームズ氏」)、(315) は抽象的な事柄を表わす名詞句(「私が知恵をつけたこと」)、そして(316) は抽象的な概念(「プロ意識」)がそれぞれ二格に立つ例であった。

これらの例からもわかるように、[認知のむすびつき]を表わす連語には、認知的な状態変化も含意されている。例えば、(314) では、「私とホームズ氏に気づく」というのは「私とホームズ氏に気づいていない」状態から「私とホームズ氏に気づいた」状態に変わるという意味であり、「知るようになる」というニュアンスが感じられる。副詞「やっと」は一層そのニュアンスを強くしている。状態変化という点において、「驚く」「傷つく」などが作る原因的なニュアンスを帯びる[感情的な態度のむすびつき]に似ている³²が、「気づく」の場合は原因的なニュアンスはまったく感じられない。また、ほとんど無意識下で状態変化が生じるとされる「気づく」は、态度的なニュアンスにも欠けている。こういったことを合わせて考えれば、「気づく」を[態度のむすびつき](3.6.1 節)に含めることはできず、[認知のむすびつき]として別に立てることが要求されることになる。

また、前述した通り、具体物に接触する働きかけを示す「触れる」などは、人間の認知

³² これは例えば「寒さに驚く」という連語は、「寒さが原因で、驚いたという状態になった」という状態変化を表わしているということである。

活動を表わす意味を派生させて多義になり、二格の抽象名詞とくみあわさって、「認識のむすびつき」を作るようになる。

(317) それに、マリが僕の家の中を見たがるのと同じように、僕は典型的な日本の家庭の生活に触れることが面白くて仕方なかった。(『落花流水』)

(318) 「仕方なかったんだよ。」雄一は私の沈黙を気にしたらしく、顔も上げずに言った。「全然君のせいじゃない。」「……ありがとう。」なぜか私はお礼を言った。「どういたしまして。」と彼は笑った。私は今、彼に触れた、と思った。一ヵ月近く同じ所に住んでいて、初めて彼に触れた。(『キッチン』)

(318) の「彼」は具体的な人名詞であるが、この文においては、「彼の身体の部分」のような具体物を示してはおらず、意志や感情を持つ人格的な存在としての「彼」を意味し、抽象的に用いられていると考えられる。

3.6.3 知的なむすびつき

〔知的なむすびつき〕を表わす連語は、「精通する」など人間の知的な活動を表わす動詞と事柄を表わす二格の名詞とのくみあわせであり、主体が二格の名詞で示されている事柄をめぐる、ある知的な活動を行うことを表わす。二格の名詞はその知的な活動の対象を示す。知的な活動を表わす動詞は基本的に自動詞である。「知的な構造」は以下の通りである。

知的な構造

【 <事>に <知的な活動>Vi 】

[知的な活動の対象] [知的な活動]

・例：歴史に精通する

知的な活動を示す動詞には「精通する、通曉する、通じる」などがあり、漢語動詞がほとんどである。〔知的なむすびつき〕において、動詞は人間が何らかの知識を有していることを表わしていて、二格の名詞はその知識の具体的な内容を示す。動詞と名詞との間の関係は状態的であるため、以下の例が示すように、動詞は常に「～ている」形で現われており、この点においては、「気づく」など人間の知覚の状態変化を伴う〔認識のむすびつき〕を作る連語とは異なっている。

(319) 半兵衛は早く父を亡くしたため少年の身で城主になっている。小賢しく喋りちらしては近隣の大人の城主どもから切り取られてしまう、と用心していたのかもしれない。戦国期にはめずらしく読書家で、軍書や兵書に精通していた。(コ

ーパス：『国盗り物語・織田信長』

(320) 「事情に通じている」とは、細かい筋道を理解していることです。（『日本語練習帳』）

また、「熟練して上達する」ことを表わす「熟達する」も二格の名詞とくみあわさると、〔知的なむすびつき〕に近い性格を見せている。

(321) それはいつもみなれたものではあったが、そうしてぼくはそのなかから真の感情をつかみ出すのに、かなり熟達してはいたが、……。 （『ボクは好奇心のかたまり』）

なお、二格の名詞は知識を示すため、上の例に見られるように、二格の位置に抽象名詞がくるのが普通であろう。（319）の「軍書や兵書」は書籍そのものではなく、「軍書や兵書の内容」という抽象的な概念を指している。

3.7 関係のむすびつき

二格の名詞が「比べる」「関係する」など二者の関係を表わす動詞とくみあわさると、〔関係のむすびつき〕ができあがる。二者はどういう関係にあるのか、すなわち動詞の語彙的な意味によって、〔関係のむすびつき〕はさらに4つのカテゴリーに分かれる。

- a) 客観的な関係のむすびつき
- b) 論理的な関係のむすびつき
- c) 起源のむすびつき
- d) 内容＝構成要素のむすびつき

以下、この順番で説明する。

3.7.1 客観的な関係のむすびつき

〔客観的な関係のむすびつき〕を表わす連語は、自動詞の場合は、「関係する」「かかわる」など物事間の客観的な関係を表わす動詞と事や人を表わす二格の名詞とのくみあわせであり、主体が二格の名詞で示されている事や人と客観的な関係をもっていることを表わす。他動詞の場合は、「繋げる」などのような物事間の客観的な関係を表わす動詞と事や人を表わす二格の名詞と同じく事や人を表わすヲ格の名詞とのくみあわせであり、ヲ格の名詞で示されている事や人を二格の名詞で示されている事や人と客観的な関係をもたせることを表わす。二格の名詞は客観的な関係の対象を示す。「客観的な関係の構造」を以下

のように示すことができる。

客観的な関係の構造

【 <事/人>に <客観的な関係>Vi 】

[客観的な関係の対象] [客観的な関係]

・例：一般生活に関係する、1万円に相当する

【 <事/人>を <事/人>に <論理的な関係>Vt 】

[客観的な関係をもたせる対象] [客観的な関係の対象] [客観的な関係]

・例：事故を政治につなげる

主体と対象との関係の仕方から見ると、[客観的な関係のむすびつき]を表わす連語には、動詞「関係する」を代表とする「単にある物事と関係を持つ」ものと、「相当する」を代表とする「ある物事と関係し、かつそれに等しい」ものがある。客観的な関係を表わす動詞としては以下のようなものが挙げられる。

かかる、かかわる、絡む、付きまとう、繋がる、繋げる、伴う、まつわる、むすびつく

関係する、関与する、相当する、直結する、通ずる、密着する

- (322) 平仮名の言葉は、毎日の基本的な、一般生活に密接に関係する基礎語が多く、その基礎語によって幼児や少年少女の知能や判断力の基本的な枠組みが決定的に育まれるからです。（『日本語練習帳』）
- (323) たった一つの修飾の語による結果だが、日本語が文脈に深くかかわる一つの証拠といえるだろう。（『日本人の発想、日本語の表現―「私」の立場がことばを決める―』）
- (324) どっちにしても、この家にまつわる忌まわしい過去など知りたくもないので、わざわざたずねてみたことはない。（『世界の中心で、愛をさけぶ』）
- (325) 私流の「人生の成功」とは、どれだけ楽しく生きたか、どれだけ楽しく仕事をしたかにかかっている。（『いい言葉は、いい人生をつくる』）
- (326) それは、カソリックの幼児洗礼に相当する儀式であった。（『少年 H』（上巻））
- (327) 『古事記』や『日本書紀』が書かれた古代の日本人は、虹は蛇に通じて不吉なものと感じ、なにか異変の前兆と恐れたが、現代人は「七色の虹」などと言って、その美しさを愛でる。（『日本人の発想、日本語の表現―「私」の立場がことばを決める―』）
- (328) 未曾有の悲劇を、国民全体の支え合いを強化する議論につなげたい。（朝・社）

これらの例からもわかるように、〔客観的な関係のむすびつき〕を表わす連語が表現している関係は抽象的なものであるため、二格に立つことができるのは抽象名詞がほとんどである。(324)の「この家」は「建物としての家」ではなく、「家の住人、家庭の歴史など」という抽象的な概念を指していることは文脈からもわかる。また、(327)の「蛇」は実際の動物としての「蛇」を指していることは確かであるが、文脈から考えると、具体的な動物そのものというより概念として抽象化されていると考えた方がいいであろう。

上に挙げた動詞の他に、「当たる」も挙げられる。「当たる」はもともとくつつきの意味を中心義とするくつつき動詞であるが、異なる種類の二格の名詞とくみあわせることによって、様々な意味を派生させて多義語として定着していると認めていいであろう。例えば以下の用例である。

(329) 「大丈夫」とは、昔の言葉でいうと「ますら男」に当たります。(『日本語練習帳』)

また、「ある物事と関係し、かつそれに近い」という意味を表わす「似る」と二格の名詞のくみあわせもこの種の連語を作っている。

(330) お前は父ちゃんに似てウソつくからな。(『少年 H』(上巻))

(331) 愛は大きく見えたり、小さく見えたりするけれど、それは月の大小に似ている。(『幸福な結末』)

「似る」は抽象的な関係だけでなく、(330)のように人間や具体物との関係をも表現できるので、二格の位置に抽象名詞も具体名詞も現われうる。

なお、〔客観的な関係のむすびつき〕を作る連語が表わす関係は相互的であるため、「関係する」「かかわる」などいくつかの動詞において、関係の対象は二格の他に、ト格にも置き換えられる(「一般生活と関係する」「社会問題とかかわる」)。

3.7.2 論理的な関係のむすびつき

〔論理的な関係のむすびつき〕を表わす連語は、自動詞の場合は、「基づく」などのような物事間の論理的な関係を表わす動詞と事や人を表わす二格の名詞とのくみあわせであり、主体が二格の名詞で示されている事や人と論理的な関係をもっていることを表わす。他動詞の場合は、「比べる」などのような物事間の論理的な関係を表わす動詞と事や人を表わす二格の名詞と同じく事や人を表わすヲ格の名詞とのくみあわせであり、ヲ格の名詞で示されている事や人を二格の名詞で示されている事や人と論理的な関係をもたせることを表わす。二格の名詞は論理的な関係の対象を示す。「論理的な関係の構造」を示すと以下の通りである。

論理的な関係の構造

【 <事/人>に <論理的な関係>Vi 】

[論理的な関係の対象] [論理的な関係]

・例：年齢に似合う、相手チームに勝つ

【 <事/人>を <事/人>に <論理的な関係>Vt 】

[論理的な関係をもたせる対象] [論理的な関係の対象] [論理的な関係]

・例：生活をパートナーに合わせる

〔論理的な関係のむすびつき〕を作りうる動詞には、「合う、合わせる、劣る、比べる、負ける、見合う」などがあるが、その語彙的な意味において、全部同じとは言えない。例えば、「合う」と「劣る」とを比べてみよう。「合う」は「適合する」の意味を含んでいるのに対して、「劣る」には「優劣を決する」ことが含意されている。従って、〔論理的な関係のむすびつき〕を表わす連語を動詞の語彙的な意味によって、さらに2つのグループに分けて説明する。

まず、「適合する」の意味を含んでいるものとして、以下の動詞が挙げられる。

合う、あてはまる、あてはめる、合わせる、適う、比べる、照らし合わせる、照らす、似合う、見合う、基づく
値する、合致する、即する、適する

- (332) 「嘘をつけ」は文字通りに解すれば“嘘をつきなさい”という命令ゆえ、まことにその場に合わない表現というべきである。（『日本人の発想、日本語の表現―「私」の立場がことばを決める―』）
- (333) 私は年齢に似合わず、クラシックばかり聞いているので、当世の人気アイドルというのは全く知らない。（『百年目の同窓会』）
- (334) 年齢や状況に応じて、自分に見合った「分」を決めるとよいと思う。（『いい言葉は、いい人生をつくる』）
- (335) 政府は、科学的根拠に基づき丁寧に説明を重ねるべきだ。子どもの安全はなにものにも優先する。（朝・社）
- (336) 「当社では一人々々の頭髪の特徴、性格にあわせて製作しておりますので白髪も混入できますし、毛色、毛質も選べます」（『ボクは好奇心のかたまり』）
- (337) 他の臓器に比べると角膜は拒絶反応が起りにくく、移植の成功率も高い。（『幸福な結末』）

一方、「優劣を決する」ことを含意する動詞として、「劣る、勝つ、敵う、負ける/失敗する、勝利する、成功する、匹敵する、優先する」などがある。

なお、「勝つ」「負ける」は奥田(1962[1983]:305)では、[かかわりのむすびつき]の[態度的な動作のむすびつき]に入っているのであるが、態度的なニュアンスを持ってはいるものの、その語彙的な意味に「優劣を争う」ことも含んでいることを考えて、本研究では「失敗する、勝利する」などととも、[論理的な関係のむすびつき]に入れることにする。

(338) 彼女は漢文を非常に多く読んでいましたから、漢語の豊富な語彙に劣らないほどのヤマトコトバの形容語を使いたかった。(『日本語練習帳』)

(339) ガルニエ先生の顔は大きくて、まるくて、顔に負けないような大きな丸眼鏡を掛けていて、動物にたとえるなら、アザラシのような愛嬌がある。(『幸福な結末』)

(340) 「おじいちゃんは？」「眼鏡(人のあだ名：引用者注)にかなわなかった」(『世界の中心で、愛をさけぶ』)

(338)～(340)において、比較を受けるもの(「ヤマトコトバの形容語」「大きな丸眼鏡」「おじいちゃん」)は、二格の名詞で示される条件や基準(「漢語の豊富な語彙」「顔」「眼鏡」)と比較されるだけでなく、比較した結果どのような優劣関係になるのか、すなわち、「優」なのか「劣」なのかということまでが、それぞれの動詞の語彙的な意味に含まれている。この点において、「適合する」の意味を表わす動詞と異なっている。

なお、「適合する」の意味を表わす動詞のグループにおいて、「その場と合う」「年齢と似合う」「自分と見合った分」「他の臓器と比べる」なども言える³³ように、論理的な関係の対象は二格だけでなく、一部の動詞はト格によっても表わせる。これに対して、「優劣を決する」の意味を表わす動詞のグループのほとんどは二格しか取ることができない。

また、「一定の基準に達する」ことを表わす「受かる」と「合格する」³⁴もこのグループに入れていいであろう。

(341) それを繰り返している間は試験に受からないだろう。(『日本語練習帳』)

(342) その甲斐あって、なんとか希望する会社に合格したのだった。(『泣かない子供』)

3.7.3 起源のむすびつき

[起源のむすびつき]を表わす連語は、「由来する」「発する」など物事の起源を表わす動詞と事柄を表わす二格の名詞とのくみあわせであり、ある物事が二格の名詞で示されている事をよりどころとしていることを表わす。二格の名詞は物事の起源となるものを示す。起源を表わす動詞は基本的に自動詞である。「起源の構造」は以下のように示すことができ

³³ ただし、同じ文での置き換えは必ずしもできるとは限らない。

³⁴ 「受かる、合格する」については、奥田(1962[1983])は触れていない。

る。

起源の構造

【 <事>に <起源>Vi 】

〔起源となるもの〕 〔起源〕

・例：刀に由来する（言葉）

〔起源のむすびつき〕を作りうる動詞には、「起因する、原因する、発する、由来する」などがあり、漢語動詞がほとんどのようである。

(343) この心理は、自己を社会（人々、世間様）の一員として客体化していない日本的な心の視点に由来している。（『日本人の発想、日本語の表現―「私」の立場がことばを決める―』）

(344) 「文明」は civilization の訳語で、これは civ（都市）を語根とする civil（都市の）と -ize（…化する）の複合に発したから、生活が都市化すること。（『日本語練習帳』）

また、普通「ある物・現象・状態が新たに起こること」を意味する「始まる」（例えば、「授業が始まる」）は、その語彙的な意味の多義性により、「きっかけとなることが生じる。起因する。」という意味を表わす構造において、「新たに生じたもの」だけでなく、「きっかけとなること、起因になること」を示すものも必要であって、二格の形で現われている。

(345) それはともかくとして、「私たち」「我々」のもとには古代語の「わ」（吾、我）に始まると思われるのだが、「わ」はその当人たる「己」を指す気分が強かったらしい。（『日本人の発想、日本語の表現―「私」の立場がことばを決める―』）

なお、下の (346) が示すように、〔起源のむすびつき〕を表わす連語では、起源＝よりどころとなる対象は、二格だけでなく、カラ格でも表わすことができる。

(346) その名称が Mobile Internet Navigation Device から由来していることから分かるように、MiND が目指すのは“インターネットとナビゲーションの融合”だ。
(<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20081118-00000044-rps-ind> 2008/12/5 アクセス)

3.7.4 内容＝構成要素のむすびつき

〔内容＝構成要素のむすびつき〕を表わす連語は、「溢れる」「満ちる」などものを数量

的に表現する動詞と事柄を表わす二格の名詞と人や物や事を表わすガ格の名詞とのくみあわせであり、ガ格の名詞で示されている人や物や事は二格の名詞で示されている事を内容＝構成要素として量的にもっていることを表わす。二格の名詞はガ格の名詞の内容＝構成要素を示す。この種の連語を作りうるのは基本的に自動詞である。「内容＝構成要素の構造」を示すと、以下の通りである。

内容＝構成要素の構造

【 <人/物/事>が <事>に <内容>Vi 】

〔構成要素の主体〕 〔構成要素〕 〔内容〕

・例：部屋中が光に満ちている、沿岸部が海の幸に恵まれている

この種の動詞については、奥田（1962[1983]:309）では一つのカテゴリーを立てるのではなく、「とむ、みちる、あふれる、たける、めぐまれる、不足する、かけるのような動詞とに格の名詞がくみあわさると、に格の名詞は、動詞でしめされる状態をその内容の側面から具体化する。この種の単語のくみあわせは、道具のむすびつきをあらわす単語のくみあわせからずれてきたものである。」というように扱われている。奥田（同）の言う「道具のむすびつき」を作る連語には、例えば「帯をうしろ手にむすぶ」「手鏡にかみをそろえる」のようなものがある。本研究では、「溢れる」などの動詞を〔内容＝構成要素のむすびつき〕として別類に立てることにした。

このむすびつきを作りうる動詞は、「溢れる」「満ちる」の他に、「欠ける、満ち満ちる」などもある。例えば以下のような例が挙げられる。

(347) もともとぼくは敬老精神に溢れた人間だ。（『世界の中心で、愛をさけぶ』）

(348) 部屋中がサンルームのように、光に満ちていた。（『キッチン』）

(349) その点どうもこれまでの言語研究や、国語教育・日本語教育といった言葉の学習では、言語の形式面での問題にばかり目を奪われて、個々の人間が自然や周囲の対象にどのような視点でそのつど向き合っているか、場面や状況から導かれる自然な対処の姿勢・心理状態を正しく理解するといった訓練に欠けていたように思われる。（『日本人の発想、日本語の表現―「私」の立場がことばを決める―』）

宮島（1972）によると、「溢れる」は「量がふえて、いれものや場所に、はいりきれないので外へ出ること（p.362）」であり、「満ちる」は「ある場所にいっぱいにあることをあらわす（p.375）」という。また、「欠ける」は「あるべきものがない」という意味である。これらの動詞は、ガ格の名詞で示されている人や物や事を構成するものの量が多いか少ないかということを表わし、その構成要素を示す二格の名詞との間の関係は、量的である。

宮島（同:382）が「満ちる」と「溢れる」について指摘しているように、これらの動詞は、量の多いか少ないかを表現しており、ある一定の基準があって、それに達したり、それを越えたり、あるいはそれより不足していたりするニュアンスをも含んでいる。

(350) これは他の人によって観察され把握された人物という点では、具体的で臨場感
に富んでいる。(『日本人の発想、日本語の表現―「私」の立場がことばを決め
る―』)

(351)のように内容＝構成要素は具体物（「海の幸」）である場合もあるが、(347)～(350)が示しているように、「敬老精神」「光」「訓練」「臨場感」などのような抽象名詞が二格の位置につくことが多いようである。

3.8 働きかけのむすびつき

働きかけの構造

働きかけを表わす動詞には、「影響する、及ぼす」の他に、「与える、及ぶ、働きかける/作用する」などもある。

(352) 原発事故の影響で放射線量が累積し、健康に影響するのを避けるためとして、「おおむね1カ月をめどに」、住民が村の外に出ることを求める。(朝・社)

(353) 現代は、乱脈なる乱倫の乱世で、乱心者も多いが、しかし乱訴というのは社会に及ぼす影響も大きいであろう。(『天窓に雀のあしあと』)

(354) 簡単に言えば、デカルトは心と物とを厳しく分割し、物が心に働きかけることも心が物に作用することも否定したのである。(『空間と人間』)

3.9 受身的なむすびつき

〔受身的なむすびつき〕を表わす連語は、自動詞の場合は、「捕まる」「見つかる」などのような語彙的に受身的な意味が含まれている動詞と人を表わす二格の名詞とのくみあわせであり、ある動作が二格の名詞で示されている人によって引き起こされることを表わす。他動詞の場合は、「教わる」などの動詞と人を表わす二格の名詞と事柄を表わすヲ格の名詞とのくみあわせであり、ヲ格の名詞で示されている事柄について、ある動作が二格の名詞で示されている人によって引き起こされることを表わす。二格の名詞は受身的な動作を引き起こした人を示す。「受身的な構造」を示すと、以下の通りである。

受身的な構造

【 <人>に <受身的>Vi 】

[動作主] [受身的]

・例：警察に捕まる、先生に見つかる

【 <人>に <事>を <受身的>Vt 】

[動作主] [受身的な動作の内容] [受身的]

・例：母親に料理を教わる

(355) Hは、「兄チャンが警察に捕まった」と思うと、急に怖くなり体が震えだした。
(『少年H』(上巻))

(356) あの奥さん、とても料理が上手でね、私は今でも時々、彼女に教わった料理を作ります。(『泣かない子供』)

この2例は下の(355')と(356')と大意は変わらないであろう。

(355') 兄チャンが警察に捕まえられた。／警察が兄チャンを捕まえた。

(356') 私が彼女に料理を教えられた。／彼女が私に料理を教えた。

このように、(355)においては、二格名詞の「警察」は他動詞「捕まえる」で表わされる動作を実際に行う人間である。自動詞「捕まる」によって表わされる結果状態は「警察」によって引き起こされるという意味合いが、二格の名詞と動詞との間に存在している。同じく他動詞同士であるが、(356)と(356')の「教わる」と「教える」の間にも同様な対応関係が見られる。(356)において、二格名詞の「彼女」は「教える」動作を実際に行う人間である。

〔受身的なむすびつき〕を作ることができる動詞は、すでに挙げた「捕まる」「見つかる」のように、ほとんどが対になる他動詞（「捕まえる」「見つける」）を有しており、そして他動詞との間に(355)と(355')が示しているような意味的・構文的な対応関係を持っていることが特徴であろう。この構文的な特徴（「対応する他動詞の受動文と同様な位置づけを持つ」（杉本（1991:234））から、杉本はこの種の動詞を「受動詞」と呼んでいる。「捕まる」「見つかる」の他に、杉本（同:239）では「苦しむ、傷つく、驚く、喜ぶ」などの感情を示す動詞も挙げられている。前述したように、〔受身的なむすびつき〕を作る動詞は語彙的に受身的な意味が含まれている動詞であり、また「受身的な構造」においては、二格は人名詞でなければならない。この2点から、本研究では「苦しむ、傷つく、驚く」などの人間の感情を表わす動詞と二格の名詞のくみあわせを〔受身的なむすびつき〕に入れず、〔感情的な態度のむすびつき〕を表わす連語として分類している（3.6.1.1節参照）。

「捕まる」とはやや性質が異なるが、以下の「育つ、ばれる」の例も〔受身的なむすびつき〕として扱っていいであろう。

(357) たとえば、中流の家庭に育ち、教養のある両親の下で成長した少年が、なぜあんな非行をなしたのだろう、という疑問である。（『性格はいかにつくられるか』）

(358) 風呂屋へ三日つづけて行かなかったので、母親にバレそうになった。（『少年 H』（上巻））

(357) では、自動詞「育つ」が「育てる」という対応する他動詞を持っており、上掲の(355)の場合と似て、「中流の家庭に育つ」は「中流の家庭で育てられる」の意味である。(358)において、自動詞「ばれる」は「母親に知られる」という意味を表わしている。

このように、この2例においても、二格の名詞と動詞との間に受身的な意味が表現され、連語全体は〔受身的なむすびつき〕を作っている。ただし、「育つ」「ばれる」は「捕まる」「見つかる」などに比べ、動作主性が低い。動詞で表わされる結果状態が二格の名詞によって引き起こされるという意味合いも弱い。

「濡れる」「揺れる」「染まる」など自然現象を示す動詞があり、それぞれが「雨」「風」「夕日」など自然現象を表わす二格の名詞とくみあわさると、連語全体は受身的な意味を帯びている。例えば以下のような例である。

- (359) 雨に濡れた街路の匂い。一巡ごとに心がしずかに鮮明になり、私はまた一人になるときがきたのを知った。(『泣かない子供』)
- (360) すると、動いていないはずの電車なのに、校庭の花や木が、少し風に揺れているせいか、電車が走っているような気持ちになった。(『窓ぎわのトットちゃん』)
- (361) それからグランドに大の字になり、ぐったりした体を大地のひんやりと心地よい抱擁にゆだねて、夕日に赤く染まった雲を眺めながら覚えた恍惚感、あれはいったい何だったのか。(『読書のたのしみ』)

実際に、これらの例においても、それぞれは対応する他動詞(「濡らす」「揺らす」「染める」との間)に上で見た(355)と(355')が示しているような意味的・構文的な対応関係を持っている。すなわち、「雨に濡れる」は「雨に濡らされる」のことであり、「風に揺れる」は「風に揺らされる」のことであり、「夕日に赤く染まる」は「夕日に赤く染められる」のことである。この点においては、この種の連語は「受身的なむすびつき」を表わす連語に近く、何らかの関係を持っている。

(359)～(361)のような連語は、奥田(1962[1983])では「状況的なむすびつき」のうちの「原因のむすびつき」に分類している。「原因のむすびつき」を表わす連語については、奥田(1962[1983]:322)は「自然現象や生理的な現象をしめす動詞が、現象をしめすに格の名詞とくみあわさると、原因のむすびつきができる。かざられ動詞でしめされる現象が、かざり名詞によって条件づけられるのである。」と述べている。

しかし、(359)～(361)における二格の名詞と動詞とのむすびつきは、奥田氏の言う「状況的なむすびつき」に属する他のむすびつき(「空間的なむすびつき」(例:「ねこがひなたにまあるくなっている」)、「情勢的なむすびつき」(例:「雨にやってくる」)、「時間的なむすびつき」(例:「六時にしまる」))に比べるとより強い。さらに下の2例と比べてみよう。

- (362) そのあまりの不自然さに、にぶい私もやっとわかった。(『キッチン』)
- (363) だからチンパンジーにいちばん近いのは、ゴリラではなく、われわれ人間である。そんな話に、クラス中が笑った。(『世界の中心で、愛をさけぶ』)

この2例においては、二格の名詞と動詞とのむすびつきが弱く、二格の名詞と動詞には制限がなく、かなり自由である。本研究では、基本的に「状況的なむすびつき」を連語と考えないので、(359)～(361)のような例をどう扱うべきかは今後の課題にしたい。

以上、本章では、〔対象的なむすびつき〕を9つのタイプに分けて、それぞれについて見てきた。次に、第4章では、〔規定的なむすびつき〕を述べる。

第4章 規定的なむすびつき

〔規定的なむすびつき〕を作る連語では、二格の名詞で示されている物、状態あるいは現象は、動詞が表わす動作のもっている何らかの側面を規定してかかる。

すでに述べたように、〔対象的なむすびつき〕を表わす単語のくみあわせでは、二格の名詞と動詞との関係が対象的である。これに対して、〔規定的なむすびつき〕を表わす単語のくみあわせにおいては、奥田（1962[1983]:309）も指摘しているように、二格の名詞と動詞とで示される2つのものの関係は、「内的」である。

二格の名詞が動作をどういう側面から規定しているかということに応じて、〔規定的なむすびつき〕は次の3つのカテゴリーに分かれる。

第1節 結果規定のむすびつき

第2節 内容規定のむすびつき

第3節 目的規定のむすびつき

以下、カテゴリーごとに詳しく述べる。

4.1 結果規定のむすびつき

〔結果規定のむすびつき〕を表わす連語は、自動詞の場合は、「なる」をはじめとする変化動詞と物や人や事を表わす二格の名詞と、同じく物や人や事を表わすガ格の名詞とのくみあわせであり、ガ格の名詞で示されている物や人や事が二格の名詞で示されている物や人や事に変化することを表わす。他動詞の場合は、「変える」などの変化動詞と物や人や事を表わす二格の名詞と同じく物や人や事を表わすヲ格の名詞とのくみあわせであり、ヲ格の名詞で示されている物や人や事を二格の名詞で示されている物や人や事に変化させることを表わす。二格の名詞は動作あるいは状態を結果の側面から規定している。「結果規定の構造」は以下のように示すことができる。

結果規定の構造

【 <物/人/事>が	<物/人/事>に	<変化>Vi	】
[変化の主体]	[変化の結果]	[変化]	

・例：友達が俳優になる、形容詞が動詞に変わる

【 <物/人/事>を	<物/人/事>に	<変化>Vt	】
[変化させる対象]	[変化の結果]	[変化]	

・例：小切手を現金にかえる

変化動詞には以下のようなものがある。

終わる、変える、変わる

一変する、様変わりする、転じる、発展する、扮する、変身する、変ずる、変装する、変貌する

- (1) 達夫が若手社員でも群を抜くやり手で、三十になるやならずで係長になった出世頭なのに引きかえ、波多野は年は三つ下だが、有力筋のコネ入社で、仕事よりも趣味に重きを置くタイプだった。（『男どき女どき』）
- (2) 炭屋のオッチャンの店は、お好み焼き屋でもあった。夏になると、“炭屋”は“氷屋”に変わって、店先に「氷」と書いた旗がひるがえっていた。（『少年H』（上巻））
- (3) 陸戦から海戦へ、さらに空戦へと進んできたそのプロセスはいまやそのスケールをはるかに拡大し、大陸間の空間攻撃から宇宙空間内の戦争（space war）にまで発展しようとしている。（『空間と人間』）
- (4) テロの背景には貧困と差別、憎悪の荒野が広がる。それをどう沃野（よくや）に変えるか。（朝・天）

なお、動詞「なる」はその語彙的な意味の多義性に頼って、他の変化動詞よりも広い範囲における変化を表わすことができる。例えば、上で挙げたものの他に、「夜」「夏」のような時間あるいは時期を表わす二格の名詞ともくみあわさりやすい。この場合、「なる」は「その時刻・時期に至る」という意味であり、連語全体は時間的な変化を表わしている。なお、こういった連語においては、変化の主体が普通現われておらず、また補うことも難しい（「時間/時期が…になる」のように言えないことはないが）ことは特徴であろう。

- (5) 「学校は？」まだ屋にもなっていない時間だったので、僕は聞いた。（『落花流水』）
- (6) しかもこの主婦のように、こういうエリート馬鹿の生まれきたった原因まで考察して弾劾している。ずいぶん風通しのいい時代になったものである。（『天窓に雀のあしあと』）

また、「なる」と意味的に対になると言える他動詞「する」も語彙的な意味の多義性により、変化動詞として機能する場合がある。

- (7) てきぱきと開かれた包みからは、なんでもジュースにしまいそうな、見事なジュースが出てきた。（『キッチン』）
- (8) 二、三時間の授業があり、あとは校庭を皇にする作業と、防空壕掘りが日課であった。（『母の影』）

典型的な変化動詞の他に、「仕立てる、育つ、育てる」などの生産動詞と、「生まれる」などの出現動詞もこのグループに入る。

- (9) 敏子は、二人の子どもを、“汚れなき天使”のような子に育てようと決心したらしく、“献児式”というのを教会で行った。それは、カソリックの幼児洗礼に相当する儀式であった。(『少年 H』(上巻))
- (10) 精神病院の俣に生まれたことに初めは抵抗し、文学部を選んだものの、戦争になり、医学生ならば徴兵を延期されると知ると、ただちに大した抵抗もなく祖父と父と同じ道へと駒を進めた。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)

また、「折れる、崩れる、太る、曲がる」などのような、ものの形状の変化の意味を語彙的に含んでいる動詞や、「増える、分かれる、分ける/分割する」などものの増減を表わす動詞も〔結果規定のむすびつき〕を表わす連語を作ることができる。例えば以下のような例である。

- (11) 千葉県野島崎沖では、この十年間に三万トン級の大型鉱石運搬船などが、船体が真二つに折れるなどして沈没したり行方不明になっている。(『男どき女どき』)
- (12) その頂点をてべして傘を開きかけの茸型にむくむくと太って行く。(『黒い雨』)
- (13) 「ありゃ、大仏さまがふたつにふえてる！ おじいさん、たいへんだよ。大仏さまがふたりいらっしゃるよ」(『ブンとフン』)
- (14) 勤労奉仕団員は、三次町に行くものと庄原町に行くものと、東城町に行くものと三隊に分かれて出発した。(『黒い雨』)

なお、(11)～(14)に見られるように、この種の連語における二格の名詞(「真二つ」「茸型」「ふたつ」「三隊」)は、「ころころに太る」「ばらばらに分かれる」などのように副詞的になっていることが多い。

「かえる」を含む複合動詞「着替える」「穿き替える」などの動詞が二格の具体名詞とくみあわさって、〔結果規定のむすびつき〕を表わす連語を作る場合もある。

- (15) 借りた寝まきに着替えて、しんとした部屋に出ていった。(『キッチン』)
- (16) それから、リュックザックに入れておいた地下足袋にはきかえたが、それでも痛痒は去らなかった。(『母の影』)

なお、この種の連語については、奥田(同:311)は「/交換する/という意味でのかえるはとりかえる、のりかえる、きかえる、はきかえるのようなかさね動詞の成分になっていて、これらの動詞とに格の名詞とのくみあわせは、規定的ではなく、対象的なむすびつき

をつくっていて、結果規定のむすびつきの出発点をなしている。」と述べている。

さらに、語彙的には変化の意味に欠けていると思われる現象性の動詞が、様態を示す二格の名詞とくみあわさると、結果規定的な関係が表現される場合がある。

(17) 「でも、明治の初めごろインキで書いた手紙、茶色に薄れていました。ひい爺さんが東京の人から貰いなさった手紙、文字が茶色に薄れています」(『黒い雨』)

(18) その子のケチャップ色に染まった唇が動くのを、私は不思議な気持ちで眺めていた。(『落花流水』)

上の2例の他に、以下のようなものもある。

(19) 真っ白に泡立つ、薔薇色に色づく、オレンジ色に浮き上がる、虹色に映る、人なつこい色に潤む、鮮やかな緑に輝く、灰色にかすむ、乳色に煙る、薄紫色に澄み切る、灰色に濁る、銀色に光る、羊羹色に焼ける；山気に染まる、残忍な光に燃える

これらの連語を作る動詞のうち、〔出現物のありか〕ですで見たとおり、「浮かぶ、浮き上がる、映る」などは場所を示す二格の名詞とくみあわさって、〔出現物のありか〕を表わす連語を作ることができる(例えば、「山の上に白雲が浮かぶ」「ガラスに人が映る」)。

なお、この種の連語に現われることができる名詞は、「茶色」「薔薇色」のような色を表わすものや、「山気」「残忍な光」など、ものの様態を修飾するようなものに限られ、動詞も上に挙げた現象性の動詞がほとんどのようである。また、これらの連語において、二格の名詞と動詞との関係は、「(平社員が)係長になる」「(炭屋が)氷屋に変わる」などに比べてかなり弱く、むすびつきの性格は二格名詞の語彙的な意味への依存性が高いと言えるであろう。

4.2 内容規定のむすびつき

〔内容規定のむすびつき〕を表わす連語は、自動詞の場合は、「見える」「聞こえる」のような認知活動を表わす動詞と人や物や現象を表わす二格の名詞のくみあわせと同じく、人や物や現象を表わすガ格の名詞とのくみあわせであり、主体がガ格の名詞で示されている人や物や現象を二格の名詞で示されている物や人や現象のように認知することを表わす。他動詞の場合は、「見る」「感じる」のような認知活動を表わす動詞と人や物や現象を表わす二格の名詞のくみあわせと同じく、人や物や現象を表わすヲ格の名詞とのくみあわせであり、主体がヲ格の名詞で示されている人や物や現象を二格の名詞で示されている物や人や現象のように認知することを表わす。二格の名詞は認知活動を内容の側面から規定し

ている。「内容規定の構造」を以下のように示すことができる。

内容規定の構造

【 <人/物/現象>が <人/物/現象>に <認知/心理>Vi 】
[認知活動の対象] [認知活動の内容] [認知活動]

・例：月が満月に見える、その声が犬の声のように聞こえる

【 <人/物/現象>を <人/物/現象>に <認知/心理>Vt 】
[認知活動の対象] [認知活動の内容] [認知活動]

・例：人生を面白いものに感じる、彼を頼もしい人に思う

〔内容規定のむすびつき〕を表わす連語を作りうる動詞は、「聞こえる」「見える」をはじめ、「思う、考える、感じる、決まる、決める」などがある。

- (20) エステールは笑うのを止め、路地の上に貼りついた月を見上げた。わたしには満月に見えるが、実際には少し欠けているのかもしれない。(『幸福な結末』)
- (21) ほとんど半狂乱の声だった。それが、団地の、高い建物の間を反響して、とてつもない大声に聞こえる。(『百年目の同窓会』)
- (22) そんな漁師を臨機応変に見つけ出す能島さんもまた頼もしい人に思われた。(『黒い雨』)
- (23) そして先刻からのあの妙な、何の理由も腹立たしいこともないのに、二人の人間がつくっていたお互いに知らぬふうをしていたものを、またと得難いものに感じた。(『女ひと』)

〔内容規定のむすびつき〕においては、認知活動の内容は「満月」のような具体物や「頼もしい人」のような人でもいいし、「大声」「得難いもの」のような抽象的なものでもいい。ただし、このような内容は認知活動を行う主体の主観的な判断であって、そのものの実際の様子や状態とは必ずしも一致しない。(20)はこのことをよく表わしている。よって、この種の連語のあるものの二格の名詞は比喩的に「～のように」と言い換えられても意味は変わらない。例えば、(20)は「満月のように見える」に言い換えられる。

認知活動を表わす動詞の他に、「する」「指定する」なども〔内容規定のむすびつき〕を作ることができる。

- (24) 「ようし。このつぎの小説は、ひとがまちがっても買おうとしないような、むずかしい小説にしてやろう」(『ブンとフン』)
- (25) 政府は近く、福島第一原発から 20 キロ圏外の一部地域を「計画的避難区域」に指定する見通しだ。(朝・社)

4.3 目的規定のむすびつき

〔目的規定のむすびつき〕を表わす連語は、自動詞の場合は、主に「行く」「来る」などの移動動詞と事柄を表わす二格の名詞とのくみあわせであり、主体が二格の名詞で示されている事柄を目的に移動動作を行うことを表わす。他動詞の場合は、「使う」「用いる」などの動詞と物や事を表わす二格の名詞と同じく物や事を表わすヲ格の名詞とのくみあわせであり、二格の名詞で示されている物や事を目的としてヲ格の名詞で示されている物や事に対してある動作を行うことを表わす。二格の名詞は動詞で示されている動作を目的の側面から規定している。「目的規定の構造」は以下のように示すことができる。

目的規定の構造

【 <事>に <移動>Vi 】

〔移動の目的〕 〔移動〕

・例：買い物に行く、相談に来る

【 <物/事>を <物/事>に Vt³⁵ 】

〔動作の対象〕 〔動作の目的〕

・例：木を材料に使う、いろいろな方法を治療に用いる

まず、自動詞の場合は例えば以下のような用例がある。

(26) 重松たち三人は大池へ釣に行くのを暫く諦めていたが、庄吉さんの云い出しで三人共同で鯉の稚魚を大池に放つことにした。(『黒い雨』)

(27) 死体を引取りにきた三人の話は、だいたい以上のおりであった。これは、刑事の鳥飼重太郎も傍にいて聞いたことである。(『点と線』)

次に、他動詞の場合は以下の用例から見られるように動詞のカテゴリカルな意味に限定がなく、様々な動詞が現われることができる。

(28) 村の家ともなれば、牛糞を材料に使った壁に、草ぶきの屋根の小屋になるが、そこでは人々は、チャルパイと呼ばれる床が編物になったベッドを戸外に出して、その上に布をひっかぶって寝ている。(『永遠の前の一瞬』)

(29) どうも動詞による客体化表現を、話者自身についての説明に用いることは、日本語としてなじまない。(『日本人の発想、日本語の表現―「私」の立場がことばを決める―』)

³⁵ 「目的規定の構造」の他動詞の構造においては、動詞のカテゴリカルな意味に特に限定がないので、ここで「V」とのみ記載する。また、下段の文法的な意味も記載しない。

(28) と (29) のような例において、二格の名詞が動作性名詞でないとき、「～として」に言い換えることができる。例えば (28) の「牛糞を材料に使う」を「牛糞を材料として使う」と言うこともできる。

また、奥田 (1962[1983]:316) も指摘しているように、「～用に」「記念に」「お礼に」などいくつかの二格の名詞は、「目的的な、あるいは意義づけ的な意味をもった副詞へちかづいていて、かざられ動詞の語彙的な意味に限定されないで、目的的なむすびつきをつくっている」。例えば、以下のようなものである。

(30) 石黒が返事をしないうちに店に入り、進物用に包んで下さいね、と声をかけていた。(『男どき女どき』)

(31) H の家に不似合いな立派な銀のナイフとフォークがあったのは、アメリカ人のミセス・ステープルスという宣教師が、帰国するとき記念にプレゼントしてくれたからだ。(『少年 H』(上巻))

なお、このようなものは二格の名詞と動詞とのむすびつきがかなり弱いため、本研究で言う連語から離れている。ここは触れるだけに留めたい。

以上、本章では、〔規定的なむすびつき〕の 3 つのカテゴリーを見てきた。

第3部 二格の名詞と動詞からなる連語がなす体系

第3部では、第2部で行った二格の名詞と動詞からなる連語の分類をもとにして、二格の名詞と動詞からなる連語がなす体系を明らかにする。すなわち、二格の名詞と動詞からなる連語が表わす個々のむすびつきはお互いにどう関係し合うかを記述する。

第2部で見たように、二格の名詞と動詞からなる連語は大きく〔対象的なむすびつき〕と〔規定的なむすびつき〕に分かれる。量的に見ても、〔対象的なむすびつき〕は二格の名詞と動詞からなる連語の大部分を占める。実際に、二格の名詞と動詞からなる連語の体系の中では、〔対象的なむすびつき〕は中核をなしており、〔規定的なむすびつき〕はその周辺に位置し、また、〔規定的なむすびつき〕は〔対象的なむすびつき〕から派生してきたものであると思われる。このことは第5章で確認する。

また、第3章で見たように、〔対象的なむすびつき〕を表わすものは、9つの下位のカテゴリーに分かれているが、それ自体も一つの体系をなしている。第6章では、〔対象的なむすびつき〕の各カテゴリーの間の相互関係を述べる。

第5章 〔規定的なむすびつき〕と〔対象的なむすびつき〕との相互関係

〔規定的なむすびつき〕は第4章で見たように、〔結果規定のむすびつき〕、〔内容規定のむすびつき〕、〔目的規定のむすびつき〕の3つのカテゴリーに分かれているが、いずれも〔対象的なむすびつき〕と相互関係をもっている。以下、それぞれが〔対象的なむすびつき〕とどう関係するかを詳述する。

5.1 〔結果規定のむすびつき〕と〔対象的なむすびつき〕

奥田(1962[1983]:311)も「かえす、うつす、もどる、すすむのような移動動詞が抽象名詞とくみあわさって、変化動詞に移行し、この種のむすびつき（〔結果規定のむすびつき〕：引用者注）をあらわす単語のくみあわせをつくることができる。」と指摘しているように、〔結果規定のむすびつき〕と〔対象的なむすびつき〕の相互関係は、主に〔移動のむすびつき〕を介して成り立っている。この関係を簡単に示すと、次のページの図1になる。

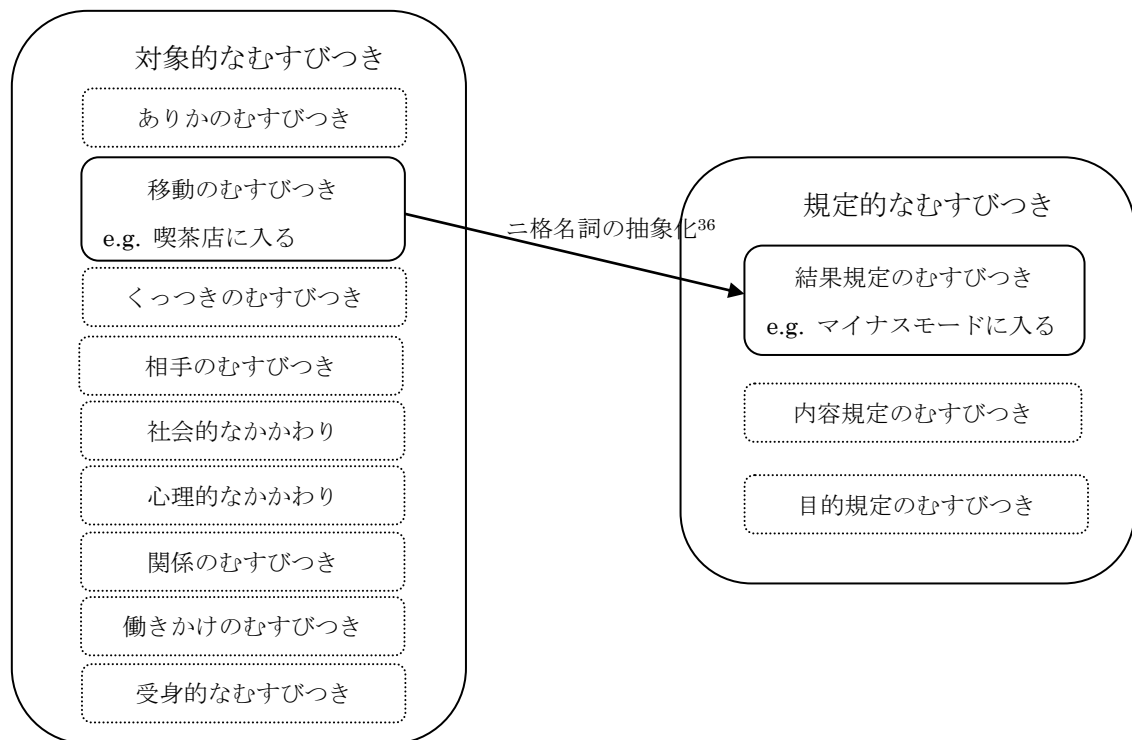


図1 「結果規定のむすびつき」と「対象的なむすびつき」との相互関係

3.2節で見たように、移動動詞と二格の方向名詞あるいは場所名詞とのくみあわせは、「移動のむすびつき」を作るが、移動動詞のうち、特に着点動詞のいくつかは、二格の抽象名詞とくみあわせると、「結果規定のむすびつき」を作るようになる。例えば「陥る、入る、戻す、戻る/達する」などの動詞である。以下の「入る」、「陥る」と「達する」のそれぞれの例を比べてみよう。(1a) (2a) (3a) は「着点のむすびつき」であり、(1b) (2b) (3b) は「結果規定のむすびつき」である。

- (1) a. 塩村は、銭湯の一軒おいて隣の喫茶店に入った。(『男どき女どき』)
b. 反対にネガティブな思いで始めてしまうと、何かマイナスモードに入ってしまう。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)
- (2) a. やむなく歩くこと約二時間、脚が棒のようになるころになって初めて公共浴場に指定された湖岸に達することができた。(『空間と人間』)
b. はまりこむわたしの癖が、この時頂点に達します。(『読書のたのしみ』)
- (3) a. うさぎはうっかりして穴の中に陥った。(作例)
b. そして、またしても私は、悲惨な戦局の中にある日本とは離れた別天地に自分がいるような錯覚に陥ったのである。(『母の影』)

³⁶ ここは相互関係の主な手段を示す。以下同様。

なお、「陥る」と「達する」は二格の場所名詞とくみあわさって、(2a) と (3a) のような〔着点のむすびつき〕を作る場合がかなり少ないようである。特に「陥る」は今回収集した用例にはなかった。

また、下の (4) (5) のように、着点動詞が具体名詞とくみあわさって、〔結果規定のむすびつき〕を作る場合もある。

(4) ゴミはみるみる大きくなって、もとのブンと名乗る男にもどった。(『ブンとフン』)

(5) 現在の養毛液はある程度の効果は望めるが、十年前、二十年前のフサフサとした頭髪に戻すことは不可能といってよい。(『ボクは好奇心のかたまり』)

さらに、「夏休み」「十九世紀」のような時期を表わす名詞や、「五十万円」「7 万人」など数量を表わす名詞が二格にたつ例もある。前者とくみあわさる動詞には「入る」「至る」などがあり、後者には「達する」「のぼる」などがある。このうち、特に「のぼる」は数量詞とくみあわさりやすいようである。

(6) 夏休みに入ってからは、ほとんど毎日のようにやって来た。(『世界の中心で、愛をさけぶ』)

(7) とにかく書き継いできて十九世紀にいたった。(『読書のたのしみ』)

(8) ここでついに、資金は五十万円に達し、最初の私の願い通り十万球のビタミン A が買えることになったのである。(『永遠の前の一瞬』)

(9) すでに失業手当を受けることが決まった人だけで4万人強、手続きを始めた人は7万人近くにのぼる。(朝)

少ないが、行く先動詞にもこの現象が見られた。

(10) 容貌はたんに青少年の間ばかりでなく、壮年期初老期を通じて、こいつばかりは文章を胡麻化しようには出来ないで、私はほとんど困じはてて遂々晩年に近づいた。(『女ひと』)

(4) ～ (10) の共通点は、ほとんど「～になる」あるいは「～を～にする」に言い換えられることである。奥田(同:311)も指摘しているように、「なる」と「する」は「結果規定のむすびつきをつくる動詞のうちで一番よくつかわれる」のである。なお、(6) ～ (10) については、3.2.2 節で述べたように、本研究はこれらの連語を〔着点のむすびつき〕の特殊なものとして位置付けているが、〔結果規定のむすびつき〕にかなり近い。

5.2 「内容規定のむすびつき」と「対象的なむすびつき」

「内容規定のむすびつき」と「対象的なむすびつき」との関係については、奥田（同）は言及していないが、4.2 節で見たように、「内容規定のむすびつき」を作ることができるのは、「見る、見える、聞く、聞こえる、思う、感じる」のような認知活動を示す動詞が多いことから、「ありかのむすびつき」のうちの「認知物のありか」との関係を見いだせるのではないか。図示すると、下の図 2 になる。

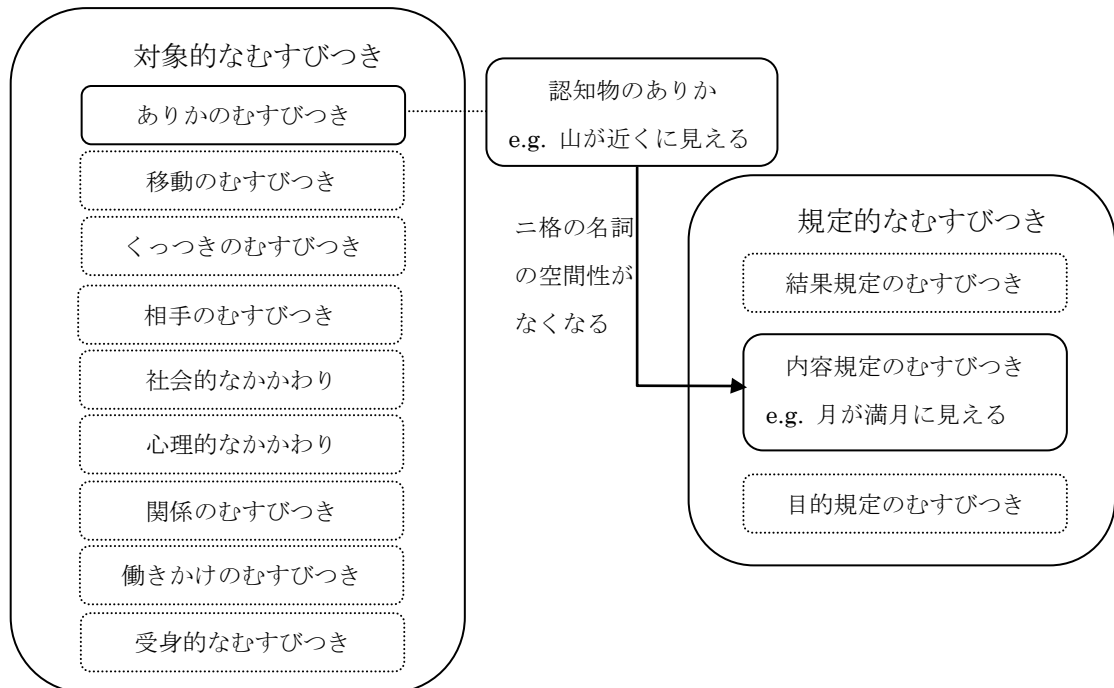


図 2 「内容規定のむすびつき」と「対象的なむすびつき」との相互関係

3.1.5 節で考察したように、「認知物のありか」を表わす連語においては、二格の位置には空間名詞がくるのが基本である。例えば「近くに山が見える」「駅のそばに家を見つける」のような連語である。空間性をもたない具体名詞や現象名詞および抽象名詞が二格に現われると、「内容規定の構造」ができあがり、「内容規定のむすびつき」を表わす連語に移行する。

また、語順においても、2 つの構造に違いが見られる。「認知物の構造」においては、「遠くに山が見える」でも「山が遠くに見える」でも言えるように、二格の名詞とガ格またはヲ格の名詞の位置は比較的自由である。これに対して、「内容規定の構造」では、「～が/を～に V」という語順が固く守られ、ガ格またはヲ格の名詞を二格の名詞と動詞との間に挿入することができない。従って、「認知物のありか」を表わす連語から「内容規定のむすびつき」を表わす連語への移行は、「内容規定の構造」と同じく「～が/を～に V」という語順をもっているもののみ起きる。

- (11) ほとんど半狂乱の声だった。それが、団地の、高い建物の間を反響して、とてつもない大声に聞こえる。(『百年目の同窓会』)
- (12) エステールは笑うのを止め、路地の上に貼りついた月を見上げた。わたしには満月に見えるが、実際には少し欠けているのかもしれない。(『幸福な結末』)
- (13) そんな漁師を臨機応変に見つけ出す能島さんもまた頼もしい人に思われた。(『黒い雨』)
- (14) 一人で生きる人生は、ただ長く、退屈なものに感じられる。ところが好きな人と一緒だと、あつと言う間に分かれ道まで来てしまうのである。(『世界の中心で、愛をさけぶ』)

なお、〔認知物のありか〕を表わす連語にも、「日ざしに冬の気配を感じる」「彼の言い方に反発を感じる」のように、二格に現象名詞や抽象名詞が現われているものもあるが、〔内容規定のむすびつき〕とは違う。(11)～(14)が示しているように、〔内容規定のむすびつき〕を表わす連語においては、二格の名詞とガ格またはヲ格の名詞が同質なものではないという制限がある(「声—大声」「月—満月」「能島さん—頼もしい人」「人生—退屈なもの」)。

認知物のありかを示す二格の名詞と内容規定の二格の名詞が同時に現われることはないようであるが、認知物のありかをノ格の名詞ではっきりさせる場合がある。例えば「遠くの月が満月に見える」のような連語は、実際に「遠くに月が見える」と「月が満月に見える」という2つの意味を含んでいる。

5.3 〔目的規定のむすびつき〕と〔対象的なむすびつき〕

4.3節で述べたように、〔目的規定のむすびつき〕を表わす連語は主に移動動詞と二格の動作性の抽象名詞からなるくみあわせである。それと〔対象的なむすびつき〕との関係については、奥田(同:315)は「この種のむすびつき(目的規定のむすびつき:引用者注)が、ゆくさきのむすびつきのずれ＝抽象化の結果うまれてきたことは、うたがいない。二三のばあい、かざり名詞はゆくさきのニュアンスをつよくもっている。」と述べ、「見物にいく」「東京から入湯にくる」のようなものを挙げている。〔目的規定のむすびつき〕と〔対象的なむすびつき〕との関係を次のページの図3に示すことができる。

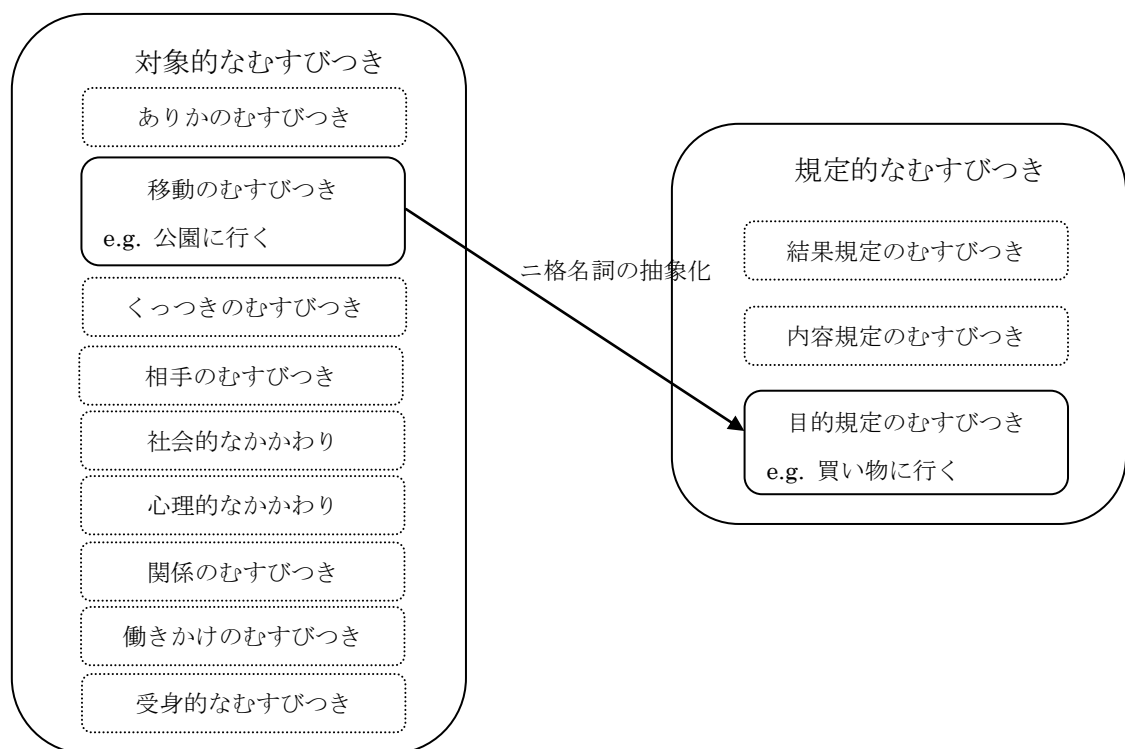


図3 「目的規定のむすびつき」と「対象的なむすびつき」との相互関係

〔移動のむすびつき〕を表わす連語では、二格の名詞は方向または場所を表わす具体名詞であり、例えば「東に向かう」「学校に行く」などの連語である。しかし、具体性を失い、動作性の抽象名詞が二格にたつと、例えば「買い物に行く」のような連語は〔移動のむすびつき〕からずれて、〔目的規定のむすびつき〕を作るようになる。このように、〔移動のむすびつき〕は二格名詞の抽象化によって〔目的規定のむすびつき〕を派生させると考えられる。

また、〔目的規定のむすびつき〕は〔移動のむすびつき〕と関係をもっていることは、下の(15)～(17)が示すように、同じ動詞が2つのむすびつきを同時に作りうることから窺える。

(15) それにマリの家に食事に行くのは憂鬱な日課ではない。(『落花流水』)

(16) ときどき四人の子供たちを、郊外にドライブに連れて行ってくれることもあった。
(『母の影』)

(17) 「本当にね」私は肯いた。「でも、ここへ相談に来たなんて、偶然ね」(『百年目の同窓会』)

(15)～(17)においては、1つの移動動詞は移動の行く先あるいは着点を示す二格の名詞(あるいはへ格)と、移動の目的を規定する二格の名詞との両方をとっている。そし

て、規定的にはたらく二格の名詞は対象的にはたらく二格の名詞と動詞との間に位置している。これに加えて、移動動詞の語彙的な意味を具体化するために、何よりも対象的にはたらく移動の行く先か着点を示す二格の名詞が義務的に必要であることから、「目的規定の構造」は「移動の構造」を基底にして成り立っていると言える。

5.4 まとめ

5.1 節から 5.3 節まで見た「対象的なむすびつき」と「規定的なむすびつき」との相互関係をまとめると、以下の図 4 になる。

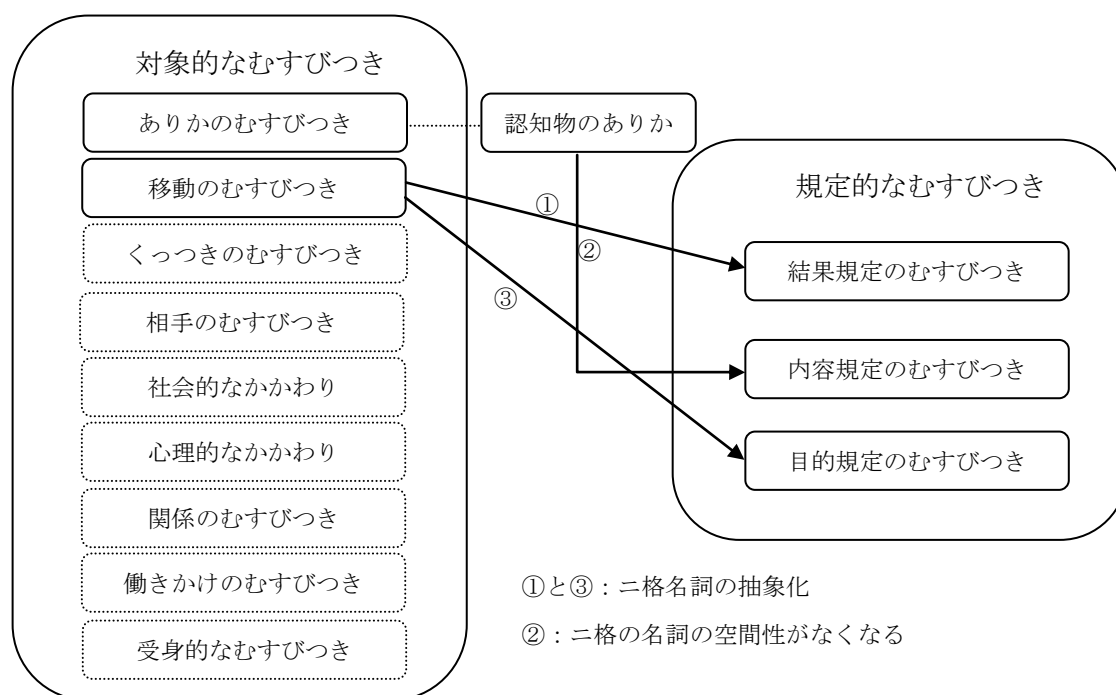


図 4 「対象的なむすびつき」と「規定的なむすびつき」との相互関係

第 6 章 「対象的なむすびつき」の各カテゴリーの間の相互関係

第 3 部ですでに述べたように、「対象的なむすびつき」を表わす連語は、さらに 9 つの下位のカテゴリーに分かれており、それ自体も一つの体系をなしている。

「対象的なむすびつき」がなす体系の中で、「ありかのむすびつき」「移動のむすびつき」「くっつきのむすびつき」がもっとも具体的なものであって、他のむすびつきとの関係において、歴史的な出発点をなしている（奥田（1962[1983]:298)）。「相手のむすびつき」を中間的なものとして、「社会的なかわり」「心理的なかわり」「関係のむすびつき」「働きかけのむすびつき」は抽象的なものになる。

本章で詳しく考察するが、まず「ありかのむすびつき」「移動のむすびつき」「くっつきのむすびつき」の 3 つのむすびつきの間に相互関係が存在しており、「ありかのむすびつき」がそれらの中心に位置している。その上、これら 3 つのむすびつきは「対象的なむすびつき」に属する他のむすびつきとの間にも発達した移行・派生などの相互関係が見られる。このように、「対象的なむすびつき」がなす体系の中で、この 3 つのむすびつきが中核をなしており、他のむすびつきはこの 3 つから派生し、それらを取り囲んでいると言えるであろう。このうち、特に「ありかのむすびつき」は他のすべてのむすびつきと関係をもっていることから、「ありかのむすびつき」は「対象的なむすびつき」がなす体系の中においてもっとも中心的な存在であることがわかる。

なお、残された「受身的なむすびつき」はその動詞の語彙的な意味の特殊性（受身的な意味をもっている）から、他のむすびつきとの直接的な関係をもちにくい。「対象的なむすびつき」がなす体系の中で、周辺的な存在であろう。

以下、「ありかのむすびつき」、「移動のむすびつき」、「くっつきのむすびつき」の 3 つのむすびつきを中心に、「対象的なむすびつき」の各カテゴリーの間の相互関係を考えるが、まずこの 3 つのむすびつき自体がどのような体系をなしているのか、またそれらの間にどのような相互関係があるのかを述べた上で、それぞれが他のむすびつきとどう関係し合うのかを述べる。それら以外の相互関係については最後にまとめて示す。

6.1 「ありかのむすびつき」と「移動のむすびつき」と「くっつきのむすびつき」

本節では、「対象的なむすびつき」を表わす連語の中で、もっとも具体的なものである「ありかのむすびつき」、「移動のむすびつき」、「くっつきのむすびつき」の 3 つのむすびつきの間の相互関係について考察する。

この 3 つのむすびつきは、「ありかのむすびつき」が中心に位置し、「移動のむすびつき」と「くっつきのむすびつき」が関係してくる。この関係については 6.1.3 節で確認する。また、「移動のむすびつき」と「くっつきのむすびつき」の間にも移行関係があり、6.1.4

節で述べる。なお、〔ありかのむすびつき〕と〔移動のむすびつき〕にはさらにいくつかの下位分類があり、それぞれの下位分類の間にも相互関係が見られる。よって、まず 6.1.1 節と 6.1.2 節で〔ありかのむすびつき〕と〔移動のむすびつき〕のそれぞれの体系を明らかにする。

6.1.1 〔ありかのむすびつき〕の下位類がなす体系

3.1 節で考察したように、〔ありかのむすびつき〕は〔存在物のありか〕、〔内在のむすびつき〕、〔所有者のむすびつき〕、〔所有物のありか〕、〔認知物のありか〕、〔出現物のありか〕、〔消失物のありか〕の 7 つのカテゴリーに分かれている。全体から見ると、7 つのカテゴリーのうち、空間的な存在を表わす〔存在物のありか〕と抽象的な存在を表わす〔内在のむすびつき〕は 2 つの中心として位置付けられ、その他のむすびつきは何らかの形で関係してくると言える。

これらのむすびつきの間の相互関係のし方は主に以下の 3 点にまとめられる。

- a) ともに「ある」という存在動詞で作りうるむすびつきである〔存在物のありか〕、〔内在のむすびつき〕と〔所有者のむすびつき〕の間は、「ある」を介して、三者は相互に関係をもっている。
- b) 〔認知物のありか〕、〔出現物のありか〕と〔消失物のありか〕を表わす連語は、動詞が文中で「～ている」形をとっている場合は、〔存在物のありか〕と〔内在のむすびつき〕を作るようになる。
- c) 〔認知物のありか〕と〔出現物のありか〕において、動詞の語彙的な意味のずれ＝抽象化によって、〔認知物のありか〕から〔出現物のありか〕に近づく。

以下はこの 3 点に分けて具体例を挙げながら見ていくが、〔ありかのむすびつき〕がなす体系を図示すると、次のページの図 5 になる。なお、〔所有物のありか〕は構造がやや特殊であることと、用例が少ないことから、他のむすびつきとの相互関係は今のところ見られない。

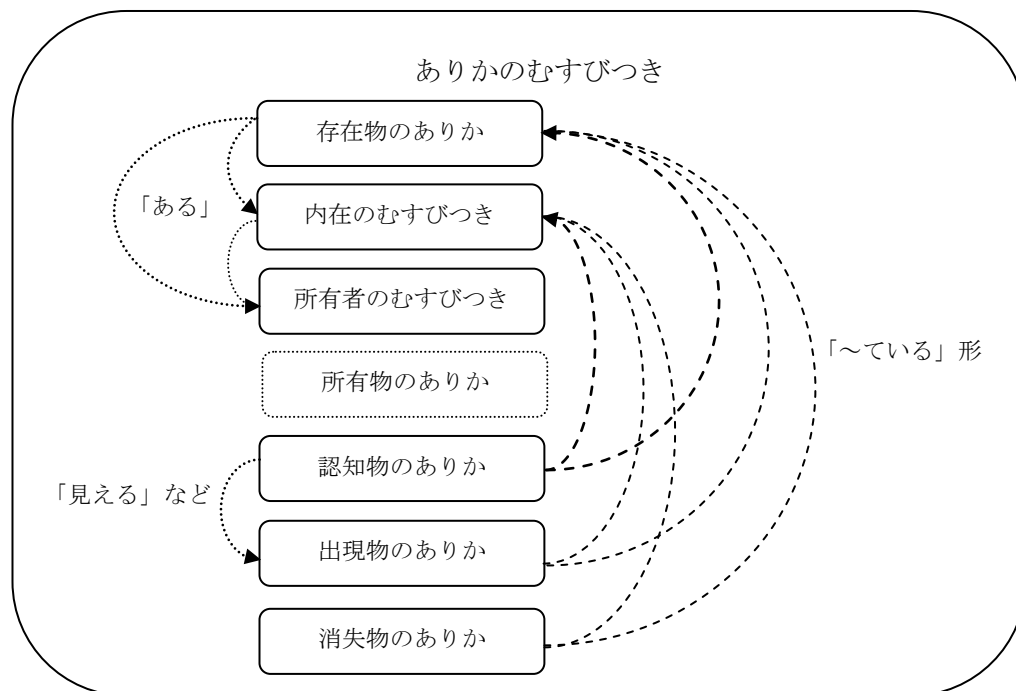


図5 「ありかのむすびつき」の下位類がなす体系

I、〔存在物のありか〕と〔内在のむすびつき〕と〔所有者のむすびつき〕

〔存在物のありか〕、〔内在のむすびつき〕と〔所有者のむすびつき〕を表わす連語はともに主に存在動詞「ある」で作られるため、二格の名詞やガ格の名詞の性質が変わることで、他のむすびつきに近づきやすい傾向が見られる。大まかに言えば、〔存在物のありか〕と〔内在のむすびつき〕を表わす連語において、二格に人名詞が現われると、〔所有者のむすびつき〕に近づくし、また、〔存在物のありか〕を表わす連語において、二格に抽象名詞が現われると、〔内在のむすびつき〕に近づく。以下それぞれを見る。

① 「存在物のありか」と「所有者のむすびつき」

〔存在物のありか〕において、二格に「手元」のような空間性ももっているが身体部位をも表わせる名詞がくると、〔所有者のむすびつき〕に近づきやすいようである。

- (1) ・ ・ ・、この定価七十円の中村白葉訳『アンナ・カレーニナ』第一巻だけは、今もわたしの手元にあります。(『読書のたのしみ』)
- (2) 私はすぐ、今手許にある金額だけ買って頂くようにお願いした。(『永遠の前の一瞬』)

(1) では、「本が手元にある」という連語は「本が手近なところに置いてある」の意味よりは、「本をもっている」という所有の意味を表わしていると言える。(2) はガ格の名

詞に相当するものとして抽象名詞「金額」が現われているため、連語全体は所有のニュアンスを一層強く帯びている。「手元にお金がある」に対して、例えば「私にお金がある」なら、〔所有者のむすびつき〕になる。

また、〔存在物のありか〕において、二格の名詞とガ格の名詞が「全体一部分」((3))あるいは「組織—内容」((4))の関係にあると、連語も〔所有者のむすびつき〕に近くなる。

(3)・・・、この旅館には、夜中に幼い子供があらわれる一室がある。(『ボクは好奇心のかたまり』)

(4)すると田村さんは、レッド・ラムにあるのはカットレットであって、トンカツではないというのである。(『永遠の前の一瞬』)

3.1.3 節で述べたように、〔所有者のむすびつき〕を作る連語では、二格の名詞は基本的に人名詞であるため、(3)や(4)のような連語は〔所有者のむすびつき〕を作れない。ただし、少ないが、組織名詞も〔所有者のむすびつき〕の二格に現われることができる。その場合は、「旅館」や商店は組織名詞としてとらえることもできるが、〔所有者のむすびつき〕なら、それぞれは下のようになるであろう。

(3') この旅館に新しい敷地がある

(4') レッド・ラムに珍しい料理がある

さらに、〔存在物のありか〕において、「～の間」のような複数性を前提とするものが二格にたつと、〔所有者のむすびつき〕にも近くなる。以下の2つの連語を比べると明らかである。

(5) 二人の間に子供がある 〔存在物のありか〕

(5') 二人に子供がある 〔所有者のむすびつき〕

〔存在物のありか〕と〔所有者のむすびつき〕との間に「二重二格の現象」³⁷が見られた。すなわち、一つの動詞に対して、存在物のありかを表わす二格の名詞と所有者を表わす二格の名詞が同じ文に同時に表われていることである。

(6) 重松のうちには日清戦争の当時まで、庭先に大きなケンポナシの木が五株もあつたと云われている。(『黒い雨』)

³⁷ 松本(1979:236)は、「これは、ありかのむすびつきのなかでの、むすびつき相互の独立性、対立性をしめす」と述べている。また、この現象は、もちぬしと存在空間の間(「お国には東京に力となる親戚がない」と、存在空間と部分・側面のありかの間「山形県・秋田県に大字の地名に開墾地を意味する語がおおい」と、もちぬしと属性の部分・ありかの間「太田にはこえに抑揚がない」に見られるとしている。

(6) では、一つの動詞（「ある」）に、二格の名詞が二つ（「重松のうち」「庭先」）くみあわさっている。「うち」は空間としての側面もあるが、この例では空間より「重松の家庭」という組織としての側面がはたらいで、「庭先」に対してその所有者を表わしている。従って、(6) において、「重松のうちに木がある」という連語は〔所有者のむすびつき〕を作り、「庭先に木がある」という連語は〔存在物のありか〕を作っている。また、二つの二格の名詞は「地理的な全体一部分」（「うち」―「庭先」）という関係を成しており、全体を示す二格の名詞は「～には」（「重松のうちには」）のように取り立てを受けることが多いのがこの種類のものの特徴であろう。

② 〔存在物のありか〕と〔内在のむすびつき〕

3.1.1 節で述べたように、〔存在物のありか〕において、二格には基本的に空間性のある具体名詞がたつが、具体性の薄い名詞が現われると、〔内在のむすびつき〕に近づいていく。

(7) しかし、この世には縁というものがあることを、近ごろ私は感ずるようになった。
（『母の影』）

(7) では、二格の名詞は「人をとりまく無形の場所」を表わし、連語全体が具体性を失っているという点において、〔内在のむすびつき〕に近いが、〔内在のむすびつき〕を表わす連語では、二格の名詞はガ格の名詞で示される部分、側面、属性のありかを示すのに対して、(7) における二格の名詞とガ格の名詞はそういった関係を成していない。

また、〔存在物のありか〕と〔内在のむすびつき〕は下のような連語を介して、連続している。

(8) うちにテーブルがある 〔存在物のありか〕
(8') うちにスペースがある 〔内在のむすびつき〕

(8) のように、〔存在物のありか〕においては、ガ格の名詞は基本的に具体名詞（「テーブル」）であるが、ガ格名詞の抽象化、すなわち (8') における「スペース」のような抽象名詞になることによって、二格の名詞は「物のありか」から「属性のありか」を表わすようになり、連語全体も抽象的なニュアンスを帯びてきて、〔内在のむすびつき〕を作るようになる。

③ 〔内在のむすびつき〕と〔所有者のむすびつき〕

3.1.2 節で述べたように、〔内在のむすびつき〕では、二格には物や人を表わす具体名詞も、事柄を表わす抽象名詞もたつことができるが、そのうち特に二格に人名詞がくると、〔所有者のむすびつき〕に近くなる。

- (9) わがままで図々しい女の子だけれど、昨日のうなぎといいこのラムネといい、彼女には人を喜ばせようとする可愛いところがある。(『落花流水』)

ただし、「所有者のむすびつき」を表わす連語では、ガ格名詞は人間の側面を表わす名詞よりも、「お金」、「家族」や「義務」「責任」などのような人間の所有物になれる物や人あるいは抽象的な概念を表わす名詞の方が普通である。

Ⅱ、〔存在物のありか〕〔内在のむすびつき〕と〔認知物のありか〕〔出現物のありか〕〔消失物のありか〕

〔認知物のありか〕、〔出現物のありか〕と〔消失物のありか〕を表わす連語のうち、動詞が文の中で「～ている」形をとっている場合、それと二格の名詞とガ格またはヲ格の名詞とのくみあわせは、〔存在物のありか〕あるいは〔内在のむすびつき〕を作るようになるものがある。

① 〔認知物のありか〕〔出現物のありか〕〔消失物のありか〕と〔存在物のありか〕

以下の(10)～(12)は動詞はそれぞれ認知動詞、出現動詞と消失動詞であるが、文中で「～ている」形をとると、それと二格の名詞とガ格またはヲ格の名詞とのくみあわせは、〔存在物のありか〕を表わす連語と言える。なお、(12)は他動詞「隠す」の受身形の「～ている」形である。

- (10) 植木の向こうに少しだけ見えるマリの家を眺める。軒下には、さっきお姉さんがお土産に買って来たと言って下げたガラスの風鈴が見えていた。(『落花流水』)
- (11) 何度もムツとしながらもふと外を見ると、遠くの空に飛行船が浮かんでいた。(『キッチン』)
- (12) しかし、どのポケットにも遺書らしいものはかくされていなかった。(『点と線』)

② 〔認知物のありか〕〔出現物のありか〕〔消失物のありか〕と〔内在のむすびつき〕

〔内在のむすびつき〕の場合は、動詞は認知動詞の「～ている」形が観察されなかった。以下、(13)と(14)は出現動詞の場合であり、(15)と(16)は消失動詞の場合である。それぞれは文中で「～ている」形をとると、それと二格の名詞とガ格またはヲ格の名詞とのくみあわせは、〔内在のむすびつき〕を表わす連語と言える。

- (13) 全体から醸し出される雰囲気というものには、誰かのことを心から労る優しさや、悲しみがしみ出ており、細い二つの目から今にも涙が零れ出てきそう。(『幸福な結末』)
- (14) 「世の中」という語に、作者の視点を通してとらえられる季節の移り行き、花見

で賑わう人間社会が脳裏に浮かんで、極めて人間臭い俳句風景を現出している。

(『日本人の発想、日本語の表現―「私」の立場がことばを決める―』)

- (15) ――十七歳にしても小柄なその体のどこに、睡眠一時間で頑張れるエネルギーが隠れているのか、使う側にいる英子が首をひねるのだから、少々妙なものである。
(『百年目の同窓会』)

- (16) ……、女の人というものはよく見ていると、どこかに美点の幾つかを匿しているものであって、それを見つけ出されないのは、相手の眼の配りが不足しているのだと解釈すべきである。(『女ひと』)

Ⅲ、〔認知物のありか〕と〔出現物のありか〕

〔認知物のありか〕を表わす連語を作る認知動詞の典型的なものの一つに、「見える」が挙げられる。「見える」は「現われる」という語彙的な意味を実現する場合は、連語全体は〔出現物のありか〕に近づく。例えば以下のような例である。

- (17) そのとき、発車寸前の電車の左側三メートルぐらいのところに、目もくらむほど強烈な光の球が見えた。(『黒い雨』)

- (18) 軋んだ音をたてて錆びついたドアが開くと、H のすぐ目の前に靴と足が見えた。人がぶら下がっていたのだ。(『少年 H』(上巻))

6.1.2 〔移動のむすびつき〕の下位類がなす体系

3.2 節で考察したように、〔移動のむすびつき〕は〔行く先のむすびつき〕と〔着点のむすびつき〕に分かれている。この 2 つのむすびつきは動詞の「～ていく/くる」形を介して、相互に関係している。〔移動のむすびつき〕がなす体系を以下の図 6 に示す。

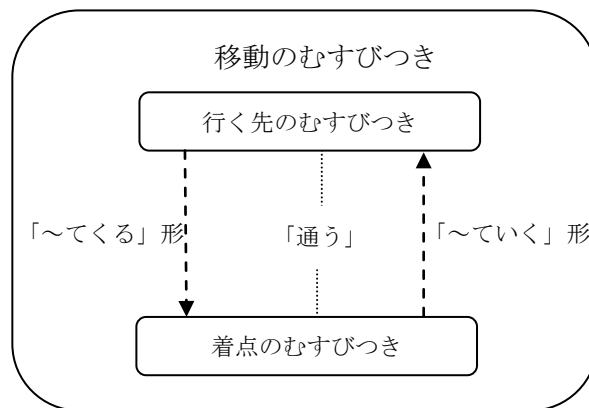


図 6 〔移動のむすびつき〕の下位類がなす体系

〔行く先のむすびつき〕と〔着点のむすびつき〕の相互関係は具体的には、着点動詞(3.2.2

節) が文の中で「～ていく」形をとっている場合、行き先動詞 (3.2.1 節) に近づき、連語全体も「行く先のむすびつき」に近づく ((19)(20))。反対に、行く先動詞が文の中で「～てくる」形をとっている場合、着点動詞に近づき、連語全体も「着点のむすびつき」に近づく ((21)(22))。

- (19) あとを追うように、下の鳩も飛び立ち、灰色の羽毛が二、三枚、ゆっくりと下に落ちていった。(『男どき女どき』)
- (20) 「こんばんは」そう言って僕は彼らのリビングに入って行く。(『落花流水』)
- (21) 薔薇のまわりには、蟻も蜂もよってくる。薔薇は、ほっそりした指の骨を思わせるそのきみどりの茎に蟻を這わせ、幾重にも重なった花びらの中にまるまると太った蜂を隠していたりするので、つい顔を埋めんばかりにして花のにおいをかいだときなど、私はしょっちゅうぎよとさせられた。(『泣かない子供』)
- (22) すなわち、橋が背後に迫ってきたとき、私が掌を上に向けて、両手を万歳した「よいしょ！」のポーズをする。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)

このように、「行く先のむすびつき」と「着点のむすびつき」はお互いに対立しながら、動詞の「～ていく/くる」形を介して連続しており、「移動のむすびつき」の体系を作り上げている。特に「行く」は、本研究では行く先動詞として分類しているが、下に示すように文脈によっては実際に到達した着点をも表わせる例が存在している。

- (23) 私は何度も泉水のほとりに行って洗ったが黒い雨のしみは消えなかった。(『黒い雨』)

(23) において、「行く」は「～に行つてV」という形で現われ、「ある場所に行つてからそこである動作を行う」という意味を表わすため、二格の名詞は行く先だけでなく、着点でもある。

また、移動動詞のうち、やや特殊な意味をもつものに「通う」がある。「通う」は「ある目的地に向かって移動する」や「ある場所に到達する」といった意味ではなく、「同じ場所に何度も行き、そこで何かをして帰ってくる」という意味を表わすため、それとくみあわせる二格の場所名詞は行く先であり着点でもある。従つて、例えば下の (24) のような連語は、「行く先のむすびつき」を作るか、それとも「着点のむすびつき」を作るかのように分類することができない。

- (24) 切り花が好きだった祖母は、いつも台所に花を絶やさなかったもので、週に二回ぐらいは花屋に通つていた。(『キッチン』)

(23) と (24) のような例の存在は、〔行く先のむすびつき〕と〔着点のむすびつき〕を全く別のものとして切り離すことができず、同じく〔移動のむすびつき〕を表わす連語の体系においてお互いにつながっていることを物語っている。

6.1.3 〔ありかのむすびつき〕の下位類と〔移動のむすびつき〕〔くっつきのむすびつき〕

〔移動のむすびつき〕と〔くっつきのむすびつき〕は、〔存在物のありか〕〔内在のむすびつき〕〔所有者のありか〕〔出現物のありか〕の4つのタイプを介して、それらの上位の〔ありかのむすびつき〕と関係をもっている。その際に、主に動詞の「～ている」形がかかわっているが、〔存在物のありか〕に関しては、他動詞の「～てある」形および受身形の「～ている」形（「～(ら)れている」の形）も深く関与している。また、〔所有者のありか〕と〔出現物のありか〕の場合は、動詞の語彙的な意味のずれ＝抽象化の結果とも言える。〔ありかのむすびつき〕と〔移動のむすびつき〕〔くっつきのむすびつき〕との相互関係を下の図7に示すことができる。

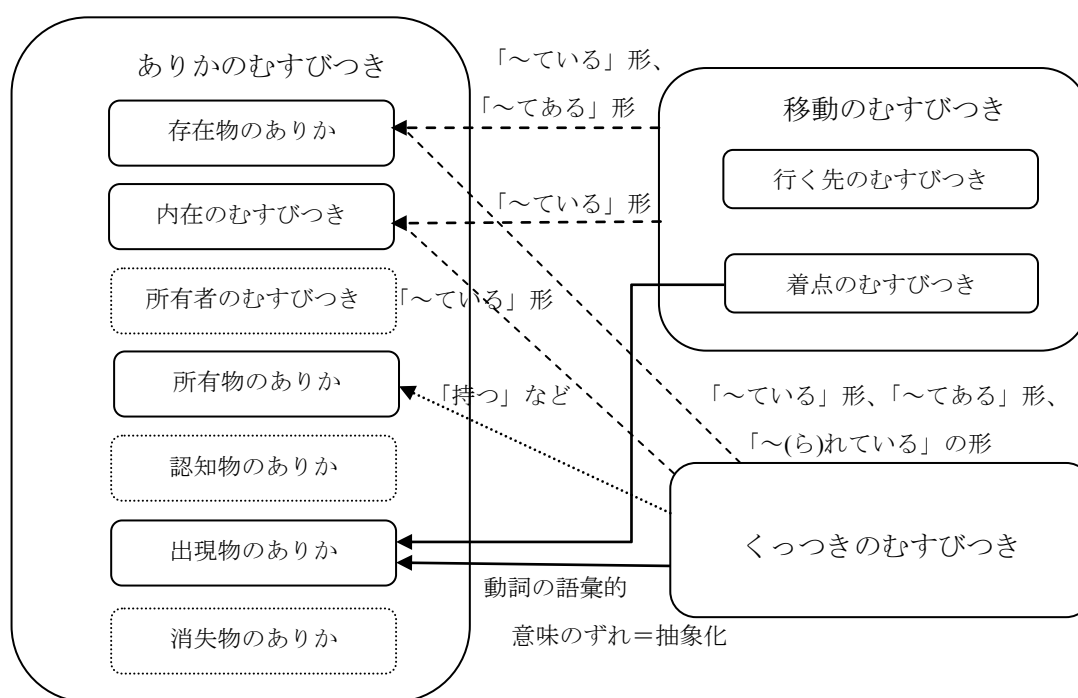


図7 〔ありかのむすびつき〕の下位類と〔移動のむすびつき〕〔くっつきのむすびつき〕との相互関係

以下は、むすびつきのタイプごとに見ていく。

I、〔存在物のありか〕と〔移動のむすびつき〕〔くっつきのむすびつき〕

第3章で述べたように、移動動詞は二格の空間名詞とくみあわさって〔移動のむすびつき〕を作り、そしてくっつけ動詞は二格の物名詞とくみあわさって〔くっつきのむすびつき〕を作る。例えばそれぞれは「(葉っぱが) 地面に落ちる」「柱にぶつかる」のような連語である。しかし、移動動詞やくっつけ動詞のあるものは、文の中で「～ている」形、「～である」形または受身形の「～ている」形（「～(ら)れている」の形）をとっている場合は、存在動詞の資格をもってきて、二格の名詞とのくみあわせにおいて、〔存在物のありか〕を作ることがある。その際に、〔移動のむすびつき〕において移動の行く先または着点を示す二格の名詞と、〔くっつきのむすびつき〕においてくっつく先を示す二格の名詞は、存在物のありかを示すようになる。

まず移動動詞の例を挙げる。なお、移動動詞の場合は動詞のアスペクトの形（「～ている」形、「～である」形）のみ観察された。

- (25) だが消滅したと思った物体はすぐ見つかった。森君の家の近くの溝の側に落ちていたからである。（『ボクは好奇心のかたまり』）
- (26) ぼくはそれを読んだ時、なんだかこわかった。トイレに入ろうと思って戸をあけたら、なかに自分が入っていたなんて話も書いてあった。（『ブランコのむこうで』）
- (27) その思いつきだけで生きているという、テーブルを買った彼女は今夜も店に出ている。（『キッチン』）
- (28) 庭にまぎれこんだ近所の子供が四人か五人、門内に乗り入れてあったトラックの柵にぶら下ったり腰をかけたりして遊んでいた。（『黒い雨』）

次に、くっつけ動詞の例を挙げる。移動動詞に比べ、くっつけ動詞の場合は移行しやすいようである。

- (29) あまり広くない校庭のまわりには、塀のかわりに、いろんな種類の木が植わっていて、花壇には、赤や黄色の花がいっぱい咲いていた。（『窓ぎわのトットちゃん』）
- (30) 両の掌を見ると、左の掌いちめんに青紫色の紙縊状のものが着いている。（『黒い雨』）
- (31) 抜け落ちたりしないように、本体に一センチ幅の丈夫なゴム輪を掛けている。（『読書のたのしみ』）
- (32) 彼は黒っぽいオーバーを着て、これも手に小型のスーツケースをさげている。（『点と線』）
- (33) その新聞が重なって、係長の机の隅に置いてあった。（『点と線』）
- (34) 資料室には古い椅子が重ねていくつも積んであった。（『落花流水』）

- (35) 土産物屋にはカツオブシにサンゴ、それに土佐犬の玩具が並べてある。(『ボクは好奇心のかたまり』)
- (36) ぼくのアルバムに、ぼくのうしろ姿のうつっている写真はそんなにないけど、三枚ばかりはってある。(『ブランコのむこうで』)
- (37) 彼のうつむいた目が、それをとらえた。黒い岩肌の地面の上に、二つの物体が置かれていた。(『点と線』)
- (38) いたる所にある様々な花びんに季節の花々が飾られていた。(『キッチン』)
- (39) この人のうちの納屋の土間には、ねじぼし大根や切干大根がどっさり吊されている。(『黒い雨』)

Ⅱ、〔内在のむすびつき〕と〔移動のむすびつき〕〔くつつきのむすびつき〕

移動動詞やくつつけ動詞が〔内在のむすびつき〕を作る原理は〔存在物のありか〕の場合と似ているが、〔存在物のありか〕を表わす連語に比べ大幅に少ない。それに、自動詞の「～ている」形のみ観察された。以下、(40)と(41)は移動動詞の例であり、(42)と(43)はくつつけ動詞の例である。

- (40) 何でも無い、名残りを惜しんでいたのだ、と弁解したが、ご不浄の窓に寄りかかって名残りを惜しむのは似合わないと言われ、うしろ姿に悩みが出ていたわよ、と目のなかをのぞき込まれると、ふと話してみる気持になった。(『男どき女どき』)
- (41) これがすごく、彼らの「おもい方」にぴったりで、それはきっとこの人が、頭でよりも心でおもう人種だからなのだろう。全然どこにも力が入っていない、自然な呼吸、自然な言葉。(『泣かない子供』)
- (42) 彼女には、そういうことが持つ、しんとした淋しさがしみ込んでいた。(『キッチン』)
- (43) だから目は取り外しやすいし、他の器官よりも独立している。ベアトリスの角膜に記憶が残っていても不思議なことではない。(『幸福な結末』)

Ⅲ、〔所有物のありか〕と〔くつつきのむすびつき〕

動詞「持つ」はヲ格の物名詞とニ格の物名詞とくみあわさって〔くつつきのむすびつき〕を作り、例えば「左手にコップを持つ」のような連語である。しかし、空間性のある名詞がニ格に現われると、「持つ」は「所有する」という意味を表わし、〔所有物のありか〕を表わす連語に移行する。なお、以下に挙げるのはやや抽象的な例であるが、具体的な例として、例えば「箱根に別荘をもつ」のような連語が考えられ、典型的であろう。

- (44) 民主党は当初、今回の統一選を政党としての足腰を鍛える好機と位置づけていた。地方に根強い支持基盤を持つ自民党に対抗し、将来にわたって担う2大政党のひ

とつであり続けるためには、地方議員の裾野を広げ、「選挙は風頼み」の体質から脱しなければならないからだ。(朝・社)

- (45)「思いこむ」とは、一つの考えを心にもったときに、それ一つを固く信じて他の考えをもてないこと。(『日本語練習帳』)

IV、〔出現物のありか〕と〔移動のむすびつき〕〔くつつきのむすびつき〕

奥田(同:290)にも指摘があるように、「くつつけ動詞や移動動詞のあるものが、語彙的な意味のずれ＝抽象化の結果、出現動詞のグループにはいりこんできている。たとえば、でる、だす、たつ、たてる、にじむのような動詞」。以下、(46)と(47)は移動動詞の例であり、(48)はくつつけ動詞の例である。なお、この類の移動動詞は主に本研究でいう「着点動詞」のようである。

- (46)『ふしぎの国のアリス』という童話には服を着たウサギがでてきたが、こうまで宙がえりが好きじゃなかったな。(『ブランコのむこうで』)

- (47) 佐山さんという人は私は知りません。新聞に写真が出ていましたが、おかみさんも、ほかの女中も誰も見おぼえがありませんから、お店に来たことのあるお客ではないようです。(『点と線』)

- (48) 朝は明けたばかりであった。沖には乳色の霧が立っていた。志賀島も海の中道も、その中に薄い。(『点と線』)

移動動詞やくつつけ動詞が〔出現物のありか〕を作る場合においても、(47)と(48)のように、動詞が「～ている」形をとるのが多い。

なお、3.1.6 節でも取り上げたように、二格の位置に空間性のある名詞が現わると、〔移動のむすびつき〕を作るか、〔出現物のありか〕を作るかその判定が難しくなる。例えば以下のような連語である。

- (49) 警察官が急に表に出てきたので H たちは逃げた。(『少年 H』(上巻))

「表に出てきた」を「表に姿が現われた」と解釈する場合、「出てくる」は出現性の意味を帯びており、連語全体は〔出現物のありか〕を表わすと判断するのが無難であろう。しかし、「表」を「出てくる」という移動動詞が表わす動作の着点と考える場合は、二格の名詞と動詞との間に〔着点のむすびつき〕が認められる。これは、(49)において、二格名詞の「表」が空間的な性格を持つ具体名詞であることと、動詞「出てくる」が多義語であることに起因していると思われる。このような例の存在は、〔出現物のありか〕と〔着点のむすびつき〕が連続していることを物語っている。

6.1.4 「移動のむすびつき」と「くっつきのむすびつき」

「移動のむすびつき」と「くっつきのむすびつき」との間の相互関係はそれほど発達していないが、「移動のむすびつき」はその下位のタイプの「着点のむすびつき」を介して、「くっつきのむすびつき」と関係をもっている。この関係を次のページの図8に示すことができる。

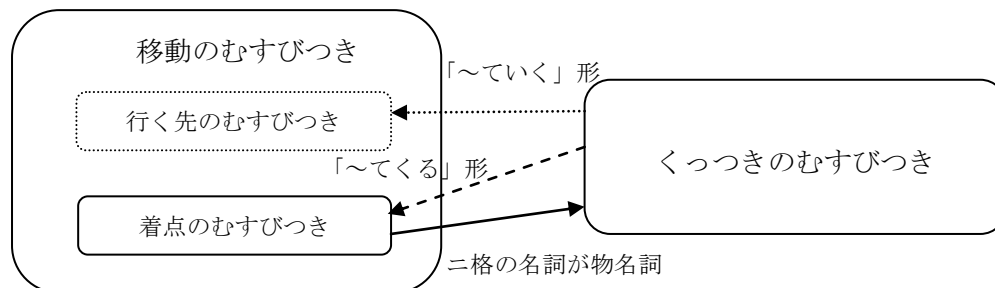


図8 「移動のむすびつき」と「くっつきのむすびつき」との相互関係

「着点のむすびつき」を表わす連語は二格の場所名詞と移動動詞とのくみあわせであり、例えば「学校に着く」のような連語である。しかし、場所性をもっていない物名詞が「移動の構造」に入ると、「くっつきのむすびつき」を表わす連語に移行する。例えば、以下の「移る」の例である。

- (50) 「料理に線香の匂いが移っちゃいけんから、隣へ移したほうがええんじゃないかの？」（『少年 H』（上巻））

反対に、「くっつきの構造」において、二格の名詞は物名詞であるのが普通であるが、空間性をもつ名詞が現われると、「移動の構造」に変わる。その際に、くっつけ動詞が文の中で「～ていく」形になっている場合は「行く先のむすびつき」へ（(51)）、「～てくる」形になっている場合は「着点のむすびつき」へそれぞれ移行する（(52)）。なお、くっつけ動詞には、「～ていく」形に比べ、「～てくる」形の方がつきやすいようである。

- (51) 荷物を市場に背負っていく。（作例）

- (52) エステールは毛布の中にもぐり込んできて、わたしの腕に抱きついた。（『幸福な結末』）

また、「着点のむすびつき」と「くっつきのむすびつき」とは、「入れる」のような動詞を介しても連続している。以下の2例を比べてみよう。

- (53) 私は彼の寝ぞうがむちゃくちゃに悪いのを知っているし、コーヒーにミルクも砂

糖もたくさん入れることや、くせ毛を直したくてドライヤーをかけるばかみたい
にまじめな鏡の中の顔も知っている。(『キッチン』)

- (54) 祖父はぼくから懐中電灯を受け取ると、腹這いになって上半身を石室のなかに入
れた。(『世界の中心で、愛をさけぶ』)

(53) の「コーヒーにミルクと砂糖を入れる」は典型的な〔くっつきのむすびつき〕を作っているが、(54) では、場所性をもつ「石室のなか」が二格の位置にたち、かつヲ格の名詞は人間の身体部位であるため、連語「上半身を石室のなかに入れる」は物へくっつく動作より、人間の移動を表わしている。「入れる」と対をなす自動詞「入る」は基本的に着点動詞に分類され、例えば「石室のなかに入る」のような連語は〔着点のむすびつき〕を作っている。人間の一部分だけではあるが、「上半身を石室のなかに入れる」は実際に「人が石室に入る」ことであり、両者はまったく無関係なものとは言えない。このことから、「石室のなかに入る」とともに、(54) のような例も〔着点のむすびつき〕に分類しても差し支えないであろう。なお、今回収集した用例の中になかったが、例えば「客を部屋に入れる」のような連語ならもっと分かりやすい。

6.2 〔ありかのむすびつき〕と他のむすびつき

6.1 節では、〔ありかのむすびつき〕と〔移動のむすびつき〕〔くっつきのむすびつき〕との相互関係を見たが、〔移動のむすびつき〕〔くっつきのむすびつき〕のような具体的なものの以外に、〔ありかのむすびつき〕は〔対象的なむすびつき〕に属する他のむすびつきのほとんど(ただし、〔受身的なむすびつき〕を除く)と移行関係をもっており、本節ではそれらについて述べる。なお、〔移動のむすびつき〕〔くっつきのむすびつき〕と関係する場合と異なり、〔ありかのむすびつき〕が他のむすびつきとの移行関係は、主に存在動詞「ある」と「いる」を介して成り立っている。〔ありかのむすびつき〕と他のむすびつきとの相互関係を図で示すと、次のページの図 9 になる。

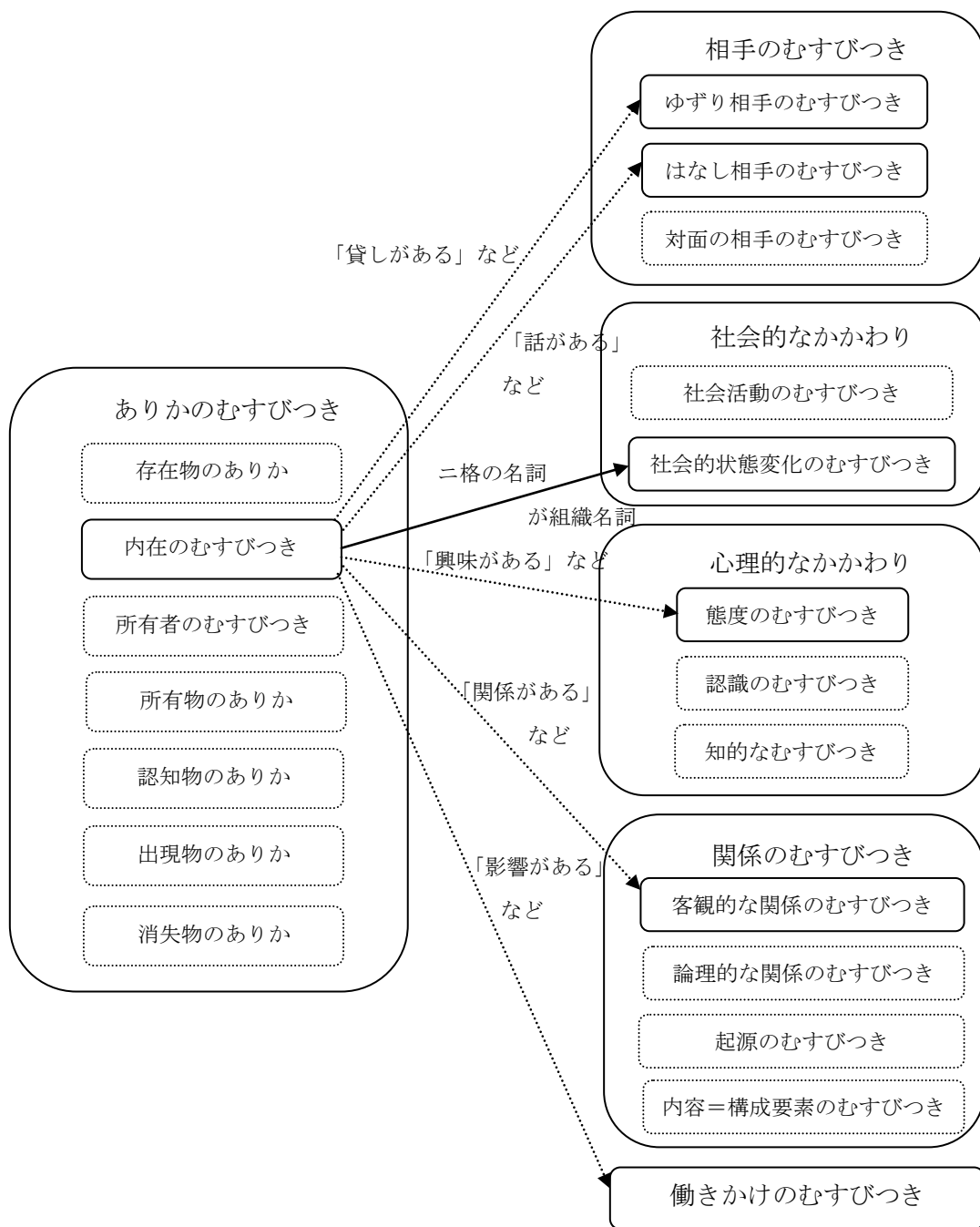


図9 「ありかのむすびつき」と他のむすびつきとの相互関係

6.2.1 「ありかのむすびつき」と「相手のむすびつき」

「ありかのむすびつき」は主にその下位の「内在のむすびつき」を介して、「相手のむすびつき」に移行する。3.1.2 節で考察したように、「内在のむすびつき」を表わす連語は、主に動詞「ある」と物や人や事を表わす二格の名詞と事柄を表わすガ格の名詞とのくみあわせである。ガ格の位置に「貸し」「借り」「話」「頼み」などのような抽象名詞がたち、か

つ二格の名詞が人名詞である場合に、〔相手のむすびつき〕に移行する。その場合、ガ格の名詞と「ある」とのまとまりが強く、その全体が二格の名詞で示される人を相手としてとっている。なお、「貸しがある」「借りがある」と二格の人名詞とのくみあわせは〔ゆずり相手のむすびつき〕へ、「話がある」「頼みがある」と二格の人名詞とのくみあわせは〔はなし相手のむすびつき〕へそれぞれ移行する。前者は例えば以下の(55)と(56)のような例であり、後者は(57)と(58)のような例である。

(55) もし、いま、赤子をかかえ、上野毛の生家に帰ったとしたらどうだろうか、と厚子は苦しくなるとよく考えた。たぶん母は表面はよろこんで迎えてくれるだろう。厚子は母に貸しがあった。母も、娘に借りがあることは承知のはずであった。(コーパス：『冬の旅（別れ霜・柿の花・白い雲・時雨・早春）』)

(56) 「ほんとだよ、ほんとなんだよ。私は柳に八百万ウォンの貸しがあるんだけど、それを棒引きにしなければ引退しないと言ってるんだ」(コーパス：『一瞬の夏11』)

(57) それで実は君に話があるのだ。加藤君第三課へ来ないか。来てくれたら、ぼくも助かるし、君もよくなる。(コーパス：『孤高の人4』)

(58) 「今日は朔にたのみがあったな」祖父はビールを飲みながらあらたまって言った。(『世界の中心で、愛をさけぶ』)

6.2.2 〔ありかのむすびつき〕と〔社会的なかかわり〕

〔ありかのむすびつき〕は主にその下位の〔存在物のありか〕を介して、〔社会的なかかわり〕に移行する。3.1.1 節で考察したように、〔存在物のありか〕を表わす連語は、主に存在動詞「ある」「いる」と二格の空間名詞と物や人や現象を表わすガ格の名詞とのくみあわせである。特に人間の存在状態を表わす場合、二格の位置に「学校」「店」のような、空間だけでなく組織をも表わせる名詞がたつと、具体的な存在状態より、人間が社会と何らかのかかわりをもっていることを表わし、〔社会的なかかわり〕の下位の〔社会的状態変化のむすびつき〕に移行することがある。例えば以下のような例である。

(59) 第二次世界大戦で日本が敗れたとき、私は十六歳で、広島県の江田島にあった海軍兵学校にいた。(『読書のたのしみ』)

(60) じっさい、お時さんの言うとおり、「小雪」(料亭の名前：引用者注)にいる女中は、多少とも安田に興味を抱いていた。(『点と線』)

この2例においては、「学校」と「店」は「場所としての学校/店」より、「組織としての学校/店」を意味している。「学校にいる」というくみあわせに関して、宮島達夫氏は以下のように述べている。

「以下の例³⁸では、存在・移動動詞がつかわれていて、そのかぎりでは空間・場所としての学校とおなじである。しかし、動詞の意味が抽象化しており、それに応じて「学校」の意味も組織としての抽象的なものである。「学校にいる」は、空間としての学校という場所にいるのではなく、学校という組織の一員として在学することである。（宮島（1996:46））」。

また、「少年刑務所にいる」「保健所にいる」などの例もあったが、特に後者は「保健所の職員として勤務している」という意味を表わす場合しかこのような移行現象が起こらず、「学校にいる」に比べ、文脈への依存度が高いと思われる。

6.2.3 「ありかのむすびつき」と「心理的なかわり」

「ありかのむすびつき」と「心理的なかわり」との移行関係は、6.2.1 節で見た「ありかのむすびつき」から「相手のむすびつき」に移行する場合に似ており、同じく「内在のむすびつき」を介して成り立つのである。「内在のむすびつき」を表わす連語において、格の位置に「関心」「興味」「自信」「野心」などのような抽象名詞がたつと、それと「ある」とのまとまりが強くなり、その全体が二格の名詞で示される人や事に対する態度を表わすようになり、「心理的なかわり」の下位の「態度のむすびつき」に移行する。二格の名詞は人名詞か抽象名詞であり、それらの態度の向けられる対象を表わす。例えば以下のような例である。

- (61) しかし安田はそれに乗って、誰に野心があるというでもなさそうだった。彼は誰にたいしても、同じように愛想がよかった。（『点と線』）
- (62) 間違いない。これは鮎吉だ。顔に見覚えがある、というほどではないが、背びれの真中が裂けたようになっている。（『男どき女どき』）
- (63) ママは日本の古い文化に興味があったし、パパもアメリカに興味があつて、独学で勉強したとかで最初からちゃんと英語が話せたそうだ。（『落花流水』）
- (64) 狐狸庵と同行したい人は——ただし容貌に自信のある女性に限る——編集部まで御連絡ねがいたい。（『ボクは好奇心のかたまり』）

人への態度は二格の代わりに、後置詞形式「～に対して」で置き換えられ、物事への態

³⁸ 宮島が存在動詞と移動動詞の例として挙げているのは次の4例である（宮島（1996:46））。

○学校にいた頃バスケットボールを余りやりすぎて肋膜炎になったきりで、脳膜炎など患った事はない。（尾崎一雄「芳兵衛」）

○その妹が最近信州を引き払い病弱な子供が小学校に上がるまで房州へ移り住むという噂は（石川淳「普賢」五）

○その選手は、日本内地のある中学校を出のち、すぐ大連実業団のスター・プレイヤーとなり、（清岡卓行「アカシヤの大連」9）

○医師から学校へ戻り、養護学校へ通うようにすすめられたのを、節子は断った。（郷静子「れくいえむ」）

度は「～について」「～に関して」で置き換えられる。例えば、(61)は「誰に対して野心がある」のようになり、(63)は「日本の古い文化について興味がある」のようになる。

〔内在のむすびつき〕から〔態度のむすびつき〕に移行する際の一つの条件として、二格の名詞は人名詞か抽象名詞であることを挙げた。一方で、6.1.1 節 (I-③) で述べたように、〔内在のむすびつき〕を表わす連語において二格の位置に人名詞が現われると、〔所有者のむすびつき〕に近づき、または移行することがある。すなわち、〔内在のむすびつき〕を出発点として、二格の名詞が人名詞である場合、〔所有者のむすびつき〕と〔態度のむすびつき〕との両方に移行しうると言え、〔所有者のむすびつき〕と〔態度のむすびつき〕との間にも直接的な関係をもっていると言える。

実際に、「覚えがある」「興味がある」「関心がある」「自信がある」などのガ格名詞と「ある」とのまとまりと、二格の人名詞とのくみあわせ、例えば「彼女に興味がある」「彼女に関心がある」などのような連語は、〔所有者のむすびつき〕と〔態度のむすびつき〕との両方を作りうるのは面白い事実である。(65)を見てみよう。

(65) 人に覚えがある

- a、若者の親への反抗心は、遠い昔に私にも覚えがあるから、わからないでもない。
(『いい言葉は、いい人生をつくる』) [所有者のむすびつき]
- b、昔会ったことがあるので、彼は彼女に覚えがある。(作例) [態度のむすびつき]

(65)の「人に覚えがある」は〔所有者のむすびつき〕と〔態度のむすびつき〕の2通りの連語を作る能力をもっており、そのどちらを作っているかは文脈に頼るしかない。

(65a)は〔所有者のむすびつき〕であり、(65b)は〔態度のむすびつき〕である。なお、2つのむすびつきを区別するひとつの手がかりとして、連語が文に入るときの振舞いの違いが挙げられる。すなわち、(66)が示すように、〔所有者のむすびつき〕の構造が文に入る場合、所有者を示す二格の名詞が主語になる((66a))のに対して、〔態度のむすびつき〕の構造が文に入るとき、新たに主語をとることができる((66b))。

- (66) a、私は(親への反抗心に)覚えがある
- b、彼は彼女に覚えがある

また、下の(67)のように、〔所有者のむすびつき〕と〔態度のむすびつき〕との2種類の連語が同じ文に同時に現れている例もある。

- (67)「・・・、だから女の子に術をかけて、あなたストリッパーだといっても、彼女自身に裸になることに羞恥心がある限りはたちまちにして術は解けてしまいます」(『ボクは好奇心のかたまり』)

「羞恥心がある」というくみあわせに対して、「彼女自身に羞恥心がある」は〔所有者のむすびつき〕を作り、また「裸になることに羞恥心がある」は〔態度のむすびつき〕を作っている。これもいわゆる「二重二格の現象」であり、〔所有者のむすびつき〕と〔態度のむすびつき〕、ないしそれぞれの上位の〔ありかのむすびつき〕と〔心理的なかわり〕のむすびつき相互の独立性、対立性を示す。

6.2.4 〔ありかのむすびつき〕と〔関係のむすびつき〕

〔ありかのむすびつき〕から〔関係のむすびつき〕への移行も、〔内在のむすびつき〕を介して実現される。〔内在のむすびつき〕を表わす連語において、ガ格の位置に「関係」のような抽象名詞がたっている場合、それと「ある」とのまとまりが強く、その全体が二格の名詞によって広げられている。連語は〔内在のむすびつき〕から〔関係のむすびつき〕の下位の〔客観的な関係のむすびつき〕に移行する。二格の名詞は主語が関係する対象を示し、人名詞か抽象名詞である。「関係がある」の他に「縁がある」のようなくみあわせもある。また、この種の連語は「汚職事件と関係がある」「植物関係の男性と縁がある」とも言えるように、関係する対象は二格だけでなく、ト格でも表わせる。

- (68)・・・、新聞によると、佐山さんという人は汚職事件に関係があつて、たいそう苦しい立場だったそうですから、お時さんが、それに同情したのでは、ないでしょうか。(『点と線』)
- (69)「味」とは、口(口偏)に未が付いている。口に何か関係がある。(『日本語練習帳』)
- (70) どうも私は、植物関係の男性に縁がある。(『キッチン』)

6.2.3 節で見たのと同様に、「関係がある」「縁がある」などのくみあわせが二格の人名詞によって広げられると、〔所有者のむすびつき〕と〔客観的な関係のむすびつき〕との間にも直接的な関係をもつようになる。それは〔所有者のむすびつき〕と〔態度のむすびつき〕との相互関係に似ている。ただし、〔客観的な関係のむすびつき〕は物事あるいは人の間の関係を表わすため、二格に単なる人名詞ではなく、「この親子」「二人」などのような複数の人間を表わす名詞が現われなければつながりが見られない。例えば「彼女に関係がある」なら〔客観的な関係のむすびつき〕であるが、「二人に関係がある」になると、〔所有者のむすびつき〕と〔客観的な関係のむすびつき〕の両方を作りうるので、そのどちらを作るかは文脈なしで判断できない。

- (71) 二人に関係がある
- a、この様子から見ると、二人にはきっと関係があるよ。(作例)
- 〔所有者のむすびつき〕

b、噂によると、彼は二人に関係があるそうだ。(作例)

〔客観的な関係のむすびつき〕

〔所有者のむすびつき〕と〔態度のむすびつき〕の相互関係の場合で見たように、〔所有者のむすびつき〕と〔客観的な関係のむすびつき〕は文に入ったときも、異なるふるまいをしている。下の(72)では、aは〔所有者のむすびつき〕の場合であり、bは〔客観的な関係のむすびつき〕の場合である。

(72) a、二人は関係がある

b、彼は二人に関係がある

6.2.5 〔ありかのむすびつき〕と〔働きかけのむすびつき〕

〔ありかのむすびつき〕と〔働きかけのむすびつき〕との関係も、〔内在のむすびつき〕を介して成り立っている。〔内在のむすびつき〕を表わす連語において、ガ格の位置に「影響」「差しさわり」のような抽象名詞がたつと、それと「ある」とのまとまりが強くなり、「影響がある」「差しさわりがある」が二格の名詞との間には、〔働きかけのむすびつき〕が実現される。二格の名詞はその働きかけが及ぶ対象を示し、人名詞も抽象名詞も現われる。例えば以下のような例である。

(73) そこに出席することは海軍にその技能を認められたことになり、将来の栄達にも
影響があった。(コーパス：『孤高の人 5』)

(74) お嬢さんは、それでも、さかんに、『ねえ、なにしてるの?』を続けるので、授
業にもさしさわりのあるので、窓のところに行って、お嬢さんの話しかけてる相
手が誰なのか、見てみようと思いました。(『窓ぎわのトットちゃん』)

6.3 〔移動のむすびつき〕と他のむすびつき

すでに見たように、〔移動のむすびつき〕は〔ありかのむすびつき〕、〔くっつきのむすびつき〕と関係をもっている。それだけでなく、〔対象的なむすびつき〕に属する他のむすびつきとの間にも相互関係が見られる。具体的には、〔相手のむすびつき〕、〔社会的なかわり〕、〔心理的なかわり〕と〔働きかけのむすびつき〕の4つのむすびつきである。以下は、〔移動のむすびつき〕がそれぞれとどう関係するかを順番に見ていく。なお、〔移動のむすびつき〕がこの4つのむすびつきに移行する際に、主に〔着点のむすびつき〕を媒介にしており、主に動詞の語彙的な意味の抽象化によるのである。

〔移動のむすびつき〕と他のむすびつきとの相互関係を図で示すと、次のページの図10になる。

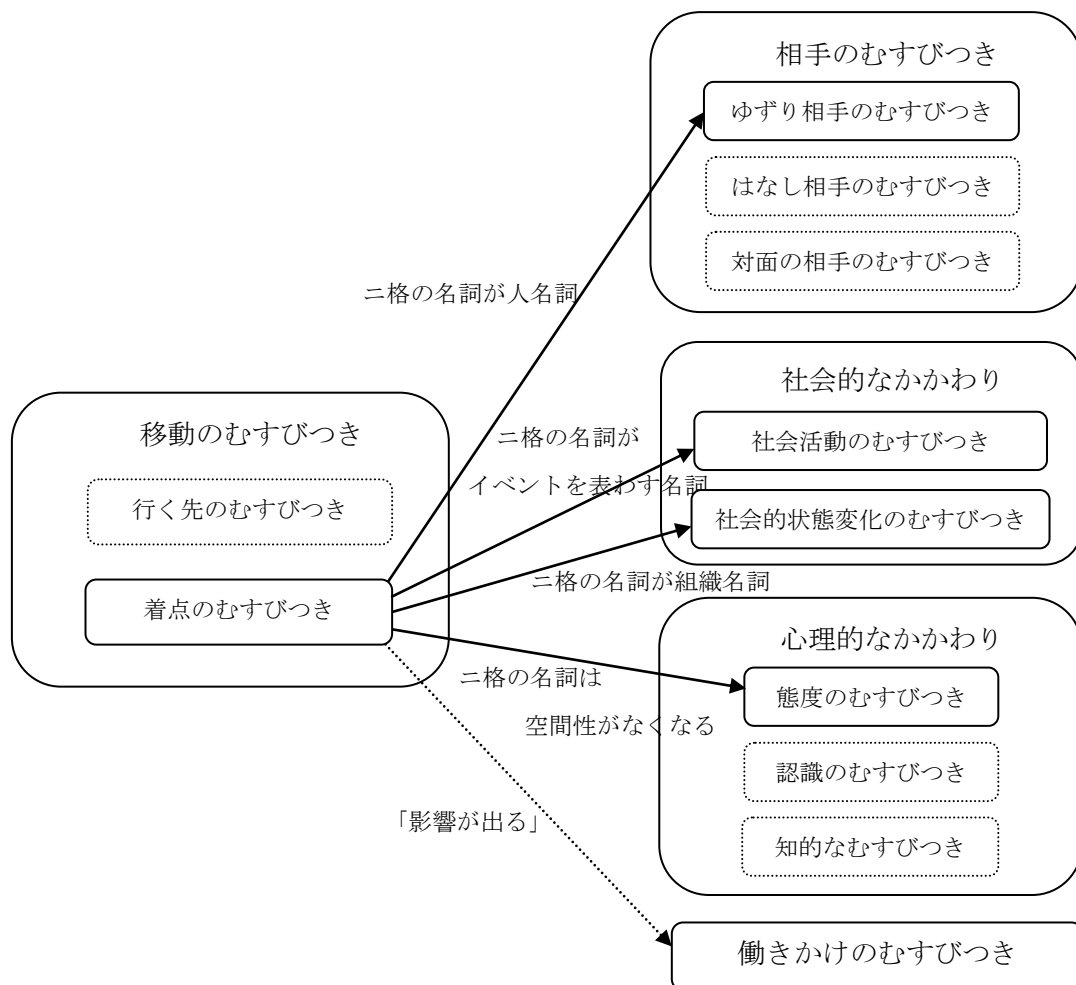


図 10 「移動のむすびつき」と他のむすびつきとの相互関係

6.3.1 「移動のむすびつき」と「相手のむすびつき」

〔移動のむすびつき〕はその下位のタイプの〔着点のむすびつき〕を介して、〔相手のむすびつき〕に移行する。〔着点のむすびつき〕を表わす連語は、人や物がある具体的な場所に到達することを表わし、二格には場所名詞が現われるのが基本である。場所名詞の代わりに、人名詞が二格の位置にたつと、動詞はそれに従い語彙的な意味に抽象化を起し、やりもらい動詞のグループに入りこんで、連語全体は〔相手のむすびつき〕のうちの〔ゆずり相手のむすびつき〕を作るようになる。典型的な動詞として「送る」が挙げられる。下の4例を比べてみよう。

(75) 寄付の分もいれると四十三万三千三百球がアフリカに送れる計算であった。(『永遠の前の一瞬』)

(76) いずれにしても重松は、矢須子のこの日記を筆耕して仲人に送る必要があった。

(『黒い雨』)

(77) 女の人に物をおくるということは、たいへん嬉しいものである。(『女ひと』)

(78) ちなみに、ナツキからエステールに送られた手紙の文面は以下の通り。(『幸福な結末』)

(75) と (76) は「送る」が〔着点のむすびつき〕を作っている例である。なお、(76) では、二格の位置に「仲人」という人名詞が現われているが、ここでは人格的な存在としての人間ではなく、「仲人の所」のような意味で、臨時的に場所として使われていると思われる。これに対して、(77) における二格の名詞の「女の人」は人格的な存在としての人間を表わすため、「おくる」は「物を他の地点に移動させる」の意味ではなく、「人に物を与える」という意味になっている（この場合は、同じ発音で「贈る」と書く方が普通であろう）。「女の人に物をおくる」は〔着点のむすびつき〕を作っておらず、「女の人に物を与える」と同様に、〔ゆずり相手のむすびつき〕を作っている。

一方、(78) においても、二格の位置に人名詞が現われているが、ヲ格の名詞（「手紙」）はやや特殊なものであるため、(76) と (77) のように、〔着点のむすびつき〕と〔ゆずり相手のむすびつき〕のどちらを作っているか判断しにくい。「手紙」を単なる移動させる物として考える場合は、(76) に近く、「エステール」は非人格的な存在で、「エステールの所」と同じ意味であり、連語全体は〔着点のむすびつき〕を作っていると言える。しかし、「手紙」は単なる物であると同時に、人への贈り物としての意味もあり、その場合の「エステール」は与える相手で人格的な存在であり、(77) に近く、連語全体は〔ゆずり相手のむすびつき〕を作っている。このような例の存在は、〔着点のむすびつき〕と〔ゆずり相手のむすびつき〕とが連続していることを物語っている。

6.3.2 〔移動のむすびつき〕と〔社会的なかかわり〕

〔移動のむすびつき〕と〔社会的なかかわり〕との相互関係も、主に〔着点のむすびつき〕を介して成り立っている。〔着点のむすびつき〕から〔社会的なかかわり〕への移行は、6.2.2 節で見た〔存在物のありか〕から〔社会的なかかわり〕へ移行する場合（例えば「学校にいる」「店にいる」）に似ているが、動詞の性質の違いにより、それよりも発達した移行関係が見られる。具体的に、〔存在物のありか〕は〔社会的なかかわり〕のうちの〔社会的状態変化のむすびつき〕のみに移行するのに対して、〔着点のむすびつき〕は〔社会活動のむすびつき〕と〔社会的状態変化のむすびつき〕との両方に移行しうる。また、前者の移行は動詞「いる」によってだけ実現されているのに対して、後者の場合はいくつかの動詞が観察された。代表的には、「来る、進む、出す、出る、入る」などの着点動詞が挙げられる。

〔着点のむすびつき〕を表わす連語においては、二格の名詞は基本的に場所名詞であるが、下の (79) ～ (81) が示すように、二格の位置に「葬式」「ペン大会」「同窓会」など

イベントを表わす抽象名詞が現われると、「そのイベントが行われる場所に到達する」という移動の意味もあるが、二格の名詞の抽象化により、移動動詞の語彙的な意味に抽象化を起し、「そのイベントに参加する」という社会とのかかわりの意味が移動の意味よりも前面に出ている。従って、「葬式に来る」「ペン大会に出る」「同窓会に顔を出す」は「葬式/ペン大会/同窓会に出席する」と同じように、〔社会活動のむすびつき〕を作っている。なお、(81)においては、ヲ格の名詞がまず動詞とくみあわさって、「顔を出す」というフレーズ（フレジオリジカルなくみあわせ）を作ってから、その全体が二格の名詞によって広げられているのである。

- (79) 親戚だけではなく、勤め先の映画館の人も、友だちも、だれ一人葬式に来ていなかった。(『少年 H』(上巻))
- (80) 私は中米を車で南下し、ブラジルのペン大会に出たあと、カリブ海で遊んで帰って来た。(『永遠の前の一瞬』)
- (81) 今まで不義理をしていたが、大学時代の同窓会にでも顔を出して、昔のよしみで頭でも下げてみるか。(『男どき女どき』)

一方、二格の位置に「学校」「店」などの組織名詞や、「嫁」「芸者」など人間の身分や職業を表わす名詞が現われると、移動動詞は「その組織に所属するようになる」あるいは「その身分になる。その職業をするようになる」といった意味に抽象化され、人間の社会における状態の変化を表わすようになる。連語全体は〔社会的状態変化のむすびつき〕に移行する。

- (82) 私自身、父の実父（父は斎藤家の養子だった）が亡くなったとき、母は、小学校に入ったばかりの私を連れて葬式に行った。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)
- (83) お時さんは、三年ばかり前にお店にはいりましたが、お座敷でのお客のあしらいも上手で、お客さまの誰にも好かれておりました。(『点と線』)
- (84) わたしがここへお嫁に来て、二日目に、お母さんに蔵の二階で見せてもらいました。(『黒い雨』)
- (85) 娘の京子も、同じ土地で芸者に出ていたが、四年ほど前に落籍されて、小金井の方に囲われたという。(コーパス：『砂の上の植物群』)

以上は主に着点動詞の例であったが、行く先動詞であるが着点をも表わせる「行く」と行く先動詞「進む」にも以上のような移行現象が見られた。(86)は〔社会活動のむすびつき〕を作っている例であり、(87)～(90)は〔社会的状態変化のむすびつき〕を作っている例である。

- (86) 「そうよ。おまえたちとやくそくしたから、おかあさんこまったのよ。いっしょにかんがえてよ、並木も大吉も。おかあさん、歓迎会にいかないで、うちにいたほうがいい？」(コーパス：『二十四の瞳』)
- (87) 夢と現実のさかいめがあやしくなったまま、わたしは「良妻賢母教育」の女学校を飛び出し、おりよく学制改革で編入生を受け入れていた共学の公立高校を受験し、当時は私立にくらべて格段に授業料の安かった国立大学に進みました。(『読書のたのしみ』)
- (88) ああ、これこそ理想の人生だ！わたしも科学者になろう、大学に行こう！感激に自分もがたがたふるえながら、わたしは決心したのです。(『読書のたのしみ』)
- (89) 小父さんは、兵隊に行く人を送るたびに、先輩づらをして嬉しがっているように見えた。(『少年 H』(上巻))
- (90) 「彼女は嫁に行ったよ。わしはおばあさんと結婚して、おまえの父親が生まれた。それにしてもあいつは堅物だな」(『世界の中心で、愛をさけぶ』)

また、移動動詞のうち、やや特殊の「通う」も、「学校」のような組織名詞とくみあわさった場合、具体的な移動動作より、「学校に行く」と同様に、人間の社会における状態の変化を表わし、「社会的状態変化のむすびつき」に移行する。

- (91) 奨学金をもらって大学に通うことができるという担任の話を、私は頭から考えようとしていなかった。(『落花流水』)

6.3.3 「移動のむすびつき」と「心理的なかわり」

「移動のむすびつき」から「心理的なかわり」への移行は、主に「追いつく」「入りこむ」などの着点動詞が場所性をもたない具体名詞か抽象名詞とくみあわさった場合に起きる。例えば下の(92)と(93)のような例である。

- (92) その結果、日本では、ヨーロッパのいろいろな概念をもちこむにあたってアジア諸国のような言語的な困難が少なく、アジアの中では最も早くヨーロッパを取り入れ、それに追いつくことができたのです。(『日本語練習帳』)
- (93) 僕は死者たちの世界に足を踏みいれていたのだ。そして生きている者たちの中へ帰って来るとあらゆる事が困難になる、これが最初の躓きだ。僕はこの仕事に自分が深く入りこみすぎ、そこからうまく出られなくなるのではないか、と不吉な感情で思った。(コーパス：『死者の奢り』)

(92) の「それ(＝ヨーロッパ)に追いつく」は「着点のむすびつき」を作っている「僕はその子に追いついて声をかけた。(『黒い雨』)」という例と異なり、「ヨーロッパとの具

体的な位置関係」を表わしているのではない。この例において、「ヨーロッパ」は「経済力などにおいて目標として追いかける相手」という意味を表わしているため、動詞「追いつく」もそれに応じて語彙的な意味に抽象化を起こし、具体的な移動動作から、「能力や技術が、すぐれたものや目標となるものと同じ水準に達する。」という意味を表わすようになり、主体の態度のニュアンスを強くもっている。「それ（＝ヨーロッパ）に追いつく」という連語も〔着点のむすびつき〕から〔心理的なかわり〕の下位のタイプの〔態度のむすびつき〕に移行する。(92)と同じように、(93)においても、「入りこむ」は「部屋に入りこむ」が示しているような本来の移動動詞としての意味ではなく、「仕事に入りこむ」は「仕事になじむ。仕事に慣れる」という意味であり、連語全体は同じく〔態度のむすびつき〕を作っている。

また、下の(94)と(95)が示すように、「口を出す」「精を出す」のようなフレーズを媒介にして、〔着点のむすびつき〕から〔態度のむすびつき〕に移行する場合もある。

(94) 世界中の紛争に口も出すが、しかしスターのつきあいとして金も出す。(『天窓に雀のあしあと』)

(95) 少し野良仕事に精を出すと体がだるくなって頭に小さなぶつぶつが出来て来る。(『黒い雨』)

6.3.4 〔移動のむすびつき〕と〔働きかけのむすびつき〕

6.3.1 節から 6.3.3 節まで見た〔移動のむすびつき〕と〔相手のむすびつき〕〔社会的なかわり〕〔心理的なむすびつき〕との相互関係ほど発達していないが、〔移動のむすびつき〕は「影響が出る」のようなフレーズを媒介にして、〔働きかけのむすびつき〕に移行する場合がある。例えば以下のような例である。

(96) 年間の被曝（ひばく）線量に換算して、健康に影響が出かねない100ミリシーベルト超になるおそれがある地点が1割ある一方、……。 (朝)

(96)において、移動動詞「出る」はその語彙的な意味の多義性により、「健康に影響が出る」は「健康に影響する」という意味を表わしており、〔働きかけのむすびつき〕を作っている。

6.4 〔くっつきのむすびつき〕と他のむすびつき

〔移動のむすびつき〕の場合と同様に、〔くっつきのむすびつき〕も〔ありかのむすびつき〕〔移動のむすびつき〕と相互に関係する一方、〔対象的なむすびつき〕に属する他のむすびつきとも移行関係をもっている。移行のプロセスは〔移動のむすびつき〕の場合と極

めて近く、[相手のむすびつき]、[社会的なかかわり]と[心理的なむすびつき]の3つのむすびつきへ移行しうる。以下はその順に見ていくが、まず[くっつきのむすびつき]と他のむすびつきとの相互関係を下の図 11 に示す。

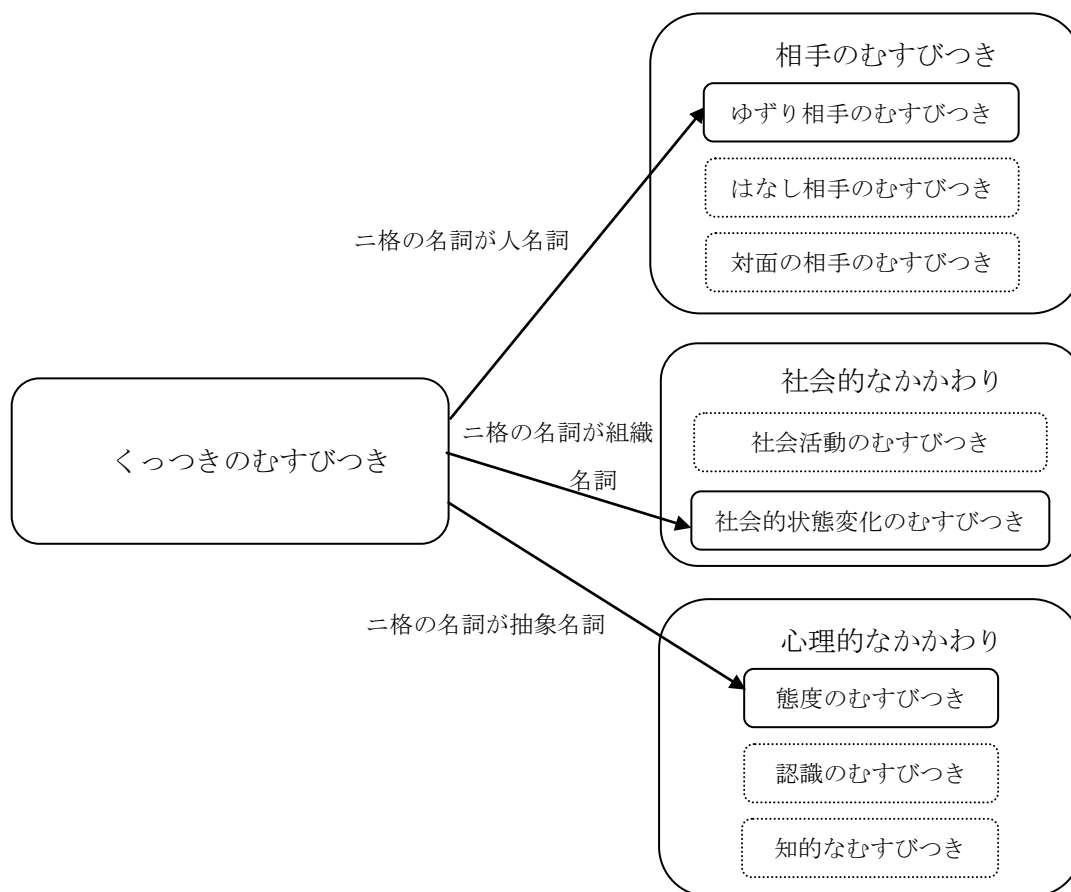


図 11 「くっつきのむすびつき」と他のむすびつきとの相互関係

6.4.1 「くっつきのむすびつき」と「相手のむすびつき」

「くっつきのむすびつき」を表わす連語は、ある物が他の物にくっつくことを表わし、二格の名詞は基本的に物名詞であり、また他動詞の場合は、ヲ格の名詞も物名詞である。人名詞、特に意志をもっている人格的な存在としての人間を表わす名詞が二格の位置にたつと、「移動のむすびつき」の場合と同じように、くっつけ動詞もそれに従い語彙的な意味に抽象化を起し、やりもらい動詞のグループに入りこんで、連語全体は「相手のむすびつき」のうちの「ゆずり相手のむすびつき」を作るようになる。典型的なくっつけ動詞として「あてがう」が挙げられる。下の3例を比べてみよう。

- (97) 或る人間がかたのごとく死んだ、そしてその顔に白布をあてがい弔客があるたびに、白布の被いを取って告別のために見せていた。(『女ひと』)

- (98) 本当は彼女のこの寝入りばなの高軀はまもなく低まって安らかになり、そればかりか彼女は夜じゅうずっと気をつけて、この年齢になっても往々おねしょをする周二をやり起し、朦朧としている少年にしびんをあてがってやるのだったが、そんなことは周二自身にはわかりっこない事柄であった。(コーパス：『榆家の人びと (第2部)』)
- (99) 影村は、彼自身と田口みやとのスキャンダルが会社内に流布されていることを探り出した。影村が田口みやを加藤文太郎にあてがおうとして失敗したことも、かなり尾緒がついて噂されていた。(コーパス：『孤高の人 4』)

(97) は「あてがう」が〔くつつきのむすびつき〕を表わす連語を作っている典型的な例である。(98) においては、二格に「少年」という人名詞が現われているが、ここでは人格的な存在ではなく、「しびん」のくつつく先であると考えられ、「少年にしびんをあてがう」は(97)と同様に〔くつつきのむすびつき〕を作っている。一方、(99)において、二格名詞の「加藤文太郎」は人格的な存在としての人間であるため、「あてがう」は「びたっと物を付ける」というくつつきの意味ではなく、「人に物を与える」という授受の意味になっている。「田口みやを加藤文太郎にあてがう」は〔くつつきのむすびつき〕を作っておらず、〔ゆずり相手のむすびつき〕に移行していると言える。

6.4.2 〔くつつきのむすびつき〕と〔社会的なかかわり〕

6.3.2 節で見たように、〔移動のむすびつき〕は〔社会的なかかわり〕の下位の2つのタイプ、すなわち〔社会活動のむすびつき〕と〔社会的状態変化のむすびつき〕との両方に移行しうる。これに対して、〔くつつきのむすびつき〕はそのうちの〔社会的状態変化のむすびつき〕にのみ移行する。また、移行する際に、主にくっつけ動詞の「入れる」と「加える」のような他動詞を媒介にしている。

前述したように、他動詞の「くっつけ構造」においては、二格の名詞もヲ格の名詞も基本的に物名詞である。しかし、下の(100)～(102)が示すように、二格の位置に「学校」「部署」「仲間」などのような組織あるいは集団を表わす名詞がたち、かつヲ格の名詞が人名詞である場合、動詞「入れる」と「加える」はくっつけ動詞としての具体的な意味を失い、ヲ格の名詞で示される人を二格の名詞で示される組織あるいは集団に加入させるという意味になる。連語全体は人間の社会における状態の変化を表わし、〔社会的状態変化のむすびつき〕を作っていると言える。

- (100) 楽器メーカーにも、冷蔵庫会社にも、室内装飾会社にも、靴屋にも、バーにも私立学校の理事長にも、明倫の卒業生はくまなくいるから、電話一本、紹介状一つでピアノが安く買えたり、カーテン屋がサービスしてくれたり、バーで顔がきいたり、娘を私立学校に入れるのに手心を加えたりしてもらえる。(コーパ

ス：『太郎物語・大学編 2』)

- (101) 原島がぼくを自分の部署に加えたのは、森川やハットの鎌田らの編集部に見劣りしないほどの人員規模がほしかっただけ、というのが本当のところらしかった。(コーパス：『新橋烏森口青春篇(本文) 3』)
- (102) 「俺たちはあんたを仲間に入れようなんて思っていない。ただあんたを手に入れたって言うただけさ。次の質問は？」(コーパス：『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド 13』)

ニ格の位置には、組織や集団を表わす名詞の他に、「メンバー」「一員」など組織や集団の構成員をはっきり示す名詞も現われうる。

- (103) そして、彼は、この加藤文太郎という男をなんとかして神港山岳会のメンバーに加えたいと思った。(コーパス：『孤高の人 2』)
- (104) 加藤は、ほっとした。少なくとも、土田リーダーが、加藤をストーブ談義の一員に加えようとしていることがわかったからである。(コーパス：『孤高の人 3』)

この場合も、ニ格にその組織や集団を表わす名詞が直接現われる場合と意味が変わらない。例えば、(103)において、「加藤文太郎という男を神港山岳会のメンバーに加える」は「加藤文太郎という男を神港山岳会に加える」とさほど変わらないし、「加藤文太郎という男を神港山岳会にメンバーとして加える」のように、後置詞「として」を用いて言い換えることもできる。

6.4.3 〔くっつきのむすびつき〕と〔心理的なかわり〕

〔くっつきのむすびつき〕を表わす連語において、ニ格の位置に「愚かさ」「現実」などの抽象名詞が現われると、くっつけ動詞はそれに従い語彙的な意味に抽象化を起し、態度動詞のグループに入りこんでくる。それとニ格の抽象名詞からなる連語は対象に対する態度を表わすようになり、〔心理的なかわり〕のうちの〔態度のむすびつき〕に移行する。ニ格の名詞もくっつく先ではなく、態度の向けられる対象を示すようになる。例えば、「しがみつく」「ぶつかる」「触れる」「寄り添う」などのくっつけ動詞が挙げられる。

- (105) 愚か者も、その愚かさにしがみついていると、やがて賢くなる。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)
- (106) けっこうずくめである。しかし、繁栄と同じように、まもなく、この問題も、決してけっこうずくめではない、という現実に、我々はすでにぶつかっている。(『永遠の前の一瞬』)
- (107) こんなに世界がぐんと広くて、闇はこんなにも暗くて、その果てしない面白さ

と淋しさに私は最近初めてこの手でこの目で触れたのだ。(『キッチン』)

- (108) 地に足をつけてきた人々が地を追われる無念を思う。とことん考えることでせめて悲痛に寄り添いたい。(朝)

ニ格の名詞が人名詞である場合も移行が起こりうるが、(109)のように、その人は意志をもっている人格的な存在としての人間でなければならない。(110)においても、人名詞「彼」がニ格の位置に現われているが、それは人格的な存在としてというより、例えば「自分のからだを電柱にぶつける」と同じように、物として考えられる。

- (109) そのかわり、家に帰ると多少、アレル日もあるという。グラウンドで抑えた感情を、家族にはもろにぶつけているのだ。(『いい言葉は、いい人生をつくる』)

- (110) しかし「野口」は何かにつまずき、自分のからだを「彼」にぶつけてしまう。(コーパス：『エディプスの恋人』)

また、「力を入れる」「手を打つ」「気をつける」などのフレーズを媒介にして、〔くつつきのむすびつき〕から〔態度のむすびつき〕へ移行する場合もある。ニ格の名詞は抽象名詞がほとんどである。例えば以下のような例である。

- (111) 先週にはさらに踏み込み、すべての原発の運転期間を再び短くし、今後は太陽光や風力などの自然エネルギーに力を入れる姿勢を鮮明にした。(朝)

- (112) 今回の事態に有効な手が打てなかった原子力安全委員会、経済産業省の原子力安全・保安院といった組織のあり方も抜本的に見直す。(朝)

- (113) うまいはなしに気をつけろというが、いかさま、ほんとうであった。(『ブンとブン』)

6.5 その他の相互関係

以上、6.1 節から 6.4 節まで主に〔ありかのむすびつき〕、〔移動のむすびつき〕と〔くつつきのむすびつき〕の 3 つのむすびつきを中心に、それぞれがなす体系、それぞれの間の相互関係および、それぞれが〔対象的なむすびつき〕に属する他のむすびつきとの間の相互関係を詳しく記述してきた。〔対象的なむすびつき〕がなす体系の中で、これら 3 つのむすびつきと直接関係せず、他のむすびつきの間にも相互関係が見られた。主に〔相手のむすびつき〕と〔心理的なかわり〕との相互関係が挙げられ、次のページの図 12 に示すことができる。

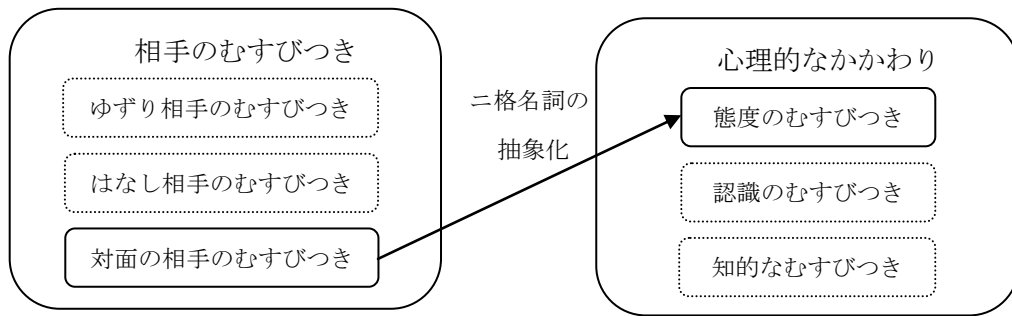


図 12 「相手のむすびつき」と「心理的ななかかわり」との相互関係

〔対象的なむすびつき〕がなす体系の中で、〔相手のむすびつき〕は、〔ありかのむすびつき〕〔移動のむすびつき〕〔くっつきのむすびつき〕の具体的なものと、〔社会的ななかかわり〕〔心理的ななかかわり〕〔関係のむすびつき〕〔働きかけのむすびつき〕の抽象的なものの間に位置している。二格の名詞が具体的な人名詞である点で、より〔ありかのむすびつき〕〔移動のむすびつき〕〔くっつきのむすびつき〕に近いが、二格の名詞の抽象化によって、連語が抽象的なものに移行することがある。

図 12 からわかるように、〔相手のむすびつき〕は主にその下位のタイプの〔対面の相手のむすびつき〕を介して、〔心理的ななかかわり〕に移行する。〔対面の相手のむすびつき〕を表わす連語では、二格の名詞は対面の相手を示し、基本的に人名詞である。人名詞の代わりに、抽象名詞が二格の位置に現われると、対面動詞はそれに応じて態度的なニュアンスを帯びてきて、連語全体は〔心理的ななかかわり〕のうちの〔態度のむすびつき〕に移行するものがある。特に対面動詞の「向き合う」と二格の名詞とのくみあわせは容易に移行が起きるようである。以下の例を比べてみよう。

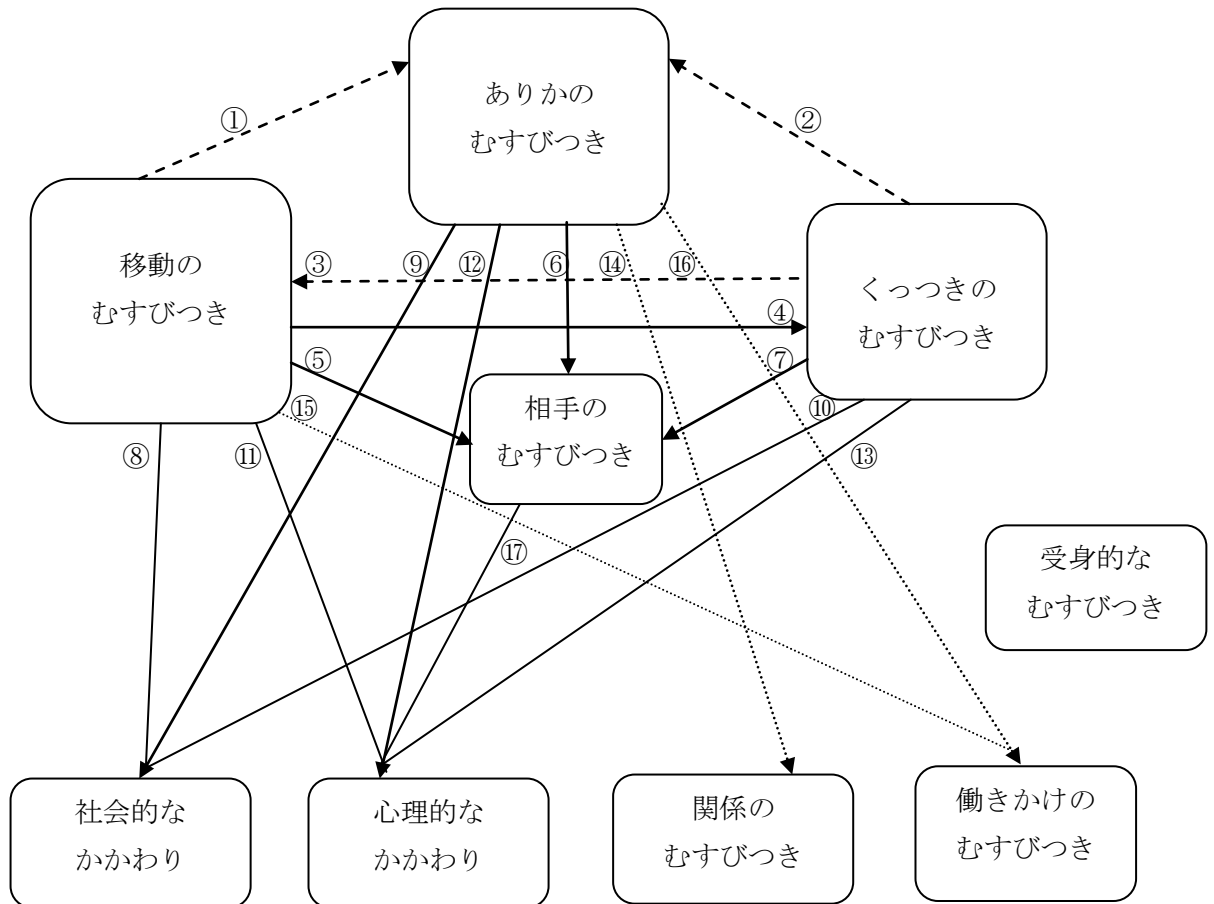
(114) 源氏は空蟬のことがあるので、罪の思いにうしろめたく、伊予の介に向きあっているのがきまりわるくも思われる。(コーパス：『新源氏物語（本文）2』)

(115) まず求められるのは、震災に向き合うことだ。東京は、農水産物や工業製品、電力供給のかなりの部分を東北と北関東に頼ってきた。(朝)

(114) においては、二格の名詞は人名詞であり、「伊予の介に向き合う」は〔対面の相手のむすびつき〕を表わす連語である。一方、(115) では、二格の位置には「震災」という抽象名詞が現われているため、「向き合う」は「直面する、対処する」という意味になっており、「震災に向き合う」は人間の態度の表わし、〔態度のむすびつき〕を作っている。

6.6 まとめ

以上、本章では「対象的なむすびつき」の各カテゴリーの間の相互関係を詳しく見たが、その全体像を下の図 13 に示すことができる。



相互関係の詳細

I - ①②：「～ている」形、「～である」形および「～(ら)れている」の形と動詞の語彙的意味のずれ＝抽象化

II - ③：「～ていく」形と「～てくる」形

IIIa - ④：二格の名詞が物名詞

IIIb - ⑤⑥⑦：二格の名詞が人名詞～「相手のむすびつき」の成立

IIIc - ⑧⑨⑩：二格の名詞がイベントを表わす名詞か組織名詞～「社会的なかかわり」の成立

IIId - ⑪⑫⑬⑰：二格名詞の空間性がなくなる、または二格名詞の抽象化～「心理的なかかわり」の成立

IVa - ⑭：「関係がある」などのフレーズ～「関係のむすびつき」の成立

IVb - ⑮⑯：「影響がある/出る」などのフレーズ～「働きかけのむすびつき」の成立

図 13 「対象的なむすびつき」の各カテゴリーの間の相互関係

第4部 結論と今後の課題

第7章 結論

第2部では二格の名詞と動詞からなる連語の分類を行い、その上で第3部では二格の名詞と動詞からなる連語がなす体系について詳しく述べた。その結果、本研究の結論は以下のようにまとめられる。

- [1] 二格の名詞と動詞からなる連語は、まず〔対象的なむすびつき〕と〔規定的なむすびつき〕の2つに大きく分かれる。〔対象的なむすびつき〕には、〔ありかのむすびつき〕〔移動のむすびつき〕〔くっつきのむすびつき〕〔相手のむすびつき〕〔社会的なかわり〕〔心理的なかわり〕〔関係のむすびつき〕〔働きかけのむすびつき〕〔受身的なむすびつき〕の9つの下位分類があり、〔規定的なむすびつき〕には、〔結果規定のむすびつき〕〔内容規定のむすびつき〕〔目的規定のむすびつき〕の3つの下位分類がある。
- [2] 二格の名詞と動詞からなる連語は、それぞれのむすびつきの間に非常に発達した移行・派生などの相互関係が見られ、一つの体系をなしている。
- [3] 二格の名詞と動詞からなる連語の体系において、〔対象的なむすびつき〕が中核的な存在であり、〔規定的なむすびつき〕はその周辺に位置する。
- [4] 〔対象的なむすびつき〕自体も一つの体系をなしており、そのもっとも中心的なものは〔ありかのむすびつき〕である。〔対象的なむすびつき〕において、〔ありかのむすびつき〕〔移動のむすびつき〕〔くっつきのむすびつき〕は具体的なものであり、〔相手のむすびつき〕を中間的なものとして、〔社会的なかわり〕〔心理的なかわり〕〔関係のむすびつき〕〔働きかけのむすびつき〕は抽象的なものになる。〔受身的なむすびつき〕も具体的なものであるが、その動詞の語彙的な意味の特殊性（受身的な意味をもっている）から、他のむすびつきとの直接的な関係を見出しにくい。
- [5] むすびつきの間は主に以下の4つの方法を通じて関係している。

I) 動詞のアスペクトの変化：

動詞が文の中で「～ている」形、「～である」形および受身形の「～ている」形（「～(ら)れている」の形）をとると、〔ありかのむすびつき〕のうちの〔存在物のありか〕と〔内在のむすびつき〕に移行しやすくなる。（p.164のI）

II) 「～ていく」「～てくる」形：

動詞が文の中で「～ていく」形および「～てくる」形をとると、〔移動のむすびつき〕に移行しやすくなる。なお、前者は〔行く先のむすびつき〕に、後者は〔着点のむすびつき〕にそれぞれ移行する。（p.164のII）

III) 二格の名詞がある特定の条件下において、あるいは二格名詞の抽象化によって、

動詞が語彙的な意味のずれ＝抽象化を起こす：

具体的なものが抽象的なものを派生するか、具体的なものから抽象的なものに移行する。(p.164 のⅢabcd)

IV) 動詞の語彙的な意味の多義性

具体的なものが抽象的なものを派生するか、具体的なものから抽象的なものに移行する。(p.164 のIVab)

以上、本研究は二格の名詞と動詞からなる連語の分類にとどまらず、奥田(1962[1983])では論述が少ない連語の体系をも明らかにした。二格の名詞と動詞からなる連語は、それぞれ単独で存在しているわけではなく、一つの体系においてお互いに関係しながら成り立っている。奥田(同)より一歩進んで、むすびつきの間の関係を全体から眺め、派生・移行などの関係をダイナミックに捉えることができたのは本研究の大きな成果であると言えるであろう。

また、格助詞そのものの用法を対象とする格助詞「二」の研究と違って、本研究は二格の名詞と動詞との関係の性質に着目して、分析することによって二格の名詞と動詞とのむすびつきを研究する。また、本研究では連語の構造を設定することで、二格の名詞と動詞からなる連語の間の移行・派生の関係、ないしそれがなす体系も明らかになった。このように、格助詞の研究ではできなかった二格の名詞と動詞との関係、および二格の名詞と動詞からなる連語の体系化が、本研究ではできたことも意義ある。

第8章 今後の課題

本章では、本研究では十分な議論が出来なかった点や、結論が出なかった点などをまとめ、今後の課題としたい。

① 他の格との関係

〔移動のむすびつき〕ではへ格、〔相手のむすびつき〕ではト格などのように、二格の名詞と動詞からなる連語において、二格が他の格に置き換えられるものがある。本研究では、関係するところで触れたものの、十分な論述が出来なかった。へ格とト格だけではなく、カラ格やマデ格なども含め、他格との関係という観点からも、二格の名詞と動詞からなる連語を分析する必要がある。

② 〔受身的なむすびつき〕の位置づけ

本研究では、二格の名詞と動詞からなる連語がなす体系の中で、唯一〔受身的なむすびつき〕と他のむすびつきとの関係が見いだせなかった。動詞の語彙的な意味に受身の意味が含まれているという点では他のむすびつきより特殊なのであるが、二格の名詞と動詞からなる連語がなす体系の中でどう位置付けられるべきか、いろんな視点から検討する必要がある。

③ 各むすびつきの用例数と分布

本研究では、収集したデータの詳細については、1.3.2 節で「表2 各むすびつきの用例数および動詞の数」にまとめたが、あくまで参考として大体の分布状況を示したに過ぎない。第2部と第3部で記述したように、各むすびつきは独立して存在しているのではなく、お互いに関係して一つの体系をなしている。そのために、それぞれのむすびつきの具体的な用例数およびそれらの分布については、本文では示すことができなかった。「ある」「いる」「なる」などいくつかの動詞の用例数が他の動詞に比べ極端に多いことを含め、本研究にとって「数」は有意なものなのか、有意なものであるならそういう分布をする理由などについては今後の課題にしたい。

参考文献

<日本語>

- 飯嶋美知子（2004）「結果継続表現の日中対照研究―「他動詞の受身＋テイル」と中国語の存在文、受身文―」『早稲田大学日本語教育研究 4』、pp.53-66、早稲田大学大学院日本語教育研究科.
- 石綿敏雄（1999）『現代言語理論と格』ひつじ書房.
- 李善姫（2009）「日本語の移動動詞の研究」東京外国語大学地域文化研究科博士論文.
- 岡田幸彦（2009）「現代日本語の移動動詞と場所名詞の格」『日本アジア研究』第 6 号、pp.39-61、埼玉大学大学院文化科学研究科.
- 奥田靖雄（1960）「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会（編）（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』pp.151-279、むぎ書房.
- 奥田靖雄（1962）「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会（編）（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』、pp.281-323、むぎ書房.
- 奥田靖雄（1967）「語彙的な意味のあり方」『教育国語』8号. [奥田靖雄（1984）『ことばの研究・序説』に所収、pp.3-20.]
- 奥田靖雄（1968-1972）「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『教育国語』12、13、15、20、21、23、25、26、28号. [言語学研究会（編）（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』、に所収、pp.21-149.]
- 奥田靖雄（1974）「単語をめぐって」奥田靖雄（1984）『教育国語』36号. [『ことばの研究・序説』に所収、pp.41-52.]
- 奥田靖雄（1976）「言語の単位としての連語」『教育国語』45号、pp.67-84、教育科学研究会国語部会.
- 奥田靖雄（1977）「アスペクトの研究をめぐって―金田一的段階」『国語国文』8号. [松本泰丈編（1978）『日本語研究の方法』に所収、pp.203-220.]
- 奥田靖雄（1979）「意味と機能」『教育国語』58号. [奥田靖雄（1984）『ことばの研究・序説』に所収、pp.159-169.]
- 奥田靖雄（1984）『ことばの研究・序説』むぎ書房.
- 奥津敬一郎・沼田善子・杉本武（1986）『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社.
- 神永正史（2008）「テアル構文の動詞構成―存在文との近さから―」『筑波日本語研究』第13号、pp.33-50、筑波大学人文社会科学研究所日本語研究室.
- 金水敏（2006）『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房.
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房.
- 言語学研究会（編）（1979）『言語の研究』むぎ書房.
- 言語学研究会（編）（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房.

- 国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』国立国語研究所報告 3、秀英出版。
- 杉本武（1986）「格助詞—「に」」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武（1986）『いわゆる日本語助詞の研究』、pp.319-375、凡人社。
- 杉本武（1991）「二格をとる自動詞—準他動詞と受動詞—」仁田義雄編（1991）『日本語のヴォイスと他動性』 pp.233-250、くろしお出版。
- 鈴木重幸（2005）「鈴木康之氏の報告に対する質問と意見」 連語論特別研究会発表資料、2005 年 2 月 19 日 於大東文化大学。
- 鈴木重幸（2006a）「鈴木康之氏の報告に対する質問と意見」『国文学解釈と鑑賞』第 71 巻 1 号、pp.196-189、至文堂。
- 鈴木重幸（2006b）「鈴木康之氏の報告に対する質問と意見（その 2）」『国文学解釈と鑑賞』第 71 巻 7 号、pp.226-223、至文堂。
- 鈴木重幸（2007）「鈴木康之氏の報告に対する質問と意見（その 3）」『国文学解釈と鑑賞』第 72 巻 1 号、pp.220-217、至文堂。
- 鈴木康之（1983）「連語とはなにか」『教育国語』73 号、pp.30-43、むぎ書房。
- 鈴木康之（2001）「連語論の確立のために」『国文学解釈と鑑賞』第 66 巻 1 号、pp.32-39、至文堂。
- 鈴木康之（2004）「奥田靖雄の連語論」『国文学解釈と鑑賞』第 69 巻 1 号、pp.152-161、至文堂。
- 鈴木康之（2005）「わたくしのかんがえる連語論」連語論特別研究会発表資料、2005 年 2 月 19 日於大東文化大学。
- 鈴木康之（2006a）「わたくしのかんがえる連語論」『国文学解釈と鑑賞』第 71 巻 1 号、pp.211-197、至文堂。
- 鈴木康之（2006b）「わたくしのかんがえる連語論（その 2）」『国文学解釈と鑑賞』第 71 巻 7 号、pp.231-227、至文堂。
- 鈴木康之（2007）「わたくしのかんがえる連語論（その 3）」『国文学解釈と鑑賞』第 72 巻 1 号、pp.231-221、至文堂。
- ソル・クンス（薛根沫）（2001）「連語論の研究—「へ格名詞＋移動動詞」を中心に」『国文学解釈と鑑賞』第 66 巻 7 号、pp.158-169、至文堂。
- 高橋太郎（1994）『動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失—』むぎ書房。
- 角田太作（1991）『世界の言語と日本語』くろしお出版。
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版。
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版。
- 中野はるみ（2004）『名詞連語「ノ格の名詞＋名詞」の研究』海山文化研究所。
- 西山佑司（2009）「コピュラ文、存在文、所有文——名詞句解釈の観点から（上・中・下）」『言語』38 巻 4-6 号、大修館書店。

- 仁田義雄 (1985) 『日本語文法・連語論 (資料編)』を読んで『国語学』140 集、pp.44-50、国語学会編.
- 仁田義雄編 (1991) 『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版.
- 根本今朝男 (1965) 「「が格」の名詞と形容詞とのくみあわせ」国立国語研究所編『ことばの研究 第 2 集』、pp.63-73、秀英出版.
- 野村剛史 (2003) 「存在の様態——シテイルについて——」『国語国文』第 72 巻第 8 号、pp.1-20、京都大学文学部国語学国文学研究室.
- 白愛仙 (2005) 「に格、が格の名詞と動詞「ある」との組み合わせ」『国文学解釈と鑑賞』第 70 巻 7 号、pp.105-120、至文堂.
- 早津恵美子 (2008) 「人名詞と動詞とのくみあわせ (試論) ——連語のタイプとその体系——」『語学研究所論集』第 13 号、pp.43-76、東京外国語大学語学研究所.
- 早津恵美子 (2009) 「語彙と文法との関わり—カテゴリーカルな意味—」『政大日本研究【第六号】』、pp.1-70、(台湾) 国立政治大學日本語文學系.
- 原沢伊都夫 (1993) 「存在動詞「いる」と「ある」の使い分け——語用論的アプローチ——」『日本語教育』80 号、pp.62-73、日本語教育学会.
- 原沢伊都夫 (1997) 「存在動詞の用法をめぐって」『富士フェニックス論叢』第 5 号、pp.1-13、富士フェニックス短期大学.
- 益岡隆志・田窪行則 (1987) 『日本語文法 セルフ・マスターシリーズ 3 格助詞』くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版.
- 松本泰丈 (編) (1978) 『日本語研究の方法』、むぎ書房.
- 松本泰丈 (1979) 「に格の名詞と形容詞とのくみあわせ—連語の記述とその周辺—」『言語の研究』、pp.203-313、むぎ書房.
- 松本泰丈 (1985a) 「連語論の考えかた」『言語生活』406 号、pp.32-33、筑摩書房.
- 松本泰丈 (1985b) 「連語の記述をめぐって—奥田靖雄「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」にまなぶ—」『国文学解釈と鑑賞』第 50 巻 3 号、pp.53-63、至文堂.
- 宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所報告 43、秀英出版.
- 宮島達夫 (1996) 「カテゴリー的多義性」『日本語文法の諸問題—高橋太郎先生古希記念論文集—』、pp.29-52、ひつじ書房.
- 宮島達夫 (2005a) 「連語論の位置づけ」連語論特別研究会発表資料、2005 年 2 月 19 日於大東文化大学.
- 宮島達夫 (2005b) 「連語論の位置づけ」『国文学解釈と鑑賞』第 70 巻 7 号、pp.6-33、至文堂.
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房.
- 森田良行 (1994) 『動詞の意味論的文法研究』明治書院.
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院.

- 李丹 (2008) 「ニ格の名詞 (句) を要求する自動詞についての考察—連語論の観点から—」
東京外国語大学地域文化研究科修士論文.
- 李丹 (2010a) 「ニ格の名詞と自動詞とのくみあわせ—連語のタイプの間の関係を中心に—」
『コーパスに基づく言語学教育研究報告 4 コーパスを用いた言語研究の可能性Ⅱ』、
pp.87-111、東京外国語大学大学院総合国際学研究院グローバル COE プログラム「コー
パスに基づく言語学教育研究拠点」.
- 李丹 (2010b) 「ニ格の名詞と移動動詞とのくみあわせについての考察—連語論の観点から
—」『日本研究教育年報 14』、pp.41-63、東京外国語大学日本課程.
- 李丹 (2011 a) 「連語から文へ—ニ格の名詞を含む連語と存在文との関連を中心に—」『コー
パスに基づく言語学教育研究報告 6 コーパスを用いた言語研究の可能性Ⅲ』、
pp.197-221、東京外国語大学大学院総合国際学研究院グローバル COE プログラム「コ
ーパスに基づく言語学教育研究拠点」.
- 李丹 (2011b) 「ニ格の名詞、ガ格の名詞と「ある」とのくみあわせ—連語論の観点から—」
『日本研究教育年報 15』、pp.73-96、東京外国語大学日本課程.

<中国語>

- 吴大纲 (2000) 《现代日语动词意义的研究》上海外语教育出版社。